中央公論第二十六年第十一號目次

▲公論

清國の内亂を評す／袁世凱は如何の人物ぞ……社論……一
お出なさった……福本日南……一三
官僚とは何ぞ……法學博士 江木衷……三一
支那の革命黨と秘密結社……根津一……三六

物價騰貴防止策

◎現今の物價騰貴の意義……法學博士 戸田海市……四一
◎物價騰貴防止策……法學博士 神戸正雄……五一
◎先づ國費を減すべし……早川鐵治……六〇
◎物價騰貴防止策に就て……津村秀松……六四
◎猥りに物價騰貴を談ずる勿れ……稻田周之助……七〇
◎物價騰貴防止に就て……法學博士 福田德三……七三
◎物價騰貴の原因及び其結果……松山忠次郎……七八
◎贅澤な廢して積極政策を行へ……仲小路廉……八一
◎物價騰貴防止策……法學博士 田中穂積……八七
◎物價騰貴問題に就て……法學博士 鹽澤昌貞……九六
◎通貨の膨脹と租税の過重……男爵 澁澤榮一……一〇三

▲說苑

數奇傳……田岡嶺雲……一〇七
太陽活動と人生……理學博士 一戸直藏……一二一

政友會の樞星、客星……黑頭巾……一二六

孫逸仙外革命黨首領人物

◎孫逸仙……文學博士 三宅雪嶺……一三四
◎孫逸仙は喰せ物……覆面道人……一三八
◎孫、黃、黎短評……根津一……一四一
◎奇傑「汪兆銘」……斷水樓主人……一四二
◎深沈にして大度ある人……小川平吉……一四八
◎勇略あつて智謀なき革命黨……上野岩太郎……一五〇
◎落着いた學者的な人……福田和五郎……一五一
◎孫は大した人物でない……伯爵 大隈重信……一五二
◎孫と黃と宋と……淸藤幸七郎……一五四
◎孫逸仙と黃興を評す……內田良平……一五九
◎長江一帶に於ける孫氏の人望……水野梅曉……一六一
◎孫逸仙は一代の大人物……宮崎滔天……一六三

▲詞藻

和歌……尾上柴舟選……一六九
俳句……高田蝶衣選……一七五

▲評論

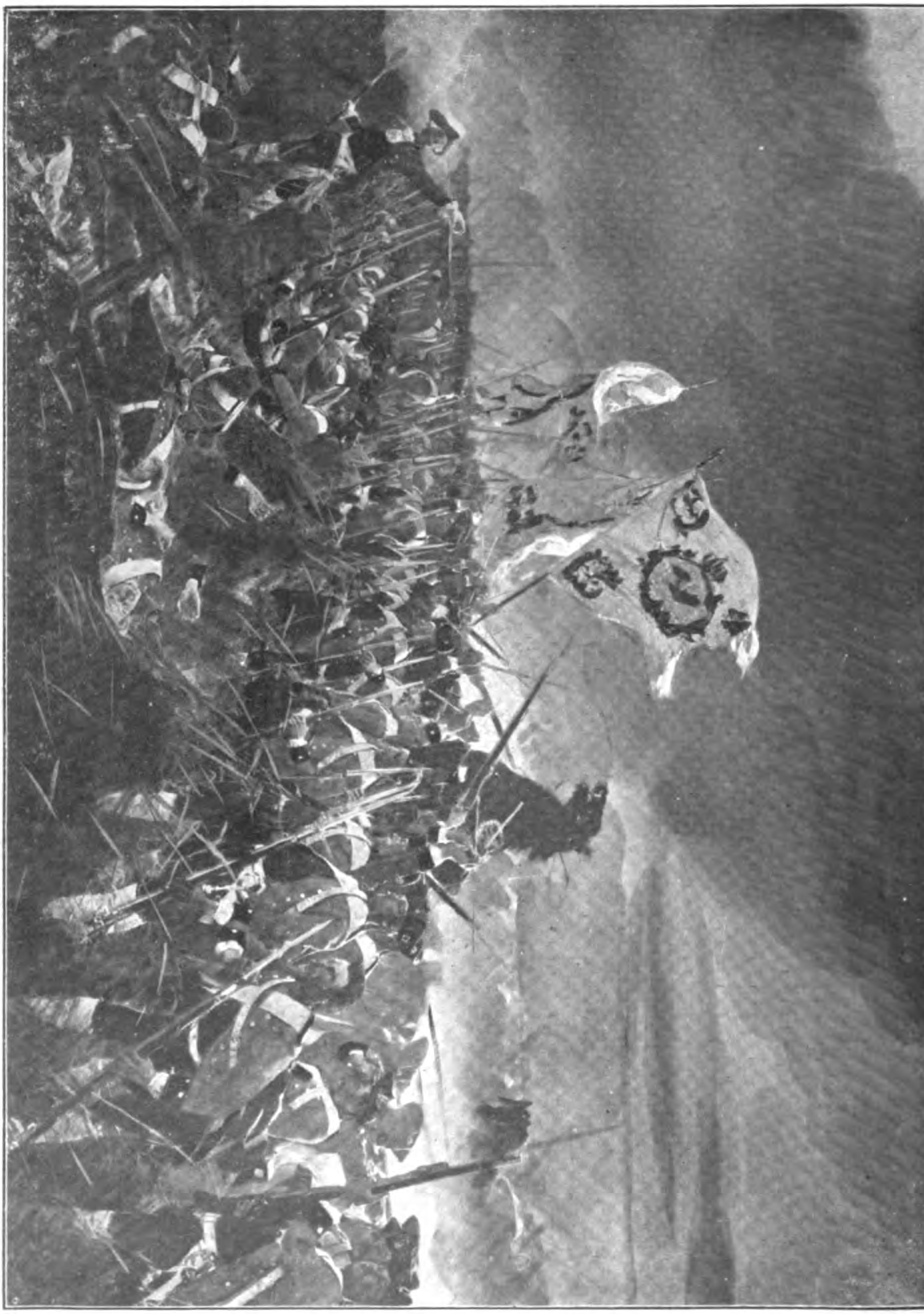
海外近事評論……懷沙隱客……一七八

▲雜俎

公設展覽會にて予の最も感心せる作……十三名家……一八二
初對面錄……饒舌子……一八六

▲小說

秘密……谷崎潤一郎……一九三
雨の日……正宗白鳥……二一七



中央公論



第二十六年
第十一號
第二百七十二號

清國の内亂を評す

(一)

十月九日清國武昌の軍隊亂を起し、其の師團長張彪及び總督瑞澂を逐ひ、更に前岸の漢陽を占領して、其の製鐵所及び造兵廠を取る、警報一たび傳はるや、我が都鄙の新聞紙は、幾んど紙面の大部分を割きて其の記事のみに費し、時々號外をも發して屢々人を駭かすに至る、蓋し對岸の火災に外ならざるも、世を愕かすの殷んなる實に意料の外に出づ、僅かに無名の一匹婦の殺さるゝに會ふても、尙ほ天下の大事件の如く書き立つる今の新聞紙の多數が、全紙此の叛亂の記事を以て塡むるも怪むに足らざるべき乎、然れども能く事實の眞相を知らんと欲せば、此の雜然紛然たる新聞紙の記事に對しては、多くの割引を以

て、冷靜に觀察せざる可らず。

（二）

叛亂の原因は、今尙ほ的確に知り得ざるが如し、諮議局議長湯化龍なるもの其の說の中央政府に用ひられざるを憤りて發せりと爲すものあり、或は兵士等一隊長が己等の俸給々與を私して支給せざるを怒り、之に暴行を加へしに、師團長張彪隊長を罪せずして兵士のみを罰せしより、竟に暴發を促がしたりと爲すものあり、革命黨の爆裂彈陰謀先づ露現したるを以て、期を早めて勃發せりと爲すものあり、叛亂の動機の未だ確かならざるに於て、其の性質を判知する頗ぶる難きものあり、之を以て純乎たる革命の亂と爲す果して正鵠を得たりとすべきや否や。

然れども一波は萬波を生む、此の叛亂の動機の那邊にあるにせよ。革命黨は乘じて相俱に起るべく、又亂を好む凶險の徒の之に加はるもあるべく、竟に如何なる大亂と爲るや容易に測るべからず、秀吉も、ナポレオンも、始めよりして彼れの如き志望を懷きて、其の理想通りに遂行したりしにはあらず、機に臨み變に應じて漸く其の大を加へしのみ、一星火もまた竟に燎原に至るを知らば、武昌の叛亂も、窮極する所未だ俄かに測るべからざるのみ。

吾人は今にして更に益々支那人の資性の解すべからざるを嘆ぜざる能はず、歐米人の日本を研究するもの實に二三五六に止まらず、然かも未だ釋き得て其の肯綮に中れるは鮮し、吾人の支那人を視る、喩へば歐米人の吾人に於ける如し、去年我が國が朝鮮を併合するや、淸廷爲めに悚動し、令を嚴にして併

合の詳細を民に知らしめざらんことを努めたりき。蓋し日本が鮮民に多くの恩賜金を與へ、其の苛政を除きて生民を安んずるが爲めに、清國の臣民等も亦之を羨みて心を日本に寄するに至らんことを憂慮したる結果なりといふ、是れ豈吾人日本國民の到底思議すべからざる所ならずや。

長髮賊の始めて起れるは道光三十年にして、其の全く平げるは同治七年也、即ち其の間實に十九年とす内には捻賊、回匪與羌の起るあり、外には英佛同盟軍の天津を屠りて北京に迫るあり、十五省多く兵燹に罹りて、民の溝壑に轉ずるもの少からず、清人の治を悦びて亂を恐るゝ、實に甚だしきものあらん、現に髮賊亂の中心點たりし南京及び武昌の都市の、今にして全く舊に復せざるを看るも、略々其の一端を窺ふに足る、或は排滿興漢と稱して、民族の爭ひなりと說くものあり、然れども漢人は僅に清朝のため其の辮髮を强ひられしのみ、他は悉く滿人を同化せしめ得て、今や愛親覺羅氏をして、僅かに虚器を擁せしむるに止まるに非ずや、然るに革命黨なるもの、必らず滿洲朝廷を滅して漢人政府を建てざるを得ずといふ。

試みに革命黨員の主張を聽け、彼等は今の政治財政を改良せば、世界人口の五分の一を有し、廣汎なる沃土と多大なる產物とを有する支那は大に開發せられて、世界の進步に貢獻すること偉大なるべきに、今の清國政府は到底其の任に堪えずといふ、然れども漢人の多數は立憲政治を以て變法自彊の途なりと唱へ、政府を强ひて明後年に國會を開設せしむることゝし、而して政府は鋭意して其の準備に惟れ日も足らざる狀態にあらずや、一方には國會政治の實行を强ひながら、一方には必らず其の政府を根本より倒

滅せしめざる可らずといひ、明らかに滿漢兩立せざるを聲言す、矛盾の極也、而して是れ又實に支那人の資性の解すべからざる所以とす。

斯の如く吾人は能く的確に支那人の國民性を解すると能はず、隨つて清人の資性より視て、武漢の變亂の如何に成行くべきかを精確に推斷すると能はずとす、唯だ下に二三の卑見を錄して、以て江湖識者の敎を乞はんとするのみ。

（三）

叛亂地の武昌は、支那の中樞たる湖北にして楊子江に濱し、殊に物資の夥しく集散して、清國第二の貿易場たる漢口を控ゆるが爲めに、殊に其の地の古來要害として名高かりし上に、尙ほ列國在留民を透して汎く世界環視の前に在るがために、清國政府は叛亂の報を耳にすると齊しく、幾んど一たびは膽落ち氣沮せるが如く、周章狼狽の狀實に正視するに忍びざるものあり、陸軍大臣廕昌を統帥として出征を命じながら、軍政攝理の代任を置かざるが如き、先皇のため不倶戴天の讐として斥けたりし袁世凱を起用せんとし、俄かに禮を厚くし辭を卑くして其の意を迎へ、袁が傲然として其の鄕里に晏臥せるまゝ言出せる總ての條件を容れ、辛ふじて之を起し得たるが如き、清國政府の威信は恰かも地に墜ちたりと稱するも誣言にあらず、斯の如き薄弱なる政府を以て、外は列國と追逐し、內は憲政實施の大業に當らんとす、清國の前途も岌々乎たる哉。

叛軍に至ては、聊か從來の百姓一揆と選を異にするものありと雖も、素より根柢あり規模ある計畫と

も視がたきに似たり、未だ長沙を舉げて其の背を堅くするとを爲さず、南京、開封、安慶、廣東の革命黨をして呼應して相起たしめざる等に徵せば、蓋し思ひ半に過ぎん。

漢陽の造兵廠は、清國第一の機器局なりといふ、然れども名を以て實を過信すると勿れ、清國には本來機器局らしき機器局なし、漢陽の造兵廠の如き、實をいへば毎日僅か五十挺の小銃を製造し得るのみ、出征せる北洋軍も、實をいへば數日の用に供すべき彈藥を有するに過ぎずして、密かに日本に泣付きて其の賣却を哀請したりといふ、凡そ世界中軍隊を有する國は、孰れも戰時編制として平時より多數の兵員を備へざるはあらず、然るに清國の出征軍は、一師團の實數殆んど一旅團に過ぎずといふ、其の組織斯の如くにして然かも十分の彈藥をすら有せず、之を以て能く叛亂鎭定の功を擧げんとは難からずや、叛軍假令如何なる天險に據るも、之を破る譬へば卵を潰すが如し、唯だ清國の官軍としては、急に之を平げがたきのみ。

叛軍の間、眞に軍略に巧みなるものあらば、能く武漢を堅守して軍容を熾んにし、成るべく多くの討伐隊を引寄すべし、討伐隊の漢口方面に集中すると多きに隨つて、其の給與の物資に不足を生じて、軍情漸く紊るべし、此の間に機を覗て黃河の鐵橋を斷たば、官軍は戰はずして潰ゆべし、且つ一面より覗れば、討伐隊の多く漢口方面に出る結果として、直隸は却つて空虛となるべく、假令全然空虛ならざるも、其の警備の多少稀薄と爲るや疑ふべからず、此の時に方つて革命黨の一部北京天津に事を擧げば、京師震動して滿洲朝廷の氣膽地に墜つべく、天下また悚動して、革命軍の氣勢大に揚るべきにあらずや。

或は京師の守備稀薄なるを避けんとする乎、勢ひ東三州に在る軍隊を移して直隷の守備に充つる外なかるべし、事若し茲に至らば、警備の全く空しかるべきは滿洲にして、然る時に馬賊の崛起するや必然也、馬賊は日露守備隊を白眼に視て南北滿洲を馬蹄に蹂躪せん、所謂愛親覺羅氏發祥の地は、竟に其の蹂躙に委せざるを得ずして、滿洲朝廷また狼狽出でん所を知らざるべし、或は日露の守兵を促がして滿洲の鎭靜を圖る乎、兩國共に竟に滿洲を占有するに至るや免がる可らずして、清廷は必らず其の墳墓の地を喪はざる可らず。

革命軍中果して人有らん乎、必らずや力めて多くの討伐隊を膝下に引付けんとを策るべし、楠木氏が關東の兵を千早の孤城に引付けたりし時、新田足利等崛起して鎌倉を陷ゐれ、赤松其の他は中國に起りて京師を取り、竟に全く北條氏を殲滅したりしにあらずや、直隷の精鋭を擧げて武漢に集中せしめ、而して直隷廣東滿洲等の革命派呼應して起たば、湖廣江浙また響應すべくして、四百州の山河竟に滿清のものに非じ、知らず武昌の叛軍中、此の壯心を懷くものありや否や、彼等が未だ黄河の鐵橋を破壞せざるに視るに、稍々壯圖雄略あるに似たり、或は其の力足らず識及ばずして破壞するに至らざる乎、然らば即ち彼等の運命知るべきのみ。

袁世凱の起てる利害得失は姑らく措き、其の局面に及ぼすべき眞の影響如何といはゞ、直隷軍の士氣を振ふに於て多少の效果なきに非ざらんも、未だ革命派をして氣沮し膽墜ちしむるには至らざらん。彼等已に三百年來權勢を秉り來れる滿清朝廷を覆すの雄心あり、區々袁世凱を憚かるの理なければ也。

然れども是れ武昌叛徒の根柢氣力十分に存すとしての見解也、事實然らずして、單に軍隊不平の勃發にして、之に塗るに革命の色彩を以てせるものに止まらしめば、官軍の彼等に對する或は轉石を以て累卵を壓するが如けんのみ、袁は勿論蔭昌と雖も、幾んど啞然として自失するの外なからんとす。

有體にいへば、吾人は未だ局面を重大視するを得ず、唯だ一星火の竟に燎原に至るを想ひ、且つ支那年來の歷史に於て、咸陽の守徒もまた竟に皇帝たるを視て、乃ち之を假想して立言せるのみ。

（四）

叛徒の將來如何は、最初の一戰の勝敗如何に由て定まるべし、支那人は形勢觀望人種也、赤壁の一戰僅かに破るゝや、曹の百萬の大軍は全く潰走せり、而して吳蜀の基礎は確立したりき、思ふに革命黨中には、武漢の叛徒若し勝たば、直ちに乘じて蹶起せんとするもの所在少からざるべし、官軍と雖も、或は戈を倒にして之に投ずるも少からざるべし。

今や漢口附近に於て、官賊の接戰せると一二回に止まらずと雖も、畢竟は最先枝隊の小衝突に過ぎずして、主力の決戰にはあらず、隨つて未だ形勢に影響する所あらずと雖も、若し決戰の機に至て官軍能く一勝利を占めん乎、叛徒の士氣沮喪して、幾んど收拾すべからざるに至るべし。

清國の富人にして、武漢及び其の背後にあるものは、叛徒のため其の財囊の口を開き、倉庫の戶を明けて米帛錢財を給するや想像に難からず、叛徒にして若し更に決戰に勝たん乎、其の財囊と倉庫とは彌よ益々廣く開かるゝのみならず、所在の富人亦爭ふて米錢を贈遺し、叛徒の到る處、簞食壺漿して迎ふ

べし、若し官軍幸ひに勝たん乎、彼の富人は俄かに財嚢倉庫を閉ぢ、物資既に全く盡きたりと唱へてまた需めに随はざるべく、叛徒は其の食物にすら窮すべきのみ。

安慶、施南、南昌、開封、南京等の諸隊も、また叛軍の勝報を得ば、竟に北京朝廷の物ならず、而して其の人民また相率ひて鋤犂を戈として政府に反かんも、官軍勝つと聴かん乎、是まで其の衛戍地を離れざる軍隊も、安んじて官軍に力を併すべく、官軍の勢力彌よ加はるや論なし。

思ふに形勢を観望するもの、清國の軍隊人民革命黨員のみに止まらず、列國と雖もまた然らざるを得ざらん、列國中の或るものは、此の場合恩を滿清政府に沽るべき乎、抑もまた叛徒に通じて漢人の歡心を收むべき乎、孰れにしても無爲なる可らずと做すならん、然かも其の決定し得ざるは他なし、成敗孰れに存するかを判知するに由なければ也、若し夫れ叛軍勝たん乎、聲援を之に與ふるは勿論、銃劍彈藥をも支給せんとするものまだ絶無ならざるべく、或は官軍勝利を得ん乎、滿清政府の欲する借欵は恐く成立すべく、軍資一切の需要に應ぜんとするもの、また爭ふて現出すべし、吾人は叛徒の勢力を視ると、彼の諸新聞紙の如く大なる能はずと雖も、最初の一戰に於て叛徒萬一勝を占むるあらん乎、形勢の清國に取て實に重大なるを認めざらんとするも能はざる也。

官賊兩軍が主力を以て決戰するまでの間に、多くの時日を費すは、叛徒に利にして官軍に不利也、曠日彌久せば、海外にある革命黨等また氣脈を通じ來りて、竟に純然たる革命亂と變じ做すの虞あれば也、彼の革命主義の鼓吹者たる孫逸仙の如き、必らず米國より歸來す可ければ也、而して各地の同黨所在に

呼應して起つの虞あれば也、淸國は交通機關缺如して、叛亂の報未だ內地に達せざるもの多きも、久しきに及ばゞ漸くにして相傳はり、加ふるに謠言蜚語を混へて人心竟に大に動搖する危險あれば也、故に官軍のために謀るに、速かに主力を集中して、一擧に賊勢を挫くを妙とす、唯だ京漢鐵道の輸送力甚だ鈍く、且つ軍隊の結束進退遲緩にして、而して更らに輜重の續かざるを奈何ともするなきのみ、殊に彈藥にすら窮乏するの不幸あるを以て、到底速戰し得ざるのみ。

若しナポレオンの如き精悍無比の好將軍あり、精銳を提げて電馳し、叛徒を攻擊して之を破るを得ば、形勢速かに定まるべきも、今の官軍統帥者は、最初の一戰に破るゝ結果の重大なるを知るに過ぎて、大事の上にも大事を取り、必勝萬全の途に出づべき乎、是れまた已むを得ずと雖も、此がために時日を遷延し、其の間叛徒をして多少の便宜を得せしむるが如きは、頗ぶる痛惜に堪えずとす、彼の袁世凱の如きも、また拙速手段を執るの果斷なく、寧ろ徐ろに形勢を觀望するの態度を執るべき乎。

淸國大に紊るべき乎、列國の干涉竟に生ずべき乎、此等の重要問題を決せんにも、總て官賊兩軍初度の決戰の結果に俟たざる可らず、詮する所、初度の決戰を視ざる間は、何事も推斷す可らず、所詮問題の要領をも得る能はざる也。

（五）

吾人は此の機會に於て、彼の革命黨の擧動に一言を試みんと欲す。

彼等は曰く漢族は本來平和の民也、古來外國を侵略したりしと無し、是れ歷史の證明する所、吾等支

那を統一するも、斷じて他の平和を脅威すると無しと、彼等が果して支那を統一し得るや否やは、素より吾人の知る所にあらず、然れども漢人古來外國を侵略したることなしといふは、正さしく歴史を無視したるもの也、漢武の遠征は如何、亞細亞より逐はれし匈奴が歐洲に流入して彼の慘禍を蔓延せしめたりしは何の故ぞ、所謂本部以外の西伯利亞、蒙古、西藏、安南、緬甸等が曾て支那の領土たりしとあり、又現に支那の屬邦たるは何故ぞ、漢人は能く勤儉なるも、一び富を獲れば驕奢放縱怠慢を極むる民族にして、其の志唯だ一身の私慾、殊に劣惡なる情欲を充すに在り、此がために遠征を欲する少きのみ、然かも英邁有爲の豪傑出づれば、四邊を劫掠して領土の尨大を欲すると、歴史の示す所ならずや、漢人は武を以て立つ民族にあらずと雖も、又斷じて平和の民にはあらざる也。

革命黨は近時我が國民に愁訴して曰く、吾等の運動に就て、吾等に單に日本が嚴正中立の態度を執らんとを希望す、吾等同志の日本に在るもの、未だ曾て日本の治安を紊り秩序を害したるとあらず、日清間の交渉に就ても、吾等は常に傍觀するのみ、嚴に中立の態度を執りて違へるとなしと、然れども彼等が日本より其の本國に歸るや、必らず相期するが如く、到る處に極力排日運動を煽揚するは何ぞや、日本に在留する彼等と雖も、一面には本國の同志と通じて排日氣勢を煽せしめ、一面には又密かに清國政府に通告して日本を讒誣し、頻りに兩國間を中傷し離間せんと欲するは何ぞや、彼等或は曰はく、滿清政府を孤立せしむるがために、故らに然かするのみと、若し然らば吾人もまた聊か其の志を憐まざるに非ず、然かも自から日清間の交渉に中立を嚴守して、曾て容喙したるとなしといふは虚言にあらずや、

殊に中清南清の同志と通謀して排日運動を煽揚し、屢々ボイコットを企畫するとは、幾んど隱れもなき事實にあらずや。

彼等は斯くして尙ほ日本を妨げ害ふとなしといふ乎、彼等或は日本の無識者を欺瞞し得べし、斷じて心あるものを佯る能はざる也。

彼等はまた近時武漢の叛亂に就て、日本國民の聲援を求め、此の場合素より軍器糧食の援助を請はざるも、叛軍に與ふるに多大の同情を以てせよ、米人の獨立を計るや佛國の輿論之に聲援し、而して僅少なる士人の一部之を助けたりしに過ぎざるも、米人は佛人の俠義を銘肝して今尙ほ忘れざるにあらずやといふ、然れども彼等革命黨は米國人の如く淡泊無邪氣なる種族にあらず、外柔にして內狡、多智にして而して極めて猜忌多き人民也、辭令に巧みなるも卒直の德なき人民也、現に密かに排日運動を煽動しながら、恰かも知らざる爲して、日清交渉に干與せざるが如く言做すにあらずや、老獪斯の如くにして、日本の聲援を求むるも、識者如何ぞ與せんや。

日本人中には弱者を扶くる任俠なる國民性よりして、自然に叛徒に同情するもの少からざるべし、ドクトル、モリソンが倫敦タイムスに打電して、日本政府革命黨に聯絡を有すといふは中傷なれども、彼の國民が一般に叛徒に同情すると爭ふ可らずといへるは、實に穿ち得て肯綮に中れり、多くの新聞紙又は志士が叛亂の形勢を事實以上に過大視するも、一は此の同情の反映に外ならずとす、然れども局に當るものは、徒らに感情的なる可らず、必らず理非得失を明識して、以て機宜の措置を謬まる可らざる

也、革命黨の如きは畢竟饒舌の徒のみ、彼等眞に平和を愛好せず、今日の執るべきもの、何ぞ叛亂にあらん、何ぞ滿人の虐殺にあらん。

（六）

吾人は又淸國政府近來の態度にも一擊を加へざる可らず。

支那傳統の外交政策は、常に他を鷸蚌として相爭はしめ、己れ自から漁夫の利を占めんとするを主とす、其の日本と戰ふて敗るゝや、露國の援助を借らんとして滿洲に特種の利權を與へ、既に與へたる結果、露國封豕長蛇の勢ひ禁ず可らざるや、己れ自から制御の任に當る能はず、乃ち日本を引きて露國に當らしめたりき、既にして日本が十萬の生靈を殞し、廿億の巨資を糜して辛ふじて露國に勝ち、其の結果として南滿洲に利權を立つるや、淸國は條約に由て之を拒ぐ能はず、理また相抗するに足るものなきを以て、玆に米國を引き來りて以て日本を控制せしめんとす、彼の所謂四國借款の如き、此の結果の一端に外ならずとす、然れども漁夫の利は常に占有する能はず、四國借款なるもの今に及びては全く失敗に歸せるものの如し、其の約定に於て十月十五日までに一億圓の引渡を終る筈なりしに、竟に其の事なきは即ち其の明證ならん。

玆に於て淸廷は更に武漢叛亂の征討費にも窮したるまゝ、僅かに四五百萬圓の借款を起さんとせるも、未だ四國の應諾を得ざるものゝ如く、竟に日本政府の援助を求め來れり、彼の東三省總督趙爾巽氏すらも、武昌叛亂の報を得るや、浦鹽斯德に出てゝ露國總督ゴンダッチ氏と會見する約を果すに至らず、倉

皇として齊々哈爾賓より奉天に歸り、直ちに橫濱正金銀行に哀訴するに五百萬圓を貸與せんとを以てしたりといふ、恐らくば滿淸政府の內意を奉じてなるべし。

北洋軍は淸國隨一の精兵なりと稱せらるゝも、猶ほ十分に銃器彈藥を所有せず、爲めに日獨兩國政府に哀請するに小銃と彈藥との供給を以てしたるが、獨逸の給する所は遙かに其の本國より送らざるを得ざるがために、今や主として日本政府に縋れるものの如し。

淸國としては、事ある每に援助を求むべきは日本のみ、其の人種略々相同じく、其の文字亦略々相同じきに止まらず、國土最も近くして、緩急相扶くるに便なるもの、實に日本に若くものはあらず、然るに平生日本を疾惡し、每事日本の所置を妨害したるに止まらず、今や叛亂酣にして、民情激昂する時に方り、其の半官報たる北京日報を指嗾し、日本を目して革命主義者の養成所と爲し、武昌の叛亂亦實に日本と聯繫ありといひ、甚だしきは則ち叛軍の中に日本人ありと稱し、盛んに排日氣勢を煽揚せんと欲するは何ぞや。

日本に在る淸國留學生中に革命主義の者あるは事實也、而して居留淸人中、排滿興漢を悅ぶものあるも事實也、吾人の知る所によれば、革命黨本部と自稱し、又は其の支部と自稱するものもまた之あるに似たり、然れども之を以て日本國民自から彼等に革命主義を訓へしといふは何ぞや、我が軍隊敎育は勿論、一般の國民敎育もまた實に忠君愛國を以て根本義とす、若し彼等留學生にして、眞に日本人に學びたりとせば、寧ろ今の滿淸朝廷に忠實なるべき筈ならずや、彼等眞に日本人を師とせば、其の歸りて排

日氣勢を煽揚する筈なきにあらずや、此の理より推斷するも、革命主義が日本に訓へられしに非ざるや明らけし、且つ革命黨員又は之を扶くるものあるが故に、日本を其の主義の養成所と爲さば、知らず米國を何とか爲す。

米國に於ては、現に武昌叛軍に聲援するに止まらず、軍資金を調達するがため公然たる運動を爲し、甚だしきは孫逸仙を推して大統領と爲さんとを聲言せるものすら之あるにあらずや、現にシカゴにある孫の如きは武昌叛亂の起れるを祝して盛宴を張り、尙ほ銀行業者に囑して多くの軍費を借らんとしつゝあるにあらずや。之を以て米人果して革命黨を助くるものと爲すべき乎、米國を以て革命黨の養成所と爲すべき乎、淸國政府未だ北京日報をして米國を難ぜしめず、偏へに日本のみを誣ひしむるは何ぞや。

一方には軍費及び軍馬の供給を哀請しながら、一方には却つて日本を誣ひ、日本國民を譏して以て排日氣勢を煽揚す或は哀訴脅迫並び至る筆法乎、然かも狡猾にして誠意なきと革命黨員以上なりとす、吾人は深く之を陋として卑む、彼の官民にして悛め悔ゆるなくんば、日本は應さに斷乎たる處置に出でゝ以て彼等をして痛切に其の眞味を飽喫せしむべきのみ。

(七)

或は革命黨を援けざるがため、三億餘の漢人の感情を害し、將來永く中淸南淸の通商關係を妨げんと做すものあり、然れども憂ふると勿れ、假令革命黨を援くるも、彼等は決して之を恩とせざるなり。蓋し彼等の歷史に於て然り、國民性に於て然れば也、通商關係は利害關係なり、ボイコットの如きは猶ほ

ストライキの如く、一時的のものにして永續するを得ざるのみ、之を怖れて强ひて彼の叛亂を扶くるが如きは、狂にあらざれば愚也。

所謂革命黨の根柢たる哥老會、三合會、白蓮會等にして、眞に排滿興漢を主義とするものたらしめば、髮賊の亂を平定したりし曾國藩以下の漢人を如何に視るぞ、曾國藩左宋棠等を助けたりしゴルドン將軍を如何に視るぞ、抑も中清人南清人等は、此がために英國民を怨みて、今尙ほ英國との通商を妨害し阻止するや、思はざる可らざる也。

拳匪の亂に、列國は皆多少の陸兵を出動せしめたりき、然れども此の經驗によりて、彼等は十二分に苦味辛味を飽喫したりき、第一は清國の風土彼等白人に適せず、第二清國の不潔なる土地家屋は彼等の健康に最も適せず、第三遠路の輸送と、軍隊の健康保持とのために、莫大なる費用を要し、第四遠征のために軍隊の風紀を墮落せしめ、第五出兵に由て得る所到底失へる所を償はざりしが故に、今清國大に亂るゝとも、列國は大なる收穫あるの成算十二分に立たざる以上、到底多くの陸兵を出す能はざる也、其の之を出し得るもの、唯だ日本と露國とのみ、且つ北滿洲蒙古及び新彊伊犁の方面ならば知らず、清國本部に出兵する便宜に至ては、露國到底日本に及ぶ能はざる也、即ち軍事上より清國の死命を制すべきものは日本のみ、列國假令清國の內事に干涉せんとするも、日本の承認を得ずんば奈何ともする能はざるのみ、夫れ日英同盟の儼として存するを思へ、日露協約の條文以上に有効なるを思へ、清國の事は此の三國能く之を定むべし、素より惑ふ所あるを要せざるに非ずや。

吾人は今日の場合、兵を北京に出すもまた機宜の一措置たるを思はずんばあらず、清國政府にして其の機關新聞をして公然排日氣勢を煽動せしむる以上、排外主義の頑冥者流蹶起して、我が日本臣民を迫害し、我が國旗を凌辱するとなきを保す可らざれば也、亂階一たび發せば、星火竟に原を燎し、再び三十三年の變亂を現するまた保す可らざれば也、乃ち之に備ふるがため、列國に提議して、日本先つ北京天津に出兵して、萬一に備ふるも可ならずや。

* * * * *

有體にいへば、清國の滿人漢人相和せずして、常に紛擾を絕たず、兄弟相鬩ぎて益々國勢を弱むるとは、吾人衷情に於て嘆惜に堪えずとす、今や立憲の期日睫の間に迫る、眞に清國のために圖るものは、官民一致して其の事に專らなるを望むや切ならん、清國政府の屢々民を欺罔する素より咎むべしと雖も、漫りに叛亂を起して平和を破り、列國の臣民を危險ならしめ、其の通商上の利害を侵害するが如き最も難せざるを得ざる也。

袁世凱は如何の人物ぞ

（一）

武漢に叛徒起るや、滿清政府震動し、竟に袁世凱を起用するに至れり、袁の人物今や中外に重きを爲

し、殆んど清朝第一と稱せらる、此の時に方つて、彼れの輪廓を描くと共に、清國官場の風氣を說明して世上の參考に資するもまた無要ならざるべきか。

今回の詔命に接しても、袁は多分起つの心なかりしなるべし、然れども清國の法として召命三び至るも遵はざるものは斬に處せらる、唯だ三び召命を發するは皇室の屈辱なるが故に、容易に之を敢てせざらんも、袁にして果して起たざらん乎、三びして忽ち之を戮するなきを保せず、乃ち袁たるもの身を全くするが爲め、竟に起たざるを得ざるのみ。

聰明なる袁は能く之を知れり、故に召命再び至るや、乃ち條件を提出したり、而して清廷は悉く之を聽かざるを得ず、袁の出づるや單に叛徒討伐水陸兩軍の總指揮權を得るに止まらず、必らずや近き將來に於て、清國の政局に變更を視るに至るべし。

袁は故張之洞の忠誠なく、又故李鴻章の才略なし、然かも果敢斷行、己れの利のためには、忍はざるなきの一事に至ては、彼の二人に過ぐると遠し、即ち朋黨排擠の清國政界に在ては、無比の適材たるべき資質を有す。

我が名古屋人は、女を生むを以て家を興す所以なりとすといふ、清人は常に曰く、子を生まば應さに男子なるべく、男を得ば必らず官吏たらしむべしと、現に我が國の町村長位ゐにしか當らざる知縣と雖も官に居ると三年なれば、其の所得優に一生を支ふべしといふ諺あり、蓋し彼等は租稅の受負人にして、民より收むる所八なれば、其の政府に納むる所五乃至六に過ぎざる也、況んや知縣以上、總督巡撫たるを

や、李鴻章は永く直隷總督として、且つ中央政府に權勢ありしがため、肥馬數十頭其の厩に滿ち、驕奢實に外人を驚嘆せしめ、死後も數千萬兩の遺產ありき、盛宣懷は數百萬若くば數千萬の財ありと稱せられ、唐紹怡、梁敦彥の如きも直隷海關道たる數年にして、各數十萬の產を作れりといふ、彼等は啻だに公金を私し賄賂を貪ぼるに止まらず、尙ほ私かに商舖を開きて利潤を得るに力む、現に武漢の叛徒より放逐せられし師團長張彪は、漢口に若干の質店を有し、慶親王すら北京天津に數個の材木店を有すといはずや、官權を利用し、官場に夤緣して利を罔みす、素より至らざるなきのみ、我が御用商人の如き如何ぞ多く之に及ぶべけんや。

軍人にして大隊長以上師團長に至るまで、兵士の俸給、被服、糧食等を私して以て一種の役德と做すが如きは、殆んど公認の例也、唯だ公認以外に貪ぼるもの絕えざるがために、屢々紛糾を生ずるのみ、武昌の軍隊の叛せる一の動機は、隊長が兵士の給與を私して支拂はざりしに在りとさへいはずや。

袁の直隷總督たるや、北京邊の滿人等頻りに中央集權說を唱ふ、袁哂つて曰く『中央集權にあらず、中央集錢のみ』と、以て其の一斑を窺ふべし。

袁もまた一般官人の如く富を集む、其の出づるや、前騎後從雲の如く、儀容堂々として威滿也、然れども自ら奉ずる極めて淺薄にして、多く財を下僚に散じ、又好んで士を養ひ、士を扶く、是れ袁が一部の人心を收攬せし所以にして、其の勢力の群を拔く所以なりとす、一般官人財を重んじて、之を得るに汲々たる時、獨り之を輕んじ散ず、袁もまた一種非凡の傑物なりと謂ふべし。

（二）

財利にのみ急なる清國官人は、一面姑息怙熙を悦ぶと共に、此の種のものの習癖として、嫉妬、排擠を事とするを例とす。

清國官人中には『得過則過』なる通用語あり、其の意味は過し得る限り現狀のまゝ過すべしといふにありて、實に姑息怙を表せるもの也、文武の大官が平生寛々として賭博宴樂に耽り、多くは事務を見ず、偶々事を行ふも單に形式に過ぎず、所謂變法なるものも、唯だ外見型式を變換するのみ、其の實質に至ては則ち一のみ。

彼の攝政王は鋭意治を求むるが如きも、女性的偏執性を具へ、狹量妬忌動もすれば漢人を斥けて滿人のみを用ゆ、近時政府に統一なく、大小の官吏各々恣に事を決して一定の方針なきは、即ち攝政王の人物威重足らるざが故にして、漢人一般の誹謗し侮蔑する所とす。

或は滿漢相反目すといふものあり、攝政王の如き、素より滿人を信じて漢人を排する傾向あるも、一般官人に至ては、素より滿漢の區別なく、己れに利なれば則ち滿人も漢人と結びて同一滿人を排し、而して漢人も亦己れに利ならざれば滿人と結托して漢人を陷ゐる、袁は李鴻章の門下にして、其の閥閲よりすれば盛宣懷の下にあり、盛は李隨一の股肱にして才識信望夙に大に顯はれたれば也、然るに袁は盛を以て我が競爭上の最大强敵と做し、第一着に慶親王と結び、盛の勢力を全く政治上より剝奪して之を上海に逐へり、然かも盛の北京に來るとあるや、袁は探偵を盛に尾行せしめて嚴に之を監視し、盛をし

て竟に一手を舉げ一足を投ずる能はざらしめたりき。

袁は始め滿人の榮祿と結托して慶親王の信認を得、此の二人に由りて西太后の寵幸を得たりき、袁は張之洞と姻戚關係を結びて背後に漢人の勢力を有する如くに裝ひ、一方には深く慶親王に結びて勢力を扶殖せり、彼の漢人中の俊傑たる瞿鴻機が張百熙と相計りて慶袁を倒さんとするや、袁は亦極力之を排斥して反對に之を陷ゐるゝを得たりき。

袁は西太后の寵幸を得たるに乘じ、光緒帝の幽閉を太后に勸めて之を實行したりき、袁が苟くもなさんとすれば則ち忍ばざる所なき性質は、此の一事に於ても明證せらる、夫れ皇帝を幽するをすら敢てす、攝政王の如き年少者如何ぞ袁の眼中に有るべけんや。

袁の勢力盛んなるや、滿人漸く平らかならず、殊に鐵良は袁の下に在て直隸布政使たりしに拘らず、辨才を以て西太后の信任を得るに及び、中央集權說を唱へて直隸總督に屬せる三師團の兵權を政府に收め、以て袁の勢力を殺げり、袁怒つて慶親王に說き、鐵の陸軍部尙書たるを拘束す、鐵大に怒り、端方と共に袁が先帝幽閉を策せるを訐き、之を攝政王に彈劾するに及び、袁は全く失敗して其の鄕里衛輝に歸臥するに至れる也。

袁を倒したる鐵良の勢力は、旭日の如くなりしも、良弼の反抗を受け、且つ端方の彈劾を受くるに至て全く蹉跌せり、盛宣懷は未だ總督巡撫たりし經歷なく、政治智識に缺くる所あるも、理財に巧みなること絕倫にして、今や攝政王の親任を得る極めて深く、慶親王の如き、名は總理大臣たるも、怏々とし

て爲す能はず、事の裁決多くは盛に待つの狀態に在り。然れども袁にして起用せられん乎、盛は勢ひ退かざるべからず、吾人は袁盛將來の關係に就て、多くの興味を以て之を注視せんと欲す、淸國官吏排擠の狀は實に斯の如し、滿漢反目の如きは、寧ろ明らかに認むる能はざるのみ。

（三）

袁は財を惜まずして深く士心を得ると共に、又事務に勤勉にして精力人に絕す、朝夕萬事を裁し、自から筆を執て電報を草し、又公私の文案を作ることありといふ。

袁今や起つ、恐らくば皇太后並びに慶親王に結びて、再び政局の變更を試み、以て大に手足を伸すの地步を作らんとすべし、袁は先帝に取て不倶戴天の敵なるを以て、皇太后も理素より袁を嫌惡すべき筈也、然れども皇太后は初めより西太后に愛せられて始終其の宮中にあり、先帝とは曾て居を同ふせざりしを以て、所謂夫妻の親情なるものあることなし、且つ今の幼帝は攝政王の子にして皇太后の出にあらず、故に皇太后は寧ろ攝政王を悅ばざる傾向なきに非ず、聞く所によれば、皇太后今や嬖幸を容れ、而して慶親王を信じ、袁の用ゆべきを深く識る所ありといふ、皇太后が力を政治上に用ひて第二の西太后たらんとするは、隱れもなき事實也、袁たるもの一面湖北の叛徒討伐と稱して兵馬の權を手にすると共に、一面皇太后及び慶親王に勸め、以て北京の形勢を一變せんと欲する莫き乎、吾人は此の形勢の寧ろ甚だ重大なるものなるを信ずるが故に、最も多く之を注視せざるを得ざる也。

李鴻章の將さに死せんとするや、其の部下に遺言して曰く『露國頻りに勢ひを滿洲に張る、中國は宜しく拱手傍觀すべし、日本は必らず露の封豕長蛇を默視せず、必らずや軍を出して露國と爭はん、此の二國は中國眼上の瘤也、然れども兩虎相搏たば共に斃れん、中國は此の虛に乘じて巧みに歐米の後援を藉り、以て滿洲恢復を策すべし、若し其の策竟に成らざらん乎、斷じて滿洲を捨てよ、國家艱難に際しては、蒙古西藏を割きても、中國本部の萬全を圖らざる可らず』と、哀にして眞に經綸あらば、其の歸着する所また茲にあるに非ざる乎。

公論

お出なさつた

稲本日南

世間から豫期された清國の革命騷ぎはいよ〳〵お出なさつた。之について自分は十年一日のやうに言つて居る。世界通用の意義ある近世的國家を作らずして、直ちに國を立憲政體に入れるなど、騷げば、秩序の未だ立たざる中に只混亂あるのみてあると言つて置いたが、清國の爲めにはお氣の毒ながら、此處少々知言の名を負ひさうてある。

譯の分つた社會ては、國なるものは大要下の如き道理て成立つてゐる筈てある。即ち大國家が成立して然る後に其れを憲政に入れる。是れ丈けは石に判を捺したやうに實行せられて居る。例へば歐洲の列國を御覧なさい。十七八世紀以來何れも美事に統一せられた前古未曾有の大國家が出來た。已に前古未曾有の大國家となつたから、善政を仕様と思へば未曾有の善政が出來る代りに、暴政を爲さうと思つても亦未曾有の暴政が出來る。是に於てか國家の事業に對して堤防を築くの必要がある。即國家夫自身の本分を逸出しない様に、國家の仕事は之れ以内ぞといふ堤防が必要となつて來た。立憲政體なるものは畢竟此爲めに出來たのである。

それて最も後れて憲政に入り込んだ我國の如き、四十餘年間の短日月にパノラマを見るやうに歐洲の文明を採用したから、何ても一時に取つたかのやうに見ゆる

けれども、それても然し一定の順序は經て居るのてある。王政維新、之れは申すまてもなく統一的國家の出現てある。二千幾百年の帝國とはいふけれども、其實、統一した大國家は之れ以來の事てある。已に此大國家が成立した。それて其次に立憲政體の必要を感じて之を採用するに至つた。根本に於て政治を理解するものは決して之を間違へぬ。然るに氣の毒千萬であるのは隣國の淸廷てある。淸廷の諸君に眩めく許りに見えたのは日露戰爭に於ける我國の勝利てあつたらう。今少し遡つて言へば日淸戰爭以來我國の勝利てあつたらう。此勝利がお隣り滿廷の人を驚かして、日本が彼の如き小國なるにも拘らず、前後に彼の如き大捷を致したといふものは立憲政體を採用したからてある。箇樣間違へられたのがお隣り抑々の失敗てある。今更ら說き諭すも詮のない事てあるが、立憲政體を採用したからエラクなつたのてはありません。エラクなつたから立憲政體を採用したのてあります。此道理に通ぜずして近數年頻りに立憲政體の準備にかゝられた。此事業たる言ひ換ふれば革命を起せ、革命を起せと淸廷自身國民に向て催促せられたのも同樣てある。淸國民たるもの御趣意を奉戴して起らざるを得ないのてあつた。それを昨今の新聞に徵すれば、日本からでも敎唆して起さしたかのやうに怨言を放たれるさうだ。怨めしいなら自分自身を怨みられたら宜しからう。然しながら數千年來極東の廣野に長夜の夢を貪られてゐた四億の大衆がそろ〳〵眼を覺して來たといふ事は、淸廷の爲めには一寸お困りかも知れぬが、淸帝國の爲めには賀すべきことてはあるまいか。寧ろ此一騷動を經て、それから後に意義ある近世的國家が先づ成立するかも知れぬ。其次ぎが淸廷の好きな立憲政體となるのてあらう。

扨今回の革命騷ぎ。之れは叛軍の方からいへば、今日までの所ては珍らしく大出來てある。何を以て左樣褒めるかなら、其手段が餘程旨かつた。全體淸國に革命の卵を抱いた分子は髮賊以來極めて多い。哥老會もあれば三合會もある。或は白蓮、或は紅蓮、種々の不平團體がある。おまけに近來に至つては膽病ながら康

の一派もあれば、又驀地に此方面に進まうとする孫、黄等の一派もある。此等が多年一日の如く革命事業に熱中し來つたにも拘らず、其れが容易に物にならなかつたのは何時も初幕から革命劇を演りかけたからてあつた。機の未だ乗ずべからざるに、而かも强いて此破壞的事業を進めやうとするから、日頃淸廷に不平を抱く面皮ある人々の間ては、其事業には加擔するを得なかつた。然るに今回は革命事業を政治問題及び經濟問題の方面から着手した所が我輩の賞讃する所てある。

今回の經過を觀察するに、最初廣東に革命黨連が集合した際は、初鼻から革命の旗を押立てゝ廣東城ても乘取つて之から革命を呼號しやうとしたのてあつた。其爲めに早くも官憲の覺る所となつて未發に打散らかされたのてある。それて革命黨連は大いに悟る所があつて寧ろ之れは普通の政治問題乃至經濟問題から端緒を開くの得策なるを感じたのてある。處に發したのは借欵問題鐵道國有問題て、南方一帶の人が大不滿を抱いた。此機乘ずべしして、革命黨連は三々五々四方に散つて以上の二問題を焚き附けた。其處て平常淸廷に不滿を抱く所の良民社會、就中面皮ある人々が一齊に起つたのてある。之が今回の事業の成功した所以てある。勿論成功といつてもそれが最後の目的まで成功したのてはない。然しながら堂々の陣を整へて淸廷のそれと太刀打ちの出來るまて至つたのは先づ一段の成功といはねばならぬ。自分が成功といふのは此事てある、只之から先きが如何になるかは自ら次の問題に屬する。

今や南北の兩軍は揚子江畔に於て大開戰を爲さんとしつゝある際てある。此秋に方つて未來の事を豫言するのは至難の業てあるが、我輩の戰眼一擊を以てすれば、其戰爭の遣り口は叛軍といはず官軍といはず、矢張りお國一流の支那的てある。先づ叛軍の方から一言しようか。

一夜武昌に起つて總督を追ひ、將軍を追ひ、武昌一府を收め、進んて漢陽、漢口を占領し、假政府を組織して各國の領事に通知し、居留民を保護して此處に將來の新獨立國を打立てる、とやつた所までは近頃感心

てある。さりながら夫れ以後此數日間に亙っての行動は何をしてゐるかといひたくなる。新聞の傳ふる所に徴すれば、官軍の鄂北に集中し來るのを待つて、之に大打撃を加へやうと豫期するもの丶やうに見える。箇樣な馬鹿な奴があるものか。如何にも武昌の兵は清國切つての精兵でもあらう。さりながら彼の後ろにどれ程のレサーブがあるか。之に多大の同情を寄する多衆はあらう。然しながら夫等は烏合の衆である。なれば十萬となり廿萬となつてお伴もしようが、ならざれば蜘蛛の子を散らすが如く四散し去る奴共ではないか。到底當てになつたものではない。それで叛軍からいへば先づ或所勝負をしなければならぬ。即ち現在有する所の兵力それ丈けを主として賴まねばならぬ。之を種にして彼が如き大事業を成し遂げやうとするのであるから、能ふ丈け多く働いて、能ふ丈け官軍の勢力を弱はめねばならぬ。然るにも拘らず昨今の擧動は何をして居るかといひたくなる。現に漢口には瑞澂や張彪や武昌軍先の幹部が存在する。第一着に其奴共を打捲らないといふ法があるものか。之を打捲つて周圍に官軍らしきもの丶片影もないとして御覽なさい。叛軍の兵勢が益々振ふに極つて居る。而して後追々に諸方から集り來る所の官軍を又片端から片づける。斯の如くして叛軍自らは次第に輿望を收め、勢力も扶植するより外名策はない筈だ。處が叛軍の先生等の言ふ所を聞けば、黃河の鐵橋を破壞しないのは此方面から來る官軍は皆同志であるから寧ろ隊形を成して來る者を其儘に收容せんと欲するが故に破壞しないのであるといつて居るらしい。暢氣も實に甚しい。果してそれが叛軍豫期の通りに歸服して來るものならば結構であるが、歸服しない曉は何とする。好て自家の立場を困難にするものではないか。叛軍に人あらば先づ其橋を破壞して黃河以南の鐵道丈けを存置する。而して其存置するものは鐵道破壞隊の工兵を以て保護して置くのである。すれば叛軍が豫期する如く降服して來るものならば、橋が無くても降服する。黃河を渡るに必ずしも此鐵橋によらなければならぬといふ事はない。多くのジヤンクは

此河上にあるから個々別々に取り乗つて此岸に渡り來るであらう。只恐るべきは隊形をなし、戰闘準備を整へた奴の其儘渡り來るのである。之れ丈けは豫め防がねばならぬ。然るに叛軍の擧は茲に出でずして上に申す通りである。自ら危くするの道を開くものといはねばならぬ。昔から「小國の固きは大國の虜也」といふ言葉がある。叛軍の總大將黎元洪の如何の人物かは承知せぬが、事によると、此男恐ろしい强がりの其實大體の見えぬ先生ではなからうか。海内第一の精兵を自分が指揮してゐるから、之を以て集つた官軍を一擧に打散らして乃公赫々の殊勳を顯はして見せやうなどと力んで御座るのではあるまいか。之は實に大奇道である或は其豫期の通りに奇功を奏するかも知れぬ。然し彼が如き大望を成し遂げやうといふものが、當てにならぬ左樣な奇道を踏む奴があるものか。若し其大戰に勝たない時は何とする。上に申す通り後ろに確實なレサーブを持たぬ軍ではないか。一敗地に塗れるの危險は直ちに其下に随伴するではないか。此處は自分の叛軍に危む所である。

それから今度の官軍の遣り方である。今の清廷に如何に人なしとはいへ、昨日までも今日までも排斥して置いた袁世凱、岑春煊の輩を迄起用しなくても、討伐軍の大將乃至蜀郡地方の鎭撫總督に二人や三人位は相當の人物があり相な物だ。事變が起つたといへば周章狼狽して現廷の政敵たる袁公岑公に向て手摩り懇望して草廬を出て呉れとは何たる醜態であらう。自分自身から滿廷空明きだといふ事を國民に表白するのも同樣である。而して其兵の送り方も日又一日と後れて緩漫を極めて居る。一方には淸廷に人なきことを表白し、他方には叛軍の蔓り次第に任かしてゐる。痴呆も此位まで至れば評の仕樣がない。箇樣にして兩軍は近日鄂北の地に相戰ふのであるが、ドチラもドチラ。先づ好敵手であらう。

此際一寸一言するのは官軍の總督袁世凱の擧動である。之れはなか〳〵面白い。袁公畢竟何を考へて御座らうか。試に先生方寸の中を推察仕ることをお許し召

され。昨日まで逆賊呼はりをされた乃公に起つて呉れろといふのは、北廷よく〳〵窮したな。此處勿體振らねばならぬ。そこで再三の徴用に會つて、扨漸く起たうとお受けをした。それは九地の底まで擠された袁氏てあるから、餘りに勿體振つて出ないのも再び生き還る機會を失ふ。そこで起つは起つたのである。然しながら此事件の發落が如何になるやは豫期しにくい。餘り急いで戰地に飛び込んだなら恢復すべからざる自家の失敗となる恐れがある。そこで大總督にはなつたが、此總督殿恐らくクヅリ〳〵と出て御座るてあらう。三輪の旅籠や奈良の茶屋といふ底の道行で入らせられやう。其中には大抵大勢が見えて來る。確かに官軍が勝つといふ見据がつけば一世の大英雄腕を振つて賊軍を一擧に殲くし、清朝を既倒に回へしたといふ大功を樹て、其儘北京に乘り込まるゝのてはないか。若し又然らずして叛軍の勢燎原の火の如く遊び近くべからずといふ事になれば此處少々分別處、黄袍を身に被つてなどゝいふ夢も亦見て御座らぬとも限らぬ。大總督の方

一寸の中には大抵此二つの考案が一日中には兩三度位出代りに動いてゐる事であらうと思ふ。

以上は昨今の清國に於ける事相の一班であるが、此秋に當つて我日本帝國たるものは、如何の態度を持すべきであるか。成る丈け多くの軍艦を派して居留民を保護し、其身體財産に危害の及ばぬやうに勤めらるべきは勿論である。がマサカ其邊には遺算もあるまい。事々しく之はいふにも足らぬ。我々の希望するのは其れ以上てある、日本政府の第一に取るべきは中立の態度てある。親愛なる與國の内亂てあるから、能ふ丈け之に干渉せず、中立の態度を取らねばならぬ。之も何人も思ふ所にして、政府自身も已に表明せられたやうてある。之についても論はない。只其中立サの如何てある。此間に我々が忠言を容れたいと思ふのは、由來我外交は大の官好き、政府好きてある。一通りそれも尤もてあるが、それには自ら次第があらうてはないか只今の處ては叛軍寡單にして言ふに足らざる樣てあれど、江南一帶民心の向ふ所から察すれば、それが大物になるの

にならぬとも限らぬ。此際に當つて一向隣國の官の爲め、政府の爲めとのみ計らるゝに於ては、非常の國難が其後へに隨伴しないともいへぬ。何となれば一朝彼の叛軍が非常の勢力を得て、清廷の力之を奈何ともする能はずといふ場合になつたとして御覽なさい。遂には是れ清國は分裂するてはないか。即ち南北兩朝の對立てはないか。尤も支那帝國の國となりから考へれば、彼の人民は一朝の下に統一されやう〳〵とする傾向を有して居る。それてずつとの未來を見越せば、一時分裂するとも結局は歸一するてあらう。さりながらそれは歴史家の看點てある。此處十年廿年若し兩朝對立するものとしたならば、其富なり智識なりが果して何れに多しとするか。いふまてもなく南方一帶てある。南方が醇酒ならば、北方は酒の糟位のものてある。其酒の糟に熱中して醇酒を取り逃がすといふ事は悧巧なお客の座るべき膳てはない。此處が中立サに手心の入る所てあらうと思ふ。現に我政府は已に〳〵北廷から：……………を請合つて御座らうが、それを惡いとは決して申さぬ。請負はるゝはかゝる場合てある。なか〳〵機敏に請負はれたと賞讃する。然し其請負はるゝ區域を北方丈けに若し限らるゝとすれば短見の甚しいものといはねばならぬ。公然の秘密に北方からそれ等を請負はれると同時に、秘密の秘密に南方からも出た注文を無にせられぬやうに希望する。斯くの如くして等分に南北の觀望を我國に惹き附けて置くといふ事は將來の計てはあるまいか。イヤ左樣な事は政府としては出來ぬなどゝ直ぐにも言はれさうな事てある、然しながら外樣のなさる所も少し見なければならぬ。日清戰爭當時に於ける英國の態度は如何てあつたか。戰爭中に支那に向て盛んに兵器彈藥を供給された。之れに對しては我々日本人としてイヤな中立てあつたものだと憤慨しないてはなかつた。然しカーデーフ炭を我海軍に向て盛んに供給して呉れたのも矢張り此英國てある。之を見た時には又都合のいゝ中立國てあると歡迎する場合もあつた。此英國の手心は我國の現在支那に對すべき手心てはなからうか。此位言つて置けば澤山

であらう。それから先きの意味深長は手の中にあり位でやつて貰ひたい。

それから今一つ此中に含まるゝ事であるが、此際餘りに國内の民間黨の擧動を拘束されぬやうに願ひたいものである。之も餘りに踏み込んで明言すべき限りでない。然しながら由來官好き、政府好きの我政府は、頼まれもせぬのに無暗と民間黨のする事を拘束するのが例である。大帝國の國家としては餘りに迫つて居る。此邊も政府に於て大體の方針を定めて、大マカにやられん事を希望する。申さば大概の處までは、見ぬ振り知らぬ振り位の處が妙であらうと思ふ。其方針さへ立てゝ置かるれば、警保局でも警視廳でも御趣意の奉戴しやうがあらう。浪花節の好きな古賀警保などは大いに心を用いて然るべきことゝ思ふ。

それから次ぎの國際問題は、日英同盟を役に立てるといふ事である。あの同盟が外觀に出來てるのでない限りは、かゝる場合に役に立てゝこそ同盟の同盟たる所以はあらう。同盟畢竟何を目的として締結せられたか。清國に於けるインテグリチーを維持し樣といふのが根本の趣意ではないか。處が昨今列强の行動を見渡すに、そろ／＼火事場泥棒が泥棒の準備に取りかゝる樣に見える。何處とかの地方に出師準備をしたとか、何とか海に艦隊を派遣するとか、物騷な眞似をする一强も見えるやうである。其强國の現に占據する一地點の如きも本はといへば他所のドサクサ紛れに掠奪した地點でないか。然るに其掠奪者は傲然として其地方は自家の勢力範圍だなどと唱へて、而して又此ドサクサに乘じてサーベルでも振廻して見たい氣味はないか。天未だ雪を降さねども先づ來るものはそれ霰とやらといつたやうな有樣がチラホラ目障りになる。此際なり、英國と充分の協訂をなして、兩國の名を以てするもよし、更らに進んで他の公正にして平和を尊重する數强と組むもよし、兎にも角にも今回清國内亂については、之に乘じて列强は一坪の土地も分割を企つべからずといふ事を聲明して貰ひたいものである。斯くの如くにして初めて東洋の平和は保障せられるのである。日本

政府の外交としては何よりも之が急務であらうと思ふ。

最後に今一つ此時局について豫め注意して置きたい事がある。それは三十三年の團匪の亂から見れば、實はといへば各國の此内亂に干渉すべき勢は十倍し來つたといはねばならぬ。列强の利害は三十三年當時に於ても可なりあるはあつた。さりながら列强の資本は未だ今日の十分の一程も入つてゐなかつた。然るに今日となつては直接に淸廷に貸與した鐵道其他の資本から又鑛山其他の事業に向て放資した金額も實に巨大なものである。從て列强政府は、銘々自國國民の財産保護上からも長く此内亂を傍觀することは出來にくい。そこで時局の發展如何によつては、共同干渉の必要が起らぬともいへぬ。扨之が起つた曉である。右するか左するかは知らねども、兎にも角にも此亂を鎭定し得べきものは我日本を措いて外にない。而して實はといへば彼の國に資本を投入してゐるのは我國が一番少い筈だ。が以上の場合に際會したならば、「此内亂を鎭定し得るものは獨り貴大帝國あるのみ」など、詰度オダテ込まれさうである。すると國人の輿論にこそ少しも耳を藉さぬ政府であるが、列强に忠順な事は又無類の政府である。顧眄して自ら勇なりといつたやうな態度で「それは遣りませう、お引受申した」など、直きに言ひさうな心配がある。此處ウッカリ引受けたが最後、世界で一番馬鹿を見るものは我帝國であらう。此際帝國としては自重に自重を加へ、容易に列强のオダテに乘らず、自家の計畫から自國に取り、兼て東洋全體に取つて、一番長計であるといふ所を踏まひて然る後動いて貰ひたいものである。此事丈けは自由黨の政府でも政友會の政府でも何でも構はぬ、切に國の爲めに今からお願ひ申して置く。

以上の事柄にして注意せらるれば、それから以後は靜かに事變の發落を見るのみである。其上の工夫はまだ段々あらうが、何樣騷動は序幕であるから、先づ序幕に對する考丈けを申述べて置く。(十月十八日)

官僚とは何ぞ

法學博士　江木衷

官僚々々と云ふ語は近頃屢々耳にする。善い意義にも使用せられ悪い意義にも聞取らるゝので必ずしも外國語の「ブロクラシー」にも相當せぬ。日本では別に一定したる理想的意義がなくては此語もない筈だが時代々々の變遷で其意義にも變遷がある。先づ其起原沿革を述べて見やう。

維新以來數十年間此日本の獨立國たる體面を侵害したものは彼の有名なる治外法權と云奴で苟も外國人たるものは一商人でさへ日本の法律に服從するの義務がないと云ふのだから外國人は勿論外國人に雇はれたる馬丁コックまでも威張り散らすと云ふ狀態で民間には排外熱が勃興して切齒扼腕したものだ。素より政府も此治外法權を撤廢すると云ふのが其全力を傾注した一大事であつたが政府には別に深謀術策がある。即ち民間と反對に猫をかぶつた軟柔政略である。ソコデ先づ第一に外國政府の御機嫌を伺ひ奉り其好意を蒙る外はないと決心した。低頭平身お世辭追從のあらん限りを盡し舞踏會だの假裝會だのとガラにもない眞似をする。耶蘇基督を奉戴し赤十字社を推立てゝ日本が西洋流の博愛國でござると吹聽する。高襟風(ハイカラ)の娼妓政界とも名くべきだが時勢は實に已を得ぬのである。心の中では泣き乍ら外に對する笑ひ顔も國家を思ふ一念だ。國家百般の政務は專門家たる官僚一味の手練手管に待の外はない。國民と共に立憲政治を行ふなどと云ふ事は以ての外である。第二には文明制度を假裝して日本も文明國でござると持掛けて對等國の仲間入を哀願すると云ふ事だ。刑法民法の諸法典は勿論憲法も制定されたがホンの對外看板の裝飾物に過ぬのだ。其實國家

の全力を擧げ何事を犠牲に供しても治外法權を撤廢すると云ふのが政府の唯一の目的である。一人たりとも此外交政策に妨害を加ふるものがあつては大變だ。全國民に去勢術を施して無氣無力の一國となし以て外に當るの必要がある。國民の手も足も縛り上げたる其上て犯罪人として取締るの方策が充分に計畫せられた。看板たる憲法の明文には日本臣民は法律に依るに非れば逮捕監禁處罰を受くることなしとある。頗る表面は立派だが其所謂法律と云ふのが有名無實である。歐洲の文明國ては夢にも見る事の出來ぬ非立憲野蠻至極の法律てある。當時の治罪法の明文には人民を逮捕拘禁するには逃走の恐あるときと又は證據堙滅の恐あるときと云ふ條件を必要とすとありて一見公平を装ふたのだが其所謂恐あるときとある其恐れがあるや否やは有司の獨斷の見込に一任することと云ふ事だから毫も法律上の制限はない事になる。裁判も亦事實の認定も法律の適用も獨斷判事の見込に一任し法律に適合する様勝手次第に事實を認定する事が出來ると云ふ事になるのも當然だ。法律の解釋も亦非常に有罪の方向にのみ傾き殊に内外人交渉事件ては内國人の勝訴となつた場合は殆んど絶無てあるので司法權の獨立と云ふ事も名義のみと思はれる。立法事業も亦同樣てある。刑法は佛國の老儒ボアソナード先生の手になつて文明流に出來たので何でも蚊でも犯罪を名として人民を捕ふるには甚だ不便至極てある。ソコデ實行後間もなく改正論が持上り明治二十年には早く已に改正に着手したのだが是が明治四十一年に公布されたと云ふも奇々妙々の顯象てある。要する所表面立憲政體となり乍ら其實其反對に非立憲主義壓制主義を行ふと云ふのが當時の實況てある。専門家の官僚の手腕手管てなければコンナ政治が出來得べき筈がない。人民と共に此日本の政治を行ふと云ふが如きは素より空想に過ぎなかつたのである。ペテン政策とも名くべきだが時勢は實に已を得ぬので心の中ては泣き乍ら我が人民の尻を抓めると云ふのも國家を思ふ一念だ。其の精神目的は咎むべき所はないが是が第一期の官僚て實に國家有用の材には相違

ないが官僚と云へば何んだか物に表裏虚實ある底氣味の悪い氣持もした。

右の如き對外軟柔政策は外國人をして益々附上らしひるの外はない。勢はいよ〳〵窮した。日本人から言へば武士道外國人から言へば排外熱は遂に爆發した。所謂臥薪嘗膽の結果である。日清日露兩大戰爭の影響で治外法權も撤去され對等國の實も得た。於是第一期に於ける官僚政治の目的は全然消失したのだが數十年來の慣行は中々一朝にして改らぬのみか一旦政府の手中に歸した廣大無限の權力は政府に取りては便宜至極である。政治の意見を異にする政府の反對黨に對し往々此手段が應用せられて人民を敵とする事になつた。具體的實例は今更茲に素破拔く必要もないが。已に惡事と知り乍ら國家を思ふ一念から已を得ずして裏面的ペテン的に密行した非立憲獨斷壓制の主義方針は其解決を偏狹の學理に求て來た。久しく此主義方針に養成せられた官吏學者連は此主義方針に向つてコジ付理窟の空理空論を附會するの風をなし所謂當時の腕利役者と持て囃され其筋の氣受もよく立身出世も早いと云ふ次第で公私の學校も盡く沒常識沒人道を本則とする敵民學の研究所と變じ去つた。常識常道を遠かれば遠かる程深遠有爲の學者人材と尊敬された。裁判事務の獨斷壓制主義は益々發達し立法事業も亦同一傾向となつた。彼の治罪法で表面丈け公平を裝ふた規定も改正せられ刑事訴訟法は敵民學上當然の結果として赤裸々に有司は勝手次第に人民を逮捕し得ると云ふ露骨の明文が出來た。敵民學の奥の手を明示した所の新刑法も公布せられた。誰れが捏造したものか新刑法は大に獨逸學者に賞讃されたと一時の評判もあつたが全然虚僞の皮だ歐米で一人も譽めたものはない。新刑法は獨逸の「リスト」氏の敎科書に基いたと云ふのだからセメテは「リスト」一派の評論位には上つたらうとも豫想されたのだが。コンナ極端主義の刑法が「リスト」氏の理想の實現だなどゝ言はるゝ事は「リスト」氏さへ迷惑至極と感じたものか氏は何事も公言せぬと云ふ事は明白だ。是が第二期の官僚で敵民主義の專門家である。政

府は素より人民を敵とするの惡意はないが政府の主腦とも云ふべき大官連は法律論と云へば由來立法の大體の方針にも御氣の付かぬのだから致方もない。是は治外法權時代に因襲した學風の罪で政府の罪ではない。

併し物究すれば變ずて敵民政策の結果は遂に人心の歸向を誤るに至つた。敵民學の國法論は國家を無限の暴力者となし臣民を絕體的の屈從者とするので人民は牛馬と云ふ事になるのだ。從て牛馬に忠孝仁義の觀念は零(ゼロ)だと云ふ事になつた。　天皇の御名に於て獨斷裁判を行ふと云ふ事が獨斷學上で古今の眞理だと講釋するのだから　天皇は神聖にして侵す可らずと云ふ事は命令と云ふ事になる。已に命令と云ふ以上は人を殺す勿れ他人の財物を奪ふ勿れと云ふ命令と一般で此命令を侵して人殺も流行すれば泥棒も流行すると同一譯合になる。弊害の究極する所は遂に有史以來未曾有なる危險思想の爆發となり朝野を震駭したのである。或は其原因を警察の行動に歸する者もあるが淺薄の見解で素より論ずるに足らぬのだ。法律制度敎育の首腦部に存する大缺點が危險思想の直接原因たる事は古今の通理である。併し之が爲に立憲政治の實を行はねば此日本は治まらぬと云ふ事が官民上下一般の認る所となり所謂情意投合で內閣の變動をも來したのだが、今後の政權は立憲政治の實を行ふものに歸すると云ふ大勢が確定したのである。前內閣も現內閣も此點に異存のあるべき筈はないが此形勢の推移にお氣が付かぬと云ふのが今日の官僚だ。今日の所謂官僚とは治外法權時代の小役人で當時に於ける官僚主義の精神目的は毫も知る所はない。又當時此等の小役人に對しては此精神目的は極めて秘密にされてあつたので之を知らぬも無理はない。唯だ〳〵多年間の經驗で、非立憲獨斷壓制と云ふ事が不思議にも上官のお氣に入るとのみ思ひ込み更に敵民學に養成せられたので時勢の變遷を知らぬは尤千萬の次第である。今日は前內閣でも現內閣でも要路の人々は流石に時勢の實情に覺醒し立憲政治の實を擧げねば日本は治まらぬと云ふ大綱は明かに看取されて居るのだが、其精神ばかりでイザ具體的法案となると

矢張り官僚一味に放任することゝなるので實務は知らず識らず敵民學の實行となるの恐がある。文官任用令の改正と云ふ事も此點から其必要を感じ來るも當然の勢だが人物を交代したとて依然敵民學の卒業生を採用すると云ふ譯ては實行も覺束ない。現行の法律制度以上に汎く文明制度に通曉したる人物てないと官僚の小理窟に閉口する外はない。今日の官僚と云ふものは此意味合のものだが空想論ても獨斷學をさへ無上の眞理の如く吹聽する丈の頭脳は充分に發達し居るのだから其精神を一變したる以上は又一ト廉の用に立つ可き所もあるてあらう。官僚一味が前内閣と通謀して現内閣を倒さんとすると云ふ新聞もあるが前内閣も此官僚の獨斷學に中毒したのだからソンナ馬鹿氣た事がある可き筈がない。是が即ち第三期の官僚だが何れの日にか來る可き第四期の官僚はどんなに變遷し來るか見たいものだ〳〵。

支那の革命黨と秘密結社

東亞同文會幹事長　根津一

支那の革命黨の起原は左程古いものではない。寧ろ新らしいものだといふた方が適當である。今より六十年前洪秀全が亂を起して、十八省の中十五省を占領した。そして十三年間も戰爭が繼續した。此時支那の人才が兩方に分れて、多少ても實力あるものは起つて官軍に附くか賊軍に屬するかした。處がとう〳〵官軍が勝つたものだからして、天下の人才も悉く北京政府に羅致せられ、政治も大いに擧つて殆んど中興の姿を呈した。曾國藩、李鴻章、左宗棠などいふ有力な人が相並んで支那を統治した。彼此する中に追々西洋流の新

らしい學問が入つて來て、個人主義とか自由主義とかいふ思想も廣まつて來るし、百般の新智識も流れ込んで來た。そこへ以て來て日清戰役の結果、支那は大打擊を受けた。それまでの間は政府の力が餘り薄弱なとも思はれなかつたが、蕞爾たる日本から散々にやられた。そんなに政府が薄弱なものならば、一つ政治上で轉覆されぬことはあるまい、といふことを思ふに至つた。それで一方には康有爲、梁啓超などが改革意見を出して、光緒帝も贊成されて、改革を實行しやうとした。處が袁世凱が裏切りして康も梁も逃げた。そして康、梁は保皇會を造つた。孫逸仙は更らに一歩を進めて滿洲人を驅逐し、漢人の天下として其上共和政府を建設しやうとした。それで康有爲等と孫逸仙等は二つに分れて、今では互に反目して相容れぬ有樣である。元來此等の革命思想を抱くものゝ出た廣東廣西は古來嶺南の地と呼んで居るが、嶺南の民は即ち王化の及ばぬ民とせられて居つた。支那の地は禹域といふが、夏の禹王は支那を五地帶に分けて一番眞中を甸服、それから眞中を去る順序に從つて候服、要服、約服、荒服の五服に分けた。嶺南は即ち荒服の地であつて、ちつとも朝廷の恩惠を受けず即ち王化に霑はざる民である。王化に霑はれざるが故に兎角謀反人が多い。謀反人が何時でも大抵此地方から出る。孫逸仙なども其養を持つて居る人だ。

革命黨といふものは前申す通り、西洋文明の入つて來た事と、日清戰爭の影響との爲めに出來たやうなもので、其起源は極めて新らしいものであるが、支那に古くからある不平團體は即ち秘密結社である。今日最も勢力ある哥老會なるものは、其會員全國に亙つて數十萬人あるが、これは明の遺臣鄭成功が明朝恢復の志就らざりしが爲め、其與黨が、福建、廣東兩省に繁殖したのを土臺にして居るが、洪秀全の亂に加擔して再び敗れたので、遂に南洋、濠洲、南北亞米利加等に渡航したものも少くない。此等が支那移民の嚆矢をなしたのであるが、繁殖に巧みな支那人の事であるから、今や巨萬の富を作つて居るものが多い。彼等は今回の

革命黨の軍資金調達などに實に有力なる後援をなして居る。又矢張り福建、廣東、廣西に亙つて三合會といふものがある。之は哥老金の一派と目すべきもので、互に連絡を保つて居る。又白蓮會といふものは恰度眞言秘密のやうな事を信じ、人間が天井を倒さになつて歩くことが出來るなど丶一種のメスメリズムのやうな事をやる連中である。之は達磨が居つたといふ少林寺を根據として、達磨の秘法を傳へるといふて河南、山東、直隷邊に散在して居る。また老子の道德教を奉ずる在裡敎は河南直隷の一部にある。元來老子の敎はよく謀反人を出したが、之も明の遺臣揚存仁の創始したもので、矢張り明朝恢復を主眼として居る。又江蘇、浙江邊には鹽梟といふものがある。支那では鹽は官營となつて居るが、之は鹽の密賣をやるもので極めて慓悍な奴等である。北に馬賊、南に鹽梟といつて慓悍な人種の標本である。其外澤山の小結社があるが、革命黨は此等の秘密結社と連絡をとつて興漢排滿の策を講じつ丶ある。

一體今度の革命騷動は武昌に突發して漢陽、漢口等を占領した爲めに、世人は其方面に最も重きを置いて居るやうであるが、それは世人の誤解である。私は今度の騷亂で一番重きを置くべきは四川であると思ふ。四川の地は地肥え、財豐かにして人口も六千萬ある。揚子江の流域は八十萬方哩あつて、支那の富の中心であるが、四川は之を人體に譬ふれば恰度頭腦のやうな處で最も大切な處である。此大切な所に彼の鐵道國有問題の騷ぎが起つたのである。蓋し四川の民設鐵道の資金は一千二百萬兩であるが、之れは建設の當時地租の附加税のやうな形に、大小の地主に强制して株を買はせたのである。夫れ故に四川の大小の地主は悉く株主であるといふ事になつて居る。然るに之を國有とするについての政府の遣り口は實に亂暴極まるものである。何故かといふに一千二百萬兩の中四百萬兩は會社の浪費と見て之を認めず、四百萬兩は無利子の株を與へ殘りの四百萬兩丈け普通の利の附く株を渡すといふのである。一千二百萬兩の中三分の一は帳消し、三分

の一は無利子の株、殘りの三分の一丈け普通の株を渡すといふのであるから、人民も憤慨せざるを得ぬのである。それに湖南、廣東邊の鐵道の買收の時は現金拂をして居るのに、四川丈け右のやうな始末である。思ふに四川は金持が多く、且つ人民が溫和だからといふので、政府が馬鹿にしてかゝつたのであらう。普通の株を貰つたからとて、今の淸國政府のやうな信用の薄弱なものでは、人民が不換紙幣を貰ふやうに思ふのに、前述のやうな始末で、ひどく踏付けられた外に紙切れを握らせられたやうなものである。彼等が激怒して四川全體に不平の聲囂々たるは固より其所である。そこで此四川一帶がかゝる空氣になつて居るといふ事は革命黨にとつて非常の强味であつて、萬一若し革命軍が敗るゝことがあつても四川に退いて守れば、官軍は容易に破ることが出來なくなる。といふのは四川は四方に高山峻嶺を繞らして、甘肅峽西に通ずるには蜀の棧道があり、揚子江に沿うては三峽の險あり、官軍が三四倍の兵を以てするも攻入ることが六つかしいのである。されば革命軍の根據地としては實に無双の地である。のみならず今日革命軍の占據して居る中淸地方も非常に形勝の地であつて、四川を頭腦とすれば之は中腹に當るのである。殊に武昌は楊子江を隔て、且つ四方に城壁を設けある要害の地であつて、此處に立籠つても容易に破らるゝ恐がない。又漢陽の大別山は武昌の蛇山と相對して漢口一帶の地を俯瞰して官軍を砲擊するに都合がよい。のみならず革命軍は漢陽の兵器工廠や鐵政局を奪つたからして兵器彈藥等の補給も出來、其活動は何人も豫想することが出來ないのである。

凡そ事を爲すには天の時、地の利、人の和の三拍子揃はなければならぬのであるが、革命軍が今年の如き洪水凶作に惱める時に起つたのは誠に天の時を得。四川を後援とし、中淸要害の地に據りたるは地の利を得。鐵道國有の不平、租稅負擔の痛苦を機として人民の同情を博して居るのは實に人の和を得て居るといふべきである。

此革命騷動が如何に落着すべきやは何人も豫言する

ことは出來ぬが、我日本國民は最も愼重の態度をとつて、機宜を誤らぬやうにしなくてはならぬ。滿人は九千萬に滿たず、漢人は三億に餘つて居る。若し假りに革命軍が負けたとしても、漢人の怨を買へば將來の對清貿易等に大打擊を蒙ることになる。私は呉々も日本國民に向て愼重の態度を取らんことを希望するのである。今大變忙しいから、此位のザッとしたお話で御免を蒙りませう。(十月十九日)

次號の公論欄には、本多精一氏の財政論、水野梅曉氏の支那革命黨詳論等掲載せらるべく、又竹越與三郎氏、鵜澤法學博士等にも寄稿を依賴せり。

物價騰貴防止策

現今の物價騰貴の意義

法學博士 戸田海市

一 物價騰貴の一般の結果

一般物價は成るべく靜平を保つことが必要てあるが、世界產金額の增減其他種々の事情の爲め、一般物價を全く靜定せしめたることは人力の企て及ばざる所てある。そこて物價の高低を避け難き事實とすれば、其の騰貴と下落とが何れが善きやの問題が起る。物價の高低の利害は其變動の程度の大小に由て同一てない。若し其變動の程度が大きくて且つ急激てあれは、騰貴も下落も等しく甚だ有害てある。何となれば急激な大騰貴は通例一般經濟界を投機的に導ひて無謀なる膨脹發展を爲さしめ、其結果早晚大恐慌を來すのみならず、勞働者や月給取りの所得は通例物價の如く速かに騰貴することが出來ず、常に一歩後れて騰貴するものてあるから、彼等の給料は金額から見れば前と同一てあつても、其金の物品購買力が減少して居る、故に其の實際の所得は減少した結果となつて生活難を生ずる。又物價の急激な大下落は是亦恐慌を生ずること多きのみならず、諸事業の收支相償はざる結果となつて人氣の銷沈及び不景氣を生じ、從つて又勞働者や役員に多くの失業や就職難を生ずるからてある。以上の場合と反對に若し物價變動の程度が小さく且つ徐々に現はれんとするは、概して下落よりも騰貴の方が利益てある。何となれば物價下落は企業心を萎靡せしめて一

般經濟界の不景氣を來たし、從て勞働の需用も減少するから下級民の實所得も增加することは難い。此場合には月給取り就中政府の役人は金錢所得の減少せずに物價が下落するから利益を得るやうてあるが、其實世の中の好景氣てないから諸事業の擴張も行はれず、從つて役員高等勞働者の需用が起らぬから、此社會全體に就職難を生じ、又既に就職して居る者も進級發展が六ヶ敷い。然るに物價騰貴の時は經濟界が活潑となり、勞働の需用も增加するから、其騰貴の程度が甚しくなければ、物價と給料との間に別段の不權衡も起らず、一面には各自皆職業に有り付て失業や就職難の弊が起らぬからてある。

十九世紀の後半は產金額の不足が主な原因となつて物價下落を生じたに反し、二十世紀に入つて產金額の急增に由て世界各國の物價は大なる騰貴を爲しつゝある。之が爲めには既に世界的の恐慌を生じたのてあるが、昨今尙ほ繼續して行はれつゝある騰貴は、近く再び投機的膨脹及び恐慌を生ずることはあるまい。何となれば最近の恐慌に由り生じた警戒心は今尙ほ頗ぶる强いからてある。只だ昨今の如く騰貴を續けては勞働者の給料や役員の月給が之に追ひ付つくことが出來ない。そこて各國の勞働者が同盟罷業を行うて給料の騰貴を圖つて居るが、中々成功しない。一體物價騰貴の時期には同盟罷工の起るのが常てあるが、一面物價騰貴は諸事業の好景氣を生ずるから、同盟罷工も割合に能く成功し、又同盟罷工の最後の手段に訴へる前に、勞働者は掛引き談判に由て相當の給料引上げを爲さしめる場合も多いのてある。然るに今回の物價騰貴は普通の場合と異なりて事業界の好景氣と伴はないから、同盟罷工の最後の手段に訴へても成功が六ヶ敷い。是れ歐米一般に近年物價騰貴に亞ぐに同盟罷工が流行的になり、而も不成功に了るものが多い爲め、下層階級の生活難の聲が甚だ高くなつた所以てある。我國も歐米と同じく物價騰貴が起り、之に次て同盟罷工は發生せぬが、中流以下の生活難は起つて居る。要するに現今の物價騰貴は彼我に通じて、經濟界を大に活潑好景

氣ならしめる力はなくて、而も中下層階級を甚しき生活難に陥れつゝある。

此の如く物價騰貴と云ふ事實は彼我同樣であるが、我國は特別の事情よりして世界各國よりも騰貴の程度が更に高くなり、從つて中流以下國民大多數の生活難も一層甚しい。併し我國の物價騰貴は獨り生活難と云ふ社會的弊害を生ずるに止まらず、此際我物價が世界に先んじて騰貴すると云ふことは、否な世界先進國と步を並べて騰貴すると云ふことさへも、我國の經濟財政を非常に苦境に陥れるものである。今にして速かに此騰貴を抑へる策を講じなかつたならば、兌換券及び金貨制度の基礎を動搖せしめ、其局遂に國民的破產を招くの虞れがないとも限らぬ。

二　我が物價騰貴の特別の危險

日露戰爭に由て我國は國力不相當なる巨額の外債を起し、其利息だけでも年に少くとも六千萬圓の正貨を海外に支拂はねばならぬ。此外其元金の支拂も次第に差迫りつゝある。戰後暫くの間は國民擧つて外債の巨大なるに今更ら驚愕し、我が貧弱なる經濟力を以て、如何にせば兌換制度を危うすることなくして、能く此元利支拂の大債務を履行し得べきかに付き痛く心を惱ました。然るに夫れも極く暫くの間の事で、其後國民は此外債問題を殆んど忘れて仕舞ひ、盛んに膨脹だ發展だ一等國だと騷いで居たのである。併し國民は忘れて居ても事實は事實として殘つて居る。此頃になつて國民は愈々眞面目に外債問題を考へねばならぬ時機が到達した。

我國が此大外債の元利支拂を爲すの途は殆んど專ら輸出超過に由るの外はない。我國が今ま俄かに佛蘭西伊太利等の如く多數の富裕なる世界漫遊の客を招致し、又は伊太利の如く無數の出稼人を海外に送つて、外國支拂の元資を造り出すことは出來ぬ。然らば輸出超過を生ぜしむるの途如何と云ふに、若し普通の場合にてあるならば、獨り政府が歳計上公債元利支拂ひの餘裕を造り出すを以て足れりとせず、必らずや同時に通貨の流通を縮小して一般物價を下落せしめ、以て自

然に輸入を減ずると同時に輸出を增すの外はない。此方法は無論一面には物價下落に伴ふ所の不景氣や失業就職難を生じ、國民に取つては甚しき苦痛であるが、苟くも正貨準備を擁護して兌換制度を確立せしめんとすれば、借金返濟の爲めに避くべからざる苦痛である、斯くの如く本來なれば借金返濟には大々的苦痛を伴ふものであるが、茲に思ひ掛けざる天祐とも云ふべきは、國民が此の如き苦痛を多く感ぜず、不知不識の間自然に外債の拂へる事件が起つて居る。其は即ち産金額の激增に由る世界的物價騰貴の事實である。其理由は左の如くである。

世界の産金額の國際分配に付て最も早く之に參加し、從つて最も早く物價の騰貴を生ずるのは、商業の最も進歩した國である。我國の如く世界の中心市場と遠く離れて居て貿易高も少なく、又運賃嵩みて遠く輸送するの不利なる粗製品を多く輸出する國は、最後は産金額の分配に與かり、從つて先進國よりも物價は常に後れて騰貴する順序である。故に若し戰後我國が人爲的に通貨を膨脹して物價騰貴を惹起さなかつたならば、其儘に放任して置ても我貿易は當然輸出超過となり、其超過額に對する受取り金を外國に支拂ふて國内に流通せしめなかつたならば、年々歲々更に輸出超過が益多くなり、從つて政府の歲計に必要なる支拂の餘裕を作りさへすれば、直接國民には物價下落や兌換制度の不安と云ふが如き苦痛危險を感ぜしめずして、能く巨額の對外債務を自然に支拂ふことが出來たのである。

此の如く我國は幸ひにも通貨縮小、物價下落、不景氣等の如き借金支拂の當然の苦痛を感ぜずして外債支拂の途が出來たのであるが、戰後人爲的に通貨を膨脹せしめ、獨り我國の物價を先進國と相並んで騰貴せしめたのみでなく、更に之れよりも一歩先んじて騰貴せしめた。其結果外債支拂の自然的方法は全く破壞せられたるのみでなく、兌換制度を維持するが爲めには更に此大外債を起さねば立ち行かぬ、借金を拂ふ爲めに更に借金せねばならぬと云ふ行き詰りの境遇に陷つ

た。然らば何の爲めに戰後我國の通貨が此の如く不自然に膨脹して物價を騰貴せしめたかと云ふに、彼の電鐵電燈瓦斯燈と云ふが如き直接に商品の生産取引を增加しない民間事業が、或は內資を以て、或は外資を輸入して多く勃興したことも幾分か原因を爲しては居るが、主たる原因は政府の過度に膨脹したる歲計を維持する爲めに兌換劵を膨脹せしめ、一面には大に關稅を引上げて此の人爲的の物價騰貴を永く支へ得ざるやうに爲たことである。固より政費は如何に膨脹するとも、增稅を斷行して之を支辨したならば、不自然なる通貨膨脹及物價騰貴の弊は大に寬和せられたのであるが、租稅の負擔は極度に達して最早や增稅の餘裕が無い所から、此の過大な歲計を支持する爲め種々の名義を以て內外債を起した爲め、遂に今日の如き狀態に立ち至つたのである。

國民の借金を拂ふ爲めに借金すると云ふことは最早や行き詰りてある。成るほど一個人なれば此の如き境遇から脫出するの方法が無いでもない。借金しても外觀を修飾し、交際や運動や遊泳術を施して一足飛びに好地位を占め、苦もなく舊債を辨濟すると云ふ例もある。併し個人としても此の如き不健實な處世術は多く失敗する。然るに個人ならざる國民は萬に一も此の如き國際的處世術を施して成功するの望はない。我國民は此際斷乎たる決心を以て方向一轉するの外はあるまい。年中張り詰めた弓はマサカの時に役に立たぬ。

三　物價騰貴の根本救治策

今日の行き詰つた狀態より脫出するには、通貨を收縮して物價を自然の地位に下らしめ、世界的物價騰貴に乘じて我が貿易を輸出超過とならしむるの外はない。國民が大なる勇氣を以て一旦此策を斷行すれば其後は世界的物價騰貴の繼續する限り、國民は樂々と外債の支拂が出來るのである。今日世界金産出の狀態より見れば將來も依然産出增加を續け從つて世界的物價騰貴も亦當分止まらないことゝ思はれる。故に我國が今にして天の與へたる此好機を利用するも決して晚くはない。此外我經濟を行き詰りの狀態より脫出せしむ

るの方法として、理論上より言へば通貨を其儘として置て、一面急激に生産を振興せしめ、以て物價下落の結果を生ぜしめ、特に輸出超過を生ぜしめたることである。這は世間に謂ふ所の積極策なるものであるが、此策は實際目下の急に應じ得るやうに急激に行はれるものではない。況んや事業を振興すると云へば、多くは物價騰貴を生じ易き電鐵や電燈や瓦斯業の如き事業のみに向ひ、其他には適當な新事業なしと嘆息する様な意氣地なき今日の實業界では、此積極主義は殆んど無主義に終らざるを得ない。

通貨を收縮して物價を自然狀態に復せしむるには、過大の關税を適度に減廢し、以て不自然な物價騰貴を何時までも支持することの出來ないやうにすることも必要であるが、這は消極的の手段のやうで、積極的に通貨を收縮せしめたるには財政を緊縮するの外はない。今日日本銀行の民間貸出は極めて微々たる額であるから、其民間貸出を制限しても別段通貨縮小の効はない。成るほど一つ々々の政務に付て云へば此際是非擴張を要するものもあらうが、總體より云へば冗費節約に由るの外に擴張の餘地はない。若し强て擴張せんとすれば先づ增税を斷行すべしである。併し今日增税の餘地なきことは何人も拒むを得ざる所である。又今日の財政難は獨り一般政費の膨脹に由るのみならず、公債價格を維持せんとするから起つて居る。在外正貨を補充して在外公債價格を維持する爲めに新たに公債を起し、又内國債に付ても政費縮小より得た餘裕もなくて無理に償却するから新負債を起さねばならぬ。政費の大減少に由り餘裕を造ると云ふが如き正當の方法を以て公債の價格を維持することが出來るなれば喜ぶべきであるが、新たに借金して之を維持するの必要なく、又此の如き姑息手續は最早や久しく行ふことは出來ぬ。固より公債價格の急激な下落は成るべく避けたいが、何時までも人工的に高價を維持せしめることは出來ぬ。公債價格を人工的に維持して新たに公債募集を爲すの便利を存して置くから、日常の政務膨脹に付ても自然公債に依賴したくなる。否妄りに公債に依賴

して膨脹せんとする心があればこそ、無理な遣繰を行ふて物價騰貴の大弊を生ずるを顧みず、强て公債價格の維持に努めて居ると評する方が正當であるかも知れぬ。若し公債を財政の實力相當の點に下落し、從つて當分新たに公債を募ることが出來なくなれば、實力不相當な政務の膨脹をも斷念する結果となる。故に公債價格の下落は一般行政及財政整理上有害でなくて寧ろ必要である。

成程國際間には何時事變が起るかも知れぬ。伊土戰爭の如き何人も豫期せざりし所である。近く支那昨今の革命騷ぎも如何に落着すべきやは豫期すべからざる事柄である。斯く國際關係は不安なるものとすれば、常に公債の信用を維持して萬一の際の新募債を可能有利ならしめる必要あるは無論である。併し今日迄の策は名を低利借換へに藉り、又は大藏證券に由る一時融通の形式を裝ふて、事實上少しづゝ新債を起し、以て僅かに目前公債市價を維持するの彌縫策であり、從つて公然と政費不足を補ふ爲め新債を募ると云ふことになれば、假令へ其の金額は僅かでも今日の公債市價は保てない、却つて反動的に大下落を生ずる。然るに國際間の事變に應ずる爲めの募債は、一寸しても二億や三億では足らない。此の如き巨額の公債を起す爲めには、勿論今日の如き彌縫策は寸効をも生ずることは出來ぬ。一個人の不健實な遣繰算段を直ちに國家の財政に應用せんとするが如きは、如何にも時代後れな幼稚な考と云はねばならぬ。

今、支那の革命騷ぎと云ふことを例に擧げたが、此變亂は今ま吾々の研究しつゝある通貨膨脹物價騰貴の問題と重大の關係がある。云ふ迄もなく支那貿易は我國の經濟に取ては最も大切な地位を占めて居るが、今回の變亂は支那市場中最も大切なる長江一帶の攪亂を來たす虞がある。假令へ此變亂が早く鎭まつても、我國の支那輸出は相當の打擊を蒙むる。不幸にして變亂が大きくなれば、我輸出に大減少を來たす虞がある。何れにしても我が輸出が減少すれば其れ丈け正貨準備が弱くなつて兌換制度を不利に陷れる。故に此際一般

輸出を妨ぐる所の物價騰貴を生ぜしめることは特に危險である。然るに世上の噂に由れば政府は從來の彌縫的方針を襲踏して不日巨額の內國債を償還せんとして居ると云ふことである。此償還は何れの方法を以てしても更に兌換劵の膨脹及物價騰貴を惹起さゞるを得ない。若し事實とするは危險千萬である。現に數日前に日本銀行の發表した物價調査を見ても騰貴の勢は著しい。此際更に通貨を膨脹せしむることは無謀の事と云はねばならぬ。

日露戰爭の結果たる巨大の外債に對する元利支拂の義務を完ふするは、上述の如く財政の緊縮に由り通貨の人爲的膨脹を防ぐの外はない。此財政の緊縮は一年二年の間でなく、當分繼續して之を斷行することが必要である。然し財務當局者が此の如き繼續的斷行を爲すには非常の勇氣を要する。殆んど國民全體を敵として戰ふの勇氣を要する。何となれば我國民は何事でも實力を顧みずして妄りに突進せんとするの傾が強く、又民間の事業も或は國庫補助に由り、或は請負御用を蒙むり、其他種々の關係に於て政府の財政に依賴するものが多いから、多年財政の緊縮を繼續することは、一般國民の反對とする所となり、又實業界の反抗を生ずるからである。一體に我が國民が今日の如く依賴心が強くて獨立自助の氣風が缺けて居ては、財政の緊縮を行ふことは至難の業である。試みに日々の新聞紙を瞥見すれば此事は明白である。即ち其政治欄の一大部分は政府攻擊の記事を以て充たされて居て、一見國民の獨立自助の精神の旺盛なるを示すやうであるが、此等の攻擊的記事は一面には常に人事界に起つた有ゆる不利不便を政府の力に由て矯正せしめんとするの意味がある。人民の獨立自助の勇氣と責任心との缺乏を表明して居る。故に政府攻擊の記事の一大部分は見當違ひて、敎育衛生は勿論のこと、進んで學問藝術等に至るまて、政府の施設の不備を責めて其の干涉保護を要求する。甚しきに至ては天候の良否に至るまて支那流の筆法を以て閣臣其責に任ずべしと云ふ風に書き立てる。此の如き空氣が瀰蔓して居ては、明治の世が四十

四年となつても五十年となつても、依然として官尊民卑や官僚政治や政務の過大膨脹は已まず、從つて又重稅の上に公債政策、通貨膨脹、物價騰貴も已まないてあらう。此の弊風を改める爲めには如何なる倫理觀を採て民心を刷新すべきかの根本主義に付ては、予輩は多數者と見る所を異にし、民族性の異なれる我國に於て西洋流の個人主義を其儘我國に輸入しても効力なく、却つて個人主義の缺乏のみを繼承すると云ふ不利のあることは、本誌其他に於て既に屢論ぜし所である。要するに我國ては今後財政の緊縮を繼續斷行することは至難の業てあるが、事業の吾々が世人に注意したいのは、世界的物價騰貴と云ふことは、我國の外債支拂に付て思ひ掛けざる天祐てあり、此際妄りに政費の膨脹に由て物價を騰貴せしむることは、故らに此天祐を放擲して、貧弱なる我が經濟財政を一步々々危機に導くの一事てある。

四　我國の日用品の高價と不急事業の進步

我國て物價騰貴は外債支拂に非常なる不利を與へると云ふ、歐米に見ざる特別の事情あるは以上の如くてあるが、此外物價騰貴は彼我同樣に生活難と云ふ社會的弊害を生ずる。併し此社會的弊害を除くには單に通貨の縮少に由り物價下落を生ぜしめる丈けでは役に立たぬ。何となれば通貨の縮少は一般物價を下落せしめると同時に給料をも下落せしめるからである。此社會的弊害を妨ぐには、物價を下落せしめて而も給料は下落せしめず、又は之を騰貴せしめる方法を講ぜねばならぬ。其方法とは即ち生産取引に大改良を加へて生産費を減少せしむることである。產業振興策とか積極策とか云ふのは即ち是れてある。

我國の產業上改良進步の著しきものは何れも西洋模倣の事業てあり、國民の日用品生産業に付ては、學理や機械の應用や大規模な會社組織と云ふが如き現代的進步を示すものは殆んど皆無てある。一體西洋何れの國ても日用品の生産が最も進步し、從つて其價は次第に安くなるに反し、奢侈品ては同樣の改良を行ひ難い

のが常てある。然るに我國ては大切な日用品の生產は依然として舊時の幼稚な狀態を維持して居るから、其價は電車賃や電燈瓦斯燈料や麥酒等に比較して高くなる。此の如く國民の一小部分のみの使用する西洋摸倣の事業は進步しても、國民の大多數の日常缺くを得ざる生活品が高くなつて來ては、假令通貨膨脹及物價騰貴と云ふ現象はなくとも、必然生活難を生ぜざるを得ない。國民生活に必要なる最大產業の進步せずして一部の摸倣事業のみが進步して居ると云ふことは、未だ我經濟が眞の進步を爲して居ないと云ふことてある。經濟が眞正に進步して居ないから、世界文明國中日本が一番人間が安くて日用品が高い。此事は本誌其他に於て予輩の屢々論じた所てあるから玆に再び詳說しないが、要するに我國の生活難の根本は物價騰貴を防いても別段の効はない。通貨の流通を縮小すれば物價が下落すると同時に給料も下落するから、生活難は今日と大差はない。眞に生活難を救はんとすれば西洋の模倣ばかりてなく、我國固有產業即ち日用品生產業を現代化しなくてはならぬ。我國の實業家も是までの如く西洋事業の模倣一點張りては最早や行き詰りてある。電氣事業や瓦斯事業も今日は最早や生產過剩の有樣てあるから、今後企業家の手を着くべきは我が固有產業の改良てある。

此外我國て日用品の高い所以は、第一之れに重稅を課し、第二に其取引市場が甚だ不完全てあることも原因を爲して居る。故に此等の點も大に改めねばならぬが、根本的に日用品を低廉ならしめ、勞働者階級の地位を改善すると同時に、更に憫むべき境遇に陷つて居る所の高等勞働者と云ふべき教育ある階級の就職生活難を救ひ、又企業家をして有利なる新事業に發展せしむる爲めには、我國の最大最要なる固有產業を改造して之を學理的機械的資本的に現代化するの外はない。是れが出來なくては日本民族は世界の競爭場裏に於ける劣敗者たらざるを得ない。然るに固有產業の改造を爲すには西洋模倣のみてなく、獨立なる工夫發明を要する。此の獨立の工夫發明の力の日本人に乏しいこと

は爭はれぬ事實であるが、併し全く無いことはない。世人擧つて其方面に力を注ぐことになれば遲れたりと雖も尙ほ進步することが出來る。故に今日の急務は世人一般をして將來我國民の發展を必要とする方面は何れに在るかを眞實自覺せしむることてある。（完）

物價騰貴防止策

法學博士　神戸正雄

一

近頃、我國にては物價騰貴の問題が喧しきが如きも、此は我國のみの問題にはあらで、世界の共通の問題なり。近頃は各國ともに痛切に物價の騰貴を感じつゝあり。元來物價は農產物の其たると工產物の其たるとを問はず、十九世紀の下半には次第に下落に向ひたるものなり。然るに二十世紀に入りては却つて次第に上騰の步趨を示すに至れり。蓋し嘗て諸物價の一體に下落の步調を取りたるは產業組織の變革、機械の進步及び交通の發達によりて各國に於て工產物は愈々廉價に調達するを得るに至りたるのみならず、農產物亦た未開地の開拓、交通の發達によりて愈々廉價に輸入するを得るに至れるによるなり。然るに近頃となりては各國財政の膨脹、及び保護政策の把持による租稅特に關稅の引上著しく、加之「カルテル」「トラスト」の外廉內高販賣策の遂行によりて物價の上騰を生じたるのみならず、特に近年の金產增加等の影響としても物價を益々上騰せしむることゝなれり。現に獨・英・米の三國の物價上騰の程度を比するに於ては米國最著しく、獨乙之に次ぎ、英國は此二國に比しては此二國間の間隔よりも更に大なる間隔を以て上騰の程度の最少きを見るは假令金產增加等の如き共通的原因の之あるにもせよ、尙ほ別に租稅及特に關稅政策「カルテル」「トラスト」運動等の影響の有無輕重に係ることの少からざるを證するに足るなり。

二

翻て之を我國に就きて見るに、其物價上騰の程度は右三國中最高を示せる米國よりも遙かに大なるに就きては、右共通原因の外、尙ほ特殊的原因の一層重大なるものあるべきを推察するを得るなり。特に輸出品の價格の騰貴程度の他の內國消費品に比して輕小なるは軈がて我國の物價が世界の平均物價よりも割高に居ることを示すものに外ならず。而して我國の經濟上の前途の爲めには最不幸なる事實にして、切角我國が益々國際競爭場裡に活動して特に我國產物の販路を擴張せんとするに於て最大の障碍とならざるを得ず。特に此物價上騰によりて困難を感ずるは下等社會よりもむしろ中等社會たるの事實あり。下層勞働者階級は物價の上騰するだけ賃金の上騰を享受せること統計の示す所なるに、中等階級に至ては物價の上騰する割合に收入は增加せず、或は却つて一層の壓迫を加へられんとしつゝあるの狀あり。而して一國の社會上に於ては此中等階級が重要なる分子なること爭ふべからずとせば、物價騰貴の問題は此點よりいふも輕視すべからざるなり。今に於て此問題を硏究するは洵に緊要なる事項たるを失はず。予輩は今囑に應じて物價上騰の諸原因を擧げ、各原因に就きて右防止策を述ぶる所あるべし。

三

我國の物價の近年上騰の勢の大なるにつきては、廣き意味の租稅の影響の最大なりしこと、何人も異論なき所なるべし。今回の關稅の引上の影響に付ては未だ著しきものを見ざる所なれども、此も尙ほ追々に一層の影響を見るべく、又既に二三のものに於ては著しき影響の認むべきものあるが如し。此關稅の引上を爲せるにつきては唯だ單純に財政上の理由に出づるに非ずして、產業保護の理由もあるべく、產業にして爲めに發展することあらんには、下層社會も隨て職業を得、豐なる賃金を得ることゝなりて、社會上にも相當の利益を齎らすべく、一時物價の上騰することありとも、其產業能力にして漸次發達するに隨ひては物價も次第に引下げらるゝことゝなりて、永遠には物價の下落の

傾向を示すことゝなるやも知るべからざれば、必ずしも一概には關稅引上を排斥すること能はざるも、實際其の果して期待するだけの成果の得らるゝや疑はしきものまでも、關稅保護を爲したるに就きては、或は却て永遠に國民一般の不利益となることなきや。奢侈的の物品は兎に角として生活必需の米穀の如きに於ける、衣服の主材料たる綿糸の如きに於ける關稅は到底不良なる結果を與ふるものと斷ぜざるべからず。就中米穀關稅最反對すべく、朝鮮內地間に於ける關稅の二重課徵に至つては殆んどいふ所を知らざるなり。人或は之が撤廢により生ずる財政上の缺陷を患ふる所なれども斯の如き小缺陷は他より補塡すること敢て難からざるのみならず、又之が補塡の途を講ずるの價値あることたるを疑はざるなり。

四

關稅以外の租稅及び租稅の變體たる專賣が物價に及ぼしたる影響に至ては既に最も痛切なり。我國の財政が一體に國の經濟力に對する關係の他の諸大國に比して一層不良なることは隱れなき事實にして、其結果は勢ひ租稅及專賣によりて割合に重大なる負擔を國民に課することとなり、隨て其の生產費及營業費を大にして、物價を上騰せしむることの著しかりしこと疑ふべからざる所なり。而も其租稅制度の不良なる、資本家贅澤者流には割合に輕易なる負擔を爲さしめつゝ、勞働者、中等階級等をしては過重なる負擔を爲さしめつゝあり。米穀關稅が此弊を頒つことは今此に別問とするも、鹽專賣が鹽の價格、隨て之を使用する諸多の貨物の價格に及ぼしたる結果は實に甚だ重大なり。酒、煙草、砂糖は贅澤品なれば致方なしとするも、織物、石油、通行稅に至ては到底中下層階級を著しく壓迫するものたらざるを得ず。或は又高き地租家屋稅の轉嫁は止むを得ずとするも、所得稅及營業稅の割合に中以下に重くして、上層の負擔力大なる者は却て會社組織によりて負擔を輕減することを得、國債利子の免除によりて負擔を免るゝことを得るの奇現象を見るなり。而して特に夫の生活必要品の價格の高きことは其れ自

身望ましきことに非るのみならず、結局賃金の騰貴を齎らして一般物價に影響することゝなるものなれば、出來るだけ之に課する所の負擔を輕減して其下落を期せざるべからず。之につきては或は財政を緊縮して生活必要品税を輕減するも一策なれども、此事行はれ難き事情ありとせば、他の資本家上流社會の負擔を一層重くして、生活必要品の方面に於ける負擔を輕減することゝ爲さゞるべからず。

五

財政に關聯して希望すべきことは啻に其租税的方面のみに非るなり。其歳出に於ても之あり。即ち軍備の爲めに支出さるゝものは農商工交通等に支出さるゝものに比して國民の經濟を進むるの効果小に、消費のみ進んで生産の之に伴ふ傾小なる所なれば、物價を騰貴せしむるの傾向は一層大ならざるを得ず。故に出來るだけ軍備を緊縮することが物價騰貴防止の上に望ましきも、今日の事情に於て其實行は或は困難ならんか。但し傳ふる所にして眞ならんには陸海軍方面に於ては支出節約の主義に反するもの多く、隨分思ひ切つて無駄なる出費を敢てしつゝありといふ。費用と性質上、さもあるべきことにして、軍事費は交通費等に比しては節約を顧みざることゝなる傾あるものなり。然るに此傾向は軈がて又物價騰貴の上に影響を有することゝなるものなれば、努めて此軍事費に於ての緊縮が爲されざるべからず。其の他一般に國家たると地方たるとを問はず兎角眼前の地方的利益の爲めに又は當局者議員等の私利の爲めに殊更に無用過大なる事業を起し、又其費用の一部を私するが如きの風あり。其結果は又物價を騰貴せしむることゝならざるを得ず。如何となれば此等は孰れも消費の過脹を結果するものなればなり。故に此等の惡風の矯正も亦おさ／＼怠るべからざるなり。

六

更に物價騰貴に於て有力なる原因は通貨的原因なり。之につきては先づ金産增加による通貨の價値減少を擧げざるべからざるも、此は避くべからざることな

れば偖て措き、今日我國に於て通貨の過大に膨脹せるの事實が物價騰貴に幾分の影響を及ぼせるは見逃がすべからざる事なり。固より兌換制度の下に於ては永く世の通貨に對する需要を超えて發行さるゝことは困難なるの道理にして、其膨脹も亦た國民經濟の進歩に伴ふ必然の結果なるが如くに思はるゝも、而かも夫の屈伸作用なるものは決して直ちに現はるゝものに非ず。斯くて若も年々歳々繰返へさるゝ所の或妨害原因ありて、一たび過大となれる通貨の自然的屈伸作用によりて減縮されんとするや更に復た通貨膨脹を見るに於ては遂に久しく過大なる通貨狀態を脫する能はざることも亦想像せざるべからざる所なり。近年日本銀行の貸出の民間に向ふもの極めて少くして、政府貸上の頗る巨額に上るを以て見るときは、財政上の原因より多少不當に通貨を膨脹せしめ居ることを斷じて過なきが如し、之を矯正するは結局國家財政の收支の適合を完全にするに在り。即ち從來の如く國庫に資金なくして國債の償還を敢てし、日本銀行の懷を當てにして起債借入を爲すが如きことは全然廢止すべし。更に租稅の納期の改正を行ひて年度の初めより今少しく收入の國庫に流入するが如くに組織すべし。是れ通貨の社會の經濟上の必要を超えて不自然に膨脹するを防止する最主要なる政策なり。若も誤つて之を敢てすることなく、徒らに日本銀行の貸出の緊縮又は利上のみによらんか、經濟界は却つて不自然に壓迫を受くることゝならざるべからず。又僅々二三千萬圓の貸出に於て大なる結果は望むべからざる所なるべし。

七

更に生産の方面に於ては我國の國土の性質が生活必要品に缺乏を感ぜしめて却つて奢侈品に豐富を感ぜしむることも亦た我國の物價特に生活必要品の價格の上騰に幾分か與つて力あるものなり。著しきは我國が米綿に於て益々缺乏して、生絲、茶に於て豐富なることなり。然れども此嘆は歐の先進國にても均しく之あるものにして、太しく悲觀するには及ばざるなり。唯た其の必要品に缺乏を感ずることの明なるに拘らず、外

國より之が補充として入り來る物に高き關税を賦課するに至つては愚といはざるべからず。尙ほ又更に進んでは自國の領土、大なる意味の領域内に生活必要品を多收ならしめんが爲めにするの努力を等閑視すべからざるなり。

八

加之我國の生産界に於ける現狀は尙ほ大體小仕掛手工的たるを免れずして、勢ひ生産費割高に、隨て物價高からざるを得ざる筈なり。特に此は日本人の特殊の需要品に於て然る所にして、近年資金の騰貴に伴ひ益々生産費を增加して其産物の價格を著しく騰貴せしむることゝなれり。之等を漸次大仕掛とし機械的に生産することゝ爲さんには、物價を餘程下落せしむることを得べきなり。而して其の彼等が愈々其企業の規模を大にして「トラスト」「カルテル」的となるに於ては生産費を減少して物價を下降せしむるの傾もなきに非ずと雖も、亦往々にして其利益を過大にして而も消費者に高き代價を要求することゝなるべければ、之に就きては相當防止の方法を講ずること獨米の如くするを要す。旣に我國に於て規模の大なるものとなれる紡績業の如き、今日最早不當の高價を内國消費者に要求し居るものに非るか。彼等が「カルテル」を作りて外國販路を擴張する爲めに幾分高き價格を内地の消費者に課することは止むを得ずとするも、會社の巨大なる利潤を貪らんが爲めに内國消費者に過大なる價格を要求せるの實なきやは嚴に調査の價値あることゝなり。而して更に大勢の趨く所益々大仕掛を增加すとするも尙社會に殘存すべき小生産者につきては、彼等の孤立の狀態を救はんが爲めに各種の産業組合を組織せしむることゝせば、其原料及生活資料の購入に於て、製品の販賣に於て、優良なる機械及製法を使用することに於て、低利なる資金を利用することに於て現在よりも一層有利となり。即ち彼等の生産費生活費を減少することによりて物價の下落を齎らすことゝなるべきなり。

九

我國に於ては更に卸賣仲買等の過多なることも亦物

價に影響するなり。尤も一は我邦の生産業の小仕掛なる結果として、勢ひ廣き販路に向て産物を分配するに於て、生産者自身の外に仲買人卸賣人等の専門的大商人を要するもの丶多きは避くべからざることにして、之を減少するは結局生産規模の一層大となることを待たざるべからず。之によりて幾分を下降せしむることを得べしと雖も、而も著しき影響は如何にや。今日此等の仲買人卸賣人の費す所の營業上の費用の大部分は矢張り他日起り來るべき大生産者自身に於ても相當之を支出せざるべからざるべし。

十

商業上の原因にして之よりも物價の上に一層重大なるは小賣商人の過多なることなり。尤も近頃小賣人の地位は甚だ困難なり。一面に於ては通信及交通機關の發達によりて大資本的の小賣商店が益々小商業者の顧客を奪去るのみならず、卸賣商人にして小賣を兼ぬる者も次第に多くなり且つ消費者間には購買組合なども起りて其販路を狹小にし、而も他面同種小賣業者間の競爭も益々激烈にして、時世の變遷と共に掛賣も困難となり、而も高利の資金を利用するに於て益々困難を感ぜざるを得ず。彼等は勢ひ消費者の無智怠慢に附込みて漸く顧客廻りと押賣りとによりて其得意を失はざらんとし、桝目品質の誤魔化、價格の高貴によりて其利益を維持するの現狀なり。元來小賣品は消費者に取りては便利には相違なきも、而も之によりて消費者が浪費を勸められ、特に割高なる物を買はさるること丶なる傾あるものにして、其餘りに多きは決して國民經濟上望ましきことに非ず。物の生産者は多々益々可なり。商業者に至ては必要なる最少限度ならんことが望ましきなり。彼等の或程度まで存在することは勿論必要なりと雖も、其過大なるに至りては迷惑至極といふべし。而も大體小賣商は其創業の容易なるより、人の多く之に就かんとする傾ある所なり。此が過多を防ぐには一方、生産者の側より販賣組合を組織するのみならず、他方消費者の側よりも購買組合を組織すること丶するに如かず。尙ほ其上に市場館を設けて日需品を

販賣せしむることゝ爲すを肝要とす。之により啻に小賣價格を低下せしむるのみならず、衞生警察上の締取を簡易とし、國民には此市場に往來することによりて健康を進め、智識を廣むるの餘得あるべし。

十一

凡べて貨物の生産取引に關聯して補助の機關として最重大なるは交通と金融となり。現今我國に於て各種銀行の整備せるが如しと雖も、之を利用するを得る者は唯だ中以上の大商工業者に止まり、小生産者小商人は之に與らざるなり。彼等は纔かに高利貸質屋其他類似のものによりて其資金を調達せらるゝの現狀に於て、勢ひ生産費營業費を增加して物價の上騰に影響せざるべからず。之を救ふには差當り、信用組合の力によるの外なかるべきは前述の如しとして、偖て交通機關につきても努めて其普及を計り其活動を敏活にし併せて賃率を低減することが望まし。特に國有鐵道の如きは最も此目的の爲めに努力すべき職分を有するものなることを忘るべからず。我が國有鐵道が果して此點に於て遺憾なき成果を擧げつゝありや疑はし。一層の努力を乞はざるを得ず。

十二

消費者の側に於ては購買組合設立の必要なるは上說したる所の如しとして、更に近頃に於ける我國の風潮が一體に益々贅澤浪費に流るゝの兆あるは嘆ずべし。斯の如くにして生産進まずして奢侈獨り進むに於ては物價は必然割高とならざるを得ざる道理なり。日露の戰前と戰後とに於ては如何に國民の經濟上の地位が進みたりといへ、國民の消費の膨脹せる程に其の進みたりとは信ぜられず。戒めざるべからず。特に日常の生活材料につきても米食が益々盛に行はるゝのみならず上等米の需要が愈々大に、衣服の如き下層社會の者にても仲々に贅澤になれり。此等は結局賃金の上騰となり。物價の上騰とならざるを得ず。今や國民は國際競爭場裡に立つて一大奮發を要するの時にして、到底美衣美食安閑を貪るべきの秋に非るなり。國民は此事を十分に自覺して奢侈を戒めざるべからず。要するに奢

修の矯正も亦物價騰貴防止の一の有力なる方策なり。但し爲めに徒らに消極的に流るゝことなからんことを要す。たゞ所謂華を避けて實に就くの美風を作るべきなり。

十三

消費の方面より物價騰貴を防止する他の策は從來消費の各家的孤立的なるを共同的社會的とすることなり。此事は既に知らず識らずの間に多少は行はれつゝあることなれども、尚ほ一層之を進むることが物價騰貴防止の上には有効なり。例之食事の如きも各家に於て竈を据え、食器を備え、下女を置きて調達することは頗る不經濟にして、之を飯屋に行きて濟ますことゝすれば僅かに一層安あがりとなるべし。尤も之により て不要となるべき主婦の勞力は子弟の教育か若くは生產的方面に有益に使用することゝ爲すべきものなり。住居の如きも各家族別々の建物に住はず、共同寄宿的大建物の中に分割住居する組織を取ることゝ爲すに於ては之れ亦經濟的なるべし。此等の仕組に於て多少の弊害は避くべからざることなれども、共同生活に伴ふ幾多の有益なる結果も之なからず。兎に角之によりても消費を節約して自然物價騰貴の防止をも達することゝなるべきなり。

十四

以上數え來れば物價騰貴を防止することに貢獻するものは決して少からず。中には一朝一夕にして行はれ難きものもあれども、直ちに行ひて成果の擧げ得べきものもあり。其行ひ易きものより着々方策を實行すべきなり。然かも兎も角其中に就きて最大なる方策は陸海軍備の緊縮、隨て租税の輕減なり。思ふに此さへ斷行するを得たらんには物價を下落せしむることは頗る大なるものあらん。但だ今日の我國の情勢に於て多少過大と見ゆる軍備も、隨て生ずる過大なる租税も恐らく止むを得ざるものなるべく、今日陸海軍の經常臨時費の合計一億八千餘萬圓は過大なれども、予の推算による我國民の酒、煙草、女色に費す所の浪費額三億七千萬圓の別に存在して、益々増加の傾を示す以上は、

軍事費も亦た國民全體の一の浪費として格別過大ならざるものといはざるべからず。即ち國民は物價騰貴を防止するに於て租税の輕減軍備の緊縮の如き消極的因循的のことをいふを止めて、大に國民の地位を自覺し、奮て之が負擔に堪え、むしろ、他面に於て益々箇人的の浪費を戒め、益々生產的活動を勵みて自然に物價騰貴を防止することに力を盡すを肝要とすべきなり。特に國民は向後其經濟上の行動につきて工夫研究を凝らし、如何になせば貨物を少しにても安く生產するを得るや、如何にせば生活上の費用を少しにても節約するを得るやを考ふることを怠るべからず。從來我國民は大體に於て此等のことに無頓着なりし嫌あり。時勢の趨く所之を許さゞることゝなる。戒め努めざるべけんや。其他の方策につきては上述の通なり。重ては此にいはず。

先づ國費を減ずべし

早川鐵治

物價騰貴は世界自然の趨勢だから、止むを得ぬと言へば言へるが、併し今日の物價騰貴は經濟界自然の順調を追ふものといふよりも、寧ろ租税の激增、誅求の甚しきに因るものが多い。今日では諸種の口實の下に陸海を筆頭として其他の行政各部皆無暗に費用を分取りし樣と勉めて居る、此間も大藏省の者と車中で偶然一所になつたから、如何だ、相變らず盛に各省から遣つて來るかねと言つたら、いや益々だといふ。實に彼等は日本の實際の國力を顧みず、他省でも殖すから此方でもと言つた樣に、競爭的に殖すことをのみ考へて居る。中心國を憂ふるの誠意が上官下僚の全體に通じて居らず、勢已むなく税を增す諸掛を殖すといふ事になり、誅求又誅求を重ねて居る。

それに地方の自治體とても同じこと。自治體を作つ

たのは山縣さんの御蔭だけれど、今では地方費の増大夥多しい。陸海軍から教育百般の事項に關する機關が殖えれば諸掛りも殖える、物價騰貴は實に已むを得ぬ趨勢である。が是は獨り我日本を責むべきではない。文明諸國皆然るのである。今や各國互に武備の競爭である。ドレッドノートと云ふ艨艟を英獨佛皆製造して騷ぐが、就中英國の如きは二國など丶稱して常に大國二國に英一國で當り得る力を備ふる事に汲々として居る。獨佛で三隻のドレッドノートを造れば英はそれに對すべく一國で三隻のドレッドノートを造るといふ有樣である。米國も以前のモンロー主義を捨て丶帝國主義となり、既に玖馬を取り非律賓を併せ、遂日に本を對手に廻して頻に軍備をして居る。即ち世界で常備軍の一番不足な所は米國であつたのに今では中々多くの常備軍を持つて居る。自餘各國皆然りである、物價は騰貴するに相違ない。昨日も親しい米人と一所に爲つたが、彼は日本は何故に軍備を擴張するのだらう、果して日米今日の親しみを思はなくして事端を開かうとするのだらうかと言つて居た、勿論或る度迄の軍備は要る、此度の伊土戰爭を見ても分る。土耳其は曾て西北亞細亞より起り東羅馬帝國を亡し、オットマン大帝國を歐亞三大陸に跨げて建設した强い人種である。陸續きならば伊太利は負けるに相違ない。が場所は海を隔つて居る。海軍は無い。如何とも施すべき策がない。已むなく今日の如く諸國に哀願して禍害の大ならぬ中に收まりを着け樣として居る。斯かる次第だから日本迚も仕方は無い。國土を維持する上には海軍も要る、一朝事あり互に相迫る時には陸軍も要る、今では特に前岸大陸に朝鮮をも持つて居る。相當の軍備は當然である、が顧みて民度經濟の如何を問はば、それ一方をのみ見て當り前に要求し、否當り前よりも以上に贅澤な要求をするに至つては默過は出來ぬ。此頃海軍大佐の太田三次郎といふ人が、能く海軍の內部を暴露して人の視聽を驚かして居るが、獨り海軍のみならんや陸軍亦左も樣である。私は卅一年頃政府に居つた時に、既に陸軍々政整理を考へたが、更に日露戰役以後に於

ては甚しく、陸軍の費用は非常に掛る、今少し民度を顧み、經濟事情の如何を察してそれと調和する樣にせなければならぬ。

又行政整理を遣れば其方の縮少は十分に何等の不都合もなく出來る。僕の友人藤田四郎は大の擴張屋で、彼が農務局長で居つた時に水產講習所種馬場種牛場農事試驗場生糸檢查所を設けなどした、養鷄場も出來れば養牧場も出來る。其樣な者に一々試驗場を設けてたまつたものでない。一體行政の何たるを知らぬものだ、行政官が事業をすべきでない。それを心得違をしてか事業をやり、民業と競爭をする。山林局にも製材所を作りなどする。が其樣な必要はありはせぬ。商務工務には今の處まだ無い樣だけれど、之を以て推せば次第に其方面にも何か事業が起るべきだ、即ち後には工務にも生絲製造とか紡績とか若くは製粉等を續々遣る樣になるだらう。いや其中製鐵所丈は現に設けられて居る。彼れは榎本武揚の道樂で拵へたもので、日露戰爭に功があつたといふけれども其功は何れ程であらう。損の高よりは功は少かつたであらう、即ち陸海軍の整理より初めて此等の諸方面に行政の縮少、いや整理をやり、更に其整理を地方の自治體にも及ぼして行き、大に諸掛を減じて民の負擔を輕からしめなければならぬ。

尙引證して言ふべきは敎育である。文明には敎育も必要かも知れぬが、日本の敎育は餘りに多過ぎて食傷の氣味である。全國各地に亙つて中學は年々殖える。それに各種の實業學校は殖える、やれ農林學校の、やれ商業學校の、やれ工業學校のと其數は仲々少くない。更に其上に高等商業學校、高等工業學校のと高等程度の實業學校の數も夥しく增して來る、其外には高等學校あり、大學校あり、官立の學校數は近年盛に殖えて來る。がそれ程政府の手で作る必要はない。無暗に學校數を殖し、敎育を奬勵し、子弟を驅りて此處に入れ込むことは一面坐食の惰民(ローフワー)を作る事となる。餘程考ふべきである。それに今の敎育制度は惡く小學校でも敎科書が年々變る。一定の帳簿も要る。習字帳も要る。加之其習字帳も今では白紙でなければならぬ。我々の

小供の時には反古を用ひたもので、一度書いた上には書き、又書き又書きしてテラ〳〵光るものを用ひたものだ。獨逸邊りの大學でも僕の居つた時代には學生が中々紙を吝みて其細片に細文字で書き取りをして居るのを見て感心したことがある。それで其結果昔の方が今の小供より字が下手かといふに却て其反對であるではないか、之を思へば敎育の方にも徒に理窟のみ多くして金を掛け過ぎると思ふ。當務者に言はすれば高が二錢か三錢の事だといふ。が其二錢三錢が、納豆賣や車挽きの子にしては容易でない。此考が抑もの大間違である。日本は歐羅巴に比すれば兎に角敎育は盛で且贅澤である。

　白耳義が敎育が盛だといふけれども、統計を取つた事がないから程度の如何を知る事は出來ぬ。が日本程の處はそれを除いては先づ少からう。といふと又直に米は如何、獨、英は如何と直にそれ等の諸强國を引いて來るであらうけれど、それ等諸國と日本とでは民度が違う、民度と相照しての隆衰をいふてなくては眞の比較は出來ぬ。日本の民度からしていふと、大學は東京帝大一つで澤山である。京都も福岡も、東北も必要はない。高等商業なども、彼様に、山口、長崎、小樽、東京などと四つも設くる必要はない、元來商業などに左程高等程度の學問の要はない。算盤さへ分れば宜い位のものだ。米國の商業學校と來たら極めて簡單であるが彼國位商工業の盛んな土地はないではないか。斯様に虛飾を去り實用を顧みて、無暗に學校を殖さぬ方法を取れば整理は十分に出來、其結果大に民の負擔を輕くする事が出來る、不祥のことを云ふ様だが日本の敎育は國を亡ぼすの要素をなして居る。文部省などは廢して內務に敎育局を設けて置き司法省も廢して法官の任免は內閣で取扱ふて可なりだ、行政機關などは恰も護謨球の様なもので引延せば何程でも擴張が出來る詰まりは前に述べた様な農務局の擴張と同じことだ。然し國の爲めに官吏を官費にて養成する慈惠院を設くるの必要は何處にあるか國民の大に奮起して此の腐敗したる政治を改革するの秋にはあらざるか。上來述べ

來つた如く全體に亙つて大々的整理をすれば今日の諸物價よりそれ丈が省かれ、餘は經濟關係の順調に從つて高低する事になるから、民を苦むるには至るまいと信ずる。

物價騰貴防止策に就て

神戸高等商業學校教授 津村秀松

一

昨今我國に於ける諸色の騰貴、從て生ずる生計の困難てふことが、大分喧しい問題となつてきた。然し之は我國許りの現象ではなくて、大きく言はゞ世界全體の通勢である。嚴正に言はゞ世界に於ける金貨國の通態である。して見ると、之は確に近年に於ける金產額の激增てふことが、共通の一原因をなして居るに相違ない。次に歐米の金貨國の內でも、特に保護貿易國として有名な米國や獨逸や墺太利や佛蘭西で、食料品の騰貴が甚しく、引き續て異動が起り、血を見るに至つた國さへあるのに、隣國の白耳義や和蘭や、扨ては海峽を一つ隔てた英吉利だけに此事のなかつたのを見ると、關稅政策の影響も亦確に共通の一原因をなして居ると思ふ。それも關稅增徵の直接の結果だけてはなくて、之に伴ふて是等の國に最近年益々盛んになつてきた彼の企業の合同聯合又は商品の買占、殊に「ダンピング」により、外國に法外に安く賣らんが爲めに、內國に法外に高く賣つて、彼れ是れ埋め合すてふ商器を採るものだから、「ダンピング」品として適切なる鐵材、石炭、綿絲、其他日用品の上に著しき騰貴を見たのてある。

我國現時の物價騰貴も大體に於て如上共通の原因あるを免れない。が又我國に特有の原因もある。戰後通貨の膨脹其の一てある。戰後租稅の重課其の二てある。固有の原因としては交易機關の不備其の三てある。一時の原因としては米作の凶歉其の四てある。尙ほ此外に近年我國に於ては生產の發達よりも消費の發達の方

著しいてふことをも數へねばならぬ。して見るといふと、我國現時の物價騰貴には、一時の原因もあるが、恒久の原因が多い。自然の結果もあるが、人爲の結果が大部分を占むる。

そこで一時の原因や自然の結果たるものは、暫く措て問はず、永久に物價騰貴の原因ともなり、そしてそれが人爲の結果であるから、又人爲により排除することの出來る事柄に就て、話を進めて見ようと思ふ。

二

先づ第一に通貨の膨脹てふことを見ると、之は驚く可き現象を呈して居る。勿論此ことは今日に始つたのてない、遠く日清戰爭以來のことてはあるが、特に日露戰爭後償金が取れないのに、盛に戰後の經營をせねばならぬてふ所から、頻に外債を募集して、依て得た正金を倫敦に預て居て、之を準備にドシ〱兌換券を增發して、政府の御用を勤めさしたからてある。勿論、通貨が膨脹しても之に伴ふ經濟界の發達があつたならば、決して物價の騰貴を起すものてないが、近年の通貨の膨脹は、此種の調節を得て居ないのである。元來日本銀行なるものは財界の中樞て、政治以外に常に超然たる態度を採る可きものてあるのに、近頃は全く一個の御用銀行たるに外ならない。功名心の多い日本の政治家が、戰後帝國主義熱に浮されて、無暗な軍備擴張を計畫したのと、消極政策では人氣を腐らすから資產者階級の氣受が宜しくないので、向ふ見ずな積極政策を採つたのと、兩々相俟て、遂に戰後非常なる財政の膨脹を見るに至つた。所が償金はあるてはなし、租税も搾れる丈け搾つたし、內債も見込はない。そこで日本銀行に御用を仰付けて、募集した外債の手取金を準備にドシ〱兌換券を增發せしめて、其の金札て以て歲計の支出を辨ずるといふ權道に出てたのである。經濟的膨脹から出た增發てなくて、財政的膨脹から出た增發であつて見れば、之はどうしても一般的物價の騰貴を防止するには、先づ以てこの政府の無理算段を思ひ止まらしめ、且つ日本銀行をして其の名の如く「日本の銀行」たる實あらしめねばならぬ。

三

第二は戰後の租税の增徵である。殊に消費税の增徵である。戰爭中に前後二回非常特別税なるもの起つたが、戰後に之を撤廢することが出來ないで、其の儘そつくり永久税に引直した。元來我國の議會は農民議會で、地主議會で、廣く考へても、極端な有資產者階級代表の議會である。であるから租税を增徵する必要ある場合にも、直接税の增徵は困難で、間接税の增徵は容易である。そこで政府も惡いこと丶は知りながら、脊に腹は代へられぬので、成る可く强敵を避けて弱輩に向ふ。此結果、現今我國の租税といふものは、餘り文明國に比類のない甚しい間接消費税偏重てふ色彩を帶びて來た。永久税に引き直された非常特別税の內で、後日輕減されたのは殆ど地租のみで、一般消費税の如きは、輕減どころか、益々加重の一方である。

殊に甚しいのは專賣と關税である。需要の最も廣い、消費の容易に減退しない、目ぼしい日用品を、片端からドシ／＼政府の專賣に買上げしもうて、專賣となつた上は、資產者階級の反對が少いから、ドシ／＼賣價を引上げて、四民平等なる負擔をドシ／＼嵩むる。煙草の如き、鹽の如き、賣價は幾倍にも上つた。そして一枚の煙草で十圓の罰金に處せらた例もある。一升の濁酒で手が後に曲つた人もある。此上昨今噂に上る酒や醬油や砂糖や石油の專賣までもやられては、物價騰貴の防止策も何もあつたものじやない。物價の騰貴を防げない位ならば、まだ宜しいが、それでは危險思想の防止策も何もあつたものじやない。

關税にした所が同樣で、之を引上ても、特に地主や資產家の負擔を增加することにならぬどころか、却て米價騰貴、產業保護で、是等の連中の懷中を溫むるものであるから、政府も思切つた增徵をやる。議會も譯もなく承諾する、物によつては更に一層の增徵を政府に勸むるといふ有樣であつた。此結果として此七月以來ボツ／＼現はれたのが即ち昨今の物價の騰貴である。此點に就て特に著しいのは米であるが、然し米のみではない。麥も豆も「コシデンスミルク」も、金巾更

紗も、釘ても石鹸ても、一切の穀物食物、一切の洋物洋反物皆然りてある。而して其の打撃は上に輕くして下に重く、否な、彼には却て幸福て、是には常に不幸のみてあるのてある。

四

斯様な亂暴な政治をやつていて、今更ら物價の騰貴に驚くといふのに驚く位てある。今日の物價の騰貴は豫て政府の覺悟せねばならぬ所て、必然の結果て、今になつて農商務省あたりて、小賣商がどうの、小賣値が高いのと言つた所て始らんじやないか。然し之も決して惡い企てじやない。小賣相場を取調ぶるのも宜からう、生産者と消費者との間の仲介が多過ぎるから、小賣値段が高過ぎるといふのも事實てあらう。が、どうして之を改善する氣か。近い内に之が改善法を發表するといふから、浦島の玉手箱じやないが、開けぬ間が樂しいのてある。

といつて此儘に我國現時の交易機關の不備を放任する譯には參らぬ。交通機關の發達を圖るのも一策てあらう。米穀並に商品取引所の改善を企つるのも一策てあらう。日本固有の日用品の大仕掛生産を奬勵するのも一策てあらう。殊に都市到る處に青物や魚肉や其の他日用品の市場を常設するのも一策に相違ない。然し之は道路が改築せられ、電車が普及し、尚ほ其の上に日本人の生活狀態が改つて、坐つて居ずに立つて居るし、和服を着ずに洋服を付けて、下駄の代りに靴を履くようにならぬと、折角設けた市場も十分に効力がないと思ふ。

之と關聯した話て、實行の困難も同一てはあるが、實行された曉は其の効力更に一層著しいと思はるゝのは、通帳制度の廢止と、消費組合の普及とてある。日本ほど通帳制度の發達した國は他に類がなからう。之は全く前述の日本人の生活狀態と東洋風の社會思想とが、因果の關係て結び付て、蟄居的な不精な出嫌ひな日本人殊に日本婦人の特性を造り出したものだから、それに伴ふて發生し來つた自然の要求て、又自然の産物に過ぎないのてある。が此爲めに益々賣手の競爭の

範圍が狹めらるゝし、賣値に金利が籠るし、買手に相場を知るの機會が減ずるし、餘計な物まで置付けらるゝし、結局、高いものを多く買ひ過ぎて、月末の支拂に困難する、家計が不如意になるのである。場末の工場の近傍にある可憐な勞働者の住居にも、勝手の柱には常に幾冊かの通帳のぶら下げられて居るのを見ると、嗚呼之が勞働者を苦しめる獅子身中の蟲だと思ふ。單に便利といふ點からのみ考へたならば、此位便利な物はないから、永年の習慣は一朝一夕に改むることは出來ないであらうが、せめて勞働者ならば勞働者、安官吏ならば安官吏の仲間で一致して、漸次に消費組合を組織するやうにしたいと思ふ。いつも言ふ話であるが、現今英吉利では消費組合に加入して居るもの約二百萬人、資本金三億二千萬圓、一箇年の賣上高約五億七千五百萬圓に達する。英吉利の人を四千萬人として、一家平均四人と見れば、戸數一千萬であるから、英吉利國民の約五分の一は消費組合に加入して居るものと言へる。又白耳義では消費組合員約三十萬人、此國の人口は約七百萬人、一家平均三人半と見れば、戸數二百萬であるから、國民の約一割三分は消費組合により廉價に衣食して居るものと斷ずることが出來る。我國でも斯樣に深山に消費組合が起てきたならば、到る處に小賣商に對する有名なる競爭者が出來る譯になるから、自然小賣商を牽制して、暴利を斷ぜしめず、消費組合に加入せざる者までも、安く日用品を買ひ得ることになる。目下の所、小賣を矯正するに、是れ以上有力なる方法はないと思ふ。

五

然し我國現今の物價の騰貴を以て、全く一部人士の買占の結果であるとか、又は小賣商の專橫の結果であるとのみ思ふたならば、それは大なる見當違いである。又單に米價に就て云へば買占も一原因をなして居る。又物品によつては小賣商の懸引によることも多い。が然し一般の物價騰貴の原因に就ては、近年我國に於ける消費の增進が生產の增進に優つて居るてふ事實を看過することが出來ぬ。即ち今日の物價騰貴の一面は確に

需要供給の懸隔により來るものであることを悟らねばならぬ。更に言葉を換て言へば、今日以上に生產の增進を圖らねば、今日の物價の騰貴を全然防止することが出來ぬのである。生產の增進には種々手段方法がある。然し茲には之を一々詳論する餘裕がないから、前に述へだ都會に於ける消費組合と關聯して、地方に於ける產業組合のことのみを話さう。我國に於ける產業組合の發生は、日尙ほ淺きに拘らず、其の發達は旭日昇天の勢て、本年九月末の調査によると、既に其の數八千二百八十五に達して居る。之を四十二年末に比すると二千五百三十六、四十三年末に比すると一千二十二の增加て、又聯合會も二十三箇所の多きに上つて居る。が然し之は昨年から低金資金の供給を受くることになつたのと、其の筋の奬勵が猛烈な爲めて、郡長や、村長や、又は地方の所謂る有志家なるものが、其の筋の覺が目出度いように、あわよくば選奬に與らうといふような野心も加はつて、無暗に百姓達を說き廻つた結果てある。それ故に數は無暗に增すが質が頗る惡い。實績の擧て居るもの、眞面目に經營して居るものは、兩夜の星も同樣てある。其の內でも、信用組合や購買組合はまだ比較的成績良好じやが、販賣組合や、生產組合ときたらば、丸て御話にならぬものが多い。之は此種組合經營の難所てある販路の保障に就て、其の筋の世話が行き屆かぬからてある。後の農家の副業なども同樣て、縣の勸業課等て、切りに副業に養鷄や養蜂や果樹栽培を奬勵するのは宜しいが、斯くて出來た產物の販路に就て一向世話をしてやらぬ。そんな面倒臭い町人のやるような仕事は役人のなすべき所てないと云ふのであらうらが、然し其の爲に百姓連が問屋を探し廻て居る內に、卵が腐つてしまうたの、果物が腐敗してしもうたのと云ふ噂を屢々聞く。それに懲りてそれ切り再び副業奬勵の演說に耳を借ぬと云ふ連中が澤山ある。販賣組合や生產組合も亦左樣て、折角組織しても、元來販賣てふような商賣には、經驗もなく、智識の乏しい百姓には、此點て閉口してしもう。てあるから我國の中央並に地方の當局者が此點に注意して、

物を作ることを奬勵するなら、同時に作つた物を賣る賣り先きに就ても、十分に周旋し、盡力してやらねば、有終の美を濟さぬ。若しも此後此方面に就ての其の筋の努力が行き屆いたならば、地方の有志家もどしどし殖產興業に熱心になるし、田舍の百姓も盛に副業をやるし、そして出來た產物が、澤山に仲介人の手を經ずして、直接又は殆ど直接に都會の消費者の手に渡ることになる。仲間の口錢が減ずるから、其れ丈け物價は安くなるし、そして又百姓の實收も多くなる。

之を要するに、我國目下の物價の騰貴に對しては、通貨の膨脹を制することと、消費税殊に關税の輕減を圖ることが、先づ第一に必要て、そして又速效のある療法てあるが、之を外にしては、永久の策として、一方に於ては都會に於ける通帳制度の廢止と消費組合の發達を努め、他方に於て田舍に於ける副業の奬勵と生產販賣組合の發展を努め、彼れ是れ相呼應して以て、物價の低廉を圖ることが、最も切要だと信ずる。

猥りに物價騰貴防止策を談ずる勿れ

稻田周之助

友人瀧田君誤つて予の物價騰貴防止策に關する意見を求む。予の如き轗軻落魄の老書生豈大家先生の間に立ちて此大論策を語るべきものならんや。且此主題たる物價騰貴防止といふことに就ても、予は甚だ疑を挾む所以のものあり。請ふ暫く其疑を挾む所以のものを云はんか。

此に題して物價騰貴防止策といふ。其物價騰貴とは何の謂ぞ。試に過去五十年間世界各國の情形を通考せよ。今日を以て異常且急劇なる物價騰貴といふを得べきか、且今日の物價を過去に比して、其騰貴せるもの甚多きと同時に低落せるものも、亦決して寡と云ふべからず。乃ち鐵類紡績品等大分量生產物（マッセンプロダクチヨン）に屬するものは皆悉く大低落を示さゞるはなく、資本制の變化機械

力原働力の進歩は、一として物價低落の原因たらざるはなきなり。近年金銀銅鐵石炭等諸鑛產物の價荐りに低落す。是亦生產費減じ、生產額增加し生產者其賣價の廉を競ふの結果なり。

近頃英佛墺諸國同盟罷工一揆暴動頻々たり。而して其原因は則ち物價騰貴の爲めなりと稱す。併ながら是れ實は細民其生計費の膨脹に苦むが爲めなり、細民生計費膨脹は何に由るか、其の消費する物品が騰貴したるとも其一原因たるべしと雖も、消費の分量增加し、其性質も亦優良を加ふる爲めに、其生計費の總額を增加したりと云ふが其眞原因たり。今日日常生活用品の主たるものは、穀物肉類なり、而して世界農業の進歩交通機關の發達及び殖民地經營の繁榮等、皆穀物を低落せしむるの効果極めて大なるものあり。其他資本制機械力原動力の効果の食料品に及ぼすもの、決して小ならずして、小麥砂糖肉類卵野菜等皆舊時に比して、甚だ低廉なるの實あり。尤も饑饉不作等特殊の事情ある處は、一時異常の騰貴を示すことあれども、之を救治するに自ら其道あり關稅を減廢し、運賃を低下し、其の供給の途を開くときは、容易に常態に復すべきなり。且歐羅巴諸國の細民の痛苦は其食物の高價なるよりは寧ろ其勞銀低く、收入寡きにあり。其職業の得難く失ひ易きにあり、夫れ細民生計困難なるの時に當りて、其生活程度のみ上進して抵止する所なし。從てこれが救治の道を求むる食料品騰貴問題のみに於てすべからず、勞働賃銀問題のみに於てすべからず。實は今日の經濟組織社會狀態の根本に基いて之を求むべきなり。然るに今の紛々たるもの概ね其本を棄てゝ其末に馳す、是れ其議論益々多くして益々其要領を失ふ所以なり。

世間往々近時金の產出夥多なるが爲めに、通貨下落即ち物價騰貴を來たせるを云ふものあり。是れ亦一理あるの言なり。今日の學問技術は金銀銅諸鑛の生產費を減じ、生產額を增加し、其生產者亦相共に廉價供給を競ふなり。これが爲めに是等諸鑛產物を驅りて貨幣となし、遂に通貨膨脹を來たすは其自然の數なり。然りと雖も、貨幣と貨物とは固と相對的なり。世界鑛產

物の增加に伴ふて他の諸產物も亦增加し、貨物及び其取引高の增加に伴ふて貨幣を增加するとも、物價の平準を失ふの道理なきなり。且物價の昂低は正貨の總額のみを以て之を測るべからず。主として個々の物品の需要供給如何に依りて左右せらる、從て過去二三十年間民生日用の雜品が若し著しく騰貴したりとせば、是れ偶ま世間一般生活程度の上進に伴ふて是等品目の需要を盛にしたることを證すべからずや。

予は今日の通用語たる物價騰貴といふことには雷同する能はざれども、細民生計困難といふ事實を認む。獨り細民のみならず、資本家事業家なるものも、今日は甚だ困難なる事情あるを認む。蓋し近き十數年間に世界の資本制機械力原働力等に急劇なる變更を見、其展開窮極なきが如くなるも、一般社會狀態及び經濟組織は甚だ保守的にして此進勢と相伴はざるなり。乃ち經濟的事物の上に幾多の矛盾、幾多の撞着ありて、未だ其處を得ざるもの多きや其痛苦を感ずるもの益其聲を大にし、其形を張りて相訴ふ、所謂食物問題物價騰貴論等皆此間に相呼號するものに過ぎずして、其もの自身が眞理を含めるや否は深く問ふだけ野暮の沙汰なり、千八百三十年前後歐羅巴に蒸汽力機械力の發達著しきものあり。經濟上の大變局を來たすや、事業家勞働者共に困難の極に陷り、長く惡戰苦鬪を續けたり。當年以後學者論客種々の言を爲して、强て其說を求めたれども、今より之を見れば當年の經濟論殖民政策社會政策が概ね過誤取るに足らざるものなるを思ふときは今日の紛々たるものも亦異日識者の笑を買ふなきを保せず。且物價騰貴は必しも喜ぶべきにあらざれども、其低落も亦更に悲むべき事情ありて、存するを思はざるべからず。而して物價の騰貴にして自然の理法に由るものとせば、强て之を防止するは自然の理法に背くものたらざるべからずして、之を求むるにも其道なからん、其道ありとするも其弊害は以て其利益を償ふに足らざるべし。是れ予が自ら物價騰貴防止策を語らざるのみならず。又他人の猥りに之を說くものを戒めんと欲する所以なり。

或は日本の米價が餘りに貴く、其他の食料品の他國に比して廉ならざるを云ふものあり。此の如き事實問題ならば國民を擧げて眞面目に研究する所なかるべからず。予の知る所を以てすれば、我國の農家にて其收穫季に賣出す米價一石十二三圓を越えざれども、中間商人の手を經、及び相場師の投機に依りて數ば暴騰を來たし、消費者をして謂れなき高價を拂はしむるものにして、是等は農業金融機關運搬給配方法か改良取引所制度の刷新に依りて之を救濟し得べきなり、然りと雖も漠然たる物價騰貴防止策の論題の下に、之を詳談するは蓋し當らず。

物價騰貴防止に就て

法學博士　福田德三

現今の物價騰貴を防止する方法を講ずるに方つては先づ物價騰貴の眞相を確めてかゝらねばならぬ。予の見る所にては今日の物價騰貴には已むを得ざる原因と已むを得る原因との二者があると思ふ。已むを得ざる原因より來る物價の騰貴は如何なる方法を用ゐても其勢を多少は緩和し得るとしても之を根本的に防止するとは不可能である。之に反し已むを得る原因より生ずる騰貴は之を防止するとが出來るし又た必ず防止するとを勉めねばならぬものと思ふ。さて已むを得ざる原因は卑見にては三種ある一は我邦國富の近年に於ける著しき增進て二は我國民經濟の性質が益々世界的となりたると是てある。我國富の增進は國民所得の增進を意味し從て消費力の擴張を意味する。但し之を精確なる統計に徵して立證するにあらざれば此主張は或は一の想像論と看做されても已むを得ぬが然し虛心平氣に最近十數年に於ける國民市場の有樣を客觀的に觀察した者は必ず此點を認めるてあらうと思ふ。但し其消費力の增進は實勢よりも寧ろ虛勢の方大にして所謂附け景氣の盛なると云ふ嫌あるとは或は免れぬかと思はれる。之を術語て『ヲース』の時期とも『ホフ、コンユンクトウーア』の時代とも云ふ。確かに我邦の經濟界は此

時代の特徴を表はして居る。此時代には定額の收入に衣食するものに取りては甚だ困難迷惑な時てある。得る所は一定の貨幣額に限られ費す所は多々益々辨ずるのてある。殊に所謂就職難を嘆ずるものは此階級に多い。就職難とは必ずしも經濟的活動の機會の得難きとを意味するにあらず一定の報酬に對し勞務を賣らんとするもの殊に今日の場合に於ては主として自由職業の範圍に於て勞務を賣りて定額の收入に糊口せんとするものが其機會を見出し難きとを指して云ふのである勞働市場一般の『アンエムプロイメント』の問題とは聊か趣を異にして居る。此意味の就職難が喧しく叫ばるる一事を以ても現在我邦は『ヲース』の時代にあるものなるを察することが出來るかと思ふ。定額收入階級以外のものは生活費の增進と共に所得の增進に浴するから口には生活難を唱ふるも實際に於ては其言ふ所の如き困難は感じては居らぬのてある。反之『ベース』の時代に於ては物價廉く一見生活は樂な樣てはあるがソレは主として定額收入階級の上から見たとて國民一般必ずしも同樣なりと斷ずるとは出來ぬのてある。今日に於て物價騰貴の爲めに苦むものは右の定額收入者流を第一とするので此階級は其苦を世間に訴ふるに於て甚だ敏捷なるものなれば恰も物價騰貴は國民一般の苦痛たるが如く見ゆるかも知れぬが國全體として見れば何時ても定額收入階級の生活が困難なる時代の方其安樂なる時代よりは進步的狀態にあるものとして歡迎す可きものてある。是は西洋の經濟史上屢々例を見る事柄てある。國民が進步の氣象に富み活働の元氣を備ふる以上は高き生活費は多くの場合に於てより大なる經濟的活働を伴ふものてある西洋中世の廉價政策の根本的誤謬と認めらるゝは此點を看過するとに存するので生活の標準の向上は經濟上の生產力を維持する最有力の動機と看做さるゝ所以も亦た茲にある。◎國全體の立場からは『廉價なる生活』は最高の理想てはない『大なる而して良き消費』が理想てある。予の見る所我邦は僅かに最近時に於て不廉なる乍併大體に於て大なる生活に向て向上の一歩を着けつゝあるもので二宮宗論の如きは

此點に於て國民經濟發達の眞相を動もすれば誤解せしむるものてはないかと思ふ。

第二の原因は我邦の國民經濟が漸次世界經濟國に深入りしつゝあることて此點に於ては去三十年の金貨本位の採用が重なる關係を有することと信ずるのてある。善かれ惡かれ我邦が世界の第一等國と共通に金貨本位國となつたことは世界經濟上の變動は又た我邦の經濟界をも支配すること甚だ深甚となつたものと思ふ。扨英國を始め西洋諸國に於ては最近十數年（殊に千八百九十六年以後）一般に物價（殊に生活の必要品）の著しき騰貴を經驗しつゝあることは誰も知る所てある。而して其原因は特殊的のものもあり又た一般經濟界の景氣の上向に連らるゝものもあるが最大の原因は世界金產出額の著しき增進にあることは疑を容れないのてある。殊に千九百四年（明治三十七年）即ち恰も日露役の前後から金產額は著しく增進したと共に物價も亦騰踊した一事を見ても首肯せらるゝかと思ふ。此大勢は同く金貨國てあつて殊に世界的に進みつゝある我邦に何等の影響を及ぼすことなくして止むものてはない。

以上二個の原因は予の所謂不得已原因てある即ち與へられたる事實として之を認むるの外はないものと思ふ。乍併我邦目下の物價騰貴は此二個の不得已原因のみによりて惹起されたるものとは思へぬ。否騰貴の割合の中此原因に歸す可きものよりも更らに大なる割合に於て原因となつて居るものは予の所謂已むを得る原因に歸す可きかと思ふ。尤も其割合を計數的に知るの道もなきこと故此點を學問的精密を以て言表はすことは出來ぬは甚だ殘念てある。さて已むを得る原因は大別すれば二種となるかと思ふ。第一は政策上の原因てあつて之を更らに細別すれば（一）財政政策上の原因（二）關稅政策上の原因（三）兌換政策上の原因の三種となるかと思ふ。第二は販賣市場（Absatzorganization）に於ける原因てある。財政政策上の原因とは云ふ迄もなく稅制と公債政策との二に於て一般物價の中特に生活の必要品を高むる傾向のあることを意味する。我邦の租稅制度は元と財產稅（收益稅）本位を以て打建られたのてあり乍ら

其主義の一貫を缺き近來は漸次消費税本位たらんとしつゝある。健全なる税制は可成所得に接近した點を本位とす可きものなるは言ふ迄もないが我邦に於ては唯一の税源たる可き所得に到達する迄の距離と手數との甚だ大なる租税を重點として居る。殊に專賣制度に於て最も甚しき缺際を示して居るので其報は直ちに生活費の增進となりて顯はれて同じ租税の負擔を荷ふも苦痛の甚だ大なる可き樣に之を荷はせられて居る。日露役の際に設られた非常特別税は此惡傾向を增大したとは誰も疑ふを得ざる所である。之に加ふるに財產階級のみ利を受可き財政政策が遠慮なく行はれて居る公債價格の人爲的釣上げは財政上假令如何なる良作用ありとも之に依つて一般國民に不利なる國費の配分を持來たしたと丈けは否定するを得ぬ。次に關税政策は左迄重大の關係なきが如きも熟考すれば決して輕視するを得ぬので就中米の輸入税（幷に移入税）の如きは此意味に於て最大の責任を辭するを得ぬのである。兌換政策は人によれば全く度外視するやも知れざれども卑見に

ては是又至重至大の關係ありと思ふ。就中在外正貨と稱して名は兌換制度の保障と稱して其實一向其効なく却て百害ある制度が新たに設けられたとは物價騰貴の原因として決して忘れてならぬと思ふ。在外正貨あるによりて我邦の兌換制度は其名ありて實なきものとなつた。一歩を誤てば即ち不換制度となるの外はない。正貨準備とは何時にても兌換請求に應ぜられ得可き狀態に正貨のあるとを云ふのである。然るに在外正貨は其實はない。予は之を稱して遠貨本位と云ふ。遠貨は時として無準備と同樣の境に陷る運命を有して居る。而して之を支ふる爲めに甚だ無理なる不自然的なる各種の作畧が運用せらるゝ結果は又益々物價を高からしめる。第二販賣市場に於ける原因とは設備の不完全より來る需給調節の人爲的紊亂を指して云ふのである。一方國民の需要は益々文明的に益々世界的に進歩しつゝあるに之に應ずる供給の機關は此進歩に伴はず不相替封建割據時代の餘弊を脫しない。其爲唯さへ騰貴の傾向ある物價をして愈々騰貴の勢を助長せしむるので

ある。

さて斯く物價騰貴の原因を考へた以上其防止策は又た之に基いて立てねばならぬ。先づ第一に來る可きは卑見にては在外正貨の制度の全廢を要する。之によりて不必要的に世界金貨本位國に於ける物價騰貴の招伴をする暗渠を撤し去る可きてある。眞に我經濟生活が世界的となり世界の大勢に影響せらるゝものならば已むを得ぬ所と云ふ可きだが然らずして人爲の制度の爲め靜なる湖水の面に太洋の激波を招致するとは斷じて不可てある。在外正貨は之を招致する暗渠てある廢さねばならぬ。第二には關税政策の上に於て生活必要品の税率を低下す可きとてある其中米の輸入移入税の全廢は急務中の急務てある。第三公債の人爲的操縱を全廢し又た税制を根本的に整理して消費税偏重の現狀を捨てゝ所得税(所謂所得税のみを云ふのてはない。形は何なりとも可成所得に近き所に於て課税する税制を云ふ)を本位とし其足ざるを財産税(收益税)に求むるとす可きてある。第四販賣市場の改良を圖る可きてある。予は事の順序は以上の如くなす可きものと信ずる。

若反之例へば第四の如きにのみ專ら重きを置き殊に人爲を以て物價の調節を圖り得可きものとするが如きは誤れるもまた甚しきものと信ずるのてある。物價は一國需給の大勢に於て自ら定まるものてある。區々の小巧小智を弄し片々たる政策上の巧妙を爭つて之を左右せんとするが如きは國民一般の迷惑此上もないとと確信する。爲政者は物價は生産費によりて定まるてふ舊時の誤れる經濟學説に囚はれてはならぬ、人爲的に生産費の輕減を圖つたとて其れが直ちに物價を引下ぐる作用ありと思ふは餘りに無學なる考てある。猶此等の施設を爲すに就て先づ物價騰貴の眞相を精密に出來得る限り統計的に調査するとが目下の急務てある。故に予等は農商務省の物價調査なるものに向て多大の希望と期待とを繋ぐものてある、其結果の發表せられた上に於てこそ始めて眞正の意味にての防止策研究も出來得るので今日に在りては、實は甚だ漠然たる抽象論を爲し得るのみてあるとは殘念と云はざるを得ぬ。——

日も早く農商務省調査の公表せられんとを切望して筆を擱く。（十月十九日記す）

物價騰貴の原因及び其結果

松山忠次郎

物價騰貴といふ事は、日本ばかりでなく、近頃各國を通じて同じ現象を呈して居る。之は大體からいへば金が下落した結果である。金が下落すれば、物價が騰貴するといふ事は申すまでもない話であつて、其反對の例は千八百七十年から廿年程の間は金が騰貴したが爲めに、歐羅巴の物價はすべて下落した。處が最近十四五年此方は、其裏が來たのであつて、金が何處も彼處も下落した。下落した理由は金の産額が多くなつたのである。南亞米利加では金鑛が續々發見されるし、又濠洲でも發見された。それから之を採掘する方法も進歩して來て、今まで引き合はなかつた鑛山も引き合ふやうになるといふやうな事で以て、亞米利加、露西亞其他の今までからの金産國も、産額が大變増加するやうになつた。それで十四五年前には、金の一年の産額が、億圓を少し超過する位に過ぎなかつた處が、近年は殆んど十億近くになつて來た。て各國共金が澤山に過ぎて、其中の幾分は裝飾品、美術品に使はれるだらうが、過半は矢張り貨幣に鑄造される。て各國共中央銀行の金貨の所有高は最近十數年間に非常に増加して居る。英吉利は中央銀行の制度が餘り金を集める制度を取らぬから左程増加しないが、佛蘭西、露西亞の如きは大いに増加して居る。米國には中央銀行が無いけれども、大藏省が金貨を拂つて其代りにゴールド、サーテフイケートを發行する。之も非常の増加である。其外南亞米利加諸國でも、金貨が非常に増加してるし、濠洲などでも増加してゐる。日本でも最近大分増加して居る。金が増加すれば紙幣が増加する。銀行準備が豐富になる。信用取引が盛んに行はれる。手形交換高が激増するといふやうな具合であつて、物價は必らず

騰貴しなくてはならぬ。之が近來世界を通じて物價が騰貴した共通の原因である。

斯ういふ譯であるから、日本の物價騰貴も當り前てあるが、其騰貴の程度が外國の騰貴の程度と變りが無いならば、それは怪むと須ゐぬけれども、日本の物價は外の金貨國の物價に比較して、特に著しく騰貴して居る。世界の主もな國の物價騰貴の程度を調べて見たが、英吉利が一番少い。獨逸、佛蘭西が之に次いで騰貴して居る。一番騰貴して居るのは米國である。處が日本の騰貴の程度は、米國よりも、もつと著しいのである。それで第二流第三流以下の小さい國の物價は調べて見ないけれども、大體からいふて、日本の物價は世界で一番騰貴して居るといふ事が出來るだらうと思ふ。日本の物價が外の國の物價より高いが爲めに輸出貿易が頗る不振となる。輸入は存外盛んになる。といふのは安い國から高い國へ輸入するのであるから輸入し易いのである。之れに反して輸出は物價の高い國て拵へたものを、安い國て賣らうとするから骨が折れる。詰り輸出品の生產費が高くつくのである。そこて我國の輸出貿易の振はないのは當然である。最近六年間に於ては殆んど輸出高が增加しないといふてよい位である。之れまでは六七年乃至七八年間に一倍の割を以て增加したのであるが、最近六年間は殆んど增加しないのである。之はなか／＼投うて置くべき問題でない。其他物價騰貴の爲めにはいろ／＼な影響があるに相違ない。貿易の影響の如きは數字であるから分るけれども、統計に取れないが爲めに世間にあらはれない影響て、餘程いろ／＼の弊害を生じて居るに違ひない。然らば何故日本の物價が外の國の物價より一層騰貴したかといふのに之には二つの原因がある。一つは戰爭の爲めに矢鱈に稅を課したからである。殆んど總ての商品に稅を課して居る。就中煙草の如きは稅を吸ふのか、煙草を吸ふのか分らぬ程である。それから、鹽、砂糖、甚しきは米までも稅が課せられてある。かゝる生活の必要品に稅を課すれば、其結果賃銀も騰貴しなくてはならぬ。而して高い賃銀て生產した製作品は

總て騰貴することになる。日露戰爭後、税を急に増した事が日本の物價騰貴を外の國より一層著しくした一つの理由に違ひない。第二の原因は兌換劵の増加である。金貨下落の爲めに當然増加すべきよりは以上に増加して居る。自然の増加でなくして人爲的の増加である。之が又日本の物價が外國の物價より特に高い所以である。然らば何故日本の兌換劵が人爲的に増加したかといふに、之は外債のお蔭である。戰爭中に外債を盛んに募集した。そして外債で得た正貨を引當てに内地で兌換劵を増發した。正貨を日本に持ち來つて、それに對して兌換劵を發行するのみならず、外國の市場に預けて置いたものまでも日本銀行の正貨準備と見做して、之に對して内地で兌換劵を増發した。そして其れを戰爭の費用に使つた。之れは戰爭中は實は止むを得ぬのであつて、それ丈けの事なれば今更ら苦情をいふ必要がないのである。否、戰爭中は財政の舵の取り方が以外に巧みであつて、盛んに外債を募集した割には内地の兌換劵は左程に増加しなかつたのである。處が兌換劵増加の弊は寧ろ戰爭後にあるのである。戰爭後に引續いて、四分利公債借換の爲めに外債を募集したのみならず、其後も電車買收の公債も外國で發行するとか、鐵道の建設公債も外債によるとかして益々外債を募る計畫である。又之まで政府が自分で外債を募集するのみならず、南滿鐵道の如き政府が保障して外債を發行せしめた。それから市債社債といふものは屢々外國で發行せられた。此等が間接に直接に内地の兌換劵を膨脹さした原因になつて居る。内地で兌換劵が特に増加し、内地の物價が外國の物價より特に高い理由は以上の二つである。

⊗

然しながら之は自然のまゝに任して置けば、此兌換劵は再び收縮すべき筈である。先にいふ通り輸入が増加して輸出が左程増加しないとすれば、正貨は外國に流出しなくてはならぬのみならず、我國は外國に對して巨額の借金を持つて居るからして、其利息も支拂はなくてはならぬ。さうすれば日本の正貨は段々外國へ行つて兌換劵も少くなり、兌換劵も自然に程よい程度

に止るのである。處が一方には政府がいろ〳〵な事業を起して外債を募集し、又一方には分らず屋があつて在外正貨を補充しなくてはならぬといふ俗論を唱へる。そして折角自然の分量になり、物價も外國と平準ならんとするを妨げるのである。元來正貨といふ者は人間の身體に譬ふれば血液の如きものである。或程度までは是非必要のものである。其程度に達しなければ所謂貧血性になる。身體に害を與へる。處が其程度を超えて必要以上の分量を與ふる時は又多血性となる。それも身體に害を爲す。今日は實は我國は多血性に罹つて居るのである。そして物價は外の國より騰貴して居る。然るに此際に尙正貨補充といふ愚論を唱へて益々多血性とするのである。益々物價を騰貴さすのである。益々輸出を不振ならしめるのである。益々勞働者を困らすのである。益々日本の經濟界の變調を甚しくするのである。仕舞には多血性が昂じて腦溢血を起すのである。故に今日では正貨補充といふ愚論を根本から打破する必要がある。そして日本の經濟界を平調に復さしむる必要がある。兌換券も自然の分量に減じて、物價も外國と平衡を保つ程度に引下げる必要があると思ふ。

贅澤を廢して積極政策を行へ

前遞信次官　仲小路廉

物價騰貴の問題は、誠に重要な問題であつて、此點については官民共に深く注意講究すべき事柄であらうと思ふ。

近來に至つて世界各邦到る處に此問題が持上つて居る。現に昨年予が歐米諸邦巡遊中にも到る處其事情を耳にし種々の狀況を目撃したのである。夫れ故に今や列國に於ても此問題は有識者の非常なる注意を惹いて居るのである。

蓋し物價の騰貴は世の進歩と共に避け難き情勢であるといふは一般の傾向であらうと思ふ。殊に鑛山の開

發――別けて金鑛の開發によつて、金產額の多きに伴ひ、其比準として物價の騰貴を來すは止むを得ざる趨勢であらうと思ふ。各國を通じて千八百年の末葉から千九百年の初頭の現時に至つて何れも物價昂上の傾向をなしつゝあるは著明の事實である。殊に我國の如き維新以來短かき歲月の間に於て各種の事物に非常なる變革を來たし、風俗慣習其他各般の點に於て幾多の變遷を重ねたる國に於ては之を歐米諸邦の狀態に比して一層急激なる變化を見ることは是亦避け難き事情である。さりながら此情勢を此儘に打捨て置いては終に如何なる所に到著すべきか、前途を考ふれば寒心すべきこと少からぬのである。故に宜しく其原因を探究し、出來得る限り、之を緩和救濟するの方策を講ずるのは至當の事である。

之について熟々其原因を考ふるに、いふまでもなく一つは物資供給の點に於ける關係と、一つは貨幣價格の比準の變動である。今一つは世の進步に伴ふ結果として各人殊に中產以下の人の生活狀態が、よくいへば向上であり、惡くいへば贅澤に流れて居るとも確かに有力な原因となつて居る。故に第一には物資の供給を出來得る限り饒多ならしめ、出來得る限り之が配給分配の點に於て便宜の道を講ずるといふのは第一要義である。即ち我國の如き主として米食をなす國、米を以て生活の中心として居る此國民に對しては、出來得る限り米穀の饒多なる途を開かねばならぬ。それが爲めには耕地整理、肥料の改良其他あらゆる方法を盡して米穀の多からんことを期するは勿論、又若し內地の產額て不足を告ぐれば、外米の輸入について便宜の道を計ることも止むを得ざる處である。又農家の副業としては出來得る限り、米穀代用の穀類を作り、家畜、牧畜其他各種の點に於て其途を講ぜねばならぬ事は至當の事である。又いふまでもなく此等の事はすべて租稅にも關係すべき事なれば、出來得る限りに於て其緩和の途を計るといふ事も當然の事である。又豫て自分は斯く考へて居るのである。實際日本の今日の狀態に於ては、物資の配給分配の機關に於ては、之を各國諸邦に

比して決して完備して居るとはいへないのである。換言すればまだ其組織が完全でないのである。物價は多數の手を經れば經るに從つて價格を增す。小賣相場の卸賣に比して價格の高まるは當り前のことである。即ち此點に於いて社會の組織を改良するのが最も必要である。出來得る限り配給の複雜を避けるのがよいのである。出來得る限り個々小賣の道を避けて共同的販賣即ち卸並みによつて物を得らるゝ道を講ぜねばならぬのである。即ち市場の經營にしても、或は問屋若くは小賣の組織にしても、此の點に改良を要すべき事は幾多もあるのである。殊に最も主要なるは、購買組合の制度、共同配給の制度であつて、此等の社會的組織は餘程發達しなければならんのである。此等の點は又折を見て一事一物について詳しくお話して見たいと思ふのである。

次に最も必要なるは各人の心の持ち方である。世は文化に進み、文明に趨くに從うて生活狀態はどうしても向上しなくてはならぬのである。又人類の本性として單純なる生活より漸次進んで高尙なる生活に向はんとするは避け難い點である。之れ亦世の進步上至當の事であるから、決して之を阻礙すべきものではない。出來得べくんば、貧困の生活狀態より富有の狀態に進め、所謂衣食足つて禮節を知るの境地に導かんとするのは爲政家の當さに盡すべき所である。相當の住居をなし、相當の風儀を整へ、相當の衣食をなすやうに一般人の進むことを勸誘し之を奬勵すべきは至當であつて決して阻礙すべきものではない。さりながら玆に最も注意すべきは、力あつて斯樣の行を爲すことは固より望む所であるが、實際其力に伴はずして只一般の風潮に侵され、己れの實力にて到底支へ切れぬ事を知りながら、虛榮の爲めに、心にもなく苦痛の生活を爲して居る。此等の人心については餘程警戒を加へなければならんのである。今や中流以下の狀態は如何であるか。今年の如き現に米は二十圓臺を超したのである。之に伴うて物價は餘程高くなつたのである。物價昂騰、生活困難の聲は囂々として世間を騷がしたのである。然

しながら實際に於ける生活の模樣はどうであるか。米が高くて困難しつゝありといふに拘らず、依然として米以外のものは食はないのである。米以外のものを食はないのみならず、外國米さへも口に入れぬのである。二十圓臺を超しても依然として日本米の外は口に入れぬ有樣である。口に困難を唱へながら依然として口腹の慾を充たすが爲めには贅澤をしつゞけて居るのである。此等の狀態は餘程注意をしなければならぬ事であらうと思ふ。依然として宵越しの金は遣はず、巾着にあればある丈けは遣ひ切つて了ひ、口に泣言をいひながら贅澤の生活をしたいといふのである。此等の思想上の點、精神上の點については、世の有識者たるもの又深く考を須ひねばならぬ事と思ふ。即ち前段に於て申す通り、物資の供給充實の途を講じ、配給分配の道を滑らかにするの道を講ずると同時に、一面精神的に於ては又質實簡易の生活法を慣らさしめ、他日を考へて相當の備をなす所の思慮ある國民を養成しなくてはならぬ。若し然らずして分不相應の贅澤をなすものならば、決して之を向上したる生活狀態とは稱する譯に行かんのである。

予は思ふ、世の志士仁人等は一面に於て種々緩和の途を講じて生活の安慰を計る慈愛の行爲も必要であるが、之と同時に中流以下、殊に生活難に困める人には、又嚴正なる注意を與へて宜しく身の程を省み、將來の事も思ひ、相當の計を爲す丈けの思慮ある生活をなさしむるやうな堅實な途に導いてやることも亦必要である。我國民はどちらかといへば贅澤に向ひつゝあるのである。巾着錢を遣ひ過すのである。 陛下の詔書にも宣せらるゝ如く、華を去り實に就かしむるといふ事は爲政者並びに世の先覺者の最も心を用ふべき點であらうと思ふ。予は此點について深く考ふる事がある。今や世の中には通貨膨脹の爲めに物價は騰貴したといふ説がある。之は何人も異議のない所である。金が多くなれば物が高くなる位の事は誰でも知つて居るのである。さりながら我現在の狀態に於て、我工業界若くは事業界の狀態に於て、果して通貨が有り餘れるのである

か。果して貨幣は多きに失して居るのであるか。今や企業家、事業家の最も困める處は金融の逼迫して居る事てある。金利の高いのに困んで居るのてある。金の融通のつかぬのに困つて居るのてある。金利の高い結果、生産物の高くなるのに困つて居るのてある。企業家、事業家の前には貨幣は決して多きに失して居るのてはない。寧ろ少きに困つて居るのてある。それが爲めに拂込にも困れば、事業の擴張經營にも困りつゝあるのてある。事業家の方面には決して金が餘つて居る事がないのてある。それなれば金が餘つて居らんかといふに餘つて居る點もあるのてある。それは何てあるかといふに、企業とか事業とかの方面にあらずして、生活の爲めの金額は浮いて居るのてある。今一つ進めていへば、事業資金ともならない所謂巾着錢、ポッケット、マネーが多過ぎるのてある。五圓七圓三圓の金は澤山浮いて居るのてある。此等の金はみんな衣食に使つて居るのてある。口腹の慾を充たしつゝあるのてある。此等の點に於て物價は騰貴しつゝあるのてある。生活は困難に向ひつゝあるのてある。若しも貨幣が餘れりといへば即ち此等散漫なる五圓三圓の巾着錢が浮いて居るのてある。而して一面事業資金は逼迫を告げつゝあるのてある。之は決して健全なる狀態といへぬのてある。即ち此等三圓五圓の金額は宜しく之を緊縮し、銘々の思はず知らず使はんとする巾着錢は之が口を引緊めて、而して之が銀行其他を通じて、事業資金に向ふやうにならなければ、物價の平準を保ち、生活の緩和を得、一面事業の勃興するといふが如き、國家の健全なる發達と興隆とは期し難いのてある。

予は殊に近來慨嘆することがあるのてある。近來の狀況は誠に妙な感じを起させるのてある。世の中の事に對して兎角消極の議論をなし、悲觀の説をなすものを以て、尤も愼重にして、思慮の深いものゝ如くにいひ做し、多少たりとも積極の意見を述ぶるか、若くは樂觀の説を述ぶるものがあれば、左も思慮の足らぬものゝ如くにいひなすのてある。果して之が國家の興隆すべき時勢に於ける狀態てあるか。悲觀すべき時に悲

觀も必要てあらう。消極の論をなすことも必要であるかも知れぬ。さりながら予は實際信ずるのである。無暗に消極悲觀の說の行はれ、軟弱なる意見の行はるゝは畢竟は老人の繰り言である。老境に頻したるものは愼重げに見えて、實は己れの力の足らざる事をあらはすのである。己れの力が足らざる故に兎角世の中を悲觀するのである。

予は思ふ。假りにも我帝國が將來益々興隆せんことを期するに於ては、萬般の點に於て消極の途を取ることは決して其所を得たるものではない。無暗に不景氣な事をいふのは、決して事業興隆の基ではない。予は前段に於て種々緩和の通を述べて居るのであるが、玆に一言にしていへば、寧ろ其根本に於て大なる緩和を與ふる事を必要とするのである。國民の生活狀態を安穩ならしめんとするについては、寧ろ其根本に於て大いなる安慰を與へなければならぬのである。大なる救濟策を與ふることが至當である。大なる救濟策とは何であるか、須らく萬事について積極の方針を取るのである。英國も物價が騰貴しつゝあるのである。獨逸も亦然りてある。何れの國に於ても物價の騰貴しない國はない。然しながら一面に於ては英獨諸邦は國力の增進と國富の發達の爲めに多少物價の騰貴に拘らず個人の生活は大いに緩和されつゝあるのである。予は思ふ。一面に於いて生活に必要なる物價の低廉を計ることは當さに講ずべき所たるには相違ない。さりながら世の爲政家たるものは、獨りかゝる消極のみに着眼することなくして、寧ろ大なる救濟をなすべき大慈悲心と大勇猛心が無くてはならんのである。政策はどこまでも積極で無くてはならんのである。今や我國に最も必要なるは多量の物貨商品であつて、凡ての方面に於て生產力を豐饒ならしめなければならんのである。諸般の事業工業は益々興起しなければならんのである。工場は盛んに起らなければならんのである。器械は充分に動かなければならんのである。器械が動き、工場が榮え、事業の勃興を計らんとするについては、先づ必要なるは低廉なる資金である。低廉なる動力である。低

廉なる資金、低廉なる勤力を以つて各種の事業に對して、大いに器械力を發達せしめ、以つて其の生產費を安くし、低廉なる物を生產して、多量に海外に輸出するのである。若しも之れが出來たならば、我太平洋岸の南米のみならず、或は東洋方面に於いても爪哇、スマトラ、若くはカルカッタ方面といひ、我航路は已に發展し又發展しつゝあるのである。幸にして我太平洋方面及び東洋方面に於て幾多未開の土地がある。我雜貨商品はなか／＼の需要があるのである。只今日憂ふる所は、品物が如何にも高く、如何にも粗末で、如何にも乏しい事である。その爲めに獨逸其他の商品に壓迫されんとしつゝあるのである。獨逸の品に比して兎角に我品物は價が高いのである、品質が粗末なのである。分量が少いのである。故に此點に於て大いに力を用ひて低廉なる雜貨商品、手丈夫にして善良なる品物を多數出來得るならば此のハヶ場については決して憂ふることがないのである。又多少の困難ありとしても奮鬪猛進し、以て其販路を擴張し、彼と競爭しなければならんのである。幸にして我國は地勢上四圍の地に對して甚だ便宜の位置を占めて居る。政府も航路を益々開發し、運賃其他について大いに盡力すべき筈であるが故に、一度其道を得たならば決して他に負くることがないのである。此等の點について大いに奮發努力すべきものと思ふ。何が故に老の繰言の如く只消極の說を述べ、只々引込思案をするのであるか。何ぞ勇奮一番我國家を興隆せしめ、我國民をして安穩にして富有なる生活をなさしめんといふ大決心を起さぬのであるか。予は此點に於て甚だ遺憾に思ふのである。予は昨年歐米諸邦巡遊の際、獨といひ、米といひ猛然として奮起しつゝあるを目擊した結果此點に就て轉た胸中に深慨するのである。

物價騰貴防止策

法學博士　田中穗積

今や物價騰貴は世界の大勢である。歐米共に最近十

年間に於て一割から一割五分、或はも少し上かも知れぬ、兎に角二割弱の騰貴である。日本も亦矢張左樣であるが、此世界を通じての騰貴の理由が、金の價の下落に在る事は世界の定論である、即ち基く所は金の産出分量の增加である、亞米利加の造幣局長の報告に依ると、千八百五十年以來世界の金の分量が五倍に爲つたといふ事である、斯樣に産出分量が殖えると金の價は下落する、其下落した金を以て他の物品と引換へれば受取るべき物品の分量は以前よりは少くなる、即ち物價の騰貴である。今日の物價騰貴の原因は是れである。

抑も物價の多少づゝ騰貴する事は必ずしも惡くはなく、惡いのは物價の暴騰暴落で、是が一番經濟界を攪亂する。例へば物價が暴騰すれば先づ債權者には損になる。高い値打の金を貸して置いて低くなつた値打の金を受取る。例へば一圓で十の品物を買へたものが僅か五つしか買へぬと云ふことになるから、債權者には損である、次にはスペキユレーシヨン即ち投機が盛になる。又官吏會社員或は勞働者といふ樣な一定の收入で衣食する者には、物價の騰貴と共に其俸給若くは賃銀の增すものでなく、多少は增しても到底暴騰した物價に伴ふべくもないから非常の生活困難に陷る。それ故暴騰は無論惡い。けれども徐々の物價騰貴は決して惡くない。徐々に騰貴すると今言つた樣に、債權者が非常に損をするといふ樣な事はない、多少は損になる道理であるけれども、今日貸借の大部分は左程長期の者でない、無論公債などには隨分長期のものもあるけれども、個人間の貸借は一般に短期であるから格別損はない、即ち損ありとしても僅に一部分の長期貸借をするものにのみ限られる事となる、而して又投機熱挑發の憂もなく、一定の收入に衣食する人々に取つても、給金は漸次に增すから從つて生活上の困難の起る事がない、否却つて利益がある。即ち物價の多少高く爲るといふ事は一般産業界の景氣を引立てる。物價が廉いと製造家も製造を躊躇し商賣人も仕入を控へるけれども、是れに反して物價が少しづゝでも段々高くなると

其反對に製造家も益々事業を擴張し商賣人も益々仕入を盛にするから、一般の產業界が景氣附いて來る。從つて勞力のデマンドが殖える。故に勞働者の職業も賃銀も亦次第に增加して却つて良好なる結果を呈すると云ふことに爲る、此事は昔より學者が旣に認めて居る。例へば英國のジエボンス等は早くから之を言つて居る、要するに急激の物價騰貴は惡いが徐々に金相場の下落して物價の騰貴するのは、啻に弊害なきのみならず却つて利益がある。

然らば翻つて日本の物價騰貴も歐米のそれと步調を同うして進みつゝあるかといふに左樣でない、最近十年間の日本の物價を見ると、凡そ三割の騰貴をして居る。之を歐米諸國といつても英、米、佛、獨等其國によつて多少違うけれど、通じて言へば先づ一割乃至二割五分、高くても二割を出でぬ騰貴の率に比べて日本は三割である。即ち其の速度よりしていふと我國の物價騰貴は歐米諸國の約二倍である、是は如何しても單に世界共通の原因たる金の下落のみに依つては說明が出來ぬ。若し同一原因とするなら同一結果でなければならぬ、即ち大體同一騰貴率でなければならぬのが、然らずして日本丈暴騰するといふのは、尙ほそれ以外に他の原因がなくてはならぬ、又斯樣な暴騰は前に述べた如く弊害が之れに伴ふから放任する事は出來ぬ、何とかせなければならぬ。然らずんば經濟上に大弊害を醸す恐がある、其所で其弊害を矯むるには先づ其原因を明白にして行かなくてはならぬ。

我邦に於ける物價騰貴の特種の原因と認むべきものは先づ五つ程ある。第一は一般の生活程度が非常に上つて居る。無論外國でも左樣であるが、日本は特に著しい、それは日露戰爭に勝ち俄に世界の一等國の仲間入をした事が原因と信ずる、田舍者に至る迄戰爭に出たものは、思ひ懸けない一時賜金とか年金とかを政府より貰ひ、それでなくても戰勝の熱に醉ひ、一等國と爲つた大國と爲つたといふ考の處へ、又此樣な金を手にするから、何の考もなく俄に生活程度を向上させる。是は吾人の日常目擊して居る事實であるから說明を要

せずに誰にも分らう、

第二は租税が重くなつた、特に其税金が食料品等に著しい、例へば外國から來る米に課税する、外國から來る麥粉に課税する。卵に課税する、鹽には鹽專賣といふ事で課税する、從つて醤油が高くなる、味噌が高くなる、酒の税も亦大變に增した、といふ譯で一般人民の日常消費する穀物を初として一般の食料品に高い課税をするから物價の騰貴は免れぬ、是も日露戰爭當時の彼の非常特別税の存續に因るのである。

第三は日本國內に於ける通貨の膨脹である。それは非常である、非常である事は之を數字で見れば直に分る。日露戰爭以前の明治三十六年には、通貨の總額三億三千萬圓であつたが、今日は五億二、三千萬圓である、斯樣な急激な增加は何處の國にもない。通貨の膨脹の仕方が既に此の如くてあれば物價の騰貴は當然である。如何にして斯くも驚くべき通貨の膨脹を起したかといふに、是又矢張り急激な財政膨脹と誤れる公債政策の產物である。

第四は人口の增加である。日本の人口は最近五年間の統計ていふと、一年に五十五六萬の增加である、斯かる著しい增加は他國には見るべからざる現象である。それ故此人口增加の爲に餘程又物價騰貴の勢力を促進して居る。と云ふことは特に食料品の騰貴の著しいのに依つて是を證明することが出來る、即ち最近十年間に物價は約三割の暴騰といふが、製造品は左程に騰貴して居らぬ。次に原料品が少し許り騰貴して居る。然るに食料品のみは著しい暴騰で。殆んど五割にも當つて居ると云ふ事實に顧て、人口の急激なる增加が物價騰貴の勢を促進しつゝあることは、何としても爭はれぬ。

以上四つの原因は、恐らく何人でも、苟も經濟問題にインテレストを持つものゝ皆な等しく認むる所で、別段名說でも無ければ珍說でもない。即ち何人にも異議の無い所であらうが。既に此四つが我國に於ける物價暴騰の明白なる原因だとすれば出來る丈其弊害を矯正しなければならぬ、第一に急激な生活程度の進み方

は、國民各自に日本の國力を顧みて愼まなければならぬ、日露戰爭の爲に日本は十數億圓の經費を遣ひ借金をそ殖へたけれども、是が爲に一向日本が富んだといふ譯でない。歐米の一等國に比するに日本の富力は非常に小なるものである。試に之を數字に就いていふと。國の富如何は元來正確な計算のなし得らるべきもので無いけれども、大體の觀察よりすれば、米國の富の總額は二千二百億圓である。次に英獨が一千七、八百億圓、佛が一千五百億圓位である、然るに日本の國富は先づ二百五十億圓乃至三百億圓と一般に認められて居る。されば武力に於てこそ日本は世界の一等國の仲間入が出來たけれども、經濟上の見地からいふと迚も歐米の一等國と並び得るものでない、斯かる事を能く能く考へて人民各自が今少し生活程度の向上を差扣えて勤儉貯蓄をしなければならず。政府も又之を誘導するに其宜しきを得なければならぬ。第二の原因の租稅の重課も、斯程迄の重稅を負擔する國民は世界に有りはせぬ。今も言つた如く國力は甚だ微弱であるのに租稅のみは割合に重い。是は日露戰爭より引續き稅額を引上げて來た結果である。特に一般人民の消費する穀物、鹽などに課稅するのは非常に重大な問題である。政府が若し貧民救濟の必要を認め、殆んど租稅に等しい樣な寄附金を出させて濟生會を作る考があるなら、何故に寧ろ是に先つて生活上の必需品なる食料品の課稅を廢止しないか、一方此の如きものにまで重稅を賦課し從て生活の困難を釀し、營養不良から延いて病氣に爲つたらば濟生會で藥を呉れてやるといふ樣な政策は考の無い愚劣な政策の骨頂と言はなければならぬ。即ち今日の如き生活の必需品に重稅を課し乍ら、一面濟生會などゝ騷ぐのは畢竟兒戲である。之に依つて人民、特に下層社會の人民を生活難より救はんとするなどは及びも附かぬ事である。人民を生活難より救ふは必要であるが、それには先づ必ず惡稅は廢止し、重稅は輕減すべきだと思ふ。第三の原因たる通貨の膨脹是れ亦矯正しなければならぬ。此急激の膨脹は無謀なる財政の膨脹と誤れる公債政策の自然產物であるから、之を

さへ棄てれば通貨は自然に收縮する。

扨て第四の人口の增加は、矢張物價騰貴の原因てあるが之れは挽める必要がないのみならず益々其增加を促すべしてある、何となれば繁殖力を制限するのは即ち國力の發展を制限する自殺の愚てある。古今東西何れの國を見ても、人口繁殖の盛な處て衰へた國はなく、又人口の段々減る國て愈よ盛になる處はない。國力發展は如何しても人口の增加に待たねばならぬ。幸に今日ても日本人の繁殖力は世界に其比を見ぬが、是は國力發展上甚だ喜ぶべき現象てあるから、決して國民は避妊し、子供の生れるのを無理に抑制する必要はない。否更に益々其繁殖を希望する。即ち此一原因だけは別物てあるが、其他の三つは一日も早く矯正に努めなくてはならぬ。却說人口の增加は多々益々結構。他の原因さへ抑へれば宜いといふならば、今後人口の增加と共に物價は益々騰貴し、特に食料品の騰貴は如何にしても免れぬてないか、子は產め、而して必然の結果として來る生活困難は忍べといふのは無理てないか。今日の物價騰貴は食料品に於て最も著しいと言ひ乍ら又益々人口の繁殖を說くのは、議論が矛盾しはせぬかと云ふ反問が必ず起るに違ひない。此に至つて私は更に第五の物價騰貴の原因なるものを述べなければならぬ。

それは何かといふに、日本人民の日常消費する貨物の重なるものは日本人民丈の需要する特種の品物てある。外人は之を消費せぬ。そして其消費物が極幼稚な道具を用ひて手先きて生產され、文明の科學を應用した大規模の生產の行はれぬもののみてある。是が日本の品物を非常に高からしむる原因てある。と同時に又其品物の價の動もすれば暴騰暴落する所以と爲る。即ち日常消費物の多くが小規模の手先仕事て生產高に限りがあるとすれば、年々人口の增加と共に價は底止する處なく騰貴するのは免れざるの勢てある、と同時に生產高が多い年ても之れを海外に輸出することが出來ず、少ないからと云ふて海外から輸入することも出來ぬ、從て價の變動も亦時によつて甚しきを免れぬのみならず、而かもゼネラルテンデンシーは唯騰貴の一方

のみてある。從つて斯の如き特種の貨物を消費する我々日本人の生活は年と共に困難となり。延て國力の發展の上に甚だしき妨害になる。例へば先づ米の如き、是は水田にのみ耕作するから、植附にも除草にも苅入にも機械を用ひて大規模の生産をする事が出來ぬ。歐米の樣に何十エーカー何百エーカーを耕すといふ樣な事は到底我國ては行はれぬ、悉く手先て不完全な道具を遣つて耕作をやらなければならず。加之如何なる所にも稻を植附けると云ふ譯に行かず、選ぶに最も灌漑の宜い地を以てせなければならぬ。歐米ならば多く麥を作る、麥ならば畑に作る。畑てあるから如何樣な機械をも遣ひ得る、即ち機械て種蒔もすれば苅取もする。從つて生産費が省けて價が安くなるのてあるが、日本ては米を唯一の食料とするから是もならぬ。米は東洋諸國、印度邊に於ても之を食ふが、併し世界一般の食料品てない、僅に世界の一地方にのみ限れる食料品てある、それ故東洋て不足だからとて世界の何處からも供給を仰ぐと云ふ譯に行かぬ、乍併之が麥であるならば出來る、例へば英國の如きは、米國の麥が不作なら加拿太からも南米のアルゼンタインからも。亦魯西亞からも供給を仰ぐことが出來る。處が日本てはそれが出來ぬ。東洋丈て米を作る而かも其東洋の米質が下等てある。迚も日本内地米程上等な米は他國から得られぬ、加之其下等な米すらも輸入稅が掛る、南京米にも皆課稅されるそれ故に日本の近來の米價の騰貴といつたら非常の勢てある、英國などては段々に穀物が安くなり十九世紀の後半紀に於ける穀物の價は約半分に下落して居るのに、日本は之に反し、小波瀾はあるにしても大體に於て益々高くなるのみてある。是が若し世界的の穀物て何處にても輸出出來るものなら豐作時の下落が防げ、又何處にても生産するものなら凶作時にも騰貴が防げ、穀物の價が標準を保つて英國の如くに却て安い方に向くのてある。

獨り米のみてない。其他の日常消費品を見ても左樣てある。日本人の下駄、日本人の傘、日本人の縞の着物、日本人の疊、皆日本人の三字を冠すべき日本特種

の產物で手先きの仕事で生產されて、文明の機械の利用が出來ぬ、而かも外國人は斯の如き貨物を消費せず又從つて外國から輸入する氣遣もない、それ故に人口增加に伴つて皆其價が高くなるばかりである。外國では製造品の價は餘り騰貴せぬ、日本でも矢張製造品は餘り其價が騰貴せぬが是は機械の利用に依る分業の御蔭である。大機械は非常の働をする。人間の働に比べると何層倍といふ仕事をする。それ故機械の利用の多く行はれる生產物程其價は上らずに却つて下落する。是は西洋のみならず日本の事實に就いて言つても判る。石炭の價の如きは日本では段々に下る、それは機械で採掘する。採掘すれば採掘する程穴は深く、掘り惡くなる譯であるけれど、機械の力は益々進むから價は却つて安くなりつゝある。銅も然り鐵も然り釘の如きも亦然りである。機械の利用の盛に行はるゝ品物は斯ういふ譯で高くならぬのである。然るに今言つた傘、下駄、疊といふ類は機械を利用する譯に行かぬ、それ故如何しても職人の賃錢が高くなれば其價も高くなる譯である。

機械の利用、分業の利益が如何程に大であるかといふ事に就ては、今より百五十年前に有名な經濟界の鼻祖と言はるゝアダム、スミスが述べて居る。留針を作るに一人で手先で造れば一日に僅か數本しか出來ぬ、併し之を分業の方法で受持を定めてやるなら一日平均五千本出來ると個樣に述べて居る。併し今日では昔の樣な單純な分業でなく機械の力が非常に進んで居るから一人一日平均一千五百萬本の留針が作れると云ふことである。即ち昔日に比べて正に約三百萬倍の仕事が出來る。それ故賃錢が高くなつても製造品は下落するのであるが。日本の物價騰貴の原因は此れが出來ぬ點に存する。即ち日常の消費物か、味噌醬油でいつても、亦日常扱ふ桶、笊といふ類でいつても、何を見ても手先で造る。而かもそれが外國には輸出せず又輸入もせぬといふものであるから、人口の增加、需要の增加と共に益々價の高くなるのは必然の勢である。それ故私は如何にしても日本特種の消費品の使用は止めなけれ

ばならぬと思ふ、之を止めずに人口のみ獨り增加すれば必ず悲慘の事態を現出するに至るであらう。

我邦に於ける日常消費物の生產に機械の利用を工夫せよと云ふことは。京都大學の戶田博士が數年來唱へられた說であつて如何にも一理あるが。私は此說に對して贊成することが出來ぬ。更らに一步を進めて私は日常消費する品物の種類を成丈け內外共通にせよと叫びたい即ち日本人丈の消費するものを造るのは非常に不經濟だと思ふ。何となれば漸く五千萬人丈の得意の用ふるものを造つた所で如何しても價の安く出來る法がない、それは機械を用ふれば笊や桶の樣な類でも幾らか安くはならう。が大に安くするには大規模に大量生產をしなければならぬ、從て僅か五千萬の得意を相手ではいけぬ、何處の人間でも使ひ、何處の人間でも買ふといふ物を作らなくてはならぬ。すれば機械力が發揮して愈價の安いものが出來、加之其價の暴騰暴落もない。如何しても日本人の消費貨物を他國と共通にする必要がある。外國の品物もドシ〳〵輸入すべきは輸入して宜い、同時に日本人の生產するものも何處へ行つても賣れるものでなければならぬ。

早い話が羅紗でも分る、兵隊や電車の車掌の着る位のものは日本に出來るけれども、縞物となると日本では出來ぬ。皆外國から來る。是は何に因るかといふと日本には洋服の需要が少い、若し日本人が西洋人の樣に皆洋服を着るなら態々高價の機械を外國より持ち來り、高い給金を拂つて職人を使つても割に合ふけれど只少數者の着る縞羅紗の生產の爲に此樣なことは出來ぬ、それ故販路の廣いと云事が必要である。販路の狹いものに大機械を用ひても其生產物の捌け場がない。即ち日本人丈の消費物の生產に機械の利用などを工夫するよりは寧ろ成べく消費物の種類を外國と共通にし、其價が安くて便利なものは外國より輸入し、內に餘りあるものはドシ〳〵外國へ輸出する工夫をするが宜しい、すれば價は自ら安くなり、安くならぬ迄も騰貴はせず、從つて人口增加にも苦まずに行ける。即ち國力の膨脹は之に依つて期待し得るであらう。日本人が若

し米のみを食つて他の穀物を食はぬとすれば日本の米の生產には自ら限があるから、人口の增加も自から米の供給によつて制限さるゝと云ふことになる。即ち米の價は段々高くなり、人民は生活に苦むから、勢ひ據所ろなく避妊をする、從て人口は或る程度以上には繁殖せず、國力も亦從つて或る程度以上には發展せぬであらう、それ故何としても消費貨物を世界と共通にし、機械の利用を十分にして愈よ生活を樂にする工夫が今日の急務である。

以上を一括して言へば、物價騰貴は世界の大勢である、是は金の產出が殖えて其價の下落した事が原因であるけれども、日本には其騰貴が特に著しい、是には特種の原因がある、即ち生活程度の急激なる向上其一。租稅の苛重其二。通貨の急激なる膨脹其三。人口の增加其四。是丈は何人も認める明白なる原因であつて、第一第二第三は矯正を要するけれども其の中第四の人口丈は益々增加させなければならぬ、それには消費貨物を世界共通にして外國の餘りある貨物をドシ〳〵輸入して消費すると同時に又內地では廣ろく世界の市場に販路を求めることの出來る品物を機械の利用によつて盛に生產する工夫をしなければならぬ。現在我々日本人の日常消費物の重もなるものは孰れも皆な日本特殊の消費物で輸出も輸入も出來ぬと云ふことが物價騰貴の第五原因を爲して居るから。之を防ぎさへすれば人口の增加少しも憂ふるに足らぬと私は信ずる。

物價騰貴問題に就て

法學博士　鹽澤昌貞

物價騰貴の問題に就て御尋ねであるが此問題は頗る廣く且つ複雜であつて倉卒の際十分詳細に論究すべき時間の餘裕なき故只所感の概要を述べて其責を塞ぐ次第であるから右御容赦を乞ふ。

物價の騰貴は云ふ迄もなく國民生計上に大影響を及ぼすものであつて古來其騰貴を防制すべき政策又は議

論は甚だ少くない。本邦に於ても物價を一定し又は制限するの政策は古來種々なる形式に於て現はれた樣である。又歐洲に於ても中世以來物價の制限と云ふことは常に政治家や學者の頭を悩まし樣々の政策や議論があつた。所謂「ジァストプライス」又は「フェーアプライス」などと云ふことに就ては隨分矢釜しい議論があつた。政府が權力を以つて物價を支配し正當に歸せしむることが果して出來るか又果して得策なりやは疑問である。往時は扨措き物價の騰貴は最近に於ける世界の大勢てある。從つて中流以下の人民は生活上の壓迫を蒙るを免れぬ。故に何人も知る如く近年英國政府の如きも生活費に關する調査をして其報告を發表し又學者の中にも物價騰貴の趨勢を研究發表して居るものもある。又米國などに於ても同樣に昨年上院で委員を設けて詳細なる調査をなさしめた。大陸國特に獨逸等に於ても物價騰貴の趨勢は著しく特に食料品の騰貴に就ては下層階級の生活上に打撃を與へて居ることは既に世に示されたる幾多の論文等によつて明なる事實てある。又先般墺太利の維奈に於て食料品騰貴の爲めに暴動を惹起したことは一般の注意を引いたことであるが之れも一朝一夕に起つたことてはない。既に數年來又特に昨年なども各都市に於て肉價の騰貴に就いて幾多の紛紜を生じたことは著しい事實てある。又佛國ても去る九月にシェルブールやシャールヴィユ邊て食料品騰貴の爲めに暴動を醸したことは外紙の報ずる所てある。此等各國に於ける物價の騰貴の原因に就いては勿論個々特別の事情も存することてあるから今一概に論ずることは出來ないが近來一般に認めらるゝ金產出の激增從つて通貨の遞落も其原因の一つてはあらうが大陸諸國又は米國等の如き峻嚴なる保護政策を實行して居る國々に於ては他の個々特殊の原因と共に關稅の影響が有力なる原因の一つと見受けらる。自由貿易國たる英國に於ても過去十年間に於ける物價の騰貴は勿論事實てあるが其騰貴の率は前陳諸國に比すれば餘程少なくなつて居る。兎に角物價の騰貴は今日世界の趨勢てあると云ふて不可なからう。

我國に於ても物價の騰貴は今日大に注意を惹き來つたが彼の歐米の諸國に於ては假令物價は騰貴しても之に應ずべき人民の所得が比較的大である故に生計上に及ぼす困難の度は又比較的少ないけれども我國の如き一般所得の增進左程著しからざる場合に於ては物價騰貴は容易ならざる問題と認めねばならぬ。元來物價は所得と相對して生計上に影響するは云ふまでもなく所得が十分に增進しつゝあれば物價騰貴は毫も憂ふるに足らないのである。然しながら我國の國富も次第に增進しつゝある事は疑ひ無いが一般の所得力特に中流以下の所得力が近年に於ける物價騰貴の趨勢と相應じつゝあるかは頗る疑問である。寧ろ物價の方が急激の速度を以つて進み來つたと思ふ。勿論物價と云ふても頗る複雜で一概には云へない或は往時に比して低廉になつたものもあらう。然しながら今日我國に於て衣食住に關する必要品は概して騰貴の趨勢を脫しない。

我國に於ける物價騰貴の原因に就いては勿論一面に於ては世界的大勢の支配を免かれないこととてあらうが兎に角近來に於ける生活程度の上進即ち衣食住に關する欲望の增加と人口の增加は貨物に對する需要の增加を來したる遠因と認めざるを得ない。此等のことは詳細に說明する迄もなく過去三十年二十年若しくは十年前と今日とを比較して見ても一般衣食住の上に益々贅澤の風を生じて居ることは明かなる事實である。勿論之は强ち奢侈の風として排斥すべきこととてはない。若し之に應ずべき所得の力が均衡を保つて居れば敢て憂ふるに足らざるのみならず物質上に於ける文化の發達の大勢を認むるより外はない。然しながら其所得との均衡を失しつゝありはしまいかと云ふ點が余輩の特に憂ふる所であつて物價騰貴が生計上の問題即ち生活難の問題を喚び起すのも此點に存するのである。前に述べた金產出の增加より生ぜる金價低落の上に及ぼせる影響は世界的の現象で我國に於ても幾分か其影響を蒙つて居ることは今茲に述ぶるを要しまい。

以上概述した通り我國に於ける生活上の變化は甚だ著しく從來比較的質素簡單であつた狀態より比較的

急激に新需要を起し諸種の貨物に對する要求は著しく激增し然も此等の要求を有する人口の數も增加しつゝあるから一般物價の上に其反應を見るは自然の數である。此等の一般的趨勢に加へて更に近來に於ける財政上の壓迫即ち各種租税の增加は勿論物價の上に影響を來すことを免かれない。特に衣食等に關する消費品に對する課税が其物價の上に及ぼす影響は既に世論の注意を惹いて居ることであるから今改めて詳論するの必要なしと思ふ。勿論生活の必要品と比較的必要ならざるか若しくは多少奢侈性質を有する貨物の課税に就いては政策として同一に律することは出來ないけれども兎に角此等の課税が間接に其物價を高むるに至ることは疑なしと信ずるのである。又近來日本銀行に於ける紙幣發行の度著しくして通貨膨脹の結果物價の騰貴に影響しつゝあると云ふことも世論の注意を惹きつゝあるが是れ亦大體に於て物價の騰貴の一因であることを免かれぬと思ふ。

政府が政策として物價騰貴を制するの方策を根本的に實行するに就いては何うしても先づ此等の財政上の原因より研究してかゝらねばならぬ。特に米穀輸入税や鹽や織物や營業等に關する諸税の廢止輕減若しくは整理をして中流以下に於ける多數人民の負擔を輕くし勞働階級に於ける費用を少くし從って一般生產費を減少することから始めなければならぬ。又通貨膨張を適度に制限するの必要なることも勿論云ふ迄もないと思ふ。政府の財政上遣繰りは往々經濟自然の成行を左右して物價の上に惡影響を及ぼすものであるをは多言を要せざることゝ信ずる。此等の財政及び金融上の政策の外に政府が物價の激變を來すべき投機取引等に關する取締を嚴にすべきは勿論又近來世上の問題となつて居る小市場の設置又は貨物賣買方法の疏通改善を計り生產者と消費者との間に於ける手數を省き卸賣値段と小賣値段との差異を少くする方法を奬勵することも幾分か有効なるに相違ない。元來一般消費者は其平生使用する貨物に就て殆んど何等經濟的知識を有せざるを常とする。如何なる貨物が幾何の生產費で出來又如何

なる順序を經てそれが小賣商の手に渡り生產原價と小賣の相場と何れだけの差異があると云ふ樣なとに就いては殆んど知らないのである。只時々の相場を見て安いとか高いとかの感じを生ずるに過ぎない從つて消費者は常に殆んど商人に支配せられて居ると云ふて差支ないのである。勿論消費者の購買力に依つて制限せられ、又他の競爭もあるから無暗に暴利を貪る譯には行かぬけれど生產者より消費者の手に渡る迄に種々取引者の手を經各取引者が相應に利益を收むることゝなれば自然に其貨物の相場も原生產費と小賣値段との間に莫大なる差異を生ずる譯であるから其取引の組織を改めて消費者が成るべく原生產費に近き相場で貨物を得る工夫を講ずるのは物價の騰貴緩和策の一たることを失はぬ。夫の歐洲諸都市に於て見るが如き大都會に幾多の小市場を設けしむるの策の如きは此等の意味に於て奬勵すべき價値ありと思はるれども之とても社會經濟上に於ける一般因襲から改めてかゝらねばならぬ。今日の樣に一家の主婦が日常の必要品買入れに一々出掛けることとは少く又普通に通帳賣買が行はれて居ると云ふ樣な有樣であり主婦が自ら一々食料品等の買入れに出掛けることを外聞が惡い樣に感ずる狀態では食料品等の市場も餘り有効とも思はれぬ。此等の市場が澤山出來て來たならば多少一般の習慣も改まる望もあるかも知れぬが是れ丈て物價の騰貴を制すると云ふは六ヶ敷と思ふ。

又物價の騰貴を制するは比較的少き生產費で多量の貨物を生產する方法も大切なることとて即ち我國に於ける日常の食料品例せば味噌、醬油と云ふ樣なものゝ製造に就いても舊來の方法に改良を加へ新知識を應用し又其製造經營等にも新組織を應用したならば比較的廉價に此等の必要品を供給すべき方法も見出さるゝてあらうと思ふ。此等のことは余等の每々口にしつゝある所てあるが我國に於ては尙十分に改善の餘地ありと信ずるのである。

兎に角貨物の分配集散の道が十分に開けて居れば需要供給の平衡も容易に保ち得て物價の變動も比較的に

少く從つて其騰貴の度も割合に薄いのである。先日シドニーウエッブ氏と英國に於ける最近の物價に就て談論したがロンドンに於ける物價は過去十年間に於て騰貴の割合は他國と比較すれば頗る低く勞働者等の生活必要品の騰貴は五分内外を越えぬとのことである。其理由に就ては自由貿易も一大原因であらうが又大體に於て貨物の集散分配の組織が整頓して需要供給の調和を維持する便宜が多いからであらうと云ふ意見であつた。我國に於ては交通機關貯藏倉庫機關其他各種の貨物分配集散の組織は未だ十分に發達して居らぬのであるから自然に原生產費と小賣々價との差額の大なるを免れぬ。此等の設備完成は自ら物價騰貴を緩和すべき結果を生ずることを疑はぬのである。

然しながら今日の所物價の騰貴は一般の大勢であつて仲々一二の政策で之を防制することは實際困難であると思ふ。それよりも尚一層急要なるは各種の產業を振起して所得の增進を計るべき方針でなければならぬ。物價がよし騰貴するにしても所得さへ十分であれば毫も憂ふるに足らぬ。我國に於て物價騰貴と所得力とは如何なる比例をなしつゝあるやの點に就ては正確なる統計を得ることが困難であるから一概に斷定し難いけれども歐米諸國の生計狀態と比すれば我國に於ては生活は比較的困難であると思ふ。特に食料品等に就ては物其自身の相場に於て我國の方が高いものが少くない。例せば肉の如きはそれである。また貨物其の自身の比較では歐米の方が高かつたにもせよ一般の所得力は我國よりは遙に大であるから生活の點に於ては反つて餘裕がある。從來我國に於ては歐米に比して生活が容易であるといふが之は平生の生活が比較的簡單であるから斯く云ひ得るので實際所得と物價とを比較して見たならば我國の方が歐米に比して生活は困難であると云ふことは余輩の常に唱說する所である。我國は生活が簡易であるとは云へるけれども生活が樂であるとは云へない。

產業の振興所得の增進を計るのが物價騰貴に對する積極的方針であるべきは勿論だが又一方に於て所得利

用の方法に革新を加ふべきことが頗る重要であると信ずる。之れは社會經濟上に於ける整理を要するのである。即ち習慣と衣食住に對する消費の整理を必要とする。今日中流階級等に於ては或る意味に於て二重の生活をなしつゝあると云ふて不可なからう。即ち例せば衣服等に於ても一方に於ては在來の和服と共に又他方に於ては洋服を要すると云ふ樣な有樣である。從つて中流社會等に於ける衣服丈けの費用も所得に對しては歐米等と比較して殆んど二重になつて居ると云ふて差支ない。又我國の衣服費は少くも中流以上に於ては所得に比して家計消費の割合上頗る多額を要するのである。今日東西文明接觸中の狀態であるから已むを得ぬとしても實際新舊兩生活をなしつゝあるのである。其他消費の各細目に亙つて考察して見れば右の樣なる現象は甚だ少なからぬのである。此等は生活費の膨脹を來し物價騰貴の大勢と照應して生活の困難を來すべき**一大原因であらうと思ふ。右は只一例に過ぎぬが此等**の二重生活を整理して生活の安固を期すべきは目下の一大問題であると思ふ。又從來の習慣にして往々形式的なる無意義の消費を要する項目が少くないと思はれる。即ち年始、年末、中元其他吉凶の種々なる場合に於ける贈答の習慣の如き大分虛禮的であつて然も仲々の費用を要するのである。勿論贈答の習慣は其眞義に合ふものならば決して排斥すべきではないが今日に於ては只無意義の虛禮に過ぎざるものが多いのである。吉凶等の場合に於て慶弔の意を表する爲めに一方より贈物をすれば又受けた方に於ても之に對して相當の返禮的贈物をなすことが習慣となつて居る。此等は頗る無意義であつて全く好意的贈物の眞義を没却し只虛禮的交換たるに外ならぬ。斯くの如き交換の爲めに費消する額は年々著しきものであると思ふ。眞正に慶弔の爲め又は社會的親愛の意を表する贈答は必ずしも惡くはないが、かゝる無意義の虛禮は廢して可なりと思ふ。又之と相關聯するとてあるが送迎や宴會や虛儀的のこ**とが甚だ多いのである。而して社交と事務とが往々混**同せられて無用な消費と精力と時間が浪費せらるゝこ

と甚だ大なるは何人も氣の付くことてあらう。繁文褥禮の廢止とか社交と事務の區別とか云ふことは誰も承知して居なから此等の無意義の習慣は仲々盛んに行はれる。此等のことも整理したならば無用の消費を節する上に於て好結果を奏すべきは疑なからう。余輩は此等のことを社會經濟上に於ける生活の整理と概稱して常に今日の急務なるを述べて居るのてあるが物價騰貴の大勢に應ずべき消費整理の方法として一般の心掛けを必要とすると信ずるのてある。

最後に關税政策特に保護關税の如きは確に物價騰貴の一誘因てあることは米、獨、佛等に於ける實例に徴して疑ひなきことてあるが今後新關税法が一般物價の上に如何なる影響を及ぼすべきかは特に注意を要することてある。又租税の過重なるが爲め一般物價に惡影響を及ぼすことも今日世界一般の現象と認められる。而して其最大原因は各國に於ける軍備競爭に在つて存するのてあるから物價騰貴及び之に伴ふ生活難の問題を世界共通の問題てありとすれば其完全なる解決に就いては空想かも知れぬが列國會議に依りて關税競爭と軍備競爭との難問を解決して人民の負擔を輕くするより外に道がないと思ふ。然し此は今日に於ては容易に期し得ることてないから各々其國に於ける特殊の原因から除いてかゝらねばならぬ。

以上は只物價騰貴と云ふ一般問題に對して概括的所感を述べたるに過ぎない。個々の特別問題に關することは更に他日を期し今日はこれて御免を蒙る。

通貨の膨脹と租税の過重

男爵　澁澤榮一

如何にも御尤な御尋ねて物價の騰貴が今日の尤も憂慮すべきものとは思ひますが、經濟界に立ち居る身てあり乍ら日常の雜務に追はれて深く考へても居りませ

ぬから、突然の御諸問に對して卒爾に御答するので丁寧な數字を並べての御話は出來ませぬ。所謂出來合の思ひ付きを申し述べます。

物價の高い安いが直に善い惡いといふ事にはなりませぬ。物價が安ければ生活が樂に出來て其國が繁昌し物價が高ければ生活が困難に爲つて其國が衰頽するとは斷言されませぬ、が兎角世間は過去を顧みて物價の今日よりも安い時代を慕はしい樣には思ひますけれども、其時代のみが强ち宜いともいへませぬ。米が一石三四圓の時もあつたけれども、其時代が果して國勢が振ひ生活が一般に結構であつたかといふに左樣はいへませぬ。物價が安くても勞働に對する報酬も亦安く、而かも其勞働の需用が不足で生活は却つて困難であつた時もあります。世界で物價の高い處はと申したら倫敦か紐育でせう、それなら倫敦、紐育が一番生活が困難で百事不振の狀態に在るかといへば左樣ではありません。却つて反對の現象で生活が樂に凡てが景氣附いて居ります。故に一國の富貴を望むなら寧ろ物價を高くすべしとも言はれる程であります。日本の物價が今日甚だ高いと申しても之を倫敦、紐育に比べればまだ低いと申し得ると思ひます。

是が故に經濟上に善い惡いと論斷するは決してそれのみでは言へません。更に其土地に於て働いて得る勞力の報酬並に其需用如何を考へて見なければなりませぬ。例へば一日働いて五十錢しか得られぬものが、六十錢なくては如何しても暮しが立たぬといふ事であつたら、其工人若くは勞働者は生活出來ぬ事となります。一家を維持する上でも同樣で、夫婦掛け向ひに小供が一人ある、それに下婢一人置くとして一ヶ月の經費が五十圓掛るといふ處へ主人の收入が四十圓しか無いなら生活困難に陷らなければなりませぬ。假に倫敦なり紐育なりに於て、一家の生計一月二百五十弗なくてはならぬ程の物價であつたとした所で、其主人の收入は三百弗あるといふ事なら生活は樂に行く。斯樣な譯だから單に物價の高低のみに就いて善いの惡いのとは言へませぬ、要は其物價に對する勞力の報酬如何の問題

に在るのてす。此點に於て日本は果して如何てせう。如何も倫敦若くは紐育と一律に爲つて居るてせうか。如何も左樣は言へぬと思ひます。言へぬとすれば此處に初めて其原因を尋ねて物價を引下るか勞働の報酬を引上るかの必要が生じます。

考へたらまだ他にも有りませうが、只今胸に浮ぶ所ては先づ其病源が二つあります。一つは通貨の膨脹てありまして、是が今日の物價騰貴を促すことの原因になつて居ると思ひます。詳細に計算は致しませぬが私の想像ては數年前よりも兌換劵の發行高が年々に增して來て居ると思ひます。曾て海外に存在する正貨準備によりて兌換劵を發行するの當否を新聞紙にて頻りに論じた事がありましたが私は日本銀行の事は詳細には知りませぬが海外に在るものを正貨準備に出來ぬといふ譯も有りますまい。兎に角通貨が多くなれば、物價が高くなるといふ事は水が增せば物が高く浮かぶといつた樣な者て、融通上並に經濟上の通則と思つて宜いのてあります。

第二には日常生活の必需品特には食料品に課する租税の過重と思ひます。差向き誰も必需品たる米が高くなつて居る、都會のみならず田舍の方も高くなつて居る、都會なり地方なり一般に、物品が高くなつたといへば米が高くなつたぢやないかといふけれども、米價ばかりが諸物價の標準てはない、米價も亦他の物價に影響されて高低します。斯樣に生活の必需品が高價になれば生活費は嵩む、從つて其製造品も高くなる譯てあります。然らば此直接の原因は私は租税が物價騰貴に大原動力を與へて居ることと信じます。要するに各自の働きに依つて得る處の報酬が物價の騰貴の割合に進まぬのが今日の憂てある、生活費が增してもそれが生産に副へさへすれば宜しいのてあります。一般人民の生活程度の高まつた事とか人口の增加とかも物價騰貴の原因には數へ得るて有りませうけれども、私は此等は發展し行く向上的の國民には當然の事と存じますから、之を弊害の中に數へる事は致しませぬ。當初に申した通り思ひ附きの一場の座談てありますから、果

して正鵠を得るや否やは知りませんが、私も貴問に對して憂を同じうする一人てありますから愚見を有の儘に御話致したのてあります。

「物價騰貴防止策」について河津博士にも寄稿を依頼したりしも、博士病氣爲めに全部脱稿に至らず、本號に收むる能はざりしは編者の遺憾とする所也。





數奇傳（六）

——一小文學者の自敍——

田岡嶺雲

（拾五）始めて家あり

(1) 不孝なる子冷酷なる夫

福岡は石を金にした成上り者の世界であると共に、又浪人の天國である。此は一は玄洋社なる浪人團の本場があるのと、一は此處に跋扈する成上り者によつて、浪人が豫測す可からざる未來を有する者たることを實物教示せられてゐる爲めでもあらう。

北淸から還つて予は暫時此地に放浪してゐた 其內に 坂本金彌氏に 拾はれて、岡山で又復た新聞記者となつた。

東西飄零、轉蓬も啻ならなかつた從來の生活に稍倦んで、岡山では始めて家をつくつた、親しく膝下に奉養するために老親をも迎へた、老親の意を安んずる爲めに終に妻をも娶つた。併し不檢束な放逸な行は未だ容易に悛らなかつた、放浪の生活に慣れた予には到底家庭の人たる資格が無い。

子として予は極めて不孝の子であつた、多年老親に倚閭の恨を抱かしめた

のみならず、漸く膝下に事へる樣になつて後も、予の放逸より結果する家政の窮乏のために奉養意の如くならず、加之家庭の上にも和氣を缺いて、却て徒らに其心を惱まし奉る事のみ多かつた。七十年の生涯、其後半生を全く予一人のために竭されしに對して、予は何の報い奉る所もあるを得なかつた。アヽ老親逝いて恰も十年、今に猶悔恨の情に禁へぬ。

夫としても予は冷酷な夫であつた、新に婚した翌夜をさへ家に還らなかつたほど冷酷な夫であつた。予は竟に妻を愛し得なかつた、妻の承順に酬ゆる所は常に厲しき色あらき言葉、只此あるのみであつた。竟に愛し得ざる女を妻としたる予も不幸であつたが、竟に愛されざる男を夫としたる予が妻は更に不幸な女である。予は妻の不幸を解し其不幸を憫みながら、而かも竟に此を愛し得なかつたほど、予と妻との間には理智を絕した或る阻隔があつた。

予が妻を愛し得なかつたのは、必ずしも容色や才能の如何のためては無かつた。又予に別に愛する者あるが爲めても無かつた。戀人の相愛するは唯相愛するが故に相愛するといふの外なきが如く、予等の相愛し得ざりしも、唯相愛し得ざるが故に相愛し得なかつたといふ以外に何の理由も無い。相愛するも一種の神秘である、相愛する能はざるも一種の神秘である。性が合はなかつた、只、是より他に說明し得べき言葉は無い。

予は予の怒罵に對して悄然たる妻を見る每に、自分の冷酷を悔いた。悔いながらも、面のあたりに妻に對すれば其一擧一動が盡く予の感情を反撥する。予自からよりいへば予の厲しき色、荒き言葉の底には相鬪ふ二箇の心理があつた、併し妻の眼には只偏へに其冷酷なる一面のみが觀取せられたらうと想ふ。

妻が或人に、予の事を外ては笑ふ樣な事があるかと訊ねたと傳へ聞いた時ほど、妻の身を氣の毒だと想つたことは無い。

併し家に在つての予の峻嚴は、必ずしも妻を愛してゐなかつたからのみはて無い。予には一面に其行ひの

甚だ不検束なる者あるに似ず、又一面極めて嚴厲な苟くも言笑しないといふ風があつた。嘗て水戸に赴いた初め、給仕に出る宿屋の女中が、今日は笑つたといつて、珍らしがつて下て噂してゐるのを聞いた事もあつた。予が此の嚴厲な一面は、殊に多く獨居する時、家居する時に現れた、予は外に出ては極めて臆病であるが、内に居ては極めて專横で、他人に對しては寧ろ服從的て、家人に對しては常に虐主である。

(2) **肉慾の露呈は恥辱である**

此くの如き妻に對しての精神的の虐待よりも、恐らく更に妻をして予の冷酷を感ぜしめた者は、予が肉體上に於ける夫婦としての約束を殆ど全く無視した事てあらう。

予は此事が妻たる者に對しての最も大なる苦痛てあることを知らぬては無い。併し予は肉體を以てする夫妻の關係を、恥づべき事汚れたる事の如く感ずるを禁じ得なかつた、予は肉體を以てする夫妻の關係を、夫としての妻に對する威を毀損ずる者の如く感じた。戀人として男女は平等である、相抱擁するに恥は無い、夫妻として男女の關係は神聖である、肉慾の要求の露呈は男子として恥辱である、予は此くの如く信じてゐた。予は晝は怒厲を以て對する妻に、夜のみ和顔を以て對するに忍びなかつた。

固より此くの如き感情は、予が、吾が妻に對する愛情の缺乏が原因てあつたかも知れぬ。併し予の性情の矛盾は此にもある、予は一面耽樂の放蕩兒てあると共に、一面禁欲の枯禪生活を主義としてゐた。予は予の哲學として、人間最高の道徳は平等相愛にありて、平等相愛は即ち我慾の泯絶に在りと信じてゐる。意慾の發現は即ち自我の意識て、自我の意識を泯絶するは即ち平等絶對の大我に渾一する所以てある。故に意慾の泯絶は人間向上の最も苦しき努力てあると共に、又唯人間のみ獨り爲し得る最も貴い犧牲てある、之れ有り得るが故に人は貴い人は美はしい、人間の人間たる所以の價値は唯此に存する。禁欲は人間のみ有し得る特權てある。此の見地よりして予は肉慾に服從すること

を人間の耻辱と考へてゐる。予は此耻辱を、對等としての予が妻の前に暴露するに忍びなかつたのである。

(3) 酬いられざる犧牲

妻は何物をも酬ゐられずに、予に對して多大の犧牲を拂つた。其嫁裝を一空して予が窮乏をも補うた、併し予は妻のために半襟一かけすら買つてやるほどの溫味をも有し無かつた。妻は妻としての責を竭くしつつも、妻として待たれなかつた。併し妻は敢て離別をも求めずに七年を予の妻として予に事へた。予も亦單に相愛する能はずとの理を以てして之を離別するに忍びなかつた。

寧ろ早く之を離別することが却て妻のために幸福であるかとも考へゐてはなかつた。併し一面には當時の予の行が放逸であつた爲めに、他の女に溺れて妻を捨つるを敢てしたりといふが如き非難を憚りたると、嚴格な妻の兄が「去られた女」は生きては門へ入れぬといつた事を傳へ聞いて、妄りに離別するに忍びなかつたのである。

離別すべきか、離別す可らざるか、予は惑うた、幾度か離別の意を決し、又幾度か其意を翻へした。妻も亦幾度か離別を求むるの意あつて陰忍してゐたのであらうかとも想ふ。

予が後年再び支那に往いた一年間の留守は、想ふに妻の最も心安かつた時であらうとおもふ、此の僅に一年間の安樂を以て直ちに過去六年間の苦痛を償ひ得たものとは考へ無いが、幾分なりとも其犧牲に報い得たを機會として、更に愛情なき同棲を續くるの苦痛を斷つの手段を執つた。

予は終に處女の戀なる者を識らず、又家庭の愛なる者を解することが出來ずに了つた。汚れた戀、すさんだ愛に多情多恨の身を誤つて、今は空しく形影相弔ふ煢然たる獨身を、足廢して起つ能はざる病床に橫たへて徒らに過去の悔恨に耽るを、自ら憐むのみてある。

(拾六) 獄に下る

(1) 人を攻擊したのでは無い

た文句がありとするも、夫を耳の上に聞き分け得るのは、多少の敎育ある者と雖ども容易で無い。況んや犯罪者として立つ多數の無敎育者をや。又敎育ある者は讀みきかされた以外に自分之を讀むことが出來る、併し無學な書記によつて綴られた其文章は粗笨拙劣である、元來文章體の文句は寫實的で無い、且つ凡手に成つたものは委曲をつすくことが難い、從つて其文章の文句の解釋によつては被告者の利ともなり不利ともなり得る樣な漠然たる用語が尠くない。斯る際に被告者は唯自己の利益の方に解釋して漫然と讀過し、之に調印するを免れない。故に其の何れよりするも速記によらざる豫審調書は極めて不完全なる者といはねばならぬ。

予自らの經驗によるも、豫審廷に於て自己の口供と左したる相違なしとして漫然拇印したる調書が後日公判の際に之を精讀して、改刪せられたのでは無いかと想つたほど、自己の意思と反した文句が多いに驚いた。

該記事が愈よ告發せられたことを知つて憤激は益々其度を加へ攻撃の筆鋒は愈よ激烈となつた。

是に於てか予の筆を縛する一種の手段としてであつたらう、予を拘引して未決監に下した。

時は恰かも四月三日の神武天皇祭の當日であつた。

(3) 兒童の喚きにも娑婆が戀しい

『獄に下る』、此語より連想する所は暗黑と苦痛と唯此てある。併し予は寧ろ此によつて予が經驗に新らしき目錄を加へ得ることを喜んだ。

未決監は唯身體の自由を拘束されたといふまでて、食物も衣服も自己の便に任せられてあるから、物質的には左程苦しい處では無い、但未決囚には刑期がない、其在獄期は無期限である。幸にして明日にも放免せらるることがあるとも知れぬ代り一年經つても其儘に捨置かれても詮方がない。其上判決の結果が果して有罪となるか、無罪となるか、有罪とならば幾何の刑を科せらるゝ歟、夫等も都て未定である。未決囚は疑懼の闇に漂ふ者て、心は常に不安の狀態にある、從つて精

神的に苦痛が多い。此は其後に至つて感じた事であるが、此に比すれば既決囚は勞役もあり、被服食物にも規定があり、物質的には苦痛であるが、一日々々と其日さへ明けて暮るれば刑期は減じて出獄の時が近づく、精神的には前途があり光明がある。

此點から觀て被告人を未決監に長く拘禁し置くことは殘酷である。往々其例を見る樣な、裁判の澁滯のために未決監へ擲りッ放して一回の審問だもなく數ヶ月も打捨て置くなどは人道上の問題であると信ずる。予は上級裁判の複審制度がある以上、第一審に陪席判事を置くことは、單に形式の修飾に過ぎぬ無用の長物だとおもふ、現に公判廷で陪席判事は坐睡を貪つてゐる場合が多い、此れならば備附けの人形でも用は足りる。一裁判毎に三人の判事が無益に顏を並べるよりも、三人を一人宛別々に事に當らしむれば、三倍の敏活さを加ふる譯である、左すれば今日の如き裁判の澁滯が減じ、未決に一年餘も在監するが如き昭代にあるまじき不祥事が除かれ得はせぬかとおもふ。

或は陪席制度は事を決するに公平ならしむる所以であるといふかも知れぬ、併し多數の説が果して正しく小數の説が果して非であるか、是も固より疑問である、よしんば多數は即ち正しとするも、三人に於ける多數決なるものは終に一人の意見によりて左右せらるゝ者ては無いか。然らば詮ずる所、陪席制も其結果は陪席制ならぬ者と同一であることに歸着するに過ぎぬ。之を被告人よりいはしむるも、陪席制の裁判を受ける爲めに在監を遷延せしめらるゝよりも、たとひ不法に有罪の宣告を受くる恐ありとも一日も早く罪の決定を見た方を喜ぶに違いない。獨り此事のみならず一體日本の法律制度にはすべて正方形流の外形の整備をのみ尙んで實際の活用に疎い弊が多いとおもふ。

陰暗い監房の裡に獨座してゐると坐ろに人が戀しい、面會は固より嬉しい、手紙も待たるゝ、差入れの辨當に記した人々の名を見るさへ懷かしい。夕飯を外に群れて遊ぶ兒童の喚きの聞ゆるにも沁々と自由な世界が戀しい情が起る。一日に一回の運動の折に看る庭

岡山へ來た翌年は、恰も小學校教科書の改正の期に當つてゐた、而るに縣ては突然之を延期した。元來教科書に關する書肆の醜運動は殆ど公然の秘密てあつた予は今度の延期にも必ず何等かの情實が潜んてゐはせぬかを疑つた、仍つて密かに探訪を此方面に進めしめた。

多少の事實を探り得て新聞に掲載し始めた時、予は一封の投書を受取つた。其中には知事及視學官等の收賄の事實が記してあつた。今からおもへば多少輕卒の嫌はあつたかも知れぬが、予は此投書の筆者を縣の學事當局の此等の內情に通じた人てあると考へて其事實を信じた。或は此投書が延期に反對する一派の爲めにする所あつてしたものてあつたかも知れぬ。併し收賄との事實の必ず有り得べき事を豫想して居た予は、聊かの遲疑もなく此を信じた。

但固より此を確める爲めに探訪の手を盡くすには盡くしたが、此かる事は暗中に行はれたまゝて踪をのこさぬ者て、確證を握る事は出來なかつた。併し當時の予は此によつて其事實を疑ふほど、深慮てなかつた。沸き易き血は唯一圖に其官威を利用して書肆と結托し私利を貪ぼる汚行に憤慨して、直ちに攻撃の筆を此に向けた。

予は固より此等の人々に何等の恩怨も無い。予が此等の人々を攻撃するに就きては何の私もない、予は唯此等の人々の罪を憎んて之を責めたに過ぎぬ。

予は其人自からを標的として之を攻めたのては無い予は其人が行ふた不義を攻めたのだ。其人には聊か迷惑てあつたかも知れぬ、併し其人の誰たるかを予は顧みるに遑が無かつた、將た又其人が實際に罪ありや否やを顧みるに遑がなかつた。唯只管に官威を弄して行はるゝ不義不正を聞いて寬假するを得なかつたのてある。

憤慨の餘りに筆端が或は詭激に過ぎたかも知れぬ、其攻撃は連日に亙つた、いよ〳〵其高潮に達した時、予は徹宵して一面全紙を埋める原稿を獨りて草したほどに情が激してゐたから、攻撃せらるゝ當人には惡辣

な毒筆ともおもはれたらう。

(2) 予はあまり率直であつた

一日突然編輯局へ豫審判事と檢事が來た、家宅搜索の爲めてあつた。予が自筆の該記事の豫告の草稿の片紙の外には押收さるべき何物も無かつた。予は自ら責任を負ふて彼等の訊問に對した、斯る事に慣れざる予は率直に事實の經過を答へた。予は裁判官が一方該記事を官吏侮辱罪を成立すべきものとして起訴すると共に一方又非違の汚行ある官吏に對しても當然檢擧を進むべき筈の公平なる者と信じてゐた。故に予は我社に於て蒐集し得ただけの材料を擧げて此に提供したのであつた。併し此は寧ろ予自からを官吏侮辱の犯罪者として白狀する結果を來たすに過ぎなかつた。

此日予が留守宅も亦搜索せられた、予は檢事に同行を求められ、檢事の取調後豫審廷て豫審判事の訊問を受けた。

予は此時豫審調書なるものの製作せらるゝことの極めて杜選なるに驚いた。無學な書記は判事が問ひ予が答ふる間に其問答の意義を理解して誤りなく之を文章に書下すべき技倆を有して居らぬ、彼は遲れ勝ちに終に筆を運んでゐるのみて、吾等の問答を聽取るだけの餘裕も無い、從つて其書下す所は豫審判事の口授てある。豫審判事は其被告者に對しては既に犯罪者たりとの成心(プレジュディース)を有してゐる、如何に公平を努めても無意識に此事あるは免る可からざる所てある。然れば被告者の答を聽くに於ても多少の曲解(固より被告者に不利益なる)あるは人間として已むを得ない所であるといはねばならぬ、而して其曲解せられた被告者の答が口移しに書記の筆に上るのてある。此くの如くにして出來上つた豫審調書が精確と忠實を缺くは當然てある、而して此の豫審調書が公判廷に於ける最も有力なる證據てあることを想へば、吾人は今の裁判なる者の公正に對して懷疑者たらざるを得ぬのてある。

固より豫審調書は讀み聽かした上調印せしむるのであるから、夫んな恐は無いといふかも知れぬ、併しヌラ〳〵と讀みきかされて、其文中に自己の意思と違つ

に咲いた花の色も吾をそゝつて徒らに物を思はしめるかつた。

(4) 密封せられた護送馬車

襟には番號を識した白い片が縫ひ附けられてある、予はユーゴーの所謂番號の人である。被る編笠も伊達てない。僅に身を容れるだけに仕切られた窮屈な檻車に密封した貨物の様に乘せられて、裁判所へ護送される、隙間からチラ／＼と映る街の狀が一種の幻視であらう、何だか支那の街を通つてゐると想はれてならなかつた。

開廷の時刻が來る迄、假小屋のやうな板屋の中で待たされた。區劃の板に爪で種々の文字を書いた痕がある、無罪とか放免とかいふ風の言葉が最も多かつた。彼等が繋げた其望みの裏には寃枉の恨みもあらう、悔悛の嘆きもあらう。此の僞りなき希求に、人間の本心の優しみが窺はれる樣に想はれた。

第一回の公判は彼の投書の起草者と目指すべき人を證人として召喚する事を許されて閉廷した。

第二回の公判が開かれた時は、其人も亦予と同じく編笠姿で官吏侮辱罪の未決囚人として法廷に立つてゐた。

若し邪推すれば、之を檢事局の惡辣手段と解されぬでも無い、若し此人を尋常の證人として法廷に立たしめば予に利益なる證言を爲して事件の波瀾を大にする恐がないとも限らぬ、而して之を共犯の被告とすれば自己の罪となるを恐るゝ限り、口を噤んで何事をも語らざるべき筈である。縣の大官から繩附きを出だすやうな縣治上の恐慌を萬一に防ぐためには、檢事局の斯の如き手段も當然であつたらうが、予等としては多少の疑惑を其間に挾まざるを得なかつた。

第一回の際の裁判長は訊問振も要領を得た人であると思つたが、果して此人は直ちに大阪の控訴院に轉じ、久しからずして朝鮮の控訴院長に昇任したことを聞いた。

第二回からの裁判長は、あまりに若くて貫目に乏しかつた。予は其前に立ちながら、何となく女義太夫の尻を追廻はす神田あたりの法學生を想ひ浮べて、眞面

目に其問に答へるが如何にも馬鹿らしいやうな氣がした。

兎に角第一審では、證憑不十分を以て無罪の宣告を受けたが、檢事局から控訴せられて、大阪の控訴院で二ヶ月の重禁錮を宣告せられた。此有罪の宣告を受けたには、未決監に投ぜられた前後の事情を書いて出版した『下獄記』が有力な心證となつたらしい。

上告したが破棄せられて、其歳の十二月二十五日に入獄した。

(5) 世界を隔離する扉の響

鈍い灰色の雲が低れて、寒い雨のそぼふる日の夕方であつた、裁判所から車で、市の南の外れにある監獄へ送られた。下した幌の内は侘しく鬱陶しかつた。

愈よ身體の檢査が濟み、澁色の囚衣に着替させられて、同じ澁色の蒲團一枚と木枕を脇に抱へて監房に入つた時は、四邊はもう暗かつた。未決監の時もさうであつたが、其身を監房の中に入れると同時に、入口の扉を閉め切る重い響を背後に聞いた時ほど厭な心持のする事は無い。吾を世界と絶縁する響である。吾を人間より除籍する響である。吾の人格、吾の威嚴、吾の權利、吾の自由は、此の響と同時に一切が失はるゝのである。

監房は頑重な板で張詰めた棟の高い長方形の室である、窓は前後に小さなのが一つ宛あるが、固より手の屆き得ぬ限りの高い處にある。燈は五燭許りの小さな電燈が房の外に微かに點つてゐるが、數房を列ねた一構に、僅に二三個の少數で固より内には影もさゝぬ。同房者の無い獨房で、身一つを置くには森として周圍が廣い。荒菰のやうな莫蓙が唯一枚席いてある外には冷たさの素足に痛い板間である。坐ると死の國のやうに陰森の氣が人を襲ふて、寒さが骨の髓まで沁み徹る。

隣の房から壁をトン〳〵と叩く新入りの予に何かを訊かうとする合圖であつたらうが、面倒だから其儘に捨てて置いたら、軈て止めた。列びは皆未丁年囚の房であることは後に知つた。

予は暗い房の内に何を念ふともなく坐つてゐた所在なさに斯ゝる時にこそ坐禪の工夫をとおもつたが、足を組んだ許りて、頭の内は取とめもない妄想雜念が亂れ湧くのみてあつた。

レ、ミゼラブルのジャン、ヴァルジャンの連想からフト脱獄の場合を胸に浮べた、扉の厚さや窓の高さを目て度りなどして無用な工夫を凝らして見た。

其内に就寢の鐸がなつた。

一枚の蒲團にくるまつて海老のやうに跼んで寢た、木枕に頭が痛い、監獄の第一夜は寢覺がちに明けた。

(6) 日の光の貴さを知つた

夜は八時に寢て朝は五時に起こされる、冬の五時は未だ暗い。赤錆のついた鐵管を通ずる前夜から汲置きの洗面の水は、赤く濁つた上に掬ぶ掌の骨が痛む許り冷たい。型ばかりの盥嗽が濟むと、掃除をする這ひつくばつて板間の雜巾がけもせねばならぬ。軈て點檢がある、禮といふ號令の下に、畏こまつて自分の番號に答へねばならぬ。山形に抑ぬいた四分六の朝飯が配られる。水ッぽい味噌汁は固より冷きつてゐる。食後の息をつく間もなく就業の鐸が鳴る、悴けて伸びぬ指に息を吹かけながら絹糸紡績の綿屑から糸を撰り出す作業にかゝる、十一時に晝飯、菜には澤庵の幾片が附いてゐる計り、午後に一回運動を許される、編笠を被つて尻切れ草履を引摺つて房外の小庭を歩行く、此間の三十分が清氣と日光とに觸れる唯一の機會である、三時半に終業、四時に晩飯、菜は野菜の煮たの、一週に一度位魚や肉が申譯につく、晩食後の正座、安座一々番木や鐸で命令せられて、闇中の沈默に戰へることと三時間許て、就寢の時間となる。是が予等四人一日の日課てある。

何事も規律づくめの苦しいといへば苦しいが、慣るれば左程の事ても無い。下女下男の役目とのみ考へてゐた朝々の雜巾がけも運動の一つと諦むれば、働くに目的が出來る。馬鹿げたやうな作業も之を已れの職分と安ずれば、爲すに勵みがある。食物は固より粗糲てあるが、粗糲なだけ夫だけ多く空腹を感ずる、空腹の

前には滋味ならぬ物は無い、墜ちこぼれた飯粒一顆をも拾うて口にするほど食慾が旺んであるから、食の粗糲は敢て苦痛にはならぬ。又實際監獄の麥飯は左程不味いものでは無い、一度に石を以て量つて多く炊く爲めと、一方に副食物に其の味を奪はれぬ爲めもあらうが、確に養生に食ふ挽割麥などと其味に懸絶がある。

其上獄中に居れば世事の繋累から全く脱却し得る、但此は其人の境遇によつて妻子眷族に關する後顧が有れば知らず。單に其人一己の上よりいへば、獄中では第一衣食住の憂が無い、毀譽褒貶に關する懸念も要らねば、世法俗禮に齷齪する煩ひも無い、盆もなく大晦日もなく、借金取りも來ない治外法權の樂地である。其境に安じて了へば牢獄は決して地獄では無い。

但予の最も苦しんだのは寒さであつた。ガランとして廣い房に一點の火の氣もない、日は固より射さぬ。着るものは綿は較々厚いが綿入一枚に襦袢である、晝は一枚の茣蓙の上に坐し、夜は一枚の蒲團にくるまるのみである。夫で酷寒中の十二月末から二月下旬迄を過さねばならぬのであつた。

元來羸弱な予の健康が、果してよく此に堪へ得るや否やを自ら疑うた、堪へ得ざるも堪へねばならぬ、予は六十日間を寒さと奮闘する決心を定めた。張詰めたら弦のやうに精神を緊張して寸時も弛めぬやうに努めた、坐するには下腹に息を凝すことを忘れなかつた。看守が監視の隙さへあれば手を振り足踏みをして血行を促すことを圖つた。

又消化の機能を助ける手段としては自分の手で脊の臍部に當る邊を強く摩擦した、是がために着物の其部分は一ヶ月目頃にはボロ／＼に破れて了つた。

作業の材料として與へられた綿屑を袋のまゝに坐蒲團代りに腰に敷いて、茣蓙を透す板間の冷さを防いだが、夫でも腰部から下肢へかけ殆ど感覺を失ふほど冷へきつて、胴震ひに齒の根の合はぬことは毎日であつた。出獄の時に、袋の底へ底へと殘つて板のやうに壓しかためられた綿屑の始末に窮して、少し宛もぎ取つては便所へ捨てた。

幾ら息を吹きかけても龜けた手が伸びず、どうしても作業にかゝれぬ朝も多かつた。寒さが身に凍りついたやうに一日中戰へがやまぬ。待たるゝは運動の時間である、晴れきつた日の光を浴びると、全身が融けてゆるむ心地がする夫と散髮の時々に、顏をしめす湯の暖みが冷きつた水に荒れた皮膚に何ともいへず快さを感じた。

晝よりも夜は更に苦しかつた、柏餅の丸寢に足を踢め手を縮めて、蒲團の端を押へながら漸く身體が暖まつて睡に落ちたと思ふと、押へた手が弛んで蒲團が開く、寒さが總身に沁みては眼が覺める。一晩中に幾度か之を繰返して熟睡する遑が無い。手足の出ぬやうに硬くなつて寢るので出獄後暫くは身體中の節々が痛かつた。出獄後初めて家に寢た夜は夜具が暖に過ぎて却つて眠られなかつた。

(7) 霜夜に麥飯腹は減り易い

人間は其生存の營養のための食慾が滿足し得られぬ時、其以外の慾望に及ぶ遑が無い。濃厚なる食物を採れば、動き刺激を求めて酒を欲し、煙草を欲し、女を欲する而かも粗糲の食に飽く能はざる時には、食慾のみ獨り徒らに旺となつて、其他の生存に直接ならざる嗜慾は殆ど意識の外に置かれる。

獄中二ヶ月間に予は煙草の一服をも、酒の一杯をも想出した事は無かつた、又生殖慾の衝動を感じる樣な事も無かつた、其代り食慾のみが殆ど一身を支配してゐた、寒氣に對する自然の必要でもあつたらう、偏へに脂肪の多い食物が欲しかつた。薩摩汁にあこがれた、鯛の鹽燒を夢にも見た、さもしい至りだが食物の夢を毎夜のやうに見た。

霜夜の麥飯腹は減り易い。一寢入りしたと想ふと、襟元に沁み入る寒さに覺めて、夜も稍々更けたらしい、四邊が森と靜まつて、河の彼方の遊廓のであらう、遠音の太鼓が寒空に冱へて響く。時には前の流を溯ぼる曳船の聲が、靜まりきつた空氣を顫はせて、腸に滲み入る樣に絶えては續く。飢えと寒さに、一たび覺めた目が容易くは睡を就さぬ。斯る時何よりも一杯の暖か

き饂飩を想ふ。

(8) 西の空に圓い月が大きかつた

二月十一日の紀元節には雪が降つた。其朝、朝飯前に教誨師の說教聽聞に引出されて風邪(かぜ)をひいた外には幸ひに藥一服をも喫(の)まずに二ヶ月の刑を期了(をは)つた。

壁板に爪で、過ぎゆく其日々々の數を記して、刑期の半ばに達した時も嬉しかつたが、愈よ出獄の前夜は流石に胸が躍つて睡られなかつた。自由!!! 束縛よりの釋放!!! 此の欲求は人間否寧ろ凡ての生物に本能的である、生命は活動を意味する、活動は自由を意味する、自由なき生命は空虛である、凡ての生物は生命を欲求すると同時に自由を欲求する、獄中の拘束から解放せらるゝ時、感ずる喜悦は是がためであらう。

刑期は二月二十二日の夜半に盡きた、最早罪人でも囚人でも無い、二千二百二十二號を以て喚ばるゝ無人格の者でもない、看守輩の叱責の前に頭を下げねばならぬ昨日までの吾では無い、其夜半に眼覺めた時予は昂然として遽に其身の大なるを感じた。

二十三日の早晨に監房を出た時は夜が未だ曉け切つてゐなかつた、熱した頰にあたる風も冷々と却て快かつた、フト見ると西の空に今落ちかゝる稍黃味がゝつた赤い圓(まる)い月が軒と軒との間に一杯に大きかつた。

監獄の門を出て第一に聞いた世事は、日英同盟の締結であつた、八甲田山の雪中行軍隊の凍死は獄中で教誨師から既に聞いてゐた。

確か此の同じ歲であつた、所謂教科書事件の大檢擧が海嘯のやうに全國の教育界を恐慌せしめた。此頃吾は獄中で損うた健康のために、病院に通うてゐた。

太陽活動と人生

理學博士 一戸直藏

日君之象也、君行急則日行疾、君行緩則日行遲、是以觀乎天文、以察乎時變と支那人が渇破したのは昔の事。今日は讀んで字の通りてあるかはチト疑問てはあるが、若し之を改めて、君日之象也、日行急則君行疾、日行緩則君行遲、是以觀乎天文、以察乎時變としたならば一種の趣味がある樣に思はれる。占星術は過去のもので、現今に於ては學者に信ぜられない。さりながら占星術的思想は現今ても尙矢張り一般の社會を動かして居る樣に思はれる。

一體人類は六合の間唯我獨尊てふ無意識的知覺に基いて、萬事を處理して居る。從て宇宙萬物を自己の爲めに作られたが如く信じ、其間に起る現象は何れも人類の爲めに生じたと解釋する念が强い。是れ自ら起る思想には相違ないが、何時までも同一形式て人心を司配し得るかは疑問てある。天動說を奉じた過去の人には此思想の下に地動說を斥けた。長き世紀を經て漸く一般の人々の信仰を買ふた地動說は更に人間中心論を生ぜずには止まない、かくて現今に於ても宇宙の廣大無邊の所に無數の天體があるが、靈智を有する人類の如き動物の存在する天體が地球しかないとの議論をする人がある。されど一方には人心に此の如き自己中心思想を信じない一種の流れがある。利己主義を主張する人々があるかと思へば他方には他愛を主張する人々もある樣に、宇宙間の萬象を宇宙其者を一團として考ふる思想がある。

宇宙は廣し、星辰は無數なり。其間に介在する地球、更に其上に存在する萬物の一小部分たる人類が、六合の唯一の目的てあるか。人類の發達のみが宇宙の目的

て、其他のものが人類の爲めに作られて居るか。其疑問に明瞭に答ふることが出來ないにしても、宇宙其ものを一大活物視して宇宙の開展てふことを主とし、其間にある森羅萬象は夫れ自身が目的てなく、個々の合併した一團體の開展の爲めに有意義のものであると假定しても差支あるまい。而かも亦實際此思想が世に存在して居る。恰かも個人が個人としては價値がないが國家の一員として完全なる國家を形成するによりて價値があるものと考ふる樣に。

此の如き思想を以て太陽を見ると、如何なる結果を來すてあらうか。太陽の普く照らす光は人類の爲めのみてあらずして、其目的は一層廣大なものてあらねばならぬ。太陽對宇宙てふ大思想があり、宇宙の圓滿なる開展の爲めに太陽が活動をなすものと見ねばならぬ。人類の如きは太陽活動の一部分の現象に過ぎない、即ち人類社會の現象は太陽其者の活動に伴ふ一種の片影と見ることとを得るてあらう。

地球上の現象は、事實に於て太陽から送られたエネルギーの變形したものてある。されば我々人間が觀平天文、以察平時變的のことが出來る譯てある。併しながら現今の科學は未だ其域に達して居らない、是からが最も趣味ある時代てあると思はれる。但し此の如きは占星術とは言はれない、星を見て個人個人の運命を判斷し得るものかは余の知り得ざる所てある。

若し非常に微細な點をも殘らず、科學の力て檢出し得る時代が來り、且つ人間の幸福とか、活動どか云ふ樣な個人心理又は社會心理的現象を數學的に計算し得る時代になつたならば、過去の天文學者が信じ實際試みた如く、否な現今に於ても或人々が唱ふる樣に、五星即ち水、金、火、木、土の五惑星や日月の力から打算して個人の性質なり、運命なりを精確に知り得るかも知れぬ。併しながら、社會上の現象なり、心理學上の問題なりが、數多の原因によりて左右せられ、其原因がどれ丈作用して居るか、個々別々に數理的に區別し、又合算する方法なき限り、とても今日の所天文占が出來ぬてはなからうかと思はれる。されど、或個人の直

覺力は意外に發達して居る場合もありと考へらるゝ故、或人が之を成し得るかも知れぬ。只普通の判斷からすれば、今日は其時代でない樣に思はれる。

獨り太陽其ものが、地球に及ぼす作用に至りては、著しいものである。されば太陽に關する智識が充分になつたならば、地球上に於ける變動を時間的に豫知することが出來るであらう。現今世の中に太陽物理學者なる一群があり、四六時中、太陽の現象に留意し、一見甚だ複雜なる現象を簡單に說明し得可き法則を發見せんとして居る。彼等の研究方法は極めて科學的である、些少の曖昧な點をも許さぬ、而かも此人々は往時天の一方を望んで、人の運命を占ふた天文博士等の末孫である。嘗ては冥想に冥想を重ねて、之を天界の現象にあてはめた人々、世人に神の如く尊敬せられた博士等、其末孫の時代に世運一變して冥想なる武器は天文學者の手から放たれ、氷の如く冷き科學的研究の方法が彼等の心を占領した。既に物質的になるに從ふて、天文家は神の位から、次第に人界に下つた。今八界にある天文學者別して太陽物理學者の言ふ所によれば、太陽とは如何なるものであらうか。之を聞いたならば太陽活動の法則によりて、地球上の大時變を知り得るかも知れぬとの望もないではない。されど、玆に時變とは古人の稱したものとは異なるのは勿論である。

太陽は永い間觀測した結果、我地球から九千三百萬哩の遠方にあり、其直徑は地球の百九倍と非常に大きな球狀のもので、著しい熱や光を間斷なしに四方八方に放射して居る。而かも其重さを量つた所、割合から言へば地球よりも餘程輕いものから出來て居ることが知れた。即ち水の一倍半程の密度を有して居る。其表面を精細に調べた所によれば輝いた無數の粒狀のものが一面に分布せられ、所々に黑點が見えたり、粒狀の部分よりも一層大きく、輝いた白紋が見えたりして居る。而かも其表面の狀態は時々刻々段々と變化をする。黑點や白紋も生じては滅し、滅して更に他のものが現はれる。此等の點や紋からして、太陽が二十五日餘で自轉することも知られて居る、が太陽の表面は何處も

同じ速さで自轉しない。其赤道から兩極に至るに從ふて段々遲く廻轉する。吾々の常に見る太陽面は光球と稱せらるゝ部分であるが、其一寸上方に色球と稱せられて居る、日蝕の時などに非常に紅に見える薄い部分がある。此部分を貫いて天文學者の紅焔と稱する驚く可き大噴火が時々見受けられる。甚しきに至りては十萬哩以上に達する深紅な焔が太陽面上から噴出するのである。更に是等とは別な一種の輝いて居るものが太陽を包んで居る。是れは現今でも日蝕の時の外見ることが出來ない。是れは天文學者のコロナと稱するものであり、其全部の形狀は至つて不規則なもので時としては赤道の方向に二三百萬哩も延びて見える。此樣に一言に申せば至つて簡單なものゝ樣であるが、粒狀をなしたものゝ個々の運動と云ひ、黒點や白紋の分布と云ひ、又其時と共に變化する有樣と云ひ、決して單純なるものと言ふことが出來ない。

黒點を永らく研究した結果、是等の出現する場所には自ら一定した所があり、且つ又時と共に最も多く現はれる所も變化することが分つた。太陽面の赤道から其兩極に向ふて四十度に至る部分には黒點が見受けられるが、夫れから北又は南によつた所には至つて稀れに見受けられる。而かも十一年餘の間に最も頻繁に現はれたる地方が段々と變更する。割合に黒點の出ない年には赤道の南北二十五度乃至四十度までの間に現はれるが、段々と頻繁となるに從ふて十度乃至二十五度の邊が一番烈しい。其後赤道の邊までも可なり繁くなる。併し兎に角最も著しいのは五度乃至二十度の南北兩帶である。又今一寸述べた樣に十一年一ヶ月程を週期として黒點の占領する面積にも浮沈がある。即ち數十年間毎日〳〵太陽を觀測して、黒點の數及び其面積を調べて半々年毎の總計を取つて見ると、其數字が段々と變化し、極大があつてから段々と減少し、七年程經過すると極小になり、夫れから又增加し四年餘經過すれば再び極大に達する。其後同樣な週期的變化を繰返へして居ることが分る。更に尙永い間のことを注意して見ると、此十一年一ヶ月餘と言ふ週期は平均の價で、

其實多分長短があるのみならず。極大丈を吟味すると更に其價も一致して居らない。思ふに十一年餘の重なる週期の外に倘短い週期もあり、又長い週期もあるによつて其等の加はり合ふた結果があの樣に複雜な結果を示して居るものであらう。

何はともあれ、此十一年餘りと申す週期は太陽の活動の循環的浮沈を示すものであるらしい。若し此活動が非常に烈しいものであつたなら、吾人地球上の人類に大影響を及ぼすに相違ない。丁度吾等は一ヶ年に寒暖の變遷を經驗する樣に、十一年餘で吾等の運命の一變遷を見ることとであつたらう。而かも幸にして、太陽の活動は至つて旺盛にして、其週期的浮沈の如きも至つて少い。是れ人類と云はず、一般地球の活動に取つて大なる利益である。併しながら元々吾等の生存の源泉は太陽にあるのであれば、其本源に於ける變化は必ず地上に影響して居る。其れは弱いにしても地球全面に就いて言へば決して少いものと言はれない。人間の生命は可なり暑くとも又可なり寒くとも保存することが出來るけれど、依て以て生命を繼ぐ食物衣服を製する原料の產額は太陽の活動と共に增減することを期せねばならない。

若し太陽の活動が十一年餘で、今日まで知られて居る法則にのみ從ふて變化するものならば、未だ甚しく憂ふに足らないが、實際は前にも話した如く、數多の原因が重り合ふ場合があり得る。其樣な時には飢饉などを起さないとは限らない。太陽活動の研究は人生に必要なのは單に智識を博めんが爲めのみでない。恰かも氣象學の天氣豫報の如き關係がある。

吾等は黑點の活動から見出された週期をば、直ちに太陽活動の週期と稱したが、是れは其實黑點のみを司配するものでなく、白紋や紅焰や、コロナを始め太陽面の現象は皆十一年餘と云ふ週期的浮沈を繰返へして居ることが分つた、現今では充分決定しないが、太陽の大さまでも十一年餘で變化すると言はれて居る。即ち太陽の内部には一種の原因あつて、其活動が十一年餘で增減し、其結果、表面上にも之を認めることが出

來るのであらう。而かも太陽のみならず、地球而上の磁力や極光なども此十一年餘の週期を示して居る。

太陽週期十一年餘について充分述べた序に、余は余の常に疑ふて居る十二支の起源が、太陽週期と關係して居らないかを一言して置く。勿論十二支は太陽の運動と、月の運動とから、自然に起り來るもの丶樣であるが、年に十二支を配したのが、單に便宜からであるか、抑も古人が實際的に太陽活動の週期を認めて之を十二年としたのであるかは少しく考へて見る價値があるかも知れぬ。迷信と稱せらる丶支那人の思想から、其下にかくれて居る眞理を啓くのも面白いこと丶思ふ。

政友會の樞星、客星（下）

黑頭巾

其一

◉侯西園寺が、純會員を以て、內閣を組織する能はざるは、猶ほ彼の理想に遠きのみならず、政友會の遺憾とするところならずんばあらず。然れども、今の內閣が貴族院の一勢力を拔き來らざりしは、前度に比して、漸く地歩を占むるを見る。

◉前の政友會內閣が、子堀田、男千家を羅致したるは、其の破綻の第一因たりき。此の如き鵺的內閣は、固より自から強くする所以にあらず、また以て外敵に向つて振ふ所以にあらず。

◉對貴族院策は政友會の尤も苦心するところなる可し。其の策、種々あり、一にして足らず、而して、操縱、攪亂は、其の最下策たる也。

◉水と油とは、一器に盛る可らず、宜しく截然、相分れて色彩を發揮するを要す。政友會が貴族院を懷柔し、攪亂せんとするは、水と油と、混和せんとし、或は、相攪亂せんとするものにあらずや。

◉政友會は、須らく、純平たる政友內閣を作りて、內

に自ら固くし、以て貴族院に當るを要す。敢て、一指を貴族院に染めんとすることあらば、事の未だ成らざるに先だち、全院を反撥せしめ、随つて内閣の崩潰を招致せん。

◉政友會の貴族院に對するは、或は「熊蜂の巣窟」に向ふが如くならん。敢て、之に近よらざるを第一策とす。若し、手を下すに意あらば、絶大の猛力を揮つて、之を粉碎し、全滅せしむるの勇あるを要す。

◉從來、政友會の貴族院に臨むは、猫のチョッカイを試むるが如く、勇氣無く、壓力無く、一回は、一回に、反感を買ふに過ぎず。或は、怯々焉として、蜂の巣を突き試むるにも似て、群蜂の驀然、大擧して襲來するを促がすあるのみ。其の時、頭を抱へて遁逃するも、頭も、手も、脊も、瘡痍に膨れ上る。

◉政友會の、大勢力者を拉し得るの見込あらば、之に向つて、全力を盡して羅致するも可ならん。而して、今の貴族院には、一人の力能く、全院を壓する者あること無し。公德川を拉し來るも、固より攪亂の一部に過ぎず。

◉貴族院に野心ありと思はるゝことすらも、政友會に取りては、甚だしき不利益ならずんばあらず。今の内閣は、宜しく貴族院を放擲せざる可らず。吾輩は、想ふに、侯西園寺の賢明なる、策、必らず、此に出でん。

其二

◉侯西園寺にして、三たび、内閣を組織することあらば、宜しく會員を以て、純内閣を造り、堅固に、貴族院に對するを要す。

◉彼は須らく貴族院を向ふに廻はし、胸襟を披いて、其の援助を請ふを得策とせずんばあらず。

◉彼、貴族院に向つて、些の野心を起すこと無く、一指を染むること無く、全然、貴族院を別物とし、其の面目を重んじ、其の勢力を尊重し、共に、國務の進行を計るの態度に出でば、彼の內閣は、些の因縁を貴族院に有すること無しとも、貴族院は、必らずや、援助を與ふるに吝ならざる可きを信ず。

◉今の貴族院に在つて、尤も注意すべきは、唯だ「政黨を嫌ひ、政黨に致されざる」を期するの思想に在り。此の傾向は、政黨に向つて、貴族院の尊嚴となる。貴族院に一指を染めんとするは、此の尊嚴を傷くる所以ならずんばあらず。

◉侯西園寺は、貴族院より、閣員を求めんとせば、宜

しく子秋元を取るべし。其の理由は、唯だ政友會員たるが故なることを明らかにすべし。

◉子秋元は、多年、貴族院の一角に、政友會の正朔を奉ず。彼は、思想系統、侯西園寺と共に、尤も公伊藤に近し。其の政論、閲歴、政友會内閣の大臣として恥かしからず。

◉子秋元は、談話會の首領也。談話會の、勢焔を揚げ天下、子の風采を想望すること、去春の如くならしめば、彼は、新内閣の一の花形役者たりしならん。

◉彼の多病なるは、談話會の運命に關すること少しとせず。然れども、彼をして、體力あり、元氣あらしむるも、今の貴族院に政友會を扶植するは難し。唯だ、孤壘を守りて、久しきに堪えしめば、則ち明治の政黨史又。興味多き一事項を留與するを得可きのみ。

◉政治家は、功名心に富むを要す。彼の多病なるを以てして、談話會を創立するは、彼の理想の在るところを見るべし。彼は、大臣たらざるも、談話會は以て彼を傳ふるに足る。

◉彼の談話會を創立するや、公伊藤も、侯西園寺も、原敬も皆、之に賛成す。今にして、彼等が大に、肩を入れざるは、其の成行に徵して、唯だ、貴族院に於ける政黨思想の、自然の發育を待つものならん。

◉能く客に接する者は、公桂也。能く客を謝する者は、侯西園寺也。此の二人者の人物、唯た此の一事にも對照せらる。

其三

◉吾輩、嘗て公桂に問ふ。日本の大臣、歐洲の大臣に比して、何等か逕庭ありや。彼答ふ。日本の大臣は、接客の煩、大に歐洲に過ぎ、隨つて靜思の餘暇を减却す。

◉蓋し、彼が、特に煩とするは、新聞記者の訪問にあらず、獵官者の要求にもあらず、恐らくは、實業家の請謁ならずんばあらず。

◉彼輩は、淡泊の會見を以て、圓滿に事務を進捗せしむること難し。會見の度數は、必らず多し。其の請謁を聽かざれば、所謂、意思の疏通を缺く。意思疏通せざれば、國務に便ならず。接客は面倒也。面倒を面倒とするは、彼の、苦痛とする所也。

◉能く勤むる者は公桂也。能く勤めざる者は侯西園寺也。今の實業家に、人氣の有と無とは、此の一點を以てトするを得可し。

◉賞揚以て阿諛に答へ、威を以て抑へ、恩を以て揚げ

酒池肉林の間に、缺陷を掩護しつゝ地歩を占む。公桂の如く、能く忍び、能く勤むる者に非ずんば、此の煩さく、馬鹿らしき間にも、斡旋するに堪えず。侯西園寺の企及するを得ざる所也。

●然りと雖も、接客の煩は、日本の大臣も亦た自から招くところ無きに非ず。面會日の確守されざる事、周公の吐哺握髮を美事とする事等也。

◉吾輩、嘗て、王安石の文集を讀む。州學記の中に、周公の吐哺握髮を論ずるの一節あり、其の大要にいふ。若し周公にして、吐哺握髮を以て宰相の能事とせば、彼は聖人にあらず。愚物也。彼、晝夜兼行するも、到底、天下の士を引見するに堪えず、何んぞ、天下に普ねく、學を起して、廣く、英才を教育せざると。

●吾輩は、昔の支那人にして、能く、此の言を爲し得るを以て、王安石を多とす。侯西園寺の接客、謝客、能く其の要を得ば、一東洋政治家、吐哺髮握の空想を破るに足らん。

●彼は、宜しく、接客の煩を避けて、多く靜思の時間を造ることを要す。而して、一面には、巧みに、面會日を利用して、廣く、各方面の人物を引見し、以て、新見を養ふと共に、各方面に向つて、意思の疏通を計らん事を要す。

其　四

●新内閣の堤防は例に依つて文部ならん。内閣の崩潰は、屢、文部よる起る。たとへ、崩潰せざるまでも、内閣の潜勢力は、つねに、此の堤防の維持に費消さる、蓋し、代々の、攻撃の波は、つねに、此の堤防の外に押寄せつゝ、内閣の其の防禦に苦しむは、恰も治水工事に疲るゝが如きなり。

◉政黨の文相たるは、或意味に於て、頗る異彩を放つ。恐らくは好結果を舉げ得るならん。

●新文相が衆議院の議長たりしは、彼が、人氣ある所以、彼巧みに、這般の呼吸を利用せば、彼は、過去の文相に一頭地を拔きて、一種異樣の成功を占むるならん。

●政友會内閣は、兎も角も、長壽ならずとせば、彼、巧みに、新舞台を經過せば、彼は、將來に、安全なる大臣株を得ん。

◉彼の閲歷を以てすれば、征韓論の殘黨にして、西南軍の一士官たり。獄中に「綱手繩かゝるうきめもうらなみの砕く此の身は、たゞ國の爲め」或は寄船述懐に「荒らき瀨の、水は濁りて流るとも、心の操立てゝ渡ら

む」と歌ひ、出獄の後も、民權論を鼓吹して藩閥に對抗し、遂に今日あるを致す。

●彼の正義、民權の旗色は、今日に於ては、鮮明ならず、少くとも褪色せるなり。

●彼の名は、純を標榜す。而して、世人より何となく、彼の名を聞き、單純、單調を聯想せらる。實は、彼は、思ひの外に、純ならず、單調ならず。

●彼が、閲歷は、城山憤勇の死士たりしに似ず、巧みに、地步を議會に占め、郡長に出身して、議會ばかりに、大臣となる。當年、彼をして、續きて、官途に在らしめば、擊拆抱關と相去る遠からず。議會が、大臣の登龍門たる事を、尤も能く證明せる者は、今日までには、彼也。而して彼が登龍門を經過せし態度は、甚だ圓轉滑脫也。

其五

●致堂が大西鄉の門下たりしは、井伊大老を排斥し、櫻田會の會長となりし所以。而して、彼、衆議院に議長たらずんば、此の會に擔がれず、彼が、半面の勤王志士系に屬する所以のもの、世に知られず。

●彼は議長の椅子を確かりと抑へて、大臣を得、それと共に、彼の人物、趣味の複雜なる所以も暴露す。

●勤王志士系たる事は、彼をして、維新諸先輩に接近して、肝膽を開かしむ。而して、其の漢學に本づく愛國說は、容易に、德富蘇峯の國家說に乘ぜらるゝを致す。

●野球の演說會に、博士雪嶺は、致堂を引きて、巧みに、文相と無學とを對照し、反映せしめ、揶揄の妙を極む。彼の無學なるは、文相たるを妨げず、無學といふと雖も、小西鄉の自から文盲大臣と標榜するほどにはあらず。

●致堂は、巧みに群衆心理の機微を捕捉し得たり。這般の自得は、彼が郡長の經歷より來る。

●郡長は、民政の樞機也。民衆を理解する、これ以上の、好位置あること無し。若し、郡長學を卒業せば、代議士たるべく、其の優秀なるものは大臣たるを得ん、

●白上佑一といふ官人あり、才子也。弱冠にして巡査となり、十年ならずして郡長となる。彼は、此の割合を以てすれば、四十餘にして大臣たるべしと言へりと聞く。

●彼は、今勅任官たらん、未だ大臣たるには遠し。此の才を蘊蓄し、長く、郡長に留りて德を積まば、代議士たりしなる可く、或は、より早く大臣に近づきしな

らん。然れども、其の大臣の器たると否とは、又た自から別問題に屬す。

●郡長ほど、さま〴〵の人物多きは無し。郡長に、修養して、見事に、男を上ぐる者、人格を知らるゝ者も珍らしからず。其等の野心家は、致堂に鑑みて、意を強くするならん。

●優良なる郡長が、代議士となる事は、吾輩、議會の爲に、地方自治の爲に、幸慶事の一とせずんばあらず。

其六

●元田の拓殖と、長谷場の文部とを、交換せしめば、互に適任なる可く思はれざるにもあらず、然かも、寧ろ、交換せざるに若かざるべし。

●世情、世味を嘗め、硬と、軟とを使ひ分け、一たび戰袍を著け、一たび囚衣を纏ひ、郡長に採まれ、議會に採まれ、圭角を沒し、如才を沒し、蠻骨を包むに滑脱の皮を以てするは、致堂の、元田の正直にして利巧なる、而して割合に、一本調子なるに勝されり。

●文部はつねに大學に牽制さる。元田ならしめば、又た其の轍を履まん。彼が、教育上の事項を領解し得るだけ、それだけ不利も、また伴ふべし。

●教育界は、古來、御し易くして、難く、難きようにして易きようにもあり。人物の眼界狹ければなるべし。されば、同臭味の人を以てするよりも、時に、門外の人氣者を拉し來りて、大臣たらしむるの、却て妙味あることもあり。

●將來の文部大臣にして成功せん者は、博學宏才、能く、部下の專門家と太刀打して勝ち得可き教育家か、然らずんば、非常の大壓力を内外に加へ得る有數の人格かの二途に出でず。而して元田も長谷場も、此の中には入らざるべし。

●若し、其の性行を以てすれば、元田の如きは、文部大臣として耻かしからず、或は、稀なる篤行者ならん。

●元田は、一面に趣味の人たり、洒脱たり、風流を解す。然れども、其の風流を好むは彼の人格に影響せず。

●彼は、連夜の遊を貪ることあるが、未明に到るも、必らず家門に向つて歸る。上ならば初より近かず、彼は中なるべし。然れども、近代の名士、風流を解せざる者、極めて稀なる可ければ、或は、彼は、上に入るやも知れず。

●聞く、彼は、其の養父に事へて、至誠、懇篤到らざる無し。彼をして貧家に生れしめば、孝子として官報

に揭載さる可かりしならん。純孝の名は、寧ろ、彼に屬す可き也。

●彼の養父に對する、先づ、藥味を嘗め、其の脊腰を撫てさすり、其の老ゐて行歩不自由なるに及びては、自ら之を脊負ひて行く。彼は、其の爲に、少しも家人を煩さず、必らず、自から養父を慰さめ、勞はり、色養嘗て缺くることあらず。此の如くにして、養父の天年を終らしむ。

●元田は恰悧なれども、善良の人物也。篤行、彼の如きは、現代稀に見る。彼が、今日の位置は、其の手腕にあらず、寧ろ天の、彼の純孝に酬ふる所以ならずんばあらず。

●彼は、後進を愛し、部下を愛す。彼の器局は、小なるも、尙ほ、其の愛情は、部下を安んずるに足る。然れども、彼の風貌は薄弱に、彼の氣燄は揚らず、此の點に於ては、彼は一著を致堂に輸す。

●今の文部大臣は、文敎の方針を定むるものに非ず。敎育界を統制するは其の任務也。此の意味に於て、人ずれて、蠻骨あり、才氣あり、押出し善き致堂は、成功すべき所以を見出すべきなり。

其七

●今の政友會に缺如する者は、智識に非ず、才幹に非ず松田の如き有德者もあり、豫算專門家の栗原を失へるをも恨まず、衆議院議長の適材無きをも、非常の缺陷なりとはせず、唯だ、膽略、星亨を缺くを一大遺憾事とせずんばあらず。

●星亨をして、生きて今に在らしめば、政友會の旗彩は甚だ鮮やかなりしならん。死兒の齡を算へて、現存者を物色するも、時に、話柄たるを失はず。

●或はいふ、男後藤は第二の星亨たるを期する者也と。蓋し、彼が、恩威を東京市に扶植するに努むるに起因する風評のみ。

●男後藤は、噴火山の如し、氣燄、直ちに鼻孔より噴く。杉山茂丸は、彼を評して、其の大言壯語するは、則ち、彼に財無き所以なりといふ。

●星は、讀書家を以て知らる。彼の學問は咽喉より上には出でず。臍下丹田に向つて沈みつゝあり。彼を見、其の語を聞きて、些の讀書家らしきを覺えず。

●男後藤は、勢力を扶植すと雖も、敵を作らず、彼は、山上の機關砲に向つて突擊するの勇士に非ず、斜に山逕を求めて、迂餘曲折して進む。

●彼は、何處までも醫者也。其の精力を打算し、盤引

の無理押を試みず。星は則ち、其の力量を自覺し、正面に、敵に向つて押進む。

●男後藤は、滿鐵に依つて、恩を三井に施し、街鐵に、其の子分を東京市に扶植し、漸次潜勢力を培養す。然れども、彼は、官を離れて闘ふ能はず。

●彼は、能く士に下り、また能く請託に應じ、世話好きたるを失はず。彼の大臣たるとき、門前市を爲し、冠を掛けて、尙ほ寂寞たらず。

●男後藤は、官に依つて、地歩を占め、星は、却つて得る。其の肌合、其の度胸、固より同一に言ふ可らず。同じく騎馬の達人なりといふとも、男後藤は馴馬を好み、星は、手に任かせて、野馬に跨がる。

●若し男後藤にして、星の跡を追はんとするあらば、彼の不所存たるや言を俟たず、また能く企及し得可きにもあらず。

●然りと雖、星無き今に於て、元老に接近し、實業界に親しみ、東京市に侵蝕し、四角八面に、其の勢力を扶植して、孜々として倦まざるものは、男後藤を多とせざる能はず。

●星は政友會の樞星たり、男後藤は、將來、天の一方より政友會を斜照するの客星たらん。彼が、如何に、政友會に因緣し、揉み合ひ、衝き合ひ、或は、碁敵となりて、一種の惡緣を結ぶに至るべき乎。此の兩者の關係は、將來の趣味ある宿題たる也。

●星は野性を以て聞ゆ。而して、彼は、其の末路、恰も、修養の必要を感じ、或は禪を學び、一二年の後、其の態度を一變するの覺悟あり、是れ、彼の親友の能く知るところ也。惜むべし、彼は、其の所期を發揮するに及ばずして逝けり。

●若し、星をして、其の鋒鋩を包み、其の光彩を磨かしめば、彼は、輓近稀覯の大勢力たり、大政治家たる可かりしならん。

●男後藤にして、修練して以て、禪機、劍機を味ひ得るに至らば、政友會は、由々しき問題として彼を見ずんばあらざるべし。

人物評論（二十二）

孫逸仙

外

革命黨首領人物評



△孫逸仙

文學博士　三宅雄二郎

チャンコロと一口に言へど、三四億もある人民の中に相應な人物の無い事はな

い、中に大人物も有るべきである。如何に力あるにしても、個人の力に限がある、小さい社會なら勢を作り出すことも出來るが、大きくなると多數の動かぬ間何とも致方が無い。傳記の中に革命家及び愛國家、即ちレザオリユシヨナリスツ、エンド、ペトリオツツと云ふを設けホフエル、マジニー、ガリバルジー、コツスート等を舉げるのがあるが、左る意味では日本の維新前後の志士に似たのがある。吉田、木戸、高杉、西郷、阪本など、皆さうである。併し時勢が時勢だけに、支那の方に一層適當なのがある、孫逸仙の如き、行動は純然たる革命家的、純然たる愛國家的である。

孫は一見して左程の人物と思はれぬ、四百餘州に革命を起すなど餘りに荷が重過ぎるかと考へられ、空想家であるとも言はれた。が空想家と言へばマジニーはより以上の空想家でなかつたか。彼は出來ぬ事を考へ出來ぬ事を行はんとし、出來ず仕舞に終つた。孫は其れ程でない。早晩出來得べき事を考へ、得らるゝ限りの機會を得て之を行はんとした、其爲す事あるに足らぬと見られたのは勢が到來せぬからの事で、勢が到來したならば、頗る傳記が面白くなり、多く類例を求め得られぬであらう。

日本に隨分西洋かぶれしたものあるが、啻に外貌に於てかぶれ、趣味及び思想に於て舊幕時代に異ならぬのが珍しくない、ハイカラ連の言行は消化れて居らぬ、自らの分と吸收した分と調和して居らぬ、硬い處、軟い處、混雜して居る。孫は之に較べて能く消化して居る、元と支那三代の敎として傳はり居るは歐米の自由思想に似て居り、滿淸政府を倒し共和政治に仕樣といふも何等かの手段として唱ふるのでなく、自然に想ひ及ぶのである。己を養ひ與た叔父が洪秀全の變に加はつた事と、早くより布哇に往き、次いで幾度も歐米を巡つた所からして、衷心より自由を重んじ、共和政治を是認し、啻に之を是認したのみでなく、之を實行し樣とするに至つた。屢次事を企てゝ屢次失敗に了り、而して失敗するや高飛して外國を徧歴する。吉田松陰は米國に往かうとして往けなんだが、孫は自由自在に

外國に遁れる。固より交通の便の大に進んだ爲でもあるが、日本に孫の如きを欲して得ぬものが稀でなかつた、馬場辰猪の米國に客死したのは多く無い例である。事成らざれば外國に遁れ、徐ろに力を養ひ、そして機會を求めて事を擧げ、幾度も斯かる事をし、遂に前よりも革命的運動の大規模なのを見るに至つたのは、支那國情の然らしむる處であるが、革命家として模範的だと言つて宜しい。今の支那では萬世一系といふべきは孔子の系統であつて、清朝は日本の德川氏の如くにしか見られぬ、力さへあれば倒して差支ない事になつて居る、特に夷狄から出て中國を奪つたといふので、革命即ち愛國と考へられて居る。

革命を好むものは多く金錢に窮する、人の厄介と爲つて生活する。が孫は金錢に窮せぬ、早く西洋醫を學び、身の廻りが裕かに爲つた、後外國を巡つても同情を得金を得た事が少くない、そして金を得て志の鈍り小富豪として餘生を送らうとする連中と違ひ、絶えず革命を企て初一念を貫かうとする。時不可なれば隱れ、時可なれば現れる。革命運動を以て終始一貫する處、自國及び他國の薄志弱行連を戒むるに足りる。それに其人と爲りや溫厚である。外貌に於て少しも危激な處がない。溫厚であつて而も志の堅く、何處迄も執つて動かぬ處は珍とせねばならぬ。マジニーの如くコッスートの如く、思想を組織立てて之を發表する事は少いが內地に跼蹐せず世界を往來して自國の改革を計る處、之に優るとも劣らぬ。マジニーは餘りに自我が強く、誰とでも喧嘩し、後全く孤立に終つた。孫は友誼に厚く、折合が善く我國人で其金を利用し損を掛けたのが有る。して損を掛けた當人の財產を差出し、之を償はしめんとしたものが有つた時、之を爲さしむるに忍びぬとて遂に其の儘にする事に爲つた。見た所では尋常と變らぬ、是ぞといふ程の人物と思はれぬが、其經歷を考へ來れば誠に尋常でない。若し革命の變が發展するならば、孫は偉人物として認めらるゝに至るも知れぬ。

併し今回の革命に何程の關係あるかは明でない。孫

は智者よりも君子と見えるが、跡方に於て出沒自在な處もある。革命の起つた時米國に居つたが、何か陰然革命を起すに與かつて居つたかも計られぬ。墨西哥の革命に米國が關係ある、支那の革命に如何であるか、其秘密に至つては後にならねば明にならぬ。孫は黄興と日本に於て提携したとしても宜いが、其提携した時日本に於て是に重きを置いたものが幾人あつたてあらう。然るに黄興は進んで風雲を捲き起した。孫の表面に現れるのは何時頃だらうか、孫は自ら兵を率ゐて戰場に出づるかどうか。支那には文武の差別が嚴格でなく、文事あるものは武備ありといふの屢次事實にせらるれば、孫とても大將たるに堪へぬ事はなからうが、軍人として大に見るべきものあらうとは思はれぬ、行政官としても大に見るべきあらうとは思はれぬ、快刀亂麻を斷つといふが如きは其長所であるまい。革命の變の何處迄進むかは分らず、遠からず鎭定するか、或は列强に於て中立を守り、滿清と革命黨と大に爭ひ、幾年かの後革命黨の勝つ事と爲るか、經過を見るの外ないが、假に革命黨の勝てりとして孫と黄とが大に勢力を占むるとは明言し難い、或は豪傑の多く現れ、今日名の知れぬ人物の大に飛躍するに至かも知れぬが、左る折に孫は政權より遠ざかるにしても、將た何人が大正の局に當るにしても、孫を革命の主動者として敬意を拂はずに居らぬてあらう。可も無く不可も無く悠々迫らざる處が却て奥床しく見ゆるてあらう。孫にして何事をも爲し遂げずして死んだならば、只徒に變を好み才幹の事を爲すに堪ふるなかつたとせらるべきが、若し何程か事變の見る可きあるに至つたなら一の英傑と認められるだらう。其邊は個人の力よりも大勢てある。龍が雲を得ずして獱獺に笑はれ、雲を得て天に上るとは此邊の事を謂ふのだ。支那には珍しくない事てある。が革命の變は何の邊まて及ぶかは豫め決し得られぬ。孫が英傑と爲るか平凡視されて終るか、今後の經過如何て定まる。

△孫逸仙は喰せ物

覆面道人

孫逸仙の主義は世界主義だと號する。世界主義は總ての人間が均一の權利を保持すると稱する。それを支那流の堯舜式に關聯さして、之を一種の信念にして居る。それから又彼の得意のルーソーの民約説は佛蘭西仕込みて出來上つた。學問は全然ハイカラ式で、支那式の趣味の多いといふ學問は一切無い人だ。一體の身體の作り方は極めて神經質である。けれども主張の上に信念がある丈けに清朝政府を倒さうといふ事は一刻も忘れない。そして彼が清朝政府を倒さうといふのは漢人が得意の持論たる滿漢別といふ所から割り出した我身打算が最も多い。有名な三十三年の事件以來數回日本へも來て日本の有志家の間にも、よく顔を知られて居る。それでサア日本の有志家內では大分高買ひされたもので、東洋流の豪傑のやうに思つて居る人も少くない。所が其本音を淡へて居る或一部の人の説ては、革命軍を起して、其革命軍の旗の下で血を流して死なうといふ決心が彼に有るか無いか疑はしいといふ事である。今まで南清地方で屢々小匪亂があつて、それは何時も孫の門下の人がやつたといふ事であるが、そんな場合に孫逸仙は妾手掛を擁して新嘉坡あたりに悠々として御坐る。そして列國の利權の爭の間に、其亂を利用して巧みに其旨味を喰ふといふやうな事を、孫逸仙を贔負にして居る人もいふて居る。昨年一寸日本に來ました時は、日本の警察は何故か知らぬが、當局者の命令であるといふ事で、彼を歸らせた。彼が昨年日本へ來たのは此前に來た時にいろ〳〵行掛りがあつたからだといふ噂であるが、其行掛りを無視して、歸つて呉れといふて歸したといふ事である。彼が日本へ來たのは大いに計る所あつての事だと革命黨一味の連中は聲を太うして颺言したのであるが、其實、布哇、亞米利加、佛蘭西に渡り歩き、又亞米利加に歸つたが、何の爲す所もない、それて窮した餘り日本に流れ込んて來たものだといふ確かな報告が或筋に入つた相であ

る。日本から歸らせられるや新嘉坡に行き又海峽殖民地々方から再び亞米利加に渡つたのであるが、鐵國問題の爭から起り擴がつた今度の革命騷ぎに對しては、例の連絡も因緣もない。假令因緣があるにしても氣脈を通ずる通信機關が備つてゐないから連絡の取りやうがない。それで此度の事件と孫との關係は、日本でいへば自由黨の松田正久君のやうな位置だ。其主張は兩人共始終一貫して居るが直接の働き手ではない、けれども松田正久君は正直な君子人であるが、孫逸仙は至つて不正直な支那人の性能を持て居る。然し始終一貫した主張を持つて居る丈けに廣東地方の首領としては一般に認められて居る。所謂過激なる革命黨の首領と世間で認めて居る理由は其處から出て居る。

それから孫の部下としては黃興、之れは寧ろ部下といふよりは友人といふた方が近い位だ。之れは眞の東洋式の人で、眞面目に死ぬ所まで行く人だといふ事は總ての懇意にしたもの丶認むる所である。人間が單純で正直、戰鬪舞臺にも立ち切り得る人だ。けれども黃與の部下といふものは殆んど人物が無い。只有象無象の書生共が集つてる丈けだ。

それから長く日本に居つた宗敎仁。之れは少し神經質な才子だ。之れは今上海の民立報に居り、通信の源に立て大いに革命軍の虛勢を張つて居る。民立報には外にどういふ奴が居るか分らぬが、思ふに十數人の同志が居るでせう。

それから章炳麟と湯某の兩人は學者である。章は人事不省といふ學者である。革命黨の中でも彼をお神と稱し、狂の如く仙の如しとして大事の相談には與らせぬ事にして居る。嘗て黃興と大喧嘩をして新嘉坡に行つた事もあるといふ調子の人だ。湯某は極めて眞面目な文章を書く人だ。眞面目な丈けに存外に錢を蓄めたり何かして、自己を守るといふ事が堅い。東洋豪傑といふ方で無い。

又孫の秘書として居る人に可といふ人があるが、之も飄乎たる一書生である。それで此類と氣脈を通じて居つた宮崎滔天。之は或は喧嘩し、或は引附きして來

たのであるが、此人にも今度の騒亂は寢耳に水てあつたらしい。大體そのやうな狀態てあるが、稍々事情を知つて居るものには、今日の通信が非常に可笑しく感ずる。北京の方て日本政府が革命黨を助けてやつて居るといふ疑を抱くのも止むを得ない。日本の新聞の記事は、革命黨が己れの爲にする電信を殆んど悉く載せて居る。况んや其通信によつて論文を書く。そして其論文の占が誠に拍子が合はぬことが多いやうに見受けられる。私共が考ふる所ては支那の暖簾換をする用事にして暖簾換の爲めに結局如何にして日本の損害を小さくするかといふ事が言論機關の上て操觚者の意を用ふべき所と思ふが、それならば研究が今少し商品取引爲替保險、それから船賃の賃率のやうなものに向ふべきて、此方面に順序のある、理解のある議論のあらはれんことを希望するのてある。

革命軍と官軍との勝負を今日に於て占ふといふ事は、少し早計に失する。何故かといふに、まだ組織的の軍隊の衝突がない。兩方の勢力を集中した衝突が一回あつて中淸の人心が何れに定るか、之が第一の觀點てある。然し革命黨の方に非常に武器の不足を告げて居ることは明瞭の事實てある。又滿洲軍の方ては經濟狀態の彌縫が出來ぬ弱點がある。此弱點の結果は、革命軍を叩きつけて逃げ散らかしても、軍費の埋合せとして、人民から無理な徴發をしなくてはならぬ。無理な徴發をすれば人民の困むのは分り切つた事て、殊に河南の方面などは人民が餓ゑる。人民が餓ゑた結果は小さな匪亂が各地に起るといふ事は分り切つた事てある、夫れ故に勝負の如何に拘らず。淸國の經濟財政界は殆んど恢復の出來ぬ程に紊亂するに相違ない。其結果は必らず日本の經濟界にも及んで神戸大阪等は大恐慌を起すことになる。此恐慌を豫め防ぐといふ事が今日の日本の立場として最も必要の事と思ふ。

元來支那人は非常に地方的感情のひどい人種て、日本ていへば東北人とか九州人とかいふ風に、各地方て相確執する狀態が實にひどい。そして各々其首領を持つて居るが、その首領は黄の部下てもなければ孫の部

下てもない。各自銘々大將の積りでゐる。それで萬々一革命黨が勝を得た曉にも、內政上でも軍政上でもなか／＼統一がつかぬ。屹度叩き合ひをやる。洪秀全の時もさうであつた。それでまだ日本人が知らぬ所の首領が陝西、四川、甘肅、湖北等には澤山居る。其首領中には餘程實力あるものも居るだらうと思ふ。古來支那の內亂を觀察するについて、第一期に起つたものは必らず打殺され、第三期か第四期の奴が天下を取るのである。今日は先づ漢書の所謂土賊蠭起の時と見るのが適當であらうと思ふ。

△孫、黃、黎短評

東亞同文會幹事長　根津一

孫逸仙といふ人は智略もあり、膽力もあり、又學問もあつて、實に立派な人物である。ナニセあの位の事を企て丶且つ實行を期して居る人であるからして、大抵の事は身に備つて居るといつても過褒でない。革命などゝいふものは、商賣などゝ違つて儲かるといふ性質のものでなく、一歩誤れば何時でも生命を捨てるといふ仕事であるから、なか／＼輕薄なる人物の出來ることでない。殊に孫逸仙は多數の革命黨の首領として、十年一日の如く熱心に其信念を貫徹しやうとして居る。其志操の堅固なることは感服するの外はない。先づ一代の大人物と稱して宜しからうと信ずる。

黃興もなか／＼の人物で、此人にも大抵の美點が備つて居る。殊に度量が大きく、よく凡ての人物を包容するの器である、又實行的人物で、あらゆる危險に身を曝して、其目的を達せんとする犧牲的精神が非常に盛んである。先づいはゞ孫逸仙と兄たり難く、弟たり難しといふ人物であらうと信ずる。少しどこまでも孫逸仙を首領に押し立てゝ、自分は其下に働くやうな態度に出て居るといふ事は殊に此人に感心する所である。

黎元洪といふ人は支那人中ではエライ人であらうが、餘り特徴のない、どつちかといへば先づ平凡な人

のやうに思はれる。私は先年張之洞と共に中清地方に行つたことがあるが、黎元洪は其時の接待係長のやうなものであつた。その時少し話をして見たが、事理はよく分る人だと思うた。然し軍の指揮官としてはどの位の腕があるか、私は深く知らぬ。例の遁亡した張彪などいふ奴は年も黎元洪よりも上て、又軍隊を指揮することは遙かに巧みだ。いはゞ百戰老巧の强者だ。黎元洪などは此人に比して軍事上てはまだお若いと思ふ。

△支那革命黨の奇傑「汪兆銘」

斷水樓主人

昔は始皇天下の兵を咸陽に蒐め、悉く是を銷して十二金人を作り、而して獨り以爲らく、我より以後又た亂ある無けんと。然るに幾ばくもなくして彼は博浪沙の鐵椎に遭ふ。鐵椎血なしと雖も錯愕施す所を知らず、天下に合して大に索む。是れ兵器の鐵は尚ほ談笑の間にも銷す可くして、人間鐵の未だ卒かに銷する能はざるを示す。則はち陸沈せられたる韓の精神が、張良の四肢を透して迸り出てたるを證するものに非ずして何ぞ。今回の清國大亂に於ても亦た當さに那邊の消息あるを見ずや。

◇

親に離れ、妻孥に別れ、骨肉を捨てゝ、其行く途は秋風寒き荒野の如く、主義の爲め、黨の爲め、朝に猛虎に遊ひ、夕には長蛇を迎へ、或は刀鋸の巉巖を攀ぢ、或は白刃の奔流を度り、眞に蜀道の難よりも更らに危險なる中に、孤客天涯身を寄するに處なき坎坷と闘ふて、而かも丈夫の面目を失はざる者、是を名けて志士と稱し得可くんば、支那革命黨に在りては、實に其人に乏しからず。首領孫逸仙氏を始めとして、或は黄興、或は胡漢民、或は胡飛卿の諸氏等殆んど指を屈するに遑あらず。彼等は啻だに革命黨中の志士たるに止らずして、其人格より、其才略よりして支那當代の沈勇也。

身を渾河の河邊に起して、長驅直ちに燕京を襲ひ、

暴路以て理想的剽掠に成功したる愛親覺羅氏は、全たく明の天下を滅淪したりと雖も、是等儕々たる志士の一團の起るを見れば、明かに人間鐵則は漢族精神の存在を確たらしむるものにして、彼等の精神は彼の祖龍を驚揺せしめし博浪沙中の舊劇に比すべくもあらず、更らに〳〵文明的手段に依り滿淸政府を事實の上に傾覆して、最後の止めを刺さずんば停まらざらんとす。左れば這個の精神を帶して活動しつゝある是等志士の面々を觀て、其人物風概を研究するは、此際に於て最も興味深き事に屬す。予は首領孫逸仙氏と交を結ぶ爰に年あり。而して先年雲南革命戰爭當時の如き、倶に與に辛酸を嘗めて死生相荷擔したるの緣故に由り、聊か黨中の人物に關して知るの便宜を有す。然れども今次大亂突發以來、孫、黄二氏及其他に至つては疾やく新聞紙によりて報ぜられたるもの詳細を極むれば、予は未だ世人の多く知らざる同黨の奇傑汪兆銘に就きて少しく語らん。

去る明治三十九年の秋なりき。予は牛込築土八幡の森蔭に寓する孫逸仙氏を訪ねたり。偶々座に瀟洒たる淸國の一青年あり、容姿一見貴公子の如く、顔の何處かに凛乎として侵すべからざる影あるを覺ゆ。予は孫氏の紹介に依りて其姓名の汪兆銘なるを知る。予が汪兆銘と相識りしは正さに此時なりき。便はち彼が廿一歳の時なりき。予は爾來孫氏を訪ふ毎に彼に接し、彼の人格と彼の才學に就きて聞く事少なからず。殊に彼が非凡なる文才を有する事を確むるに及んで、只管彼を敬愛せり。越えて四十年一月十三日彼は突如として横濱に去れり。而して彼は再び飄然として横濱より何處にか去れり。同月廿二日予も亦た横濱より某地に向つて出發せり。然るに予が香港に着するに及び、汪兆銘の先づ到れるあり。

暫らくにして廣東城を西に去る事三百淸里なる羅定府に於て、所在相呼應して烽火は擧げられんとす。是れ現在の支那革命黨が革命戰を演ずるに至る最初の一幕なりき。孫逸仙、黄興、汪兆銘の諸氏悉く來り會し共に轡を列べて陣頭に立たんとす。而るに底事ぞ、或種

の大蹉跌は狂風の如く起つて、彼等が計策を捲き去りぬ。然れど蹉跌に會ふて妄りに望を失はず、反つて是を轉じて天外の奇策となすは彼等が常態也。故に彼等は潔よく膝を拂ふて他日の再擧を誓ひし後、或は姑らく子房となりて西に向ひ、或は魯連となりて東に馳るの巳むなきに臻る。春風陣々落ち行く人の肌に冷く、愁雲長く楚湘の空に棚引きて恨綿々たる夕べなりき。汪兆銘、黄興は將さに日本に、予は是より臺灣に去らんと互に手を握つて其健在を祈れり。斯の如きは慘憺たる敗軍の士の別離にも似て、今尙ほ當時を髣髴する毎に暗涙を催すもの、豈に啻だに予のみならんや。予は臺灣に在りて風雲の會を俟つ事二ヶ月の後、更らに孫逸仙氏の香港に淹れるを報じ來れるに遭ひ、直ちに船して之に赴むく。焉んぞ知らん、汪兆銘も亦た此處に在らんとは。加之らず、數日を出てずして彼は同志と別れて單身西の方佛領安南國東京を經て暹羅に入り、夫れよりボルネオ、スマタラ、ジャワ等、南洋巡歷の途に上れり。是れ彼が同黨の爲めに軍資の調達をなさんとする健氣なる巡禮の旅行たる也。而かも彼は到る處の各地に於て著々成功せり。幾許もなくして烽火は愈々雲南に擧げられたり。維れ則はち明治四十一年に於ける所謂雲南革命戰爭として世人の耳目を聳動したる新記憶に屬する事件也。然れども天は未だ容易に漢族の爲めに幸せず。是に於て乎再び好果を收むる能はざりし彼等は、羅定の轍を踏んで、孫逸仙氏は新嘉坡を經て佛蘭西に、黄興、胡飛卿の二氏は欽州、廉州に走むき、胡漢民氏は香港に、予も亦た之を以て假りに革命見物の一段落となして東京に歸れり。而して汪兆銘は當時直ちに去つて南洋を經由して日本に來り、親しく予の居を叩けり。時に明治四十二年の某夜陰の事なりき。

是より前、雲南革命戰の敗るゝに至るや、汪兆銘は大に考ふる所あり。斯くの如く一敗地に塗るゝに至る、復た何れの日にか起つを得ん。矣し此上は千秋の如き敗後の日を曠しく過すに忍びんや。宜しく急劇なる非常手段に訴へて著々其步を進むるに如かずとなし、慨

然至誠を以て孫、黄二氏等の前に其畫策を披瀝して大に論ずる所あり。急劇なる非常手段とは何ぞ、則はち要路の大官を窺ふて、隨處に之を暗殺するに在り。數多の失敗に鑑み汪兆銘をして此手段に憑らざるを餘儀なくせしめし支那革命の行程の難且つ險なる夫れ察するに餘りあるに非ずや。此時孫、黄二氏等は深く汪兆銘の衷誠を諒とし、其精神を酌んで情を同ふするものありしと雖も、唯だ其採る可き手段に對つては、再考三考漫ろに肯諾を難んずるものありき。此故に兩氏は或は撫だめ、或は慰め、當初の志を飜さん事を勸告するに之れ努めたり。然りと雖も彼は敢然として前說を執り容易に動かず、尙ほ許すに此手段を以てするにあらずんば、遂に或は悶死するに到らんと云ひ、言々句々熱血迸り、赤誠溢る。而かも其堂々たる態度を見、其整然たる論旨を聞くに迨んで、猝かに之を拒む可からざるものあるを奈何せん。議論數時の後汪兆銘は斷然自由行動を執るに決し、渺然たる迢程の羈旅に上れりとは、予が後にて孫氏より聞き得たる所なり。

明治四十三年六月某日の事なりき。予は某處に在る孫逸仙氏より一飛信を手にしたり。其一節に曰く、

「汪兆銘敵の毒手に落ちて無期徒刑に處せられたる旨胡漢民より電報あり痛嘆深慨に堪へず云々」

と之を讀み終ると同時に予も亦た惻怛せざらんと欲するも能はざりき。恰かも其前月の事なり、新聞紙は、

「支那革命黨員十五名攝政王邸内に於て爆藥裝置の大陰謀を企て、攝政王及其他の大官を斃して、北京政府を一擧に轉覆せんとせしも遂に捕へられて吟味の結果、直ちに悉く斬罪に處せられたり。」

と傳ふ。然るに是に關して又た一說あり。曰く、

「其主謀者は汪兆銘、胡亞威、黄爾禍の三名にして、攝政王は事の重大なるの故により躬自ら吟味の座に臨み、親しく汪兆銘を糺問せしに、汪は毫しも臆する所なく眞摯沈勇の態度を持して是に對し、從來口頭を以てしたる革命黨員の陳情が多くは奸佞なる政府當局者の爲めに誣妄せられたる實例を引き、自分は文章を以て答ふべしと云ひ、輙はち筆硯を請ひ得

て、僅かに二十分間に數千言を連らね、先づ倒滿興漢を旗幟とせる民族的革命の主張より、更に進んで政治的並に社會的革命の必要なる理由を列擧し、最後に中華文明の急先鋒たる革命黨は、第一著手として攝政王を屠り、以て首途の血祭を爲さんと試みたるに過ぎず、而るに謀ごと事前に露はれて鼎鑊に坐す、又た憾とする所に非ずと論ぜり。是に於て攝政王は深く其才器を愛しみ、且つ故ヴイクトリア女皇が曾て其玉體に危害を加へんとしたる凶賊に對し、躬ら聖經(バイブル)を展きて其死罪を赦したる例に傚ひ、終に左右を顧みて汪兆銘を赦さんとするの意を漏らせり云々。」

と、予は是等二個の説を商量して其後者の餘りに小説的なるに反して、其前者の遙かに信を置く可きを思へり。而かも越えて又た旬日ならずして、在北京なる某氏より同月廿六日に於て愈革命黨員十五名斬罪に處せらるとの確報を得るに迨び、夫の滿清政府の慣用手段に稽へて、最早や前者の説の疑ふ可き餘地なきを感じたり。爾來予は全たく彼を世に亡き者と信じ、日夜知人に會ふ毎に開口先づ汪兆銘の爲人を語り、或は曾て彼より得たる幾多の書翰を繙讀して、私かに萬斛の熱涙を灑ぎ、聊か以て其英魂を慰めんとせり。圖らざりき、予は此孫氏の報によりて夫の後者の説の未だ必らずしも小説的夢想たらざりしを覺らんとは。嗟呼一篇の文章能く其敵とせる攝政王の心を動かして其死を脫がれしむ。其如何に彼が天賦的文才の超絶せるかを見るを得可くして、而して又た奇異なる感想に打たれざる者幾人ぞ。

由來革命の神は貪慾なる蠻神也。常に最も多くの生贄を求む。彼の殘骸累々として或はセイメ河畔牧草靑き邊り、或はシベリア原頭白雪深き處に、或はバスチィルの城獄に、或はアカトイの牢塞に、到る處無算の數を貯へて飽く無きを思はしむ。支那革命の神に於ても亦た然り。敢て遠く太平天國の革命史を按ずるを須ひず、最近の舞臺に於ては、夫の湖南一帶の土地を震撼して大義の旗を擧げんとし、誤つて捕へられ、斷頭

臺上に立ちし時
『我は漢族の爲めに死す、一死惜しむに足らず、寔だ願くば我兄弟相繼いで起るあらば我れ死して餘榮あり。』
と絶叫したる湘潭の馬福益の如き、或は廣東省城に爆裂彈を抱き、單身能く二十餘人の官吏を斃して、
『容貌婦人風骨仙。博浪一擊膽如天』
を想見せしめたる番禺の美少年史堅如の如き、或は出洋大臣の便乘せる汽車中に泥入し、自ら爆裂彈を踏んで身先づ碎けたる皖北の貴公子吳越の如き、或は安徽巡撫恩銘を殺したる徐錫麟の如き、又た是に座して刑戮に處せられ、
『祖國陸沈人有責。天涯淪落我無家。』
の慷慨歌を遺したる秋懂女史の如き、皆な是れ中華革命の荒神に献ぜられたる高貴なる犧牲にして、而して汪兆銘も亦た最も價高き、最も新しき犧牲の一人なりとす。彼や今非凡の才略を懷いて囹圄の裡に呻吟す。支那革命黨に取りては、此倉忙の間に在りて、眞に堪ふ可からざる大損失に非ずや。是に於て乎、孫氏が曩に痛嘆深慨すと云へるもの、豈に啻だに其股肱を愛しむの眞情のみに非ざるを知らん。予は佛領印度に流寓したる當時、日夕彼と寢食を共にし、勞酸苦艱をも相同うして、親しむ事甚だ厚く、且つ彼を信じて其の必らず爲す有るを思ひ、常に敬慕の念を絶たざりしが故に彼に關する思出の深き、敢て他人と相校ぶ可からざるものあり。而して予が歸來大阪朝日紙上に連載したる「支那革命實見記」の上梓を促し來りたるに加へて、特に孫逸仙氏の序文を手記して送り越したるが如き、其友に篤く、其隣に溫かなる、其才の豐富なる、而かも其世間的流行に疎くして其性の赤兒の如く無邪氣なる、洵とに天下に稀に見る所の者也。嘗て佛領印度潜居の當時、日々サンドー亞鈴を弄するに餘念なかりし彼は一日何處よりか一挺の室內射的銃を携へ來り的を作りて切りに之を射居たり。彼が胸中些の欝積なく、英雄の心裡常に卓落餘裕ありしに似、其爲すことの何ぞ幽しきや。遂に是が爲めに孫逸仙氏を始め一同の者

も、思はず銃を取り上ぐる事となり、萬里の客たるを忘るゝに至れり。

半夜鷄を聞いて起舞する祖逖の概ある無からんや。戈を枕にして晨を待つ劉琨の風ある無からんや。眞に汪兆銘は實行の人也。稀世の豪傑也。彼は當年取つて僅かに廿四歳也。攝政王が彼の才氣膽略に服して終に其死を赦したる亦宜なる哉。彼は廣東府某大族の家に產れ、其素行純潔、種々の誘惑に犯され易き弱冠の境に在り乍ら、學に從つて眞理を探求し、傍ら之を革命の上に施こすの他何事も知らざる篤學篤行の青年にして、實に志士たるの面目に於て秋毫も耻づる所なし。今や彼は生を有して生無きに若かず。悲風徒らに鐵窓に荒び、南の方兵馬頻りに動くに際して、彼の北京政府の常套手段に徵すれば、憐れむ可し、彼は毒殺か將た斬殺か、早晩其孰れかの悲運に遭遇せん。是を想ふて予は彼が爲めに熱涙の下るを禁ずる能はず。

匆忙の際自ら執筆する暇なく、姫倉波雄氏を煩はして筆記せしむ。乞ふ諒せよ。(完)

△深沈にして大度ある人

小川平吉

一體孫逸仙といふ人は餘り身體の大きくない人だ。私も五尺二寸位しかないが孫逸仙は私と同じ位か或は私よりも小さい位だ。又あの人の寫眞は此頃の新聞に出てゐるが、實物よりも少し善過ぎるやうだ。どつちかといへば容貌風采の餘り揚らぬ人だ。又逢つて話をした所で別に大した大人物とも思はれない。身體が小さく、容貌風采も揚らず、又態度も人を壓するやうな處がないものだから、さうエライ人間でないと思ふ人があるかも知れぬ。然し私はなか〳〵エライ人間と思つて居る。幾年も少しも撓まず屈せず、どんな困難に遇つても、諸方でいろ〳〵な迫害を受けて、所謂九死に一生を得たといふ場合に處しても、少しも其志を變じない。啻だに變じないのみならず、難に處して之を通ずるの道を知つて居る。若し通ずるの道を知らぬならば夙くの昔に死んで居る人間である。長い年月の間

手も足も出ない境遇に置かれても不屈不撓の精神を失はず、且つ之を巧みに拔けて來た手際を見れば、不屈不撓の精神と共に才幹も力量もある人間といはなければならぬ。身體が小さく、容貌風采の揚らぬといふ事ばかりで彼を評すれば大變間違ふだらうと思ふ。古から容貌風采はよく人を誤る。彼の漢の張子房は其容貌婦人の如しといはれたが、才略もあり膽力もあつて、博浪沙の一擲、秦の始皇帝をして其の膽を寒からしめた。孫逸仙を詰らぬいとふ人は又多く彼の容貌風采態度に誤られたるもので、若し本當に彼の今まで行ひ來つた事を見たならば、確かに彼はエライと賞せざるを得ぬ事と信ずる。勿論彼の友人同志、殊に日本の志士などが彼を助けたといふ點もあらう。然し此處まで遣り通して來たのは第一は矢張り本人の力といはざるを得ない。例へば彼が比利賓の獨立を助けての比利賓から廣東の方へ押し出して行くことを考へて、其實行に着手して隨分其步を進めたといふ事や、或は臺灣と福建の關係とか、それから又日露戰爭の時などは、革命を仕遂げて漢人が天下を取れば、滿洲の如きは愛親覺羅氏にこそ捨て難き所なれども、漢人には用のない土地故、我々が天下を取れば之を日本にやつてもよいといふやうな議論を主張して、日本を動かさうと計つた事の如きは、なか／＼計畫の大なることを窺ひ見ることが出來やうと思ふ。そして清國政府は巨額の懸賞を以てあの人の頭を求めて居るに拘らず、東西に出沒し、世界を跨にかけて、四方に散在せる同志を糾合して、どこ迄も革命を仕遂げんとするのは確かに偉大なる人間といはなければならぬ。あの人位の人間が日本に澤山あれば、日本も大したものだが、日本にはたんとない。支那に革命を起すことの正否は別論として、孫逸仙其人はどうしても先づ偉人といつてよからうと思ふ。身體の造りや容貌風采は前に述べた通りで、顏色も黃色く、又人を壓倒する丈けの意氣ありとも見えず一寸見ては大した特徵がないやうにも思はるゝが、然し平易な、サッパリした間に、長年苦勞した丈けに、どこか落着いたエラサウな所があり。又どこか素人の

測量の出來ぬ奥行のある人のやうに感ぜられる。若し成語を以て評すれば深沈にして大度ありとてもいふべき人と思ふ。

△勇略あつて智謀なき革命黨

上野岩太郎

拜復武昌革命亂暴發の今日、孫逸仙氏其他革命派名士の月旦を各方面より蒐集せられ候儀は、時機に投ぜる御計畫と存候拙生多年淸國に遊べるも、概ね北京に淹留せるの故を以て、南淸革命派の諸氏とは交遊の機會少く孫氏とも僅に半面の識あるのみに過ぎず、其性行、識見、態度等に就て多少知る所は、均く傳聞に由れる者に候得者、拙生には實以て品隲評論の資格無之却て直接彼等諸氏と杯酒の間に徵逐し、死生の間に事を共にせし諸君子の月旦を貴誌によりて聞かんことを樂む者に御座候拙生最近六年北京に淹留中、三十八年の秋には吳樾氏が爆藥を懷にして出洋考察憲政大臣の出發を北京停車場に待受けて暗殺を試みんとし、未だ之を投擲するに及ばずして、過つて爆發焚死したるの實況を目擊し、昨四十三年の春には、汪兆銘なる前途多望の一青年が攝政王府の門前に爆藥を仕掛けたること發覺し、捕縛せられて無期繫囚の身となりたる事實を見聞し、其他袁世凱氏が直隷總督たりし時代、革命黨の名義の下に、羅織せられて、暗から暗に葬られ去りたる幾多有爲の志士あり、而も其志士は孰れも擧動沈着にして、立派なる最後を遂げたるもの多きを牒知し、革命黨中には眞個に其主義の爲め、民族の爲め、國家の爲め一身一家を犧牲として、死を見ること、歸るが如きもの甚だ多きを感嘆致居たる次第に候、併し又同時に革命動亂は福壽康樂を唯一の理想とする支那人の思想に投合せず、多數の漢人は滿人を嫌忌しながら、尙且つ滿洲朝廷の衣冠爵祿に戀々し、以て所謂福壽康樂の理想を滿足せしめんことを希望致居候故革命的動亂は實際革命黨の聲明するが如く、滿洲人の壓迫に對する漢民族の反抗運動たる狀勢を呈せずして、一部の漢人

が他の漢人を排撃する同志撃騒亂たる顯象を呈するの虞あり、而して漢人の此の弱點を知悉して巧に之を利用し、漢人をして常に同志撃の狀にあらしめ、頼りて以て漁父の利を收むるは、滿洲朝廷祖先以來の筆法にして、吳三桂の事や、長髮賊の亂や、近くは此次の變亂に袁世凱氏を起たしめ、袁氏も亦案外素直に之に應じたる等の事實は、歴々として「漢人を以て漢人を伐つ」の筆法を證明して餘りあり孫氏等は這般の點に關して如何の考慮を費せるやを知らざるも、其主義に熱心なる餘り、多數漢人の政論を咀嚼するの餘裕なく其實行を急ぐの餘り、挺して險に走るの窮地に迫り、看すく\漢人の同志撃を演じて、悔ひざるの狀あるは、拙生の賛同する能はざる所に御座候、即ち拙生は革命黨は勇略餘りありて智計足らざるを疑ひ革命黨諸君子の勇膽義肝に敬佩すると同時は、其手段方略に感服する能はざる者に御座候詳細は別に起稿して世に問ふの機可有之暫く大要を略記して御返事に代へ候草々

△落着いた學者的な人

福田和五郎

孫逸仙といふ人は、私はよく知らない。只二三度逢つて多少話をした事があるといふ位のものである。私を孫逸仙に紹介した人は、支那語の達者な人だから、此人が取次ぎをしたりして話がよく分つたが、あの人は日本語は餘りよく出來ない。英語は達者なやうである。殊に英文は堪能であるといふとだ。極く落着いた品のいゝ人で、どつちかといへば學者肌で、革命家風でない、又寧ろ寡言な人で多辯な方でない。逢つて感じのよい人だが、然し左程の大人物と思はるゝやうな節もなかつた。けれども幼年時代から洪秀全に私淑して、倒滿興漢を以て一生の理想とし、十年一日の如く主義主張の爲めに骨を折つた丈けあつて、ドコカしつかりした所もあつて、只の贋せ物とは思はれない。十五の時から布哇に居る兄貴の所へ行つて、西洋人に隨いて基督教徒となり、後廣東で醫學を治めて、澳門で

開業醫をしたといふ事てあるが、容貌もどつちかといへば支那人といふよりも歐羅巴人らしい所がある。

一體今度の革命騷ぎの起りについてはいろ〳〵の說があるが、孫逸仙は直接に與かつて居らぬといふのが眞實てあらうと思ふ。彼の弟分ともいふべき黃興も叛亂地には居らず、之も直接の關係者てないといふ說もある。何ても武昌の諮議局議長の湯化龍が、北京政府に皇族政治を改めるやうにとの建議を提出した。處が北京政府は馬鹿にして一向に取り合はない。て湯化龍が怒つて武昌に歸つて、革命運動を初めさしたといふのが本當かと思ふ。何故かといふに、今まて孫逸仙や黃興のやつたのは、いはゞ一揆騷動のやうな事が多く、今度のやうな、秩序整然たる文明流の革命運動をやらなかつた。然るに今度のはすべての革命的行動や外國に對する態度などが悉く文明流て從來とは丸て違うて居る。湯化龍は日本の法政大學の出身て深く國際法を研究したといふ事てあるが、今回の革命軍の秩序の整然たる事や、外國に對しての落度なきやり方などは恐らく此人の畫策及び盡力てあらうと思ふ。それだから私は此度の革命に對しては此湯化龍といふ人が最も注目すべき人と思ふのである。

△孫は大した人物でない

伯爵　大隈重信

孫？　つまらん、一向つまらん、孫の批評なんど、それに我輩はもう革命はいやだ。孫は無論大した人間ぢやない、我輩は能く爲すなしだと思ふ。併し人は勢だ。時の勢次第て虎が猫にもなれば猫が虎にもならうさ、が孫は學問もなし、英語を多少知つて居る位のもの、併しちよいとした事なら何ても一寸間に合ふだらう。才子てもない。才といつても本の猪小才位の處だ。之を康有爲に比べれば人物は數等の下だ、康有爲は兎に角學者て、支那に居ても南海先生を以て呼ばれて居る。孫などの寄り附けるものぢやない。

我輩はもう革命は徒に日本を困らせ、

支那を困らせ、而して何の内に利する所なくして空しく外の爲にされる計りだ。時勢が違ふ。昔ならば一大人物が現はれて革命を起せば能く政事を改め民心を新にする迄に至つたのだけれど、今は左樣はいかぬ、我輩は愛親覺羅朝が續かうが亡びやうが、支那人の何人が四百餘州を一統しやうが構はぬとしても、それ迄に至らぬ中に直に外部から文明の壓力が加はつて來るから駄目だ。大勢を通觀すれば今の世徒に革命呼はりをすべきでない。

それに今度の事件は無論偶發だ、黄興などといつても本當に立つて居るのか居ぬのか、世評だけて眞相はまだ明かてない。聞く所によれば今度は哥老會の連中によつて起されたといふてないか。偶發て烏合の衆ては遂に久しきを保つべからずと思ふ。

孫を日本の維新當時の志士に比べたら何れ程の處にならうと？ 左樣いふべき程の人物ぢやない。それに支那と日本とては全然國情が違ふ、日本の當時の志士は皆藩閥の力に據つて動いて能く大を爲したのだ。西郷、木戸、大久保にしろ。薩長の大藩を離れたら何事をしたてあらう。處が支那にはそれがない。彼等は據つて大をなすべき藩閥といふ樣なものを背負つて居らぬ、それて如何程迄の事が爲せやう。彼を食はせものといふ評がある？ それは少しく酷だらう。左樣迄はない。人物の小さいといふ丈て其の奉ずる主義には忠らしい。彼の共和政を唱へるのは今の場合已むを得まい。支那ほど治め惡い國はない。何人が天下を取るにしても國は十八省にも分れ國語は二十以上もある。從つてそれぞれ感情を異にして居るので、餘程の大人物が出るんてなくては迚も一身に操縱出來るものてない。孫の如きの能くする所てない、即ち斯ういふ處には米國あたりの樣に聯邦政治ても行ふより外がない。是が彼の主張の起る所以てある。彼の威望は寧ろ日本の新聞などが作つて呉れた位のもので、實際に於ては左程てない。彼の節度の下に革命黨の他の領袖連が皆靡くといふ樣なものてない。黄ても黎ても皆互角の心得て居るのだらう。

△孫と黄と宋と

清藤幸七郎

孫逸仙については、實をいふと、私は世間の或一部の人のいふが如く、無制限の讃辭を呈することが出來ぬのである。然し孫の人物の如何に拘らず、昨今では孫は支那の革命について以前丈け重要の地位を占めて居ない。重要の地位を占めて居ないと云のは、昨年孫君が一寸日本に來られた時分に、革命黨の幹部、就中東京に居る少壯血氣の連中が孫君に對して献策をした。それは從來運動費が出來て事を擧ぐる時は、鐵砲を買ひ、彈丸を用意して、之を或地點から密輸入をした。然し鐵砲といふものは何時も廢銃、彈丸も或る場合には不適當な、鐵砲に合はないものが多くて左程の効果が無い。又密輸入には非常の危險がある。そんな不完全な、危險なやり方では到底目的を達する事が出來ない。夫れ故に今後は若し金が出來たならば、其金で以て軍隊勸誘をやつた方がよい。軍隊内の將校も聯隊長以上は七分通り漢人て、聯隊長以下は殆んど全部漢人てある。だから漢人の獨立運動について、軍隊の同意を得るてとが左程難澁てない。只機會を作ることが必要だ。而して機會は金さへあれば出來る。徒らに廢銃、廢玉を買ひ、且つ危險なる密輸入によつて、一部分に事を擧げ、其度毎に若い元氣のあるものを殺し、又世間の物笑ひを買ふといふ事は甚だ詰らない。今後は是非全力を軍隊勸誘に盡したいといふ事を熱心に說いた。其時孫君は同意しなかつた。それて血氣盛んな或一部の人は、孫君を以て、矢張り廣東とか廣西とかいふ自分の勢力範圍に於て事を擧げやうといふ地方的感情があり、又四方から軍隊を動かせば、其功名の纒まりがつかなくなり、自分の一手て革命を行うたといふ大功名が立たない。詰り地方的感情と一身上の功名心の二つによつて、かゝる事理明白なる献策を聽き入れぬのであるといふて非常に憤激した。て此等の人々は孫君を以て「廢銃丸百發主義」といふ言葉を設けて評した。之れ以來、寧ろ實行側に屬ずる人間は、極端に孫君に反

對して、一種の排孫說を主張した位であつた。然るにさういふ場合に何時も雙方の楔になるのは黃興である。黃君は以前から必ずしも孫君を萬能と思つてゐない。けれども孫の人物の如何に拘らず、孫の南方に於ける地盤勢力を無視する譯に行かぬ。又革命を遂行するについて、孫は虛名ながらも兎に角各地に名望を持つて居る。それを打算の中に入るゝ必要があるといふ考の下に、黃は孫を重視して居る。それて排孫說盛てあるに拘らず、又自らは孫の缺點や弱點も耳にし、目にもし、換言すれば孫のあらゆる短所を熟知して居るに拘らず、孫を押して總首領とし、自分は其下に立て働く方法を取つて居る。然し昨年頃から黃も孫に對しては等しく抱擁して押し立てゝ居るに拘らず、程度があるやうに思はれる。此四月に廣東て事を擧げた時には、黃は孫に計らなかつたらしいのてある。今度の長江一帶の事についても無論何事の打合せもしなかつたのてある。今度の革命動亂の端緒は四五年前から、長江一帶の軍隊に革命主義を吹き込んて、勢力を扶植して居つたといふ事にある。然し著しく力を此方面に傾けたのは昨年の年末頃からてあつて、そして其れに最も力を盡したのは宋敎仁てある。宋敎仁は現在總本營の參謀長といふ形て、黃興は其總司令官といふ風てある。吳崑とか劉揆一とかも其要部に居り、其他凡そ五十名ばかりのものがあつて、活動を初めたものだ。然るに本年四月頃廣東の方て機運が熟したといふのて、全部の人間が廣東の方へ行つた。處が事破れ長江の方に廻つて來た。其中に鐵國問題の反對が四川の方に起つた。支那の一揆騷動は何時ても藁松明の如く直ぐに消えるのだが、今度の四川の亂はなか〱粘りが強く長く鎭壓が出來ない。右が消えたかと思ふと左りが燃えるといふ風だ。それて奇貨措くべしとして大計畫を立てた。且つ旗擧げの根據地として大膽にも武昌を選んだ。そして非常に熱心に、今度は軍隊のみならず、四川の縉董、即ち日本ていふ有力者の如き者をも說き廻つて、大いに計畫を進めた。それて一寸お話して置く必要のあるのは、從來革命主義を鼓吹するについて

興漢排滿といふ旗印を振り翳してやつて居つた。然し之は覺醒した支那人を動かすには適切な言葉であるが一般の支那人は斯樣な旗印では感じが鈍かつた。然るに今度は偶然にも鐵道國有問題について湖南、四川地方が騷いて居る。此地方の政治問題を旨く捉へて革命主義に利用した。彼等がいふには、鐵道を國有にするといふが、政府には金が無いぢやないか。それて政府は外國の資本家から金を借りる。處がそれを返すべき途がない。盛宣懷が攝政王にいうた所を見るに、行く〳〵は十數億の大借款を起して、遂に全國の鐵道を國有にするといふ事だ。交通のよくなるのは有難い。然し左樣な大借款を起したなら、元金は愚か、利息丈けでも拂ふことは出來まい、すれば終には外國から鐵道を引き上げられる。夫れ故に鐵道國有は畢竟鐵道外有を意味する。我々民間のもの丶憂ふる所は、國有の美名の下に、之を外有に歸せしめんとする政府の愚策である。一時我々の力によつて之れを中止さしても滿洲朝廷のある間は、又々箇樣な愚劣な事をして、終に恢復すべからざる大瘡痍を受くることゝなる。一日滿廷存すれば一日其危險を深くする。だから一日も早く我々は獨立しなければならぬ。斯ういふ論法で、鐵國反對の氣勢に乘つて革命主義を鼓吹した。それて其効能が非常に多かつたのである。軍隊の方も益々革命熱が加はつて來た。四川の紳董も大いに動かされて連判帳に名を連ねるものも少くないといふ事だ。それて豫想外に事が順序よく運んて居る所に、十月九日の夜漢口の露國租界て爆裂彈を過失から破裂さして、數十人が繫せられて、三人ばかり斬殺された。勿論此時は黎元洪も革命運動に贊成してゐたらうし、又武昌諮議局議長の湯化龍も同意してゐたらう。だから時後れて總督の制裁を受くるよりも、こつちから事を起して、相當の態度をとつた方がよいといふので、終に突發したものと思はるゝ。だから實をいへば今度の事を計畫して居つた人にも豫想外に早く事が起つたのである。素より支那四百餘州に互つて改革變化を行はなければならぬ事情は充滿して居る。かゝる時にかゝる事件の起きた

のは誰の力でもない。全く機運の力と思ふ。が總督が愚劣にも部下のものを殺したなどゝいふ直接の動因を別として、今回のもつと深い原因を造つたものは、矢張り軍隊に革命思想を入るゝに骨を折つた宋敎仁などゝいふ人の力と思ふ。

此宋敎仁といふ人は一度革命黨中から誤解された事がある人物である。それは何故かといふに、明治四十年の夏、日清間に彼の朝鮮北境の間島問題が起つた。其時宋は苦心慘憺して間島の證據書類を調べ上げた。處がそれは支那に利益なものであつた。それで在東京留學生宋敎仁といふ名で、其調べ書を北京に送つた。日清間の樽俎折衝の間に支那側の有力な材料として提供されたものは總て宋の調べ上げたものであつた。それで北京政府では宋の身元調べをして、彼が革命側のものであることは分つたけれども、惜しい才物だといふので、外務部から時の在日公使李家駒に訓令して宋を招かしめた、李と宋とは東京に於て數十回會見した。其事についても宋の胸中には一物があつて、假令北京に乘り込むにしても、大膽な考があつたのである。それを革命黨の仲間では、宋が變節すると思ひ非常に注意をしたが、然しそれは全くの誤解であつたのである。といふのは當時宋は李家駒と北京行の交渉して居る間に、或る同志の一人と密約し、自分がいよいよ北京へ行くと極めておいて、途中から其同志の一人を自分の身代として北京に乘り込ませ、其男に爆裂彈を投げつけさせる計畫であつたのである。其計畫を纏める爲に李との會見も長くかゝつたのである。處が當時宋の周圍には探偵などが附いて居つて仲間にもウツカリ話されず、一人で苦心をして居つたのであつた。そんな場合にも宋は其誤解を甘受して敢て辯解しなかつた。だから此事が後に仲間に知れるや、仲間のものは深く宋に謝し、且つ宋の人望は益々加つたのである。其後宋は實に運動の要部に立つて着々其計畫を進めたのである。

宋敎仁といふ人はどういふ人かといふに、身體は五尺八寸以上もあつて、顏も支那人に有り觸れた間の拔

けた顏でなく、眼も大きく、鼻筋も通つて、一言にして言へば容貌魁偉といふべき人だ。そしてなか〳〵考の緻密な人だ。一體支那人の通弊といふべきは、善い事があると、直ぐに有頂天になる。惡い事があると極端に沈む。そこになると宋も黄も共に時勢の產み出した人間といはうか、どんな事があつても極めて沈着である。今度のやうな機會でも起ると、外のものは前後左右の考なく、直ちに焦り立ち騷ぐのであるが、宋は決してさうでない。日本人なども矢張り輕擧の弊を免れぬが、宋に至つては支那人に珍らしく其弊が無い。一點でも合點の行かぬ所があれば、前後左右に思慮を配つて、決して手ぬかりのないやうにする。今日の黄の行うて居る大計畫は實に宋の立てたもので、宋は黄の智嚢である。

黄興はよく物を包容する大きな器だ。別によく切れるといふ譯でもなく、又非常な智慧者でもないが、よく人を容れる。之れも確かに時勢の產兒と思ふ。

宋と黄の殊によいと思ふのは、彼等は自ら其功に居らぬといふ點である。革命運動が段々進むと、黎元洪とか、湯化龍とかいふ人が、長沙を占領し、南京を占領するといふ風に功を樹てるものが出て來る。長髮賊の時もさうであつたが、地方〳〵分立した勢力も追々に出て來て、長沙は長沙人によつて占領せらる、廣東、安慶、其他皆其地方〳〵の豪傑に占領せらるゝといふことになるかも知れない。さういふ時に之を統一して其首領になりたいなどゝいふ野心があれば、其爲めに事を破る恐れがある。然るに宋も黄も、共に支那人に珍しくも獻身的な奴て、その氣遣ひは毫頭ない。

最後に孫逸仙の事を一言申上げてもよいが、革命黨中の或一首領が嘗て孫君を評して「ナニ孫さんは支那を革命して自分が大統領になる積りなんです」といつた事があるが、私もさうだらうと思ふ。缺點も固よりない事はないが、缺點は誰でもあるから、そんな小さな缺點は指摘せぬ方がよいと思ふ。只破壞的の時に彼壞し、建設的の時には建設に力を盡せば、辭退しても人民が自然に押し立てゝ大統領にしたといふやうなワ

シントンのやうな風でなくして、自分で革命して自分で大統領になりたいといふ心持があれば人物としては餘程價値を損するだらうと思ふ。從てあの人の德行などについても、私は極端な讃辭は呈し兼ねるのである。

△孫逸仙と黃興とを評す

内田良平

明治三十年頃から孫逸仙と懇意にして居る人は、宮崎、淸藤、犬養、私などであるが、私は極く記憶力の乏しい男で、古い出來事は大抵忘れて了つて居る。殊に支那人の名前などは一向に覺えて居らん方で、顏と名と別々に頭腦に殘て居るやうなものだから、私は實は批評などは御免蒙りたいのである。然し折角のお尋ねでもあるし、且つ孫逸仙は喰せ物だとか贋せ物だとか又は詰らぬ奴などゝ評した人があるといふお話を聞けば默つても居りたくない。て一寸思ひ浮ぶ事丈けをお話して見ませう。

或一部の人が孫逸仙を喰せ物だとか何とか非難をするのは、彼の地位に居つては免れぬことかと思ふ。何故かといふに、孫逸仙はいはゞ隱謀家である。隱謀家は其動靜を秘密にして、すべての行動を人に知れぬやうにする必要がある、所が幸か不幸か孫の名は段々高くなつて、世界一般に孫の行動に注意するやうになつた。それ香港へ來た。日本へ渡つた。又亞米利加へ行つたといふ風で、世人の眼は彼の動く所に附き隨ふといふ有樣になつた。それでは何にも出來やせん。孫が追々實際運動から遠かるやうに見えるのは此爲めてある、て彼が何か事を爲さうとする時には、他の革命黨の人よりも、更らに其行動を秘密にする必要がある。て或事件を或一味の人にのみ計つて、他の同志の人には計らぬといふやうな事がある。すると計られた方の人は喜んでも、計られぬ方の人は、孫に賣られてもしたやうに誤解して、孫はどうだとか斯うだとかいふ事になる。金の遣ひ道についても、事件の成行について

も同樣である。孫が一部から惡評を受けるのは右のやうな事が主因をなして居るので、孫の心事に至ては公明正大て、一點の疚しい所がなからうと思ふ。虚談をして金を造るに巧みな康有爲のやうな人物などは到底も比較になるまいと思ふ。

孫といふ人は學問も該博、智識も廣汎で、落着いた立派な紳士である。日本語は餘り出來ないが、英語は實に達者である。幼少の時代から布哇の宣教師に附いて學問をし、澳門て開業醫をやつて財産を造つたが、それは固より革命の爲めに蕩盡し、布哇に巨萬の富を持て居る兄貴から大分金を出さして革命に使つた。且つ孫が自ら陣頭に起つて革命を行はふとする決心のあることは一昨年の鎭南關の亂て孫自ら兵を督してやつた事ても分る事て、革命黨の大首領として耻からぬ人てあると信ずる。

黄興はどつちかといへば勇氣の勝れた人て、智謀の人てはない。從て黄興は實際運動の首領たるに適した人て、總ての人を包容するの度量がある。手段などについても自説を立てず、よく人の説を用ふる。

孫逸仙の長所であつて又短所と思はるゝのは、孫逸仙はよく自説を立てる。そして自分の思ふ壺へ來なければ事を發せぬといふ傾がある。黄興はさうでない。甲の人が軍隊から事を起さなければ駄目だといへば、よからう、やり玉へといふ。又乙の人が先づ我黨が團結して、種々の方面から呼應して起たなければならぬといへば、よからう、やり玉へといふ、又丙の人が先づ總ての方面に革命思想を普及せしめるが急務だといへば、よからう、やり玉へといふ風て、各自銘々をして思ふ存分の事をやらしむることが巧みだ。少しは其の間に自分の不本意と思ふ所があつても、それをやらせ切る。處が孫になると、それはいかんかも知れんぞこういふ風にした方がどうだと直ぐに自説を出す傾がある。黄興が各人銘々に思ふ存分のことをやらせるものだから、黄興の勢力が漸々盛んになつて來る。智謀に於いては黄興以上の人間が澤山居る。然し黄興は一方に於いて此等の人を纒めて一方には孫逸仙を尊敬し

て居るといふ有様てあるから、黄興は今日革命黨に於て非常に樞要な人てある。

又宋敎仁といふ人は黄興の唯一の智謀の人てある。其外何天烱とか張繼とかいろの〳〵面白い人物があるが、前申した通り、古い事は忘れて了ふ方てすから、此位て御免を蒙ります。

△長江一帶に於ける孫氏の人望

水野梅曉

私はまだ孫逸仙といふ人に逢つた事が無い。が今度の革命軍の起つた中清地方には十數年間も居つて、あの地方の狀況及びあの地方に於ける孫逸仙の聲望の大なることについては、大抵の人よりはよく知つて居る積りてある。殊に三年ばかり前から昨年にかけての湖南、湖北、江西の三省の旅行は、今日になつて見ると恰も此三省に於ける革命熱及び孫逸仙の聲望如何を研究するが爲めに歩いたかとも思はるゝ位てある。それて貴誌から革命黨員の人物評を求められたるを機として自分が旅行した三省に於ける孫氏の人望についてお話して見やうと思ふ。革命黨について從來私の研究した纒つた意見は、其中折を見てお話することに致しませう。

最初に私は江西省の萍鄕と袁州の方へ行つた。そこの學校へ行つて見ると、學生が集つて來て、「あなたは日本人てありませんか」と問ふ。「さうだ」と答へると「孫逸仙はどうして居ります」といふ。私はわざと冷然と構へて「私は知らん。然しどうしてあの人の事を尋ねるんだ」と問ひ返してやつた。すると「あの人は實に我々漢人を救ふべき大人物てある。あの人の外我々漢人を救ふべき人はない」と熱心に說き立てる。て、私は益々冷然と構へて「ても今迄、一向何にも仕事を成し遂げないんぢやないか。所詮あの男は成功の見込が無さうだ。それよりもあの男の首には非常の大金が掛けてある。いつその事、あの首を取つて金儲けをてはどうか」と訊いて見た。すると非常に憤激して、

「イヤ假令千萬の懸賞がかゝつてもあの人の首丈は取ることが出來ない。あの人こそは淸廷政府を倒して我々漢人種を救ふべき唯一の大人物である」といつて、恰かも孫といふ名前に醉うて居るものゝ如く見えた。

　それから軍隊の方へ行つて見ると、恰度、徵兵募集をやつて居る處に出逢つた。そこに日本の士官學校を出た將校が居つた。「どうです、兵隊はよく集りますか」と聞くと、「實に非常な勢だ。今や長江一帶を通じて、民族主義勃興の勢は非常なものだ。そしてみんな孫逸仙の風貌を想像して、其下に立つて漢人種の獨立を計りたいと希望して居る」と熱烈な口調で說き立てた。そして盛んに軍歌を歌つて演習をやり出した。處が此軍歌なるものは、革命熱、民族主義を皷吹するには、實に革命黨宣言書以上の效能あるもので、彼等が之を歌うて居る中に、自然に倒滿興漢の志氣を養成されるのである。淸廷に威福を恣まにして居る大官共は赳々たる武夫は國家の干城とか何とかいうて、太平樂て御座るのに、豈圖らん哉、其先生共は實にかゝる危險なることを計畫して居るのであつた。

　江西省の學界と軍界に於ける、孫のかくの如き聲望を知つたから、湖北省の方へ旅行して、宜昌、沙市、襄陽などへ行つた時は、今度は政治界即ち地方自治に熱中して居る少壯政治家の方面に於て孫がどういう風に思はれて居るかと試して見た。此等の少壯政治家は私を見て、「水野さん、此局面はもう何年續くでせうか」と聞く。「それは私にも分らん」と答へると、「然しもう只年數の問題だ、もう三年は持ちますまい、氣の毒だが此局面を持ち耐へる人が北京政府に一人もない」といふ。て私はわざとぢらして、「梁啓超のやうな組織的頭腦を持つた人があるんぢやないか。」というと、彼等は驚いて「あなたは康派ですか」といふて、「康有爲一派の奴は賣國奴だから、日本には都合よいかも知れません。然し眞に淸國を救ひ、漢人の幸福を增進する人は孫逸仙の外には一人もない。」といふて熱心に說いてゐた。湖北は其脈を辿つて政界の言論をよく／＼調べて見たが、革命思想の瀰蔓して居ることは驚くべきも

のて、且つ孫逸仙をば漢人種を救ふべき神樣の如く尊崇して居る。

湖南地方に於ける孫の人望、革命熱の熾盛なるはいふまでもない事て、此地方ては車夫馬丁ともいふべきものまても漢人の獨立を希望して居る。私が或驛の小さな旅館に居ると、其處へ學生がやつて來て、いろいろ革命の話をした。其れを傍に聞いて居た籠擔に向つて「ドウダ、今我々が話した事が分るか」といへば「分りますとも」といふ。て「お前共はどう思ふ」といふと、「どうかさうなつて呉れゝばよう御座んすな。先づ第一これが入りませんや」というて、イキなり頭に手を上げて辮髮を引張つて見せた。

孫が大人物てあるや否やは私は深く知らない。然しながら私は長江一帶を旅行して、學界、軍界、政界、果ては車夫馬丁の類に至るまて、調べて見た所によれば、其革命思想の瀰蔓して居る事、未見の孫逸仙を神の如く尊崇して居ることの甚しいのには實に驚嘆を禁じ得なかつたのてある。て孫逸仙の如何の人物かは論ぜぬとして、此人望、此尊崇を得たるものは決して只策とか略とかのみによるものてなく、是れ實に孫氏の有する天爵てあり、又天位てあると思ふのてある。

△孫逸仙は一代の大人物

宮崎滔天

孫逸仙は一代の大人物てある。悲しい哉現代の我日本には朝野を通じて彼に比すべきの人物がない。其學問、其識見、其抱負、其膽力、其忠誠、其操守何れの點に於ても、彼は現代の日本人の何人よりも傑れて居る。只十餘年一日の如く苦節を全うしたる點に於て犬養木堂の彼に比すべきあるのみてある。若し後世の歴史家が成語を以て彼を評すれば、其仁は天の如く其智は地の如しとてもいふだらうと思ふ。

世間往々彼の勇氣如何を疑ふものがあるが、其勇氣も亦遙かに尋常人を凌いて居る。こゝにそれを証すべ

き一つの面白い話がある。それは彼の三合會の頭目であつた鄭弼臣から聞いた事であるが、一體三合會とか哥老會とかいふ所謂秘密結社なるものは、皆無學文盲の獰惡なる者共だ。書は以て姓名を記すに足るといふ事があるが、此者共は姓名を記すにも足らぬ。只其頭目などには稍々作詩位の出來るものがあるといふ風であるが、此鄭弼臣は孫逸仙の學校友達で、一向勉強はしなかつたが、兎に角新らしい學問の臭ひを嗅いだ人である。此人について可笑しい話がある。此男が日本へ來て居る時分に、白首を一人引張つて私の處へ來た事がある。當時私は芝の愛宕下の對陽館に下宿して、支那の革命黨の連中や日本の豪傑と盛んに往來して居つた。そこへ鄭氏がやつて來て「かういふものを引張つて來たが、どうか二三日隱して呉れ。誰が來ても居ないといふて呉れ。殊に孫さんには秘密に賴む。」といふ事だ。私は此通り酒も好き、女も好きといふ方だから私なら與し易いと思うて來たのらしい。私は「よしよし」といふて秘密部屋に案内をして匿かしてやつた。

すると驚く勿れ、此先生それから三日三夜の間一度も室から起きて來ない。宿のお上に御飯はどうして喰べると訊いたら、御膳を持つて行くと、寢ながら喰べて居るといふて大笑ひをした事がある。恰度三日目に孫逸仙が私の處へ來て、「鄭さんは居りませんか」といふ。私は「居らない」といふと「や宮崎さん、どうぞ隱さずに逢はして下ない」といふて、非常に大事な相談があつて、二三日鄭の行方を尋ねて居るがどうも分らない。あの男の行く所は大抵極つて居るから、何時でも分るのだが今度はみんな探して見たが、どうしても分らない。こゝへても來て居らなければもう外に彼の居る所はない。是非逢はして呉れと賴む。でも私は鄭から孫に秘密にして呉れと賴まれて居るし、さればといつて孫の用事はなか／＼大事らしい。だから仕方がなくて、「孫さん、私數へて上げますが、あなた鄭さんを叱らないでせうね」と念を押すと「大丈夫です。鄭さんの人物は私よく知つてゐますから」といふ、それで私の後ろに跟いて來いといふて、廊下を通うて、例の

秘密部屋の前へ行つた。私が「鄭さん」と大聲で呼ぶと、「何です」といふ。それから室の戸をあけた。私は此通りの大男、孫さんは小男だから私の後ろにかくれて室へ入つて行く。鄭さんがムクリと床から起き上る拍子に孫さんが私の後ろから顔を出したのが見えた。アッといふて鄭さんは再び床にもぐり込んで、頭からスポリと夜具を被つた。孫さんは其處へ行つて「オイ〳〵鄭さん」といふて、夜具の上から輕く叩く。鄭さんは益々もぐり込む。て足の方から夜具を捲らうとすると女がキャッ〳〵と騒ぐ。此時の鄭さんの樣子は實に可愛かつたといふて、あとから大笑ひをしたが、鄭さんは兎に角起されて、着物を着て居ると、何とか何とかと孫さんと支那語で話を初めて、二人揃うて大急ぎて出て行つた。

話は思はず横道の方へ外れて了ふたが、此鄭さんに向て、私が嘗て斯ういふ問を出した事がある「君は何處がエラクッて孫さんにそんなに敬服して居るんだ」といふて見た、處が鄭がいふには、「私は實にあの人に感心した事がある。もうそれ以來あの人の爲めには、犬馬の勞は愚か、生命を捧げても、ちつとも惜しくないと思うて居る。それは明治二十九年に孫さんを私共が計つて、事を擧げやうとした事がある。其時陸東皎が軍指令官であつて、互に氣脈を通じて爆發しやうといふのであつた、處がいよ〳〵爆發しやうといふ前夜、事露見して、官軍の逆襲を受け、陸東皎は抑へられた。陸東皎の部下のものは泡を食つて、此事を告げに來て、早くお逃げなさいといふ。陳白さんなども慌てゝ直ぐに飛び出した。私ゃ激しく動悸がして落着いて居られない。處が孫さんは逃げない。ぢつとして居るそして慌てゝいかん。先づ同志とやり取りした電報や人名簿を燒けといふ。それを燒き終ると、爆裂彈を隱さなければならぬといふ。それから其翌日香港から五百の援兵が來ることになつて居つたが、默つて置けばこゝへ來てムザ〳〵殺されるからといふので、「事破れ中止した」といふ電報を打たせる。そしてそれが終ると、「飯を喰へ」といふ。飯を喰ひ終ると、召使の苦力

を呼んで、自らの着物を苦力の着物と着換へて、それから静かに、船着場の所へ行つて群集の中に紛れ込んだ。支那の船着場は大變人込の所だから此處へ入ればもう大丈夫だ。それから澳門へ行き香港へ行き、日本に來て、又亞米利加へ渡つた。それは孫さんが僅かに廿八才の時だが、其時の態度の落着き拂つて、大事に莅んで、深沈にして智略あるやり方には、私もつくづく感心して此人でなければ革命の大事を成し遂げ得ないと深く思ひ込んだ」と語つた事がある。

今では孫逸仙の名聲が世界に響き、境遇も非常に變つて來たから、彼は輕々しく身を處することが出來ず多く彼は隱れて居つて大計畫を策しなければならぬやうになつたので、彼に實際運動の矢面に立つ勇氣ありや否やを疑ふものもあるが、それは四十一年鎭南關に於て黃興等と革命軍を起した事を知らぬもの丶言である。當時孫は自ら陣頭に立て戰鬪に從事したといふ事は黃興の直話によつて分る。黃が曰く「私は鐵砲を打ちたいです。よく中ります。孫さんも鐵砲打ちたいてす。危いからあなたは出ていけませんといつても、孫さん出て來ます。そして打ちます。矢張りよく中ります。その中に負傷者が出ます。三町ばかりある所に孫さん水を汲みに行きます。負傷者に繃帶をします。孫さん看護長です。大變忙しいです」といふた事でも分る。又彼の抱負は自ら戰場に立たうといふ事にある事は、彼は支那の兵書は勿論の事、西洋の有名な兵書は殆んど皆熟讀して居る。那翁の傳記ばかりでも彼は何十冊となく讀んだ。そしてそれは皆戰術研究の爲めである。私が甞て或る日本の武官に孫を紹介した事がある。後其武官は彼を評して「イヤ、あの人はどうして戰術の黑人だ」といつて驚いてゐた事がある。

獨り戰爭の書物ばかりでなく、哲學書、政治書、經濟書、あらゆる方面に亘つて彼の讀書慾の盛んな事は實に驚くべきもので、平常自分からは滅多に口を開かず、人から話しかけられるまで、專念讀書に熱中して居る。傍らでドダンバタンとドンナ矢釜しい事をやつて居つても彼は平氣で本を讀んで居る。彼は別に道樂

はなし、讀書が第一の樂みなやうに見える。之についても面白い話がある。犬養木堂が一日彼に向て、「君は何が一番好きか」と訊いた。すると彼は直ちに「レヴオリユーション」(革命)と答へた。「イヤ君のレヴオリユーションの好きな事は誰でも知つて居るが、其外に何が好きか」と木堂重ねて問うた。すると孫は妻君の顏を見てニヤリ／＼して容易に答へない。「何だかいふて見玉へ」と木堂再び促す。すると「ウーマン」(女)と答へた。「これや面白い」といつて木堂横手を拍つて喜んで「次は」といふと「ブツク」(讀書)といふた。「コレヤ正直な告白だらう。君は第一の道樂は讀書だらうと思つたが、讀書の前に女をいふたのは面白い。之れは孫サンに限らんからネ」といふて大笑ひをして、「それ程好きなウーマンを抑制して居る處益々エライ」といふて木堂大いに感服した事がある。

孫逸仙は私のやうな懇意なもの丶所へ來ては、日本語も可なりよく話し、又時としては日本語で洒落などもいふ事があるが、自分では日本語が下手だと思うてゐるものだから、餘り近つきのない人には滅多に日本語で話さない。そして大抵英語でやる。私共は彼と話する時に日本語と英語と、時として支那語を交ぜて奇々妙々な話し振りをやつてゐた。彼が日本語でも洒落が出來るといふ一例をいへば、何時か頭山滿さんが烏森の桝田家に彼と陳白を招いだ事がある。其時に新橋の奇麗首がずらりと座に侍つた。然し孫は何時もの通り、酒を飲むでもなし、女に嬉戯ふでもなし直ぐ柱に倚りかゝつて本を開き出した。頭山さんは餘り孫さんに愛情がないとでも思つたか、孫さんに向て、「君は此處にゐる女の中でドレが一番別嬪と思ふか」と聞いた。すると孫さんは一寸一座に眼を配つて「みんな別嬪です」と答へた。「然しその中でも誰が一番の別嬪か」と頭山さんがまた聞いた。すると孫はまた「ドレもみんな同じに別嬪です」と答へる。其時頭山さんは自分の傍らに居た女を指して「この人が一番別嬪だらう」といふた。其女といふのは例の有名な洗髮のお妻で、その時は確か二度目に左褄を取つた時で頭山さんとも何か關係があつた時であつた。頭山さんは「さうです」といふだらうと待ち設けたらしいが、孫さんはつくづく見て「もう十年前はもつと別嬪でしたらうね」とや

つた。みんな手を拍つて笑つたが、お妻は「おとなしい風をしてゐながら、ひどいことをいひますね」といつて之も苦笑ひをしてゐた。

孫逸仙が日本語がよく出來ぬといふ事に關聯して一つ面白い事がある。當時孫は橫濱に居つたが急用が出來て、私の處から「スグコイ」といふ電報をやつた。處がなか／＼來ない。そして豫定よりも二時間も三時間も後れて來た。陳白が「どうしたんだ」と訊くと、汽車を乘り間違へて東京へ來るのを國府津の方へ行つたのだといふ。で陳白は「あなたが日本語を勉强しないからそんな間違をやります。これから日本語を勉强しなさい」といふと、孫は大喝一聲「オラア日本語を勉强するに日本へ來たのぢやないぞ」と呶鳴つた。

孫逸仙は巨額の軍資金を募集し、而かも其費途を總ての革命黨員に明かす譯に行かぬ所から、或は自分が着服して贅澤三昧をなすのぢやないかなど疑ふ手合もあるやうであるが、之れは全く孫の平常を知らぬものゝ憶測であつて、孫は友の窮乏を救つたり、或は目的の遂行の爲めには思ひ切つた金を出すが、自ら奉ずることは極めて質素で、酒は飲まず女遊びはせず、無駄遣ひなどは決してなさぬ。電車のある所は必らず電車に乘り、又俥に乘るにしても、チャンと賃錢を極めて乘つて金びらを切るやうな事は決して無い。又雨の降る時は勿論であるが、どんな天氣のよい時でも必らず外套と洋傘を持つて歩く人だ。これは雨が降つても何處でも歩き得るやうにする用意である。

又友人に同情の篤い事は驚くべきもので、鎭南關の事敗るゝや、彼は黃興と別れて新嘉坡に行き、黃興は再び雲南に於て事を擧げた。其時彼は黃興の家族の事を心配して、あとは女ばかりだから定めて黃興も心配だらう。家族は何とかしなくてはならんといふので、彼は新嘉坡から使を派して家族を探さした。けれども其時はどうしても見つからなかつた。あとで漸く居所が分つたが、黃興のお母さんがどうしても本國を去りたくないといふのでとう／＼支那を去らなかつた。此時なども女ばかりの處に男ばかり迎へにやつても如何かとて女と男と二人を迎へにやつたのであつた。彼が友達の家族の事まで心配して、而かも細かい處まで氣がつくといふのは、いよ／＼以て彼の革命黨の大首領たる資格あるを表明するものと思ふ。此の美點長所を擧ぐれば數限りなくあるが、以上の二三の逸話を以ても彼が一代の大人物たることは分らうと信ずる。

和歌

尾上柴舟選

細井よし子

○

ことごとく君に捧げし若き身の衰へゆくが見えてこしかな

いつしらず寂しや稲の刈られけむ秋草の花まづしげに咲く

紫蘇の花ちりてまづしき穂をもちぬ寂しや秋の日は白く照る

やゝなれし家のまはりにうちそよぐ紫の花なづかしきかな

なにとなく重たき髮に小櫛あてとづかねまへの日を思ひ見る

君がため厨に水をとりにゆくねまきの裾のかすかなる音

川岸の夜の並木の月あかり君が姿のやさしげに見ゆ

無花果の葉のはらはらと地にちれり寂しや秋を物思ひする

○　捫垣青花

夏くれば夏のこゝろをさびしめる身のおとろへをかなしがる哉

十八の夏も淋しく過ぎにけり木の間にうごく夕月のいろ

なに思ふともなく一樹のかげに立ち煙草吸ひ居る深き夏の夜

煙草とりすりたるマチのにほひ悲し月いづるまへの夜の郊外

みちのべの草に月さすうすあかり別れてしばしこほろぎをきく

さびしさや男ひとりが寝ざめたる片隅にきて鳴けるこほろぎ

○　細井魚袋

いとけなき兒等にまぢりて野菊摘む指ににぢめるうす黄なる色

紫蘇（しそ）の花散る秋の日は物うかり口髭すこしのびにけるかな

夜おそく夜霧にぬれて郊外にかへれば妻の灯と

もしてまつ
もろこしの葉に夕月のすべる頃泣かまほしくて郊外にゆく
やゝうゑし病あがりのからだをばやりどころなく秋草に投ぐ
ただ一人泣かまほしくて海にきぬ鷗の群よさやりあらすな
身も家もわすれてひとり河にきぬきつれは千鳥洲に立ちてなく

〇　安井竹美

わかれては男の身さへ泣かるゝをわけても汝はしぬびかぬらむ
別れなどつゆ思はずにとりし手がおはりなりけり夏の月の夜
しみじみと人の戀ひしき夜はふけてしげくも虫のなきつのるかな
雨はれし殘暑の後のひるごろにつよく匂へる萩のむらがり
秋もはやふかくなりけり別れゐの女よわれを忘れゆくらむ
人恨むありのすさびに灯籠など灯して若きひとの愁へる
さかしげに眸うるませて虫をきく少年のしる戀のたふとさ

〇　井田葉歌

湖にうつる青き灯かげのさゆらぎに泪ひそめて見入るあはれさ
空にゆく白き貰の煙程にうすくかなしき我が辿る道
柔らかき穗草にぬかをうづめつゝ遠く射的のつゝ音をきく
味方得し如も思はれ灯避けあゆむ男に近よりて行く

〇　木暮刀水

音に泣きてひねもすめぐる水車我が幸も無き嘗みに似る
靜づかなる晝の廂に餌をあさる鳥の數ほど落葉するおと
この二人思はぬ少しさきの世にかの日と月は生れたりけむ
秋の風うれひもつ子の前髮をいたくな吹きそいささかはよし

○　　　林　白愁　歌

愁ひつゝ街に出て行く海に行く人戀ひしさのわり無き夕べ

愁へつゝ木の間歩めば足下に涙の如く赤き花咲く

たまたまに流れし涙珍らしと掌に受け寂しく見守る

目さむれば仄に紅き灯うるむ見ゆ手もて掩へど涙とまらず

○　　　石田俊雄

色々の廣告ならぶ街のはしわかれ來し身に秋の風吹く

落ちぶれのほのかに見ゆる吾家のうら庭にさくコスモスの花

目の前にうかぶあまたの人の顏君のおもわのいちじろきかな

○　　　下浦潭水

幼子の指をはなれし風船の秋の空飛ぶ村のまつり日

まばたきの早くなりたる弟の眸それて涙灯に光るかな

○　　　村上義信

想思樹の木立に蟬の聲はして八月の白き日は吸はれ行く

汽車は今高原を行く白雲の地と境する高原を行く

眞晝なり八月の日の音もなく牧牛の群に照るがさびしき

○　　　松島落果

人妻の子の可愛さに抱き上げて橋の上より見る河の水

青く小さく松の果ひとつ手のひらにのこれり林いてし夕ぐれ

○　　　井筒千作

ぬきすつる錆びたるペンの如くにもいとも容易く捨てられし人

眉よせて君と歩みし山の手のとある垣根に咲きゐたる花

秋秋秋秋のなげきか朝顏は日日に細まり悲しみて咲く

○　　　沙東紅潮

日每〳〵なす事もなく寢てあれば氣紛れ心死な

んと思ふ
夜はきぬ「今日一日をなにせしか」吾れの答のおぼつかなくも

○　米田菊

秋の夕べ卓をかこみてうち默しもの靜やかに箸はこぶかな
初秋やうがひの水のしみしみとむし齒の內にしみ渡るかな
やうやくに心靜めてねむる夜のさびしき部屋にちんちろりなく

○　香取升二

荒み行く心の底の何處やらに少年の戀の殘るあはれさ
同胞をきらひて獨り川べりにかみて遊びしすかんぽの味

○　奥屋白暮

『吾が友よ來れ』とばかり呼ぶがごと秋風吹きぬ聲のなつかし
暮れなやむ野にところどころ刈草の高く積まれし秋のさびしさ
高く浮く雲の隙より陽はそそぐかくて暮れざる

秋の日の山

○　外山廉三

新らしき疊の匂ひなづかしみねころびてみし四疊半かな
いつのまに亂れそめけむ此頃の心ぞと思ひかへりみをする

○　堀弋二紘

日にやけし腕の皮膚のほのいたみ覺えてひとり盃をとる
遣る瀨なきこのさびしさをずてに來し野にあかるくもきりぎりす鳴く

○　松井綠水

呼び鈴のとぎれとぎれのたよりなき宿直の夜の室の寂しさ
ものもなき膳に向ひておとなしう父子ふたりが箸運びけり
ちち色の水草の花少しさく水のほとりの女の家よ

○　青柳朝風

何となく潤ひのなき家に飽く大人ばかりの寂しさに飽く

熟れ過ぎて酸味のぬけたる果物のくどき甘さに似たる甘さよ

○ 齋藤甫

朝雨は桐の大葉に降りそゝぎこゝろしづかに秋は近づく

畑ゆけば茶ほのじろう夜は明けぬこゝろの濡るゝつゆ草の花

○ 福光紫邦

いつかしら秋となりけり旅に得し歌の心の懐かしうなる

杉たてる丘のあかるさ緋の色の襦袢ほしある窓のあかるさ

○ 若杉零果

遣るせなき雨垂の謠きゝながら障子の桟の淡あかりみる

青白い廣き圓天床に音たてゝ旋風機めぐる幕間のさび

○ 奥屋白暮

友ら去りしわが校庭の夕暮にしみじみ思ふ秋のわびしさ

黄の波に素絹の如き陽のそゝぐ田の穏なる神無月かな

○ 中山星魚

酒醸すやうに林檎の匂ひして茶の間は春のめくもりに満つ

藍の香と白粉の香と罩めて居つ夏の夜なりき緑日なりき

○ 日隈萩泉

寝顔つつむかなしき夜のうすあかりうちふるはして蟋蟀の鳴く

こみあぐる悲しき胸を抑ふるにやうやくなれて秋にしたしむ

○ 石橋三男

姉来ずばよき兄君と今もなほ思ひ居なむを寂しきわが家

○ 伊藤蓮二郎

合はず合はずあはざる性をいづくまで延べ行く可きぞ清く別れむ

たよりなきこの天地にいつまでを生きながらへむ何を欲りして

○ 山本玉洗

燭せんとマッチ擦る手にかゞやける金の指環の

なまめかしさよ

○　赤松星岬

茄子の實をちぎる手先にひやひやと沁み心地よき秋のあさつゆ

吾と言ふ獸をさして吾しらぬ愁ひ集つまる秋もかなしや

○　本間砂丘

切株と疎に見ゆる耕土とが痛がゆき程心にしみぬ

○　高山白楊

つかれたる瞳に笑みを見するときつとかなしみの來るかはたれ

君がセルわがネルの肩相並ぶ頃とはなりぬべコニヤの花

○　松見芳石

緣日のどよみの中の油煙をば先づ遠くより見たるかなしさ

○　津田月穗

知らぬげによそほふことの巧なるかしこきに過ぎ胸やすからぬ

ことさらに君泣き給ふかく思ひかく思ひつゝ君をなぐさむ

○　かずを

疲れたる身を道端に投げし時首にふれたるしろき草花

○　佐野珂村

聲あげて思ふが儘に泣きて見む悲しむによき木立の中に

○　高橋源左衞門

秋雨は我家の外の桐によりすゝりなきする我妻のごと

○　宮内柳芽

つばくろのつとすぐることよき歌のふと浮ぶごと二つみなよし

○　米田菊

小供らのしきりにさわぐゆふまぐれほのかに紀伊の山燒くる見ゆ

○　村手晃陽

ニムフニムフハイネの唄のローレライ眼すとしくよくうたふ君

○　雲の城

下宿屋の黄なる疊に横たはり人思ふ夜をこほろ

ぎのなく

○　宮村哲雄

秋風かなんぞと人のさわぎたつものゝあはれの誘ひ來しかな

かゝることと再びあらぬ憂ひなど想はざりしが今日となりぬる

悲しみに抱かれ涙にいたはられ秋雨の夜をすごす淋しさ

柿の實の赤きが一つ碧空に淋しく浮ぶ小春日の午後

○　上田英夫

歯磨粉つと口にせるあけがたのうすくらがりに秋の虫啼く

○　國府田柊花

橡の葉の小動ぎもせで黑くなる秋の夕はわりなく淋し

○　德島杜の子

島人の麥搗くおとのすがすがしあかつきの星消ゆとまたゝく

○　唐原曉雲

もてあますかなしき身をば草原になげ出して見る山の明るさ

應募和歌は
東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

黍

高田蝶衣選

議決常に兩端を持す黍の主　波月
黍の秋惡食に奴婢出代れり　同
奴婢が勞增給に慰す黍の秋　同
又も檢擧の累を耻づ黍の主　同
機女募るに甘言弄す黍の秋　同
舊友を訪へば敬遠す黍の秋　同
黍の秋懇請に夜學の師となりて　同
不平殘る納得の歸路を黍そよぐ　摘星辰
禮樂を抛つて黍の月に居る　同
小著世に問ふべく黎の門を出し　同
風の黍野月下に醉へる海の如し　同
地藏洗はん水運ぶ黍高の道　同
黍通れば咎むる人も黍秋す家　白靑
師の來ます例刻を黍餅もして　同
黍餅の座に解雇せる婢の事を　同

髮染めの愚を知りぬ黍秋となり　同
高黍の風日頃沼釣れずなる　芋郎
布につゝみ行く囮籠黍の路　同
庵號をのみ呼ばれ住む黍の秋　同
黍の中四車行く路白う見ゆ　同
捨つ塵の肥利きて庭前黍高し　望羊
巨樹雲を誘ふと黍を飾ひ急く　同
葛藤避けて黍の小寺に寄食せり　同
窗前に梧桐あり黍も穗垂れよき　同
遺壘今犂鋤の旁午や黍熟れて　木犀
新船に帆風送るや島の黍　同
盆地いふ溫泉鄕や黍照りて　同
藻にも似てそよげる黍に空澄めり　同
唐黍に風あり鷄の尾を逆に　柳子
閑談に莫蓙敷けば黍戶にあたる　同
せり負けて馬戾り來ぬ黍の風　同
成竹を期せしも筆澁る黍熟す頃　國郎
史蹟とも知らて來し黍に浪打てり　同
偸安過ぎし我に燈冷たし黍の宿　同
鼎銘も古りにし黍の小家かな　朱星
御嶽戾り勞ふ宿や黍を燒く　同

一寺覆ふ森影や黍の夕されば　同
風無きを噴煙に見て黍を摘む　翠郭
黍の里帆に織るか糸繰る戶每　同
退廳を行樂す裏畑の黍　同
門邊黍の夕陽に掃かん愛馬の脊　愛香
買ひし山に杣入れも黍熟るゝ頃　同
比良に雪來て捨作の黍刈りぬ　綠羊
石工の褥黍殼も盜み敷く　同
急使立つも坐礁の事や黍の鄕　蒼蛇
濱墓地へ黍の徑や居所もあり　同
爽に續く會の人集り黍高し　丁字
黍たけて幾度か僧の秋を言ふ　同
黍酒に出來祝せん日晴れたり　吼天生
雀合戰ありし日の夕黍刈れる　同
唐黍も爐に喰ひ僧衣ほやけたり　三石
黍の穗や畵師訪ひし晝を小雨せり　同
崖近かの黍の大畑燒落の宿　白幽改青輪
里鍛冶や夕凪黍垂れ荒ぶ中　同
自炊僧に零餘子煮しやる黍の家　楚丘
黍殼の小屋建てゝ忙や野邊泊　同
鴫場近かを鳴く鳥や黍に朝日照る　都月

黍蔭の釣半日婚前を忘れたる　同
僧送る歸依衆や黍を野分ふく　神風
牧牛を説く流人や黍の宿　同
黍に取る酒の香に醉ふ我なりき　兎國
守護札の柱を北げて黍枯れぬ　同
招魂の假宮や城外の黍伏す野　紫皐
醉へば狂體放吟す黍畑の主　同
驚鳴くも宵月や黍晴れの里　志山改宙斗
槽櫪に朽つる恨や黍の秋　行々子
破門など期す事に黍夕下山せり　象眼
黍餅を流人に惠む島司かな　寒山老
黍殼や夜寒の陣にもえしぶる　紫明
人突きの逃げ牛追ふや黍の秋　愚案
高黍や走り帆月を摩し去れる　芳葩
產馬名地黍常食の村とこそ　六絲
黍蒸すやせがむ子のなき淋しさを　秋紅
地震に竹林へ逃ぐる里人黍の秋　胡盧
濱見えの家棲や黍畑のあり　孤風子
地酒酌むや黍炊ぐ夕べ來古る君と　曉卯
大がらの機女を献ずや黍の秋　美田
熟れかけの黍腐らすや彼岸時化　紫浪
入佛式濟む鐘や黍折りの風　靜濱
黍畑に祖道の宴や鳥の群　流水
古墳裏む雜草の丘や黍高し　夏雪

課題　除夜　十一月十日〆切
初曆、古曆（新年號）十二月十五日〆切
規定　▽一人卅句限▽新年號は四十句限〆切繰上▽用紙半紙▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛

雜詠　蝶衣

棟折れの寺長尾雨に椎まじる
蟻の害木根に鹽俵卷く殘暑
關せざれば百罵休み秋を我訪へり
流俗と絕つ暫や黍の味
媚びん爲の他を罵りか夜を長み
婦と行けば童もはやす秋暮れの町
朝顏や客來ん占の竈火鳴り
芋の葉の羽ばたき風や臼匠
右文の王を謳ふや月の秋
長き夜や露眠の客に逢ひて拉す盧

評論

長江の動亂

武昌の亂、燎原の勢をなし、四百餘州震撼す。蓋し滿漢間の惡感、清朝廷の秕政、民主思想、之が原因たらずんばあらず。

蓋し漢人より見れば、今の朝廷は夷狄の朝廷也。所謂華人の朝廷にあらざる也、少壯慷慨の士、回天の偉業を志すもの、叛意を包藏するに至る、亦何の怪む可き所ぞや。況んや廟堂の顯職、日を逐ひ滿人に歸し、加ふるに中央集權の勢、甚しうして、地方官の不平、時と共に大なるをや。若しそれ朝廷の秕政に至ては一々擧證するの要を見ず。何となれば秕政なるものを擧證せんよりは秕政ならざるものを擧證する方、却て容易なる程なれば也。次ぎに革命黨員間の民主思想（支那一流の特別臭味ある）の如きも亦深説する迄も無かる可し。

吾人は竊かに革命黨員の心事を憐むと雖も、動亂の永續は敢て欲する所にあらず。袁世凱の再起、岑春煊の重用等、相竢つて、速かに平治の運に至らんことを望んで止まず。

然かも翻つて想へば、今回の叛亂は其成否如何に係らず清國政府に一箇の教訓を與ふ可きこと疑無し。何ぞや、正直に議院政治の實現を期するの利益なること是也、人民に自由を與ふるの急務なると是也。換言すれば、民を和せざる可からざると是也。論より證據、袁世凱出盧條件は之を證明して餘りあるにあらざる乎。

中清の亂、猶論ず可きもの多し。然かも本誌上他に之が詳論を見る可きを推して、今玆に多く言はず。

メーテルリンクと賞金

文豪モーリス、メーテルリンク、例のノーベル賞金を受く、之を聽くもの、慶賀せざるは無し。

然かも賞金てふ尺度に依りて度られざる可からずとせば、文學者も亦憐れむ可きの極なるかな。

英帝印度行

本月上旬英帝倫敦出發、印度に向ふ筈。蓋し是印度皇帝戴冠式(十二月上旬擧行)に列せんが爲め也。不安の印度が、新帝を迎へて平安の印度と化するや如何。吾人は其然るを得んことを望んで止まず。

伊土トリポリ戰爭

一

八月三十日、伊國巡洋艦、土耳其驅逐艦を擊沈し、戰端茲に啓かる。歐洲驚駭し、世界憂懼す。知らず事遂に此悲運に至れるは何故ぞや。

伊太利の爲めに辯ずるものは曰く、青年土耳其黨執政以來、權力回復に汲々として、行ふ所排外の性質を帶ぶ。現にトリポリの如き、伊太利商人の權利、屢々侵害せられ、殆んど救ふの途無きを見る。伊太利は自己の利權保護の爲め、依然トリポリを土耳其領たらしむることを得ざる也と。土耳其の爲めに辯ずるものは曰く、土耳其はトリポリに於て伊太利人を虐遇せず、他國民と伊國人の間には何等の差別を設けざる也、蓋し伊太利は、是迄寧ろ何かな好口實を設け、トリポリを占領せんと欲して、未だ遂げ得ざりしに外ならず。然かも時日を空費せば、併呑の機會を失はんことを恐れ、無理に戰爭を挑發したるものに過ぎずと。

吾人は兩者の辯を見て、共に多少の眞理を含むを覺ゆ。思ふにトリポリの地、面積四十萬方哩、人口一百萬、其一部は牧畜に適し或は農物に適す、小麥、サフラン、棗、煙草を產し、羊毛、棉花を產し、象牙、駝鳥毛、護謨、硫黃、曹達を產す、加ふるに北阿弗利加の土耳其領土中、埃及已に事實上英國に歸したるを以て、殘留するもの、獨りトリポリあるのみ。己に斯くの如くなれば、一九〇八年青年土耳其黨が政權を得て以來、トリポリに於ける行政的基礎を確立し、外國の政治的勢力を排斥し、以て自ら堅うせんとするは、豈自然の勢にあらざらん哉。又伊太利より見んか、地理上トリポリとは地中海を隔てゝ相對す。此地にして自ら占領せず、他日他の强國の手に落つることあらば、自國の危險亦決して少しと言ふ可からず。況んや歐洲人中トリポリに在留するもの、伊人を以て最多となすに於てをや。況んや亦一九〇〇年伊佛協約成り、伊國

は、摩洛哥に於ける佛國の優越的地位を承認する代りに、佛國も亦トリポリに於ける伊國の優越的地位を承認したるに於てをや。然らば則ち摩洛哥に於ける佛國の利權問題確定せんとするに當り、伊國もトリポリ占領を企てたるは敢て不思議とするに足らざる也。而して一方に利權回復に汲々たる土耳其は、遂に伊太利の要求を承諾せず、愈戰爭を見るに至りしも、亦怪むに足らざる也。

二

然らば則ち、勝敗の數は如何。恐らくは何人も伊國の成功を疑はざる可し。何となれば兩國にして歐洲本土に爭はざる以上、土耳其海軍の微弱は萬事を決定するものなれば也。換言すれば伊太利は自由に軍隊をトリポリに派遣するを得れども、土耳其は軍隊は勿論、彈藥、糧食をも輸送することを得ざれば也。

左らば伊太利のトリポリ征服は容易なる可き乎。吾人は爾か思惟せず、他無し港灣の占領は容易ならんも、奥地(ヒンターランド)の征服は困難ならん。蓋し同地土民は回教徒として寧ろ土耳其に信頼す。基督教國たる伊太利の統治に對しては、必ずや我臺灣の土蠻同樣の反抗を試みずんば止まざる可き也。

加奈太の新首相

加奈陀内閣更迭し、保守黨領袖ロバート、ボルデン氏起て首相となる。ボルデン氏は如何なる人ぞや。

彼れ一八五四年ノヴ、スコチヤに生る。即ち正に五十五歳也。少時法律を學び、辯護士を業とす。其政黨趣味は最初自由黨に近かりしが、實際的政治問題に會するに及んで、意見寧ろ保守黨と合するを發見し、轉じて身を保守黨に置く。而して一九〇一年、彼はチヤルス、タッパー氏の後を繼ぎて保守黨首領たりしが、數年前加奈陀議會が在野黨首領に俸給を與ふる法律案を可決し、彼又之を辭せずして受くるや、天下の議論紛々彼を非難し以て自由黨政府に買收せられたるものとなしたりき。然かも彼以爲らく、方今の政黨領袖は多く富豪の後援に依りて生活す。從つて一旦身を政府に置けば往々富豪の頤使する所となる。寧ろ如かず、國費を以て在野黨首領を支へ、其節操を全からしめんにはと。依つて彼は平然意に介せず、引續き之を受け、次で非難の聲も亦收りたりき。

彼は親英主義者也。依つて今回の米加互惠條約の米

國に有利にして將來英加分離、米加合併の先驅たるを見るや、彼は猛然として反對せり。而して九月下旬總選擧の結果、勝利保守黨に歸し、彼今や首相となる。是即ち其略歷也。

然らば則ち彼の執らんとする政策は如何なる可き乎。母國及加奈陀間の密接、海軍の充實等最も其力を致す所ならんか。從つて其の就職が英國に歡迎せられたるも、毫も怪むに足らざる也。

墨國大統領選擧

曾つて革命軍將として、墨西哥大統領デアス氏を放逐したるフランシス、マデロ氏、十月一日墨國大統領に當選す。誰か亦自然の成行となさゞるものぞ。

然りと雖も吾人は彼の爲めに痛惜に堪えざる一事あり。何ぞや。同じく大統領候補者たりし政敵レエスを壓迫し、之を國外に奔らしめ、今や叛旗を飜へさしむるに至れると是也。顧みるにマデロ氏が自ら革命軍を起したる動機は、實に昨年大統領選擧の際、ヂアス氏に壓迫せられ、禁迫せられたる爲にあらざりし乎。人しマ氏を評して「己れの欲せざる所を人に施す」の類と謗るも、恐らくは一言辯明の辭無かる可き也。

米國の淸艦歡待

淸國軍艦海圻、紐育に至るや、欵待最も極む。蓋し蝦を以て鯛を釣るの猾策也。

軍艦建造か。軍艦建造か。此處少焉らく天機漏らす可からず。(懷沙隱客)



第五回文部省美術展覽會に於て予の最も感心した作

右の如き標題を掲げて、(一)日本畫(二)西洋畫(三)彫刻とし、各部について一つゞゝ作品を擧げ且つ其の感心せらるゝ點に就いて簡單な説明を附せられんことを畫伯及び批評家諸氏に求めて、其解答を得たのが、即ち次に載つて居る所のものである、往復はがきで三四十名のお方に願つたのであるが、一つは餘り匆卒であつたのと、一つは或は旅行中、或はまだ行つて見ぬといふので、僅かに十三名士の解答より外得られなかつたのは編者の遺憾とする所である。玆に謹んで右御解答を賜つた諸名士に感謝します。(二十五日編者しるす)

○　齋藤與里

まだ一度しか見に參りませんからお問ひに答へる事は出來ません。然し

(一)秋草(尾竹竹坡)の根氣

(二)インスピレーション(鹿子木孟郎氏)作者の態度

(三)千仞の谿(白井保次郎)ギリシヤのセリゴツト邊て堀り出した、四世紀頃の彫刻を木刻(キボリ)てやつた點などには感心しました。

右御返事まで

○　木下杢太郎

復啓、貴問に對して適當な御答をするのはむづかしい事と思ひます。西洋畫てはしかし南薫造氏の「瓦燒

き」といふのが大へん氣持の好い繪と思ひました。あれは藝術家的の氣稟も理解も趣味もよく現はれて居るやうでした。但し赤の色彩諧調には同情が出來ませんでした。また上手な繪と云へばあれより上のがいくらもありました。日本畫は更に流派も多くアクサンッュエエする所も從つて異つて居りますから、數ある中から「最も感心した作」などを選み出すことは一層困難でせう。彫刻では朝倉文夫氏の「産後の猫」といふのが面白かたが、線だの凹凸(モデレエ)だのは月並です。やはりコンスタン・メニエエ臭いが藤井浩祐氏の「石割」の方が氣に入りました。結局藝術品と云ふものは、量のものでなく、値のものであるから一定の標準以上ではもう優劣を論ずるわけにはゆきますまい。昔ゲエテが羅馬に居た時フリイス伯爵といふ人の所で伊太利亞の美術商や文學者連が集まつて、タッソオとアリオストオ、ラフアエロとミケランジエロとどつちがえらいかと議論したといつて嘲つて居ります。そして「人間といふものは窮屈なものだ。いくつかの大きいものに出かはすと、それを種類の違つた大きいものとして平等に評價し、識認する事が出來ないのだ」と嗤つております。不盡。

十月廿四日朝。

○　正宗得三郎

御尋ねの感心したる作品は無之殊に一枚づゝ撰み出す事は出來がたく强て好きなる作を申上ぐれば左の三點に候

寺崎廣業氏「支那山水」の筆。有島壬生馬氏『宿屋の裏庭』の色。藤井浩祐氏「石割」の調子を好み候。

○　林田春潮

(一)日本畫　結城素明氏作『囀』

菱田春草氏と異れる立ち場より出立して新らしき日本畫を作り、而かも、それが能く完成されある點

(二)西洋畫　南薰造氏作『瓦燒き』

形式上のコンヴエンションに捉はれたる作品多き西洋畫の中にありて、能く自己の箇性を發揮し、豊富

なる色彩と充實せる內容とが、相俟つて、淡く、長閑な、快い氣持を味はしむる點

(三)彫刻　米原雲海氏作「專念」

クラシカルの巧妙なる技巧は材料及び題目と能く調和して、沈んだ、淋しい、一種のローマンチックムードともいふべき情趣を現はし居る點

○　中村不折

拜復文展出品日本畫及彫刻は未だ熟覽不仕候間御返事申上兼候西洋畫は我々審査委員として不感服のものは皆落選せしめ現今出品のものは悉感服仕居候もの丶みに候此段御回答に及候

○　黑田鵬心

あまりの惡作なるに感心したるもあり、それを臆面もなく出品されし點に猶更感心したるもあり、此の人の作にしては非常の出來榮と感心したるも尠からず候。併し藝術的價値の偉大に驚嘆し感心せしものは一つも無之候。而して御出問の意味は此の最後の點に在りと存じ候ゆゑ甚だ御回答に苦しみ候、又多少感心しても、其の內特に一つを取出すは非常に心苦しき事に御座候。併し強ひてと云はるれば(一)日本畫にては大觀氏の「山路」をとるべきか、多くのものが模倣を事とし、會々創意ありても固くちゞこまれるに反し、大膽なる手法を試みてしかも相當に成つてゐる點を感心いたし候。(二)西洋畫にては藤島氏の「幸ある朝」の繪具が眼につかず、溫き感じのする所、云ひ換ゆれば垢拔がしてゐる所に感じ候。終に(三)彫刻は新海氏の「一致」これは意匠が面白く、題材と材料の表現との調和せる點、手法等に感じ候。以上。若し好ましきものと云へば又自ら別の事と御承知被下度候

○　結城素明

拜復西洋畫にて和田英作君の「くもり日」日本畫には平福百穗君の「赤茄子と芋」彫刻は新海竹太郎君の「一致」か木彫「荷車」の小品餘所行てない不斷着のまゝ

他の芝居をして居るのと對しことに嬉しく別ても「くもり日」の圓熟したる技術に感心して居るものに御座候不具

○ 嶋崎藤村

また私は今度の諸作品を見る折がなくて居ります。私は性來繪が好きて、好ましい作品の前には半日ても眺め暮したい方てすが、どうもユックリした氣分て展覽會場には居られないやうな心地がして未だに足が向かずに居るところてす。

○ 中澤弘光

拜復。小生は病氣其他の事故て洋書の外はついまだよく拜見致して居りません。日本畫には四五枚好きな畫がありますが、其内一つどれと申上ぐる事はむづかしい。彫刻ては「專念」あれは大好きてす。「產後の猫」も面白いと思つております。

○ 德田秋聲

日曜日のことて、場内雜踏のなかをざつと瞥見したまてだが、最も目に殘つたのは

(一)日本畫ては大觀氏の「山路」？ 何の拘束されるところもなしに自分自身のものを自由に描いてあるところを好ましいと思つた。

(二)西洋畫ては有島氏の「旅館の裏庭」とか云ふものに心を惹かれた。氏や南氏の畫には、他て見るやうな暗中捜索の危つかしげな處を更に見受けない。南氏のは見逃した。

(三)彫刻は見なかつた。僕には木彫の面白味は味へるが、塑像の方は見ても解らないからてある。まだ木彫ほど完成した作品がなささうにも思へる。

○ 山本森之助

一日本畫 囀 結城素明作

一彫刻 專念 米原雲海作

小生は右二點を選び度候
西洋畫に就而は職責上緘默を守り度候

○上司小剣

御問により態々上野へ展覽會を觀にまゐりました。折柄の日曜て、藝術を愛する多くの男女の群に遮られて、折角の名畫も半分より下はよく見えず、そこ〳〵に觀て過ぎたる所感を錄すれば、御尋ねの『予の最も感心したる作』は『無く』、所謂『ルウヴルの赤ノレンの下や金メッキの枠の中に屏息してゐる憐はれなる藝術』と云ふ言葉を思ひ出したゞけてす。其の中て巧拙は兎に角、稍私の心を惹いたのは（諸大家の作を外にして）日本畫ては金森觀陽と云ふ人の『おどり』のボウッとした淡い色と、西洋畫て三上知治氏の『初秋』と、それから、彫刻ては池田勇八氏の『川マデ』が小ひさくて、私たちの書齋を飾るのに手頃だと思ひました。（十月二十三日朝）

○平福百穗

一日本畫　今一と息といふ處だが松林桂月の秋山晩晴をとる
二西洋畫　山下新太郎君の窓際
三彫　刻　石井鶴三君の荒川嶽は表情に勝れた點を見出す

初對面錄

饒舌子

△大浦兼武子

後藤男は常に大浦子を「蝮の鎌」と呼んで居るといふ噂がある。又私が嘗て政友會のある有力な政治家に大浦子の批評を求めたら「彼は桂派の犬鷹の雄である、予は彼を評するを屑とせぬ」との答を受取った事がある。又一部の人は「大浦子はよく恭謙士に下る」と褒めて居る。又之を批難する人は「恭謙士に下るは、彼無學なるが故に下らざれば衆心を得難きによ」るといふものもある。私の頭の中には彼に逢ふ前に「蝮の鎌」「桂派の犬鷹」「恭謙士に下る」「無學なるが故に恭謙」などゝいふ、いろ〳〵

な意味の言葉が離れ〳〵になつて存在してゐた。

其外私は勿論、大浦子が巡査上りて、陸軍の少尉か中尉の肩書を持つて居る人で、警視總監の時は辣腕を揮つた人で、前後二回の桂内閣では最も有力な一人で、彼の見識や人物も、位置の上るに從つて段々上つて來て、今居の彼の發展も頗る注目すべき人である位の事は知つて居つたのである。

彼の寫眞は雜誌の口繪などで私も幾度も見て居る。然しまだ一度も逢つた事がない。あの威厳ある、而かも何處か福々しい、日本の政治家の中では、先づ最上の部に屬し相に思はるゝ寫眞の顏は果して實物と餘り違はぬであらうか。屢々寫眞に騙されて、實物を見て、丸で別人のやうに感じた事の經驗の多い私にとつては、その事も多少氣にならない譯に行かなかつた。

某氏の紹介を持つて朝の八時頃に子の玄關に立つた。書生が出て來てお留守だといふ。仕方が無いから名刺に用事の大體を書きつけて、再訪を約して歸つた。それから一二度電話をかけて見たが、何時もお留守だとの返事だ。今度は朝の七時頃にかけて見ると、今散歩に出て居るが、然し歸れば直ぐ外出することになつて居るといふ。若し逢はない積りかも知れぬ、それならば幾度電話をかけても無駄だ。本郷から麻布まで出て行つて空戻りするのも感心しない。思ひ切つて了はふかとも思つたが今一遍と思ひ返して、それから二三日經つてからまた電話をかけて見た。今日は居りますから直ぐお出でなさいとの返事だ。て再びいろ〳〵な人の評判を胸に浮べながら再び彼の玄關に立つたのは十月廿一日の午前九時半頃。

僕の名刺を受取つて奥へ入るまでに五六回も頭を下げた、鄭重な女中の姿が見えなくなつて暫らく經つと、どうぞお上り下さい、只今來客中ですから、一寸こちらでお待受けを願ひますといふて玄關の右の方の一室に案内した。

成程質素なものだ。噂の通りだ。六疊の間に一つの卓子と三四脚の椅子を置いた限りで、飾りらしい飾がない。幅物も扁額も目につくやうなものがない。床の間には十二三册の書物があるが、それも和綴のものや寫眞帖のやうなもので、金ぴかのものや、横文字のものは一册もない。カチ〳〵〳〵と鳴つて居る置時計も木の框の中に入つて居るジミなものだ。第一、卓子も椅子も何の裝飾もない、極くお粗末なものだ。只篠筵の上に敷いてある絨纏は日本のものぢやないらしいが、然しこれも金目のかゝつた、趣味の多い品とも思はれなかつた。

十分ばかり經つと、大變お待たせいたしました。どうぞこちらへといふて書生が二階の方へ案内して呉れた。梯子段を上り切つて、指し示された右側の室の方へ向くと、そこの障子が一尺許り明いて居つて、其明いた所から、チラと子爵の顏が見えた、子爵はニコリ笑つて居られた。

私が初對面の挨拶をして用事の大體を簡單に話した。用事といふのは物價騰貴を如何にして防ぐかといふ問てある。それをいふと、子爵は右の平手を乳の高さ位の所で二三度横に振つて「イヤ〳〵もうさういふ問題

は見ても私などには分りません」といはれた。そしてそれないふ間にこ〱笑つて居らるゝ。農相の椅子に長く倚つて居られた子爵が、こういふ問題は丸て分らぬといふのは、餘り不見識ぢやないか、といふやうな考も一瞬時胸に閃いたが、然し子爵のニコ〱笑つて居る顔には、充分の愛嬌があつて、怒る氣にも、侮る氣にもなれなかつた。「ハヽア此調子で人を手懐けるんだな」とも思つて見た。然し矢張りそれを惡む氣にはなれなかつた。そしてつく〲子爵の風體を注意して見た。顔は寫眞で見たよりは少し瘦せて居る。右の目尻の所がちよと、爛れたやうになつて、寫眞よりも少し元氣が衰へて居るやうにも見える。鐵無地の綿紬の羽織に、大名縞のセルの袴を穿いて、幕府時代の劍術の指南のやうな風體にも見える。然し絶えずニコ〱笑つて居られて、其笑顔には小供も懐くやうな愛嬌がある。その强いて拵へたものでなく、自然に出るやうな愛嬌のある顔を見て居ると、これが、辛辣な、時として惡辣な手腕を揮ひ兼ねかつたと噂せらるゝ大浦子かと思へば、妙に異樣の感に打たれた。

子爵は、此問題はなか〱私共に分らんと逃げられて、どうも物になりさうでない。で私も其時迄聚つたいろ〱な人の說をかい摘んで、物價騰貴の原因は斯く〱だ論ずる人が多い。その批評でもよいと促した。すると子爵は稍々眞面目なやうな態度をとつて、此問題はなか〱六つかしい。私にはまだ確定した意見がない。成程原因はさうかも知れん。然し原因は深く問はなくてもよい。如何にして此騰貴を救ふべきか、之れが第一の問題だ。私などは朝にあると野にあるとを問はず、言一度口を發すれば必ず其實行を期せなければならぬ。實行の出來ぬ空理空論は何等の益が無いと思ふ。何れあなたの方の諸家の說を發見して私の意見も定ればお話してもよい。此問題は重大な社會問題で必ず來月でなければならないといふ事もなからうから今少し待つて下さい。と答へられた。其原因を除く所に防止の策も見出さるべき筈だ。私が原因のみを擧げて話したものは、さう思ふたからである。子爵の原因は原因、防止策は防止策といふやうにいはれた所には異論もあるが、「朝にあると野にあるとを問はず、言一度口を出づれば之が實行を期さなければならぬ」といはれた時は、所謂官僚派の常套の口調とはいへ、猶ほ意氣の颯爽たるものがあつた。此言葉を發せらるゝあたりには額も自然に緊縮して、眉と眉との間を稍々蹙めて居られた。大事を決する時は常にこんな顔をさるゝのだらうと、思うて私は見てゐた。

それから私の鄕里を巡遊された時の話や、鄕里から出た一二の人物の話など出たが、その中他の來客の名刺を書生が持て來たから、お邪魔をしても惡いと思うて私は直ぐ暇を告げた。

幾度か辭退したが、子爵は私の後に跟いて梯子段を降りられて玄關まで見送られた。

「感じのよい人だ」。只此言葉のみ私の腦にあつた。俥に揺られながら麻布から赤坂の方へ出るまで總ての外の人の評論は皆忘れてゐた。

△谷崎潤一郎氏

麹町屋と本屋の間の露路を突當つて、更らに細い露路を右に曲つた左側に谷崎といふ標札が辛やく見附かつた。「御免なさい」といふて簾を目隱しのやうに打つけた格子戸を開けたら、そこに、學校の制服を着た丈の高い、色の白い顔立の貴公子めいた人が靴を穿いてゐた。此人が谷崎潤一郎だ！と思つたが初對面の事、先づ「谷崎潤一郎さんは御出ですか」というて見た。すると「まだ寢てゐますが」と其人がいふ。意外！「オヤ〳〵此人でないのかナ」と思ひながら、名刺を出して面會を求めた。暫くお待ち下さいというて其人は出て行つた。それから女の人が、直く玄關脇の梯子段を上つたり下りたりするのを、私は戸口の所に立て見てゐた。ものゝ六七分も經つた頃に其女はお上り下さいというて、二階を指した。梯子段を上り切ると正面の所は唐紙張りの開戸になつて居る。右手の方に小さな室がある。どつちに行つていゝか分らぬが、明いてる方の右手の室に入つた。座布團が一つ置いてあるが、それを傍らに押し除けて座つて居た。こゝは先程出て行つた人の室であらう、英文の小說や、日本の文學書や、早稻田文學の綴込なども硝子戸の本箱に入つて居る。どうも早稻田の文科の人らしい。さう思うて見ると、制服もどうも早稻田の制服らしかつた。そんな事を考へて居たが、肝要の主人公はなか〳〵出て來ない。そしてヒツソリして何の音もしない。ひよツとすると隣りの室に僕の入つて來るのを待つてゐるのかも知れぬ。さう思うて、一つ咳拂をして見た。が、こちらですとも何ともいはない。どうしたんだらうと思つてると、トン〳〵と煙管を火鉢の縁に叩く音がした。はゝア先生朝煙草を飲んでゐるわいと思つてる中、梯子段の眞上の開戸が明いて誰か下に降りて行く。振り返つてチラと見たら、赤ら顔の、身體のよく肥つた、どつちといへば武骨らしく見える人だつた。「少年」を書き、「幇間」を書き、「飇風」を書いた谷崎氏は、ハイカラな、貴公子然とした、少し嫌味のある人だらう、とやうに想像してゐた私は、何にか騙されたやうな氣もされた。

十分ばかり經つと、ミシ〳〵と梯子段を上る音がして、どうも失禮いたしました。昨宵遲くまで起きたものですからと、朝寢の辨解らしい調子でいつて、僕と差向つて座つた。先程チラと見た時ほど武骨らしくもないが、體格はなか〳〵いゝ。頭は五分刈が延びて一寸位になつて居るが、毛が著しく縮れて居る。そして俯向き加減にしてまだ世慣れないといふ風に見える。私は小說の寄稿を頼んで置いて、それから、少し文學上の談話などをして見た。日本の作家では夏目さんと正宗さん。西洋の作家ではアンドレーフとワイルドが好きだなどゝも話された。大學の國文科へ入つたのは國文科は一番樂だらうと想像したからだ、ちつとも學校へ行かぬから、籍さへもどうなつてゐるか分らない。もう學校を廢めて創作で立つ積りだなどゝも話された。又實は小說よりも脚本を書きたい。來年は脚本の方を眞面目にやつて見る積りだとも話された。それから酒が好きで毎晩酒を飲むことや、「飇風」の背景はすべて氏の實際旅行して

來た所ばかりであることも話に出た。東北に生れて矢張毎晩晩酌をやる私とはよく話が合つた。

只此人が、あの飈風の主人公のやうに、或一人の女に惑れて、機能に障害を來した事があるだらうかと想像して見た時、眼の前のいかにも達者さうな體格が、其想像と矛盾して居るやうに思はれた。

「想像と違つたハイカラでない人」「忌味のない人」こんな心得で私は露路を出て神田神保町の電車通へ出た。

新刊批評

▲科學的人生觀

柳宗悦著　籾山書店發行

「新しき科學」「メチニコフの科學的人生觀」二篇。前者は有名なる刑事法學者チエザーレ・ロムブロゾーの「死後そは何ぞや」及物理學者サーオリウア・ロツヂの「人命の殘存」二書を統一して紹介し、後者はメ氏の「人間の性」及「生命の延長」二冊を統一して紹介したものである。凡て著者が死乃至無意識界に對する冥想の補助者となつたものと認められる。勿論、死に關する論文の中で、近頃これほど正直な青年の喜悦に價するものはあるまい。呈示された内容には、時として紹介者の喜悦と原著者の微かな苦笑がありありと見られる。自己を見出すに急なる若い柳君の未成品なる創作として見ても面白い。此の若さと冥想の現實味に距離のある事とは共に此の書の特色である。科學はこゝでは已に惡緣となつた。あの落付いた確實な筆で、かういふ叙情詩を作る事も面白いには相違ないが、同時に現代科學者の靈肯な冥想と煩悶をも傳へられん事を特に記者から柳君に御願しておきたい(金一圓)

▲醉後の花

高濱長江著　今古堂發行

しつぽりと濡れたぢやないか「かほる」がひたひ頰のあたり——鶸羽色なる肩衣さへも色まさろ、闇に盲を手引するあの柔かいお里のやうな身振ひに何と華語を投げてやろ(金六十五錢)

▲芭蕉句選季考 卷上

大野洒竹　沼波瓊音　校訂　文成社發行

石河積翠の著の異本四種を照して校訂した、蕉翁の句とその代々の評註とを集めたものである。蕉翁の風格、蕉翁の俳趣に接せんとするものには得難い逸物であらう。(金一圓五十錢)

▲豐臣秀吉

綠園生著　東亞堂發行

豐太閤日吉丸の卷である。例の達者な筆で描かれてある。面白いものに違ない。(金一圓)

▲釋迦牟尼小傳

井上哲二郎　堀謙德　合著　文榮閣發行

佛敎中學校乃至佛敎學校の敎科書として作られたもので、偉人傳の要を摘んで餘す處のないものと認められるが、全體としては今少し趣味ある叙述が欲しかつた。此書に限らず敎科書と趣味と結付くることを當局者に望みたい。(金六十錢)

▲現代文章寶典

井上甑圃著　文榮閣發行

文章の組立、文範、美辭類纂の三篇八百頁に餘る。初心の手引として甚良く、一般文章の練習としては少しく材料が偏したやうである。(金一

圓八十錢)

▲原　主水　　中里介山作　清流社發行

日本戰國時代から德川初世へかけての切支丹征伐の當時、殉教者の一人であつた主水の一生に、信仰及權力の悲劇に富んだ社會を背景として描いたものだ(金三十五錢)

▲佛教の革命　　大道長安　吉田修夫講述　森江書店發行

妙力門救世教の布教講演錄である。妙の一字青天白日の法旗の下に立つ觀音信仰の教である。(金十錢)

▲商業政策下卷　　津村秀松著　寶文館發行

第二編外國貿易政策上の手段並に其發展、第三編外國貿易政策上列强の現在及將來。二編二十章八百五十頁の大冊。關稅、關稅同盟、通商、最惠國條欵、自由港保稅倉庫の各編から、英の帝國主義、米の汎米主義獨の世界政策、及び日本將來の發展策にまで說き及ぼして餘す處がない(金二圓八十錢)

▲父の罪　　尾島菊子著　辰文館發行

コンヴエンショナルな書き方が、處々にあつて目障りになるが、全體の筆はいかにも暢び〱として、紛糾した事件を樂々と書いてある。時としては餘りに達者過ぎて、却て陰鬱な情緒を破りはしまいかと危まるゝ程達者な筆である。「大阪朝日」の二等に當選した作だと聞くが、一般の家庭や小說好きな奧さんや娘さんにとつてよき讀み物と思ふ。(定價九十五錢)

▲南國記　　竹越與三郎著　二酉社發行

本書が今時稀に觀る面白くして且つ有益なる著述なることは本誌が曩きに江湖に紹介したる所也。其後青年子弟爭つて本書を讀まんとするもの次第に多きを加へ、今や其第八版を發行するの盛況を呈し、通常教育調査會に於ても本書を以て青年必讀書の一に數ふるに至りたりといふ。以て如何に青年子弟の本書を歡迎せるかを卜するに足るべし。(定價二圓卅錢)

▲桃介式　　福澤桃介著　實業之世界社發行

福澤桃介氏の所說は皆面白い。どれでも讀んで氣持がいゝ。奇矯な言論の中に穩健な意見を藏し、極端な主張の中に眞面目な教訓を含んで居る所は氏の獨壇である。三宅博士の序文も面白い。(定價五十錢)

▲我子の家　　德田秋聲著　春陽堂發行

文藝叢書の第二篇で「我子の家」「祭」「新店」の三篇を收めてある。卷頭の「我子の家」は「母」と題して本誌に載つたもの、又「新店」も本誌に載つたものであるから、本誌の讀者の大部分は此二篇を知つて居らるゝことゝ思ふ。秋聲氏の作品は此篇に限らず、總て滋味があつて、深く人生の一角を描破する所、何人の追從も許さぬのであるが、一體が澁味が勝つて、華やかな賑やかな所の少い所から、作品の價値に比して人氣の乏しいのは文壇の爲め深く惜む所である。(定價廿五錢)

▲女と赤い鳥　　鈴木三重吉著　春陽堂發行

文藝叢書の第三篇で、「女」と「赤い鳥」の二篇が收めてある。「赤い鳥」

は嘗て本誌に載つたものである。三重吉氏は近來總ての方面から評判がよいやうであるが、三重吉氏は何にも近來になつてエラクなつた譯ではない。元からエラかつた。昔の作品にも非常によいのがある。近來急に評判のよくなつたのは、所謂自然派の作品が單調になりかけたのに厭きが來た反動であらう。此二篇も固より旨い。現實に根ざし、寫生を本としてロマンチックな空想、夢幻的な描寫を、不自然と思はれぬ處まで恣まにした處は獨得の手腕である。我等は此二篇を固より推重するが、只先きの氏の作品の價値を認めずして、只反動として氏を歡迎する社會は、氏の價値が次第に高まつても又何時か氏を左程褒めぬ時代が來るでなからうかと思うて、藝術的定見なき人々を一種憫むが如き心地を禁じ得ない。（定價廿五錢）

▲菅原傳授手習鑑
棊太平記白石噺　　六合館發行

舊劇の有名なるものは大抵院本や脚本が備つて居る。然し劇場では決して院本や脚本の儘にやらない。別に臺帳なるものがあつて、原院本、原脚本を改作したり、拔き差ししたりして居る。て芝居を見るものにとつては非常に不便を感ずる。本篇は演劇叢書第二篇であるが、演劇叢書は芝居の臺帳其まゝを刊行せんとするのである。此は吾等の双手を擧げて歡迎せんとする所である。處が只此書に慊らぬ所は、日本の俳優は此臺帳の通りにも演らない。俳優によつて銘々違ふ所がある。此篇でいつても寺子屋に於ける松王の臺詞などは團、菊、團(蔵)皆違ふ。つまらぬ俳優の演りに改作するのなどは固より省る必要もないが、せめて名優といはれた人の演り方は後世に殘したいと思ふ。それには鼇頭の如きものを附して有名な文句の處は某は斯く、某は斯く、位附けて貰ひたい。此篇にある松王の「アノ逃隠れも致さずにや」などとは誰もいふ俳優がない。「アノ逃げ隠れも致さずにな」と一般にいふ。斯ういふ處の吟味は餘り屆いてゐないのは本書の缺點であるが、然し芝居好のものにとつては極めて便利なる叢書である。（定價五十錢）

▲近松脚本集（下卷）　　六合館發行

前掲の演劇叢書第三篇である。近松翁の作七八篇を脚本にしたるものを收む。（定價五十錢）

(中付の二)

老莊書談成る

松村介石氏
齋藤松洲氏
合著

老莊書談

四六倍版（縦八寸七分 横六寸四分）
新裝函入色刷木版
書卅六葉用紙別漉
裝幀高雅製本堅牢

定價金二圓二十錢
送料金十八錢

東京神田小柳町
左久良書房

老莊の學を講ずる者世至る所に在り
その文字を講ずる者亦多きを加ふ
前者は老莊の膈を嚙り古人の糟魄を嘗むる者也、後者は老莊に醉ひて古人の婢僕たるに止まるなり、吾人は共に伍せず老莊を道破して現世間の事實を拉し來り取舍するところ其眞諦を明むるに勤む
老子や莊子や、若し蘇り來らば吾人に一言の謝辭を陳ぶる豈吝ならざらん乎
文の莊嚴、畫の絢爛、加ふるに字解を付す、周到懇接本書を手にせずして老莊を語るは抑も迂也、敢て江湖に薦す、

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●十一月一日●

●刷新第一號●

刷新

外交時報

第十四卷
第百六十八號

口絵 清國動亂兵備圖
社説 中清動亂に對する我覺悟 有賀博士
動亂と我が態度 三宅雪嶺博士
米加互惠協定の將來 田中穗積
植民政策より見たる伊土戰爭 茅原華山
= 歐米新聞雜誌飜譯欄には
摩洛哥事件 露國海軍擴張案外重要記事數十件

●創設●

◉歐米及東亞の要地に通信員を設く

◉經濟交通植民軍事の記事を精選す

◉中清動亂通信の爲特派員を派遣す

每月二回 一日十五日

壹部貳拾錢

東京青山南町六丁目百十六番地

外交時報社

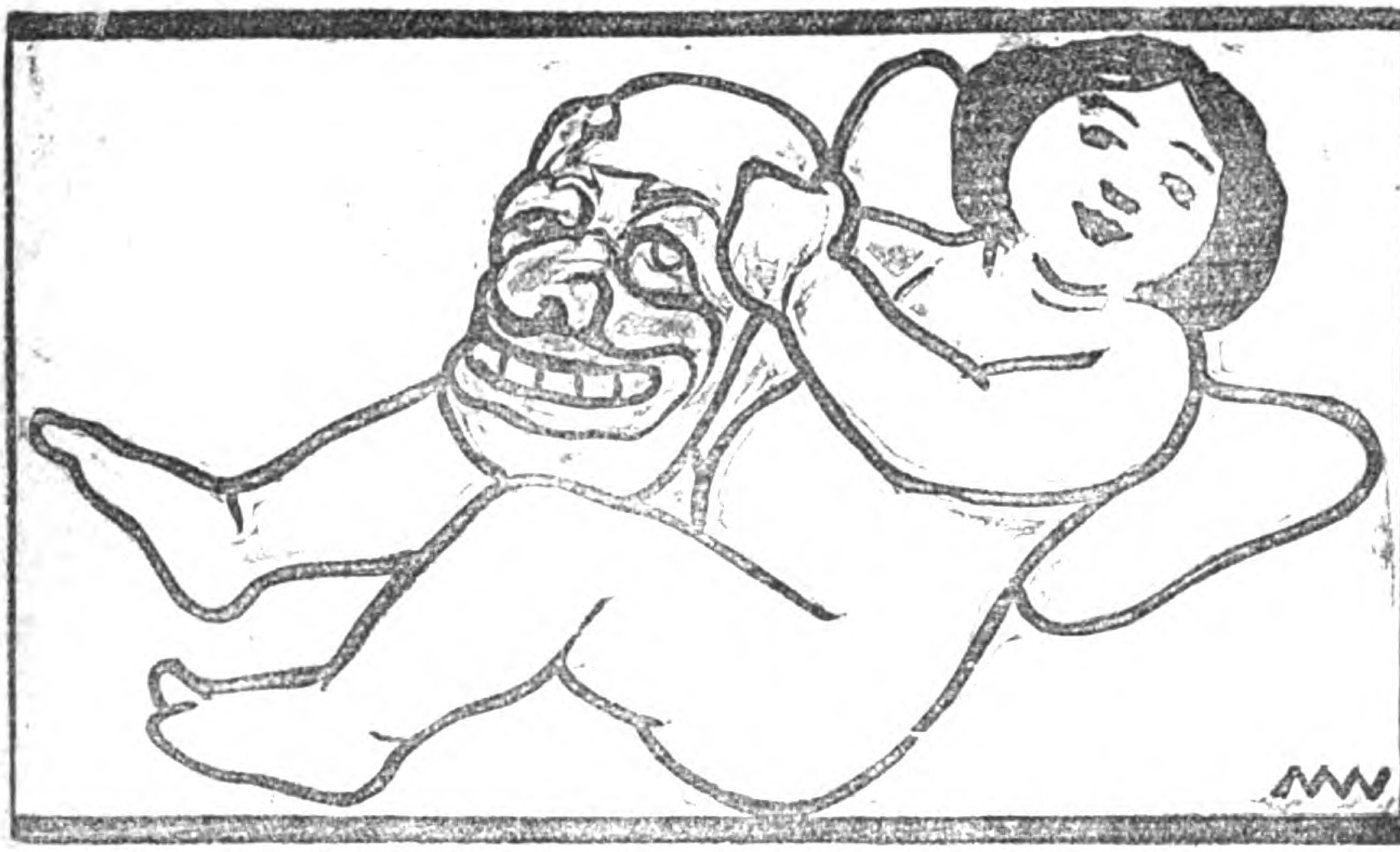
振替口座東京六二〇番

半ヶ年 貳圓參拾錢

一ヶ年 四圓五拾錢

（中付の四）

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



秘密

谷崎潤一郎

其の頃私は或る氣紛れな考から、今迄自分の身のまはりを裹んで居た賑かな雰圍氣を遠ざかつて、いろいろの關係で交際を續けて居た男や女の圏内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適當な隱れ家を捜し求めた揚句、淺草の松葉町邊に眞言宗の寺のあるのを見付けて、やうやう其處の庫裡の一と間を借り受けることになつた。

新堀の溝へついて、菊屋橋から門跡の裏手を眞直ぐに行つたところ、十二階の下の方の、うるさく入り組んだ obscure な町の中に其の寺はあつた。ごみ溜めの箱を覆した如く、彼の邊一帶にひろがつて居る貧民窟の片側に、黄橙色の土塀の壁が長く續いて、如何にも

落ち着いた、重々しい寂しい感じを與へる構へてあつた。

私は最初から、澁谷だの大久保だのと云ふ郊外へ隱遁するよりも、却つて市内の何處かに人の心付かない、不思議なさびれた所があるてならうと思つてゐた。丁度瀨の早い溪川のところ〲に澱んだ淵が出來るやうに、下町の雜踏する巷と巷の間に狹まりながら、極めて特殊の場合か、特殊の人でなければめつたに通行じないやうな閑靜な一廓が、なければなるまいと思つてゐた。

同時に又こんな事も考へて見た。——

己は隨分旅行好きで、京都仙臺はおろか、北海道から九州までも步いて來た。けれども未だ此の東京の町の中に、人形町て生れて二十年永住してゐる東京の町の中に、一度も足を踏み入れた事のないと云ふ通りが、乾度あるに違ひない。いや、思つたより澤山あるに違ひない。——

さうして大都會の下町に、蜂の巢の如く交錯してゐる大小の無數の街路のうち、私が通つた事のある所と、ない所では、孰方が多いかちよいと判らなくなつて來た。

何ても十一二歲の頃てあつたらう。父と一緖に深川の八幡樣へ行つた時、

「これから渡しを渡つて、冬木の米市て名代のそばを御馳走してやるかな。」

かう云つて、父は私を境内の社殿の後ろの方へ連れて行つた事がある。其處には小網町や小舟町邊の堀割と全く趣の違つた、幅の狹い、岸の低い、水の一杯にふくれ上つてゐる川が、細かく建て込んでゐる兩岸の家々の、軒と軒とを押し分けるやうに、どんよりと物憂く流れて居た。小さな渡し船は、川幅よ

りも長さうな荷足りや傳馬が、幾艘も縦に列んでゐる間を縫ひながら、二た竿三竿ばかりちよろちよろと水底を衝いて往復して居た。

私は其の時まで、度々八幡様へお参りをしたが、未だ嘗て境内の裏手がどんなになつてゐるか、考へて見たことはなかつた。いつも正面の鳥居の方から社殿を拝むだけで、恐らくパノラマの繪のやうに、表ばかりで裏のない、行き止りの景色のやうに自然と考へてゐたのであらう。現在眼の前にこんな川や渡し場が見えて、其の先に廣い地面が果てしもなく續いてゐる謎のやうな光景を見ると、何となく京都や大阪よりももつと東京をかけ離れた、夢の中で屢々出逢ふことある世界の如く思はれた。

それから私は、淺草の觀音堂の眞うしろにはどんな町があつたか想像して見たが、仲店の通りから宏大な朱塗のお堂の甍を望んだ時の有様ばかりが明瞭に描かれ、其の外の點はとんと頭に浮ばなかつた。だんだん大人になつて、世間が廣くなるに隨ひ、知人の家を訪ねたり、花見遊山に出かけたり、隨分東京市中は隈なく歩いたやうであるが、いまだに子供の時分經驗したやうな不思議な別世界へ、ハタリと行き逢ふことが度々あつた。

さう云ふ別世界こそ、身を匿すには究竟であらうと思つて、此處彼處といろいろに捜し求めて見れば見る程、今迄通つたことのない區域が到る處に發見された。淺草橋と和泉橋は幾度も渡つて置きながら、其の間にある左衛門橋を渡つたことがない。二長町の市村座へ行くのに、いつも電車通りからそばやの角を右へ曲つたが、あの芝居の前を眞直ぐに、柳盛座の方へ出る二三町ばかりの地面は、一度も踏んだ

覺えはなかつた。昔の永代橋の右岸の袂から、左の方の河岸はどんな具合になつて居たか、どうも好く判らなかつた。其の外八丁堀、越前堀、三味線堀、山谷堀の界隈には、まだまだ知らない所が澤山あるらしかつた。

松葉町のお寺の近傍は、其のうちでも一番奇妙な町であつた。六區と吉原を鼻先に控へて、ちよいと横丁を一つ曲つた所に、淋しい、廢れたやうな區域を作つてゐるのが、非常に私の氣に入つて了つた。今迄自分の無二の親友であつた派手な贅澤なさうして平凡な「東京」と云ふ奴を、置いてき堀にして、靜かに其の騷擾を傍觀しながら、こつそり身を隱して居られるのが、愉快でならなかつた。

隱遁をした目的は、別段勉強をする爲めではない。其の頃私の神經は、刄の擦り切れたやすりのやうに、鋭敏な角々がすつかり鈍つて、餘程色彩の濃い、あくどい物に出逢はなければ、何の感興も湧かなかつた。微細な感受性の働きを要求する第一流の藝術だとか、第一流の料理だとかを翫味するのが、不可能になつてゐた。下町の粹と云はれる茶屋の板前に感心して見たり、仁左衞門や雁治郎の伎巧を賞美したり、凡べて在り來りの都會の歡樂を受け入れるには、あまり心が荒んでゐた。惰力の爲めに面白くもない懶惰な生活を、毎日毎日繰り返して居るのが、堪へられなくなつて、全然舊套を擺脫した、物好きな、アーティフィシャルな mode of life を見出して見たかつたのである。

普通の刺戟に馴れて了つた神經を顫ひ戰かすやうな、何か不思議な、奇怪な事はないであらうか。現實をかけ離れた野蠻な荒唐な夢幻的な空氣の中に、棲息することは出來ないであらうか。かう思つて、

私の魂は遠くバビロンやアッシリヤの古代の傳說の世界にさ迷つたり、コナン、ドイルや涙香の探偵小說を想像したり、光線の熾烈な熱帶地方の焦土と綠野を戀ひ慕つたり、腕白な少年時代のエクセントリックな惡戲に憧れたりした。

賑かな世間から不意に蹈晦して、行動を唯徒らに秘密にして見るだけでも、すでに一種のミステリアスな、ロマンチックな色彩を自分の生活に賦與することが出來ると思つた。私は秘密と云ふ物の面白さを、子供の時分からしみじみと味はつて居た。かくれんぼ、寶さがし、お茶坊主のやうな遊戲——殊に其れが闇の晩、うす暗い物置小屋や、觀音開きの前などで行はれる時の面白味は、主として其の間に「秘密」と云ふ不思議な氣分が、潜んで居るせゐであつたに違ひない。

私はもう一度、幼年時代の隱れん坊のやうな氣持を經驗して見たさに、わざと人の氣の付かない、下町の曖昧なところに身を隱したのであつた。其のお寺の宗旨が「秘密」とか、「禁厭」とか「呪咀」とか云ふものに緣の深い眞言であることも、私の好奇心を誘うて、妄想を育ませるには恰好であつた。部屋は新しく建て增した庫裡の一部で、南を向いた八疊敷きの、日に燒けて少し茶色がゝつてゐる疊が、却つて見た眼には安らかな、暖い感じを與へた。晝過ぎになると和やかな秋の日が、幻燈の如くあかあかと椽側の障子に燃えて、室内は大きな雪洞のやうに明るかつた。

それから私は、今迄親しんで居た哲學や藝術に關する書類を、一切戶棚へ片附けて了つて、魔術だの、催眠術だの、探偵小說だの、化學だの、解剖學だの、奇怪な說話と挿繪に富んでゐる書物を、さながら

土用干の如く部屋中へ置き散らして、寢ころびながら、手あたり次第に繰りひろげては耽讀した。其の中には、コナン、ドイルの The Sign of Four や、ド、キンシイの Murder as one of the Fine art や、アラビアン、ナイトのやうなお伽噺から、佛蘭西物の不思議な Sexuology の本なども交つてゐた。

此處の住職が秘藏してゐた地獄極樂の圖を始め、須彌山圖だの涅槃像だの、いろいろの古い佛畫を强ひて懇望して、丁度學校の敎員室にかゝてゐる地圖のやうに、所嫌はず部屋の四壁へぶら下げて見た。床の間の香爐からは、始終紫色の香の煙が、眞直ぐに靜かに立ち昇つて、明るい暖い室内を焚きしめて居た。私は時々菊屋橋際の舖へ行つて、白檀や沈香を買つて來ては、其れを燻べた。

天氣の好い日、きらきらとした眞晝の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒めるやうな壯觀を呈した。絢爛な色彩の古畫の諸佛、羅漢、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、象、獅子、麒麟などが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す。疊の上に投げ出された無數の書物からは、慘殺、痲醉、魔藥、妖女、宗敎——種々雜多の傀儡が、香の煙に溶け込んで、朦々と立ち罩める中に、二疊ばかりの緋の毛氈を敷き、どんよりとした蠻人のやうな瞳を据えて、寐ころんだ儘、私は每日〳〵幻覺を胸に描いた。

夜の九時頃、寺の者が大槪寐靜まつて了ふと、ヰスキーの角罎を呷つて醉を買つた後、勝手に椽側の雨戶を引き外し、墓地の生垣を乘り越えて散步に出かけた。成る可く人目にかゝらぬやうに、每晩服裝を取り換へて、公園の雜沓の中を潛つて步いたり、古道具屋や古本屋の店先を漁り廻つたりした。頰冠

りに唐棧の絆纏を引掛け、綺麗に研いた素足へ爪紅をさして雪駄を穿くこともあつた。金縁の色眼鏡に二重廻しの襟を立てゝ出ることもあつた。着け髯、ほくろ、痣と、いろいろに面體を換へるのを面白がつたが、或る晩、三味線堀の古着屋で、藍色地に大小あられの小紋を白く散らした女物の袷が眼に付いてから、急にそれが着て見たくて堪らなくなつた。

一體私は衣服反物に對して、單に色合が好いとか、柄が粹だとかいふ以外に、もつと深く鋭い愛着心を持つて居た。女物に限らず、凡べて美しい絹物を見たり、觸れたりする時は、何となく顫へ付きたくなつて、丁度戀人の肌の色を眺めるやうな、快感の高潮に達することが屢々であつた。殊に私の大好きなお召や縮緬を、世間憚らず、恣に着飾ることの出來る女の境遇を、嫉ましく思ふことさへあつた。

あの古着屋の店に、だらりと生々しく下つて居る小紋縮緬の袷――あのしッとりとした、重い冷めたい布が、粘つくやうに肉體を包む時の心好さを思ふと、私は思ず戰慄した。彼の着物を着て、女の姿で往來を歩いて見たい。……かう思つて、私は一も二もなく其れを買ふ氣になり、ついでに友禪の長襦袢や、黑縮緬の羽織迄も取りそろへた。

大柄の女が着たものと見えて、小男の私には寸法も打つてつけてあつた。夜が更けて、がらんとした寺中がひッそりした時分、私はひそかに鏡臺に向つて化粧を始めた。黄色い生地の鼻柱へ、先づベッとりと煉りおしろいをなすり着けた瞬間の容貌は、少しグロテスクに見えたが、濃い白い粘液を平手で顏中へ萬遍なく押し擴げると、思つたよりものりが好く、甘い匂のひやひやとした露が、毛孔へ沁み入る

皮膚のよろこびは、格別であつた、紅やとのこを塗るに隨つて、石膏の如く唯徒らに眞白であつた私の顏が、潑溂とした生色ある女の相に變つて行く面白さ。文士や畫家の藝術よりも、俳優や藝者や一般の女が、日常自分の體の肉を材料として試みて居る化粧の技巧の方が、遙に興味の多いことを知つた。

長襦袢、半襟、腰巻、それからチユツチユツと鳴る紅絹裏の袂——私の肉體は、凡べて普通の女の皮膚が味はふと同等の觸感を與へられ、襟足から手頸までも白く塗つて、銀杏返しの鬘の上にお高祖頭巾を冠り、思ひ切つて往來の夜道へ紛れ込んで見た。

雨曇りのしたうす暗い晩であつた。千束町、淸住町、龍泉寺町——あの邊一帶の溝の多い、淋しい街を暫くさまよつて見たが、交番の巡査も、通行人も、一向氣が付かないやうであつた。甘皮を一枚張つたやうにばさばさ乾いて居る顏の上を、夜風が冷かやに撫でゝ行く。口邊を覆うて居る頭巾の布が、息の爲めに熱く濕つて、歩く度に長い縮緬の腰巻の裾は、ぢやれるやうに脚へ纏れる。みぞおちから肋骨の邊を堅く緊め着けて居る厚板の丸帶と、骨盤の上を括つて居る扱帶の加減て、私の體の血管には、自然と女のやうな血が流れ始め、男らしい氣分や姿勢はだんだんと失つて行くやうであつた。

友禪の袖の蔭から、お白粉を塗つた手をつき出して見ると、強い頑丈な線が闇の中に消えて、白くふつくらと柔かに浮き出て居る。私は自分で自分の手の美しさに惚れ惚れとした。此のやうな美しい手を、實際に持つて居る女と云ふ者が、羨しく感じられた。芝居の辨天小僧のやうに、かう云ふ姿をして、さまざまの罪を犯したならば、どんなに面白いであらう……探偵小說や、犯罪小說の讀者を始終喜ばせる

「秘密」「疑惑」の氣分に髣髴とした心持て、私は次第に人通りの多い、公園の六區の方へ歩みを運んだ。さうして、殺人とか、强盜とか、何か非常な殘忍な惡事を働いた人間のやうに、自分を思ひ込むことが出來た。

十二階の前から、池の汀について、オペラ館の四つ角へ出ると、イルミネーションとアーク燈の光が厚化粧をした私の顏にきらきらと照つて、着物の色合や縞目が、はツきりと讀める。常盤座の前へ來た時、衝き當りの寫眞屋の玄關の大鏡へ、ぞろぞろ雜沓する群衆の中に交つて、立派に女と化け終せた私の姿が映つて居た。

こツてり塗り付けたお白粉の下に、「男」と云ふ秘密が悉く隱されて、眼つきも口つきも女のやうに動き、女のやうに笑はうとする。甘いへんなうの匂と、囁くやうな衣摺れの音を立てゝ、私の前後を擦れ違ふ幾人の女の群も、皆私を同類と認めて怪しまない。さうして其の女達の中には、私の優雅な顏の作りと、古風な衣裝の好みとを、羨しさうに見てゐる者もある。

いつも見馴れて居る公園の夜の騷擾も、「秘密」を持つて居る私の眼には、凡べてが新しかつた。何處へ行つても、何を見ても、始めて接する物のやうに、珍しく、奇妙であつた。人間の瞳を欺き、電燈の光を欺いて、濃艶な脂粉とちりめんの衣裝の下に自分を潜ませながら、「秘密」の帷を一枚隔てゝ眺める爲めに、恐らく平凡な現實が、夢のやうな不思議な彩色を施されるのであらう。

それから私は毎晩のやうに此の假裝をつづけて、時とすると、宮戸座の立ち見や、活動寫眞の見物の間

へ、平氣て割つて入るやうになつた。寺へ歸るのは十二時近くてあつたが、坐敷に上ると早速空氣ランプをつけて、疲れた體の衣裝も解かず、毛氈の上へぐつたり嫌らしく寐崩れた儘、殘り惜しさうに絢爛な着物の色を眺めたり、袖口をちやらちやらと振つて見たりした。剝げかゝつたお白粉が、肌理の粗いたるんだ頰の皮へ滲み着いて居るのを、鏡に映して凝視して居ると、廢頽した快感が古い葡萄酒の醉のやうに魂をそゝつた。地獄極樂の圖を背景にして、けばけばしい長襦袢のまゝ、遊女の如くなよなよと蒲團の上へ腹這つて、例の奇怪な書物のページを夜更くる迄繙すこともあつた。次第に扮裝も巧くなり、大膽にもなつて、物好きな連想を釀させる爲めに、匕首だの痲醉藥だのを、帶の間へ挿んでは外出した。犯罪を行はずに、犯罪に附隨して居る美しいロマンチックの匂だけを、充分に嗅いで見たかつたのである。

さうして一週間ばかり過ぎた或る晩の事、私は圖らずも不思議な因緣から、もつと奇怪な、もッと物好きな、さうしてもッと神秘な事件の端緒に出會した。

其の晩私は、いつもよりも多量にヰスキーを貪つて、三友館の二階の貴賓席に上り込んで居た。何てももう十時近くてあつたらう。恐ろしく混んでゐる場內は、霧のやうな濁つた空氣に充たされて、黑く、もくもくとかたまつて蠢動してゐる群衆の生溫かい人いきれが、顏のお白粉を腐らせるやうに漂つて居た。闇中にシャキシャキ軋みながら眼まぐるしく開展して行く映畫の光線の、グリグリと瞳を刺す度每に、私の醉つた頭は破れるやうに痛んだ。時々映畫が消えて、ぱッと電燈がつくと、溪底から沸き上る

雲のやうに、階下の群衆の頭の上を浮動して居る煙草の煙の間を透かして、私は眼深いお高祖頭巾の蔭から、場内に溢れて居る人々の顔を見廻した。さうして私の舊式な頭巾の姿を珍しさうに窺つて居る男や、粋な着附けの色合を物欲しさうに盗み視てゐる女の多いのを、心ひそかに得意として居た。見物の女のうちで、いでたちの異様な點から、樣子の婀娜つぽい點から、乃至器量の點からも、私ほど人の眼に着いた者はないらしかつた。

初めは誰も居なかつた筈の貴賓席の私の側の椅子が、いつの間に塞がつたのか能くは知らないが、二三度目に再び電燈がともされた時、私の左隣に二人の男女が腰をかけて居るのに氣が附いた。

女は二十二三と見えるが、其の實六七にもなるであらう。髪を三つ輪に結つて、總身をお召しの空色のマントに包み、くツきりと水のしたゝるやうな鮮かな美貌ばかりを、此れ見よがしに露はにして居る。藝者とも令孃とも判斷のつき兼ねる所はあるが、連れの紳士の態度から推して、決して堅儀の細君ではないらしい。

「…… Arrested at last. ……」

と、女は小聲で、フイルムの上に現れた説明書きを讀み上げて、埃及卷の M.M.C. の薫りの高い煙を私の顔に吹き付けながら、指に嵌めて居る寶石よりも鋭く輝く大きい瞳を、闇の中できらりと私の方へ注いだ。

あでやかな姿に似合はぬ、太棹の師匠のやうな皺嗄れた聲、——其の聲は紛れもない、私が二三年前

に上海へ旅行する航海の途中、ふとした事から汽船の中で暫く關係を結んで居たT女であつた。

女は其の頃から、商賣人とも素人とも區別のつかない素振や服裝を持つて居たやうに覺えて居る。船中に同伴して居た男と、今夜の男とはまるで風采も容貌も變つてゐるが、多分は此の二人の男の間を連結する無數の男が、T女の過去の生涯を鎖のやうに貫いて居るのであらう。兎も角も其の婦人が、始終一人の男から他の男へと、胡蝶のやうに飛んで歩く種類の女であることは確かであつた。二年前に船で馴染になつた時、二人はいろいろの事情から本當の姓名も名乘り合はず、境遇も住所も知らせずにゐるうちに上海へ着くと其のまゝ、私は自分に戀ひ憧れてゐる女を、好い加減に欺き、こッそり跡をくらまして了つたが、太平洋上の夢の中なる女とばかり思つ居た其の人の姿を、こんな處で見ようとは全く意外であつた。彼の時分やゝ小太りに肥えて居た女は、神々しい迄に瘦せてすッきりとして、睫毛の長い、潤味を持つた圓い眼が、拭ふが如くに冴へ返り、男を男とも思はぬやうな凛々しい權威さへ具へてゐる。觸るゝものに紅の血が濁染むかと疑れた生々しい唇と、耳朶の隱れさうな長い生へ際ばかりは昔に變らないが、鼻は以前よりも少し嶮しい位に高く見えた。

女は果して私に氣が付いて居るのであらうか、どうも判然と確めることが出來なかつた。明りがつくと連れの男にひそひそ戲れて居る樣子は、傍に居る私を普通の女と蔑んで、別段心にかけて居ないやうでもあつた。實際其の女の隣に居ると、私は今迄得意であつた自分の扮裝を卑しまない譯には行かなかつた。表情の自由な、如何にも生き生きとした妖女の魅力に氣壓されて、技巧を盡した化粧も着附けも、

醜く淺ましい化物のやうな氣がした。女らしいと云ふ點からも、美しい器量からも、私は到底彼の女の競爭者てはなく、月の前の星のやうに果敢なく萎れて了ふのであつた。

朦々と立ち罩めた場内の汚れた空氣の中に、曇りのない鮮明な輪廓をくッきりと浮ばせて、マントの陰からしなやかな手をちらちらと、魚のやうに游がせてゐるあてやかさ。男と對談する間にも、時々夢のやうな瞳を上げて、天井を仰いだり、眉根を寄せて群衆を見下ろしたり、眞白な齒列を見せて微笑むだり、其の度毎に全く別趣の表情が、溢れんばかりに湛へられる。如何なる意味をも鮮かに表はし得る黑い大きい瞳は、場内の二つの寶石のやうに、遠い階下の隅からも認められる。顏面の凡べての道具が、單に物を見たり、嗅いだり、聞いたり語つたりする機關としては、あまりに餘情に富み過ぎて、人間の顏と云ふよりも、男の心を誘惑する甘味ある餌食であつた。

もう場内の視線は、一つも私の方に注がれては居なかつた。愚かにも、私は自分の人氣を奪ひ去つた其の女の美貌に對して、嫉妬と憤怒を感じ始めた。嘗ては自分が弄んで恣に棄てゝしまつた女の容貌の魅力に、忽ち光を消されて、蹈み付けられて行く口惜しさ。事に依ると、女は私を認めて居ながら、わざと皮肉な復讎をして居るのではないであらうか。....

私は、美貌を羨む嫉妬の情が、胸の中で次第次第に戀慕の情に變つて行くのを覺えた。女としての競爭に敗れた私は、今一度、男として彼の女を征服して勝ち誇つてやりたい。かう思ふと、抑へ難い欲望に驅られて、しなやかな女の體を、いきなりむづと鷲掴にして搖す振つて見たくもなつた。

君は予の誰なるかを知り給ふや。今夜久し振に君を見て、予は再び君を戀ひし始めたり。今一度、予と握手し給ふお心はなきか、明晩も此の席に來て、予を待ち給ふお心はなきか、予は予の住所を何人にも告げ知らする事を好まねば、唯願はくは明日の今頃、此の席に來て予を待ち給へ。

闇に紛れて私は帯の間から半紙と鉛筆を取り出し、こんな走り書きをしたものを、ひそかに女の袂へ投げ込んだ。さうして、又ぢッと先方の樣子を窺つてゐた。

十一時頃、活動寫眞の終るまで女は靜かに見物してゐた。觀容が總立ちになつて、どやどやと場外へ崩れ出す混雜の際、女はもう一度私の耳元で、

「....Arrested at last.....」

と囁きながら、前よりも自信のある、大膽な凝視を、私の顔へ暫く注いて、やがて男と一緒に人ごみの中へ隱れてしまつた。

「Arrested at last.」

女はいつの間にか、自分を見付け出して居たのだ。かう思つて私は竦然とした。

それにしても明日の晩、素直に來てくれるであらうか。大分昔よりは年功を經てゐるらしい相手の力量を測らずに、あのやうな眞似をして、却つて弱點を握られはしまいか、いろいろの不安と疑惧に挾まれながら、私は寺へ歸つた。

いつものやうに上着を脱いて、長襦袢一枚にならうとする時、ぱらりと頭巾の裏から四角にたゝんだ

小ひさい洋紙の切れが落ちた。

「Mr.S.K.」

と書き續けたインキの痕をすかして見ると、玉甲斐絹のやうに光つてゐる。正しく彼の女の手であつた、見物中、一二度小用に立つたやうであつたが、早くも其の間に、返事をしたゝめて、人知れず私の襟元へさし込んだものと見える。

思ひがけなき所にて、思ひがけなき君の姿を見申候。たとへ裝ひを變へ給ふとも、三年此のかた夢寐にも忘れぬ御面影を、いかで見逃し候べき。妾は初めより頭巾の女の君なる事を承知仕候。それにつけても相變らず物好きなる君にておはせしことの可笑しさよ。妾に會はんと仰せらるゝも、多分は此の物好きのおん興じにやと心許なく存じ候へども、あまりの嬉しさに兎角の分別も出てず、唯々仰せに從ひ明夜は必ず御待ち申す可く候。たゞし、妾に少々都合もあり、考へも有之候へば、九時より九時半までの間に雷門までお出て下されまじくや、其處にて當方より差し向けたるお迎ひの車夫が、必ず君を見つけ出して拙宅へ御案內致す可く候。君の御住所を秘し給ふと同樣に、妾も今の在り家を御知らせ致さぬ所存にて、車上の君に眼隱しをしてお連れ申すやう取りはからはせ置き候間、右御許し下され度、若し此の一事を御承引下され候はずば、妾は永遠に君を見ることかなはず、此れに過ぎたる悲しみは無之候。

私は此の手紙を讀んで行くうちに、自分がいつの間にか、探偵小說中の人物となり終せて居るのを感

じた。不思議な好奇心と恐怖とが、頭の中で渦を卷いた。女が自分の性癖を呑み込んで居て、わざとこんな眞似をするのかと思はれた。

明くる日の晩は素晴らしい大雨であつた。私はすつかり服裝を改めて、對の大島の上にゴム引の外套を纏ひ、ざぶん、ざぶん、と甲斐絹張りの洋傘に、瀧の如く叩きつける雨の中を戸外へ出た。新堀の溝が往來一面に溢れてゐるので、私は足袋を懷へ入れたが、びしよびしよに濡れた素足が、家列のランプに照らされてぴかぴか光つて居た。夥しい雨量が、天からざあざあと直瀉する喧囂の響の中に、何も彼も打ち消されて、不斷賑かな廣小路の通りも大概雨戸を締め切り、二三人の臀端折りの男が、敗走した兵士のやうに駈け出して行く。電車が時々レールの上に溜まつた水をほとばしらせて通る外は、ところどころの電柱や廣告のあかりが、濛々たる雨の空中をぼんやり照らしてゐるばかりであつた。

外套から、手首から、肘の邊まで水だらけになつて、漸く雷門へ來た私は、雨中にしよんぼり立ち止りながら、アーク燈の光を透かして、四邊を見廻したが、一つも人影は見えない。何處かの暗い隅に隱れて、何者かゞ私の樣子を窺つてゐるのかも知れない。かう思つて暫く彳んで居ると、やがて吾妻橋の方の暗闇から、赤い提灯の火が一つ動き出して、がらがらがらと街鐵の敷き石の上を駛走して來た舊式な相乘りの俥が、ぴたりと私の前で止まつた。

「旦那、お乘んなすつて下さい。」

深い饅頭笠に雨合羽を着た車夫の聲が、車軸を流す雨の響の中に消えたかと思ふと、男はいきなり私

の後へ廻つて、羽二重の布を素早く私の兩眼の上へ二た廻り程巻きつけて、蟀谷の皮がよぢれる程强く緊め上げた。

「さあ、お召しなさい。」

かう云つて、男のざらざらした手が、私を摑んで、惶しく俥の上へ乘せた。

しめつぽい匂のする幌の上へ、ぱらぱらと雨の注ぐ音がする。疑もなく私の隣には女が一人乘つて居る。お白粉の薫と暖い體温が、幌の中へ蒸すやうに罩つてゐた。

轅を上げた俥は、方向を晦ます爲めに、一つ所をくるくると二三度廻つて走り出したが、右へ曲り、左りへ折れ、どうかするとlabyrinthの中をうろついて居るやうであつた。時々電車通りへ出たり、小さな橋を渡つたりした。

長い間、さうして俥に搖られて居た。隣に列んでゐる女は勿論T女であらうが、默つて身じろぎもせずに腰かけてゐる。多分私の眼隱しが嚴格に守られるか否かを監督する爲めに同乘して居るものらしい。しかし、私は他人の監督がなくても、決して此の眼かくしを取り外す氣はなかつた。海の上で知り合ひになつた夢のやうな女、大雨の晩の幌の中、夜の都會の秘密、盲目、沈默――凡べての物が一つになつて、渾然たるミステリーの霧の裡に私を投げ込んで了つて居る。

やがて女は固く結んだ私の唇を分けて、口の中へ巻煙草を挿し込んだ。さうしてマッチを擦つて、火をつけてくれた。

一時間程立つて漸く俥は停まつた。再びざらざらした男の手が私を導きながら、狹さうな路次を二三間行くと、裏木戸のやうなものをギーと開けて、家の中へつれて行つた。

眼を塞がれながら一人坐敷に取殘されて、暫く坐つてゐると、間もなく襖の開く音がして、女は無言の儘、人魚のやうに體を崩して擦り寄りつゝ、私の膝の上へ仰向きに上半身を凭せかけた。さうして、兩腕を私の項に廻して羽二重の結び目をはらりと解いた。

部屋は八疊位もあらう。普請と云ひ、裝飾と云ひ、なか〳〵立派て、木柄なども選んではあるが、丁度此の女の身分が分らぬと同樣に、待合とも、妾宅とも、上流の堅儀な住居とも見極めがつかない。一方の椽側の外にはこんもりとした植ゑ込みがあつて、其の向うは板塀に圍はれてゐる。唯此れだけの眼界では、此の家が東京のどの邊にあたるのか、大凡の見當すら判らなかつた。

「よく來て下さいましたね。」

かう云ひながら、女は坐敷の中央の、四角な紫檀の机へ身を凭せかけて、白い兩腕を二匹の生き物のやうに、だらりと卓上に這はせた。襟のかゝつた澁い縞お召に腹合せ帶をしめて、銀杏返しに結つて居る風情の、昨夜と恐ろしく趣が變つてゐるのに、私は先づ驚かされた。

「あなたは、今夜あたしがこんな風をして居るのを可笑しいと思つて居らッしやるんでせう。それでも人に身分を知らせないやうにするには、かうやつて毎日身なりを換へるより外に仕方がありませんからね。」

卓上に伏せてある洋盃を起して、葡萄酒を注ぎながら、こんな事を云ふ女の素振りは、思つたよりもしとやかに打ち萎れて居た。

「でも好く覺えて居て下さいましたね、上海でお別れしてから、いろいろの男と苦勞もして見ましたが、妙にあなたの事を忘れることが出來ませんてした。もう今度こそは私を棄てないて下さいまし。身分も境遇も判らない、夢のやうな女だと思つて、いつまでもお附き合ひなすつて下さい。」

女の語る一言一句が遠い國の歌のしらべのやうに哀韻を含んて私の胸に響いた。昨夜のやうな派手な勝氣な悧發な女が、どうしてかう云ふ憂鬱な、殊勝な姿を見せることが出來るのてあらう。さながら萬事を打ち捨てゝ、私の前に魂を投げ出してゐるやうてあつた。

「夢の中の女」「秘密の女」朦朧とした、現實とも幻覺とも區別の付かない love adventure の上の面白さに、私は其れから毎晩のやうに女の許に通ひ、夜半の二時頃迄遊んでは、又眼かくしをして雷門まで送り返された。一と月も二た月も、お互に所を知らず、名を知らずに會見してゐた。女の境遇や住宅を搜り出さうと云ふ氣は少しもなかつが、だんだん時日が立つに從ひ、私は妙な好奇心から自分を乘せた俥が、果して東京の何方の方面に二人を運んて行くのか、自分の今眼を塞がれて通つて居る處は、淺草から何の邊に方つて居るのか、唯其れだけを是非共知つて見たくなつた。三十分も一時間も、時とよると一時間半もがらがらと市街を走つてから、轅を下ろす女の家は、案外雷門の近くにあるのかも知れない。私は毎夜俥に搖す振られながら、此處か彼處かと心の中に臆測を廻らす事を禁じ得なかつた。

或る晩、私はとうとう溜らなくなつて、
「一寸でも好いから、此の眼かくしを取つてくれ。」
と車の上で女にせがんだ。
「いけません、いけません。」
と、女は惶てゝ、私の兩手をしッかり押へて、其の上へ顏を押しあてた。
「何卒そんな我儘を云はないで下さい。此處の往來はあたしの秘密です。此の秘密を知られゝば、あたしはあなたに捨てられるかも知れません。」
「どうして私に捨てられるのだ。」
「さうなれば、あたしはもう『夢の中の女』ではありません。あなたは私を戀ひして居るよりも、『夢の中の女』を戀して居るのですもの。」
いろいろに言葉を盡して賴んだが、私は何と云つても聞き入れなかつた。
「仕方がない。そんなら見せて上げませう。……其の代り一寸ですよ。」
女は嘆息するやうに云つて、力なく眼かくしの布を取りながら、
「此處が何處だか判りますか。」
と、心許ない顏つきをした。
美しく晴れ渡つた空の地色は、妙に黑ずんで星が一面にきらきらと輝き、白い霞のやうな天の川が果

てから果てへ流れてゐる。狹い道路の兩側には商店が軒を列べて、燈火の光が賑かに町を照らしてゐた。不思議な事には、可なり繁華な通りであるらしいのに、私は其れが何處の街であるか、さつぱり見當が付かなかつた。俥はどんどん其の通りを走つて、やがて一二町先の突き當りの正面に、精美堂と大きく書いた印形屋の看板が見え出した。

私が看板の横に書いてある細い文字の町名番地を、俥の上で遠くから覗き込むやうにすると、女は忽ち氣が付いたか、

「あれッ」

と云つて、再び私の眼を塞いで了つた。

賑かな商店の多い小路で、突きあたりに印形屋の看板の見える街――どう考へて見ても、私は今迄通つたことのない往來の一つに違ひないと思つた。子供時代に經驗したやうな謎の世界の感じに、再び私は誘はれた。

「あなた、彼の看板の字が讀めましたか。」

「いや、讀めなかつた。一體此處は何處なのだが私にはまるで判らない。私はお前の生活に就いては、三年前の太平洋の波の上の事ばかりしか知らないのだ。私はお前に誘惑されて、何だか遠い海の向うの、幻しの國へ伴れて來られたやうに思はれる。」

私が斯う答へると、女はしみじみとした悲しい聲で、こんな事を云つた。

「後生だからいつまでもさう云ふ氣持て居て下さい。幻しの國に住む、夢の中の女だと思つて居て下さい。もう二度と再び、今夜のやうな我が儘を云はないて下さい。」

女の眼からは、涙が流れて居るらしかつた。

其の後暫く、私は、彼の晩女に見せられた不思議な街の光景を忘れることが出來なかつた。燈火のかんかんともつてゐる賑かな狹い小路の突き當りに見えた印形屋の看板が、頭にはツきりと印象されて居た。何とかして、あの町の在りかを捜し出さうと苦心した揚句、私は漸く一策を案じ出した。

長い月日の間、毎夜のやうに相乘りをして引き擦り廻されて居るうちに、雷門で俥がくるくると一つ所を廻る度數や、右に折れ左に曲る回數まで、自ら一定して來て、私はいつともなく其の鹽梅を覺え込んでしまつた。或る朝、私は雷門の角へ立つて眼をつぶりながら二三度ぐるぐると體を廻した後、此の位だと思ふ時分に、俥と同じ位の速度で一方へ駈け出して見た。唯好い加減に時間を見はからつて、彼方此方の横丁を折れ曲るより外の方法はなかつたが、丁度此の邊と思ふ所に、豫想の如く、橋もあれば、電車通りもあつて、確かに此の道に相違ないと思はれた。

道は最初雷門から公園の外郭を廻つて千束町に出て、龍泉寺町の細い通りを上野の方へ進んで行つたが、車坂下で更に左へ折れ、お徒町の往來を七八町も行くと、やがて又左へ曲り始める。私は其處でハ

タリと此の間の小路にぶつかつた。

成る程正面に印形屋の看板が見える。

其れを望みながら、秘密の潜んでゐる巖穴の奥を究めてもするやうに、つかつかと進んで行つたが、つきあたりの通りへ出ると、思ひがけなくも、其處は毎晩夜店の出る下谷竹町の往來の續きであつた。いつぞや小紋の縮緬を買つた古着屋の店も、つい五六間先に見えて居る。不思議な小路は、三味線堀と仲お徒町の通りを横に繋いで居る街路であつたが、どうも私は今迄其處を通つた覺えがなかつた。散々私を悩ませた精美堂の看板の前に立つて、私は暫く彳んで居た。燦爛とした星の空を戴いて、夢のやうな神秘な空氣に蔽はれながら、赤い燈火を湛へて居る夜の趣とは全く異り、秋の日にかんかん照り付けられて乾ら涸びて居る貧相な家並を見ると、何だか一時にがつかりして興が覺めて了つた。

抑へ難い好奇心に驅られ、犬が路上の匂を嗅ぎつゝ自分の棲み家へ歸るやうに、私は又其處から見當をつけて走り出した。

道は再び淺草區へ入つて、小島町から右へ右へと進み、菅橋の近所で電車通りを越え、代地河岸を柳橋の方へ曲つて、遂に兩國の廣小路へ出た。女が如何に方角を悟らせまいとして、大迂廻をやつて居たかゞ察せられる。藥研堀、久松町、濱町と來て、蠣濱橋を渡つたところで、急に其の先が判らなくなつた。

何でも女の家は、此の邊の路次にあるらしかつた。一時間ばかりかゝつて、私は其の近所の狹い横町

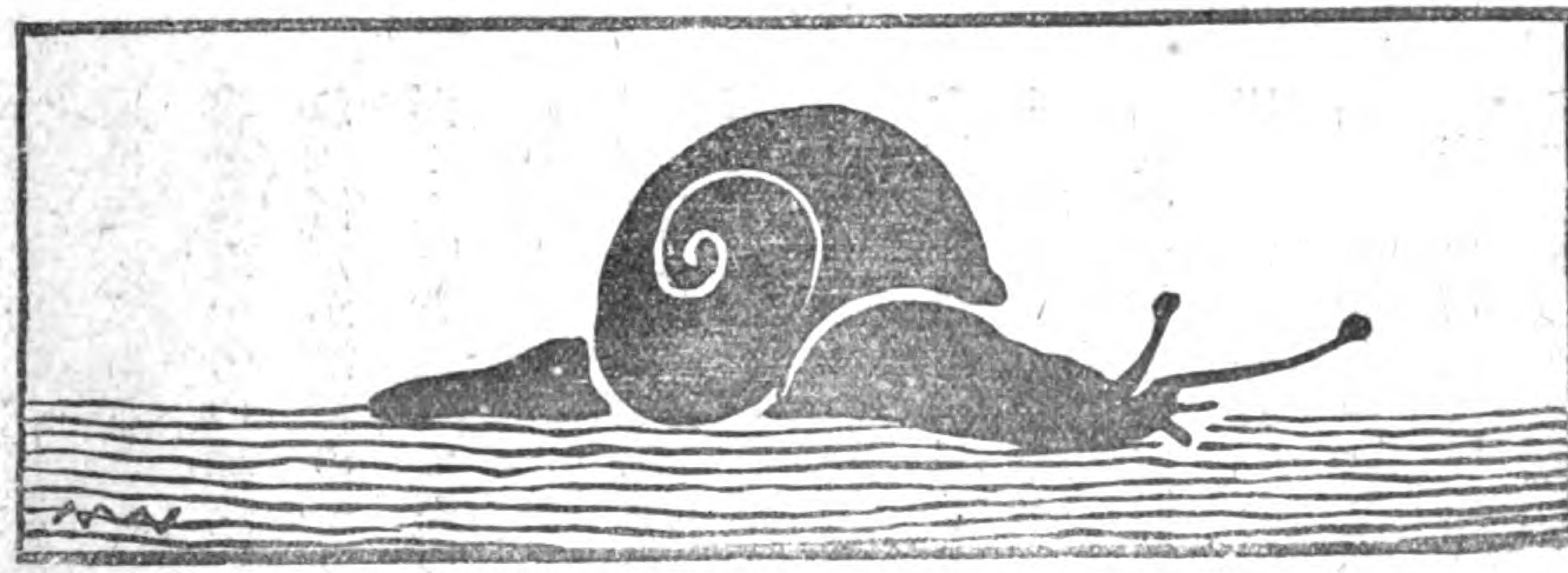
を幾度も出つ入りつした。

丁度道了權現の向ひ側の、ぎつしり列んだ家と家との庇間を分けて、殆んど眼につかないやうな、極めて細い、さゝやかな小路のあるのを見つけ出した時、私は直覺的に女の家が其の奥に潜んで居ることを知つた。中へ入つて行くと右側の二三軒目の、見事な洗ひ出しの板塀に圍まれた二階の欄杆から、松の葉越しに女は死人のやうな顔をして、ぢつと此方を見下ろして居た。

思はず嘲けるやうな瞳を擧げて、二階を仰ぎ視ると、寧ろ空惚けて別人を装ふものゝ如く、女はにこりともせずに私の姿を眺めて居たが、別人を装うても怪しまれぬくらゐ、其の容貌は夜の感じと異つて居た。たッた一度、男の乞ひを許して、眼かくしの布を弛めたばかりに、秘密を發かれた悔恨、失意の情が見る見る色に表れて、やがて靜かに障子の蔭へ隠れて了つた。

女は芳野と云ふ其の界隈での物持ちの後家であつた。あの印形屋の看板と同じやうに、凡べての謎は解かれて了つた。私は其れきり其の女を捨てた。

二三日過ぎてから、急に私は寺を引き拂つて田端の方へ移轉した。私の心はだんだん「秘密」などゝ云ふ手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もッと色彩の濃い、血だらけな歡樂を求めるやうに傾いて行つた。（完）



雨の日

正宗白鳥

「この次の日曜には朝から君の家へ遊びに行くから、何處へも出ないてゐたまへ」

私は先日電車て久振りに廣田に出會つた時、こんな約束をして置いたことを思出した。今日はその日曜てある。當てにして待つてゐるかも知れない。

が、昨日からの秋雨のまだ降つてゐるのを見ると、幾度か出掛けようとしては躊躇された。正午過ぎになつても、つい横になつたまゝ知らず〳〵晝寢をして、日暮近くなつて目を醒ました。て、「腹こなしに行つて來ようか」と思切つて外へ出た時分には、軒燈が點いてゐた。

春日町て白山行の電車に乘換えて、混合つた間へ割込んだ。そして、乘合はせた知人と話しながら白山て下りた。その人には一年に一度ぐらゐし

か會はないが、何時見ても同じやうな顔をして、同じやうな調子で口を利く。この頃はまた自分だけ下宿屋に住んでゐるとか、先月は子供が死ぬるし、今月は甥が死んだとか話した。「僕はこれで三年に四度、自分に近い者の葬式をしてるが、かう矢鱈に死なれちや、死ぬると云ふことも些とも悲しくはなくなるね。何だか滑稽のやうな氣がするよ。またくたばつたかと思つてね。しかし自分はまだ死にたかあないが……」と云つて笑つた。

その人は何のためか、私の新しい住所を手帖に書留めて、停留所から別れて左の方へ行つた。私は右の坂を上つて、以前自分の住んでゐた家の前を通つた。左右も向ひ隣りも表札が違つてゐる。一軒は竹垣が嚴しい板塀になつて忍返しがついてゐる。二三軒先の家主の家の軒燈も名前が違つてゐる。

以前のまゝの質屋の角を曲つて、井戸端の敷石を踏んで、昔ながらの廣田の家へ入つた。廣田は毛布を跳ねのけて、目をこすりながら私を迎へた。「貴下が來ないから、今まで寢てたんです」と、枕を隅へ押のけて胡座を掻いて、人懐つこい笑ひを見せた。

「入つて見ると、何だか以前とは様子が違ふ」と、私は突立つたまゝ、暫く明放した家の中を見渡してから座に着いて、「君のお母様が出て來ないのが變なやうな氣がするよ」

「さうでせうね」

廣田は何氣ない返事をした。茶の間には髮の亂れた色の薄黑い痩せた妻君が、丸々と肥つた目の大きな愛くるしい乳呑兒を抱いてゐたが、灰皿を持つて出て、恭々しく私に挨拶した。私も座直して恭しく

挨拶した。廣田は紹介もしないで、只目をパチ〳〵させて微笑してゐた。あの時分の君が結婚したり子持ちになつたりしてゐるのが可笑しいと云ひたさうに、私は廣田をジロ〳〵見たが、先方でも此方の意味を合點してゐるやうな顏をして微笑した。

「しかし、君の家はこの二三年で急に變遷した。僕等がよく來てた時分が丁度過渡期だつたね。隨分ゴタ〳〵してたが、この頃は平穩無事らしいね。子供を持つと少し氣分が違ふだらう」

「えゝ、子供つて面白いものですね、生きた玩具だから」

「君のお母樣はあんなに焦慮つとつたのに、とう〳〵初孫を見ないで死んだね」

眞面目にこんな話をしてる間に、妻君は座敷の瓦斯に火を點けて、茶の間の方へ行つて、子供を綾しながら、夕餐の支度に取掛つた。私は直ぐに座を崩した。明るい光で以前から見覺えの机や本箱や、座敷の諸道具を見てゐたが、床の間の掛物は見たことのない新式の繪であつた。

「あれは一寸面白いね、誰れが書いたんです」と訊いた。

「社の古川君に書いて貰つたんです。僕にはいゝ繪だか何だか分らないんだが」

「…君はあの人と一緒に、東海道を徒步旅行したさうだね、珍らしい所があつたらう。東京以外殆んど一步も踏出したことはなかつたんだから」

「しかし格別違つた所もありませんね。君がよく箱根から西へ行くと、景色がまるで違ふと云つてたから、そのつもりで見てたけど、大して違ひもしませんね。それに暑くつて弱りましたよ」

「だけど、一月も歩いて來たら、身體は丈夫になつたらう」

「いや、歸つてから當分腸が惡くつて困りましたよ」

廣田は旅中の滑稽な出來事を話して、「僕は社用で十四五日名古屋に逗留してましたが、東京が戀しくつて溜りませんでしたよ。終ひには情なくなりますからね」

「誰れでもさうだね、皆んな暮し榮えもしないのに、東京に愚圖々々してる」と、私は自分がこの近所に住んでゐた時分の知人の近狀を尋ねた。藤田も澤村も井深もこの周圍に住まつて、殆んど毎晩のやうに廣田の家へ集まつて、碁を打つたり將棊を差したり、遠慮のない馬鹿話をして夜を更かしてゐたのである。谷川は早稻田邊の下宿からわざ〳〵出掛けて來た。廣田の老父母が客好きで、氣の置けぬ人なので、一度來た者も直ぐに打解けて自然に足繁くなつたのだ。姉娘もまだ結婚してはゐなかつた。

「皆んな元の所にゐますよ、この頃はあまりやつて來ないけれど。澤田君は今朝一寸來て、君が來たら知らせて呉れと云つてました。も少しして呼びにやりませう」と、廣田は臺所へ行つて、妻君に何か言付けた。妻君は小聲で何か云つてゐたが、やがて泣聲立てる子供を脊負うて出て行つた。

「これで老母が生きてると、子供の守をして呉れるだけでも、非常に便利なんだがね。」と、私は妻君を見送りながら云つた。

「さうですね、僕も母親の生きてる中は邪魔つ氣で仕方がなかつたが、死なれて見ると、もつと生きてゝ呉れたらと思ふことがありますよ」と、廣田も同意した。

「あの時分お母様が一生懸命邪魔をして呉れたからこそ、君も無事にかうして家が持てたんだよ。あの女にはあれから會はないかい。よく何とも云つて來ないことだ。矢張さう性質の悪い女ぢやないんだね」

「えゝ。誰れかの妾になつてるらしいですよ。去年の夏だつたか、一度使ひに手紙を持たせて呼出しに來たことがありましたよ。だけど、僕行かなかつたんです」

「しかし君もあの時分が戀しくはないかね。可成り苦勞もしてたやうだから。君もこれから二度とあんな面白い目は見られないよ。あの女が僕とこへ來て、廣田が何處かへ身を隠すと云ふ悲觀的の手紙を寄越したきり、行衞が分りませんから心配でなりません。お母様が六ヶ敷から自殺するかも知れないなんて嚇かした事があつたねえ。それが二三日すると、もう二人で一緒に歩いてるんだから驚いたよ」

私の記憶から昔の彼れの影が浮出た。大晦日の夜、女の宿の拂ひが出來ぬからと、私の家へ相談に來たことがあつた。その時女は門口に待つてゐたらしかつた。見せつけるためか、私を女の宿へ連れて行つたこともあつたが、その時女は私が後にゐるとは氣づかないで、障子の隙間から顔を出して妙な手付をして招いた。母親に頼まれたので、私は四谷にゐる女の叔父の家へ出掛けて、一世一代の柄にない役目を勤めたことさへあつた。

「何だか大變古い事のやうですね」と、廣田は笑つて、「僕はあの女のために非常に身體を壊しましたよ、隨分無法だつたんだからな。これぢやとても健全な子供は産まれりやすまいと心配してたけど、子供は

案外丈夫ですよ。案ずるより產むが安いつてこの事だらう」と、一寸昔ながら面白くもない洒落を云つて、
「子供つてよく親に似るものですね」
「よくしたものだよ。これで子供の顏が父親に似なかつたら變だらうね」と云つて、私はまた話をあの女の方へ轉じて「あの女は容色はよくはなかつたが、何故あゝいろんな男を迷はすんだらう」と訊いた。
「さあ。……葉山と云ふ知事の息子はあれの爲に大學を落第したんですからね。」
「矢張何處かに男を惹く所があるんかね、一體君があんなに永く關係してたのは、どんな原因からだらう」
「さうですね、今となつて冷靜に考へて見ると、つまりは財政上の問題ですね。とてもさう度々遊びに行く金はないしするから、ついあんな風になつたんですね。金に不自由さへしなけりや。藝者遊びでもしますよ、その方が氣が利いてるし、人前もいゝですからね。墮落女學生に關係するなんて厭なもんだからな」
「だけど、そりや今の君の考へて、あの時分はさうでもなかつたよ。戀と云ふ者は外目に滑稽に見えるほど、當人同士は面白いんだらうね。」と、私は云つて、「澤村は相變らず淸淨潔白であの下宿に蟄居してるんかい。三十過ぎるまで女を知らんのは、僕は損だと思ふがね」
「僕もよくさう云ふんですが、自分ぢや些とも後悔しないと云つてますよ。一生かうして送つてもいゝつて。この頃は每晩のやうに寄席へ行つてるらしいんです。」

二人は女を知らぬ澤村の體力の强いことから、その體力を自分達に分けて呉れたらばなどゝ話してゐたが、其處へ妻君が何か提げて歸つて來た。「澤村さんは最少しゝて入つしやるさうです」と云つて、臺所へ入つた。瓦斯を點けて煮物をし出した。

狹い庭を隔てゝ、向ひの家の玻璃窓の中が眞晝のやうに明るく見えた。緣側へ出ると、油繪の額もはつきり見えた。

「新しい家だね。誰れがゐるんだい」と、私はその應接室らしい部屋を見ながら訊いた。廣田も緣側へ寄つて、

「伊田井とか云つて何をする人ですかね。何でも五六萬の財産家だと云ふ噂ですよ。去年の暮に此處へ越して來て、あれだけ建增したんです。あの部屋が出來たので、この座敷も風通しが惡くなつて、夏中困りましたよ。澤村君の下宿の前にも、監獄のやうな高い煉瓦塀が出來て、矢張風道を塞がれて弱つてました」

「かうして見てると、あんな家へ住みたくなるよ」

私は暫らく緣側をブラ〳〵してゐた。この狹い庭にも香ひの强い沈丁花や大神樂とか云ふ赤い椿が咲いてゐたのを覺えてゐるが、今は花一つなさゝうだ。雨は寂しさうに降濺いてゐる。座に戻つて煙草を吸ひながら、其處等を見廻したが、どうも其處にゐなくてはならぬ人がゐないやうに思はれてならない。

「あれが昨夕も歸りませんてすよ」と慌たゞしく話をする老母の影も見えぬのが不思議だ。

「君がこの一家の主人になつたのが變たよ。責任が重いだらう」

「えゝ。僕もこの頃は子供の名前で貯金してるんです」

澄してから云つた廣田の言葉に私は驚いた。君が貯金する氣になつたかと冷かさうとしたが、冷かすには相手があまりに眞面目過ぎるので、言葉を轉じて「それは何より結構だ、今の君の境遇から考へると、將來急に豐かになる當てがあるんでもないから、今から少しづゝでも貯蓄しとく方がいゝね」

「えゝ、……僕は親爺が死んでから驚いたことが二つあるんですよ。僕の結婚の時に幾らか出して與れたから、それだけしか貯蓄はないんかと思つてたら、自分の葬式の費用も秘密で蓄へてたんです。母も知らなかつたらしいんですが、昔の人間は自分の葬式に重きを置いてるんですね。それから、も一つ驚いたことは、親爺の同僚だつた若い人に聞くと、親爺はあれて中々巫山戲た眞似をしてたんださうです。宿直の時には、役者の假聲を使つたり、都々逸を唄つたり、一度踊を踊つたこともあるんだと云ふから驚く。」

その樣子を思出しても可笑いと云つて、廣田は笑つた。妻君も臺所の方で幽かな笑ひ聲をさせた。

「その二つの逸話で君の親爺の人となりがよく分るよ」と、私は笑ひもしないで、鹿爪らしく云つた。

妻君は食卓（ちやぶだい）を座敷へ運んだ。私達は手盛りで食事をした。廣田は二三年前に比べて、著るしく食量の減じたことを歎じた。「君の家で饗（よ）ばれてた時分には、何時も飯櫃を空けてましたね。どう云ふものかこの頃は食へなくなつちやつた」

私達が箸を置いた時分に、廣田の妹が乳呑兒を抱へて來て、茶の間で妻君と話をしてゐたが、間もなくいそ〳〵と玄關へ出た。そして歸り際に一寸私に挨拶して行つた。以前福々と肥つてゐた顏が、見違へるほど瘦せてゐる。

「君は次第に親爺に似て來たし、お藤さんもお母樣に似て來出したね。世帶を持つと、女はあゝ瘦せるものか知らん。女の次第に窶れるのを見るぐらゐ痛ましいことはないよ。つた子だつて今會つたら乾度老込んでるよ、あんな淫亂な女は早く歲を取るものだ」

「厭だなあ」

廣田は私がそんな事を云ふのをも厭がつてゐる風だつた。て、話を變へて、獨り者の藤田の家へ泥棒の入つたことや、谷川が社內の大刷新の結果免職されたことなどを話出した。藤田は點燈料さへ拂へなくて、軒燈を持つて行かれたと、曾て聞いたことがあつたので、その家へ泥棒が入つたのも、落語にありさうて、滑稽に思はれた。別に金目のものはある筈もなかつたが、それでも何か大切な者を取られたやうな氣がして變だつたさうだ。そして巡査の取調べに應じて、盜難品價格五十圓といゝ加減なことを申出したさうだ。

「泥棒が入つたと聞いた時に、何か置いてきやしなかつたかと云つてやりたかつた」と、廣田は云つた。

「あの男は相變らず、富士見町あたりへ流連してるんだらうな」

「えゝ。この頃も隨分遊んでるんでせう。先日藤田も詰らん事から裁判沙汰になりかゝつたことがある。

んですよ。前科者と知らないてある男と懇意になつて、一緒に州崎へ行つて‥‥」と、廣田が話しかけた所へ、澤村が黒い顔をチカ〳〵光らせて入つて來た。挨拶のかはりにニッと笑つた。

「君の首は無事だつたんだね」と、私が座を開きながら云ふと、

「僕はどうならうと平氣なものさ」と、そんな事を氣にしてゐると思はれるのすら厭であるらしく、「何故皆んなあんなにビク〳〵するんだらう。廣田君なんか殊にさうだよ、君の地位から云つて、決して氣遣ふ必要はないんだもの」

廣田はそれに答へないで笑つてゐた。私は彼れに成代つて、「其處が妻帶者と獨り者との違ふとこだよ」と冷かすやうに云つた。

「何、さうぢやないさ」と、澤村は爭ふやうに云つて、「人間は覺悟一つさ。自分のやるだけやつて後は運任せにするんだね」

「‥‥この頃君は寄席通になつたさうだね、面白いかい」と、私は話を外へ移した。

「寄席へでも行かなけりや、毎晩退屈で仕方がないもの。此處へ來るか井深の家へ行くか、その外は大抵寄席へ行つてるね」

「僕も時々行くんだが、輕便な退屈醒しの方法は外に一寸見つからんね。僕や君のやうな人間は酒は飲まないし、讀書には厭きてるし、世間との交際はないし、寢るまでの時間を潰すにや、寄席へでも行くより外に仕方がないね」

私がふと同感らしい口を利いたので、澤村は喜んだ。そして、頻りに藝人の品評をし始めた。義太夫の小土佐と落語家の圓喬とを口を極めて稱賛した。

「僕は圓喬の鹽原多助を一回も缺かさないて聞いたよ。あの人が話すと馬までが生きて來るから豪い。今度旅て失敗して歸つてからは、一層身を入れてやるやうだね。此間若竹て三味線栗毛といふのを聞いたが、按摩の聲がちやんと按摩になつてるよ。目の開いた人間の聲ぢやない。第一僕は圓喬の錆びた聲が好きさ」と、言葉に熱を帶びて話した。私は以前頻繁に往來してゐた時分には、遊藝に對して何の智識も何の興味もなさゝうだつた彼れの口から、こんな黒人めいた評を聞くのを不思議がつた。廣田は詰らなさゝうに聞いてゐる。

「しかし圓喬の一派は外が皆駄目だ。そこへ行くと小さんの門下生はどれも可成り聞ける。それにこの連中には何處か清新な所があるから、將來有望だよ。矢鱈に笑はないて、じつと聞いて味はつてると、人生の或スケッチが前に現れて來るからね」

それから澤村は、昨夕若竹て聞いた小三治の「赤鼻の長兵衛」の筋を話した。話しながら、前にあつた菓子皿の黄味時雨を抓んてゐたが、話し終る頃には一つ殘さず平げてしまつた。

「澤村君一人て食べちやつた、成程身體が强い筈だね」と、私は感歎するやうに云つて、「そんなに强くつて、よく落語道樂ぐらゐて鬱憤が洩らされるね」

「僕も時々寄席が厭になることもあるけど、目下の僕の境遇ではそれ以上を許さんからね」と、澤村は眞面目になつて「僕は下宿屋の拂ひと、寄席の木戸錢のために稼いでるんだよ」

暫らく話が止切れた。てんでに横になつたり膝を崩したりした。妻君は次の間で子守唄を唄ひながら子供を寢かしつけてゐた。向ひの部屋では瓦斯を消した。廣田は自分で立つて茶を入れ變へてから、澤村と明日の仕事を話し出した。

其處へ井深の妻君が玄關まで來て、今日の新聞を貸して呉れと頼んだ。廣田はそれを渡しながら、「井深さん、どうしてゐます？」と訊いた。

「一日ゴロ〳〵して居ります」と、妻君は答へて、身體を曲げて座敷の方を一寸見てから歸つた。

「あの人は滅多に外へ出ない人だね」と、廣田は云つた。

井深と云へば、私は何時も褞袍を着た微笑々々した細い聲の男を思出す。「あの人は何時仕事をするんだらう。毎日家にゐて晝寢ばかりしてる人のやうに思つてたが」

「なに、あの人だつて羽織袴で外を歩いてることがあるさ」と、澤村は辯護するやうに云つた。

「しかし、今日の新聞をこれから讀まうと云ふんだから呑氣だぜ」

「なに、あれは續物を讀むんだよ」と、澤村は執念く辯護して、「小説や講談は隨分よく讀んでる、兎に角東片町の貸本屋の小説は大抵讀み盡くしたと云つてたよ」

「さうかねえ」と、私は冷淡に聞流して、「近かくに一度我々の會を此處で開かうぢやないか」と、二人の顔を見た。

が、二人ともさして氣乘りがしないらしく、「やつてもいゝね」と輕い返事をしたばかりだつた。

「僕もそろ〳〵出掛けようか。雨はまだ降つてるね」と、私は身を起したが、また座直して、煙草二三本吸ひ盡くす間、止切れ〳〵に興のない話をした。

十時近くなつて、澤村と一緒に家を出た。少し廻り道だが、彼れの下宿屋の方へ歩きながら、ポツ〳〵廣田の事を訊いた。

「僕もこの頃は滅多に行かないんだよ。彼處にも子供が出來てから、家の中が小便臭ひやうな厭な臭ひがしていけない」と、澤村は云つた。

「お藤さんは夫婦仲はいゝんかね」

「いゝも惡いもないさ」

「あの人が誰れと結婚するかは、我々の興味ある問題になつてたぢやないか」

「あゝ」

それから進んで話合ふでもなく、二人は口を噤んで自分だけの考へに耽つた。で、下宿屋の前まで來ると、澤村は足を留めて、「寄らないかね」と、それを豫期してゐるやうな調子で云つた。

「あゝ、もう遲いから」私は下宿の前の高い煉瓦塀を仰ぎ見た。以前は通りから見えてゐた澤村の部屋は塀に遮られて見えなかつた。

「何時も丁度今時分に寄席から歸るんだ‥‥ぢや失敬」と、澤村は煉瓦塀に添うた敷石を傳つて行つた。

私は電車の方へ急いだ。